

平成19年度
「山口大学のFD活動」

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

平成 19 年度の山口大学の FD 活動は、中期目標・中期計画に則り、全学レベル及び学部・研究科レベルでの取り組みが推進された。全学レベルでは大学教育機構主催のアラカルト方式全学 FD 研修会、共通教育授業科目別分科会における FD 活動、学生授業評価・教員授業自己評価の統一の実施による授業改善の取り組み等が実施された。全学 FD 研修会は講演会を 2 回と 10 種類の研修会を吉田・常盤地区・小串地区で合計 13 回開催し、388 名の教職員・学生が参加した。これは、昨年度の 174 名の 2 倍を超える数字であり、単年度の参加人数としてはこれまでで最大であった。アラカルト方式を導入する以前は全学 FD の参加者が 80 名～100 名規模で推移してきたことを考えると、参加者数は一挙に 4 倍以上に増加したことになる。特に、本年度の新しい取り組みとしては①TA 研修会の新規開催、②障害学生修学支援に関する講演会・研修会の実施、が挙げられるが、これらはいずれもニーズが高く、本学で早急な充実が求められている分野であった。こうした多様な研修会を柔軟に実施できる点がアラカルト方式の良さであると改めて感じられた。

一方、各学部・研究科の FD 活動も、本報告書にまとめられているように、非常に充実したものになりつつある。授業のピア・レビュー、授業改善や研究指導に関する各種 FD 研修会の開催、優秀授業評価など、多種多様な取り組みが実施されている。平成 20 年 4 月に大学設置基準が改正され、大学院に加えて学士課程でも FD 活動が義務化されることとなったが、本学では義務化以前から地道な取り組みが行われている。本報告書では、その活動をほぼすべて網羅しているので、是非ご一読いただければ幸いである。

なお、今後の FD 活動の方向性についてであるが、FD 研修会の一層の充実や授業評価を通じた個々の授業の改善はもちろんのこと、各教員が所属する学部・研究科のグラジュエーション・ポリシーやカリキュラム全体についての理解を深め、教員同士が改善点を積極的に検討していける雰囲気づくりと場の提供が必要であると考えている。そのために、次年度はもう一段階進化した FD 活動に取り組む予定である。その成果を今後本報告書にまとめていけるよう、全力を尽くしたい。

山口大学大学教育機構・副機構長

大学教育センター・センター長 岩部浩三

目次

第1章 大学教育機構主催のFD活動	1
第1節 講演会及び研修会一覧	6
第2節 講演会及び研修会の概要・報告	8
第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動	24
第1節 FD活動	24
第2節 第55回 中国・四国地区大学教育研究会報告	25
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	41
第1節 実施方法・実施状況	41
第2節 学生授業評価の結果について（全学）	47
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	56
第4章 人文学部のFD活動	67
第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）	67
第2節 人文学部IT研修会	72
第3節 大学教育機構主催FD研修・講演会への参加	73
第4節 人文学部における学部学生むけアンケート	73
第5節 その他のFD関連活動	89
第5章 教育学部のFD活動	90
第1節 はじめに	90
第2節 全学FD研修会および講演会への参加状況	90
第3節 学生授業評価・教員授業自己評価	92
第6章 経済学部のFD活動	99
第1節 平成19年度経済学部FD計画	99
第2節 ピア・レビュー	99
第3節 大学教育機構主催全学FD研修会等への参加状況	107
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	107
第5節 その他	108
第7章 理学部のFD活動	109
第1節 理学部におけるピア・レビュー	109
第2節 大学教育機構主催全学FD研修会への参加状況	117
第3節 学生授業評価	118
第4節 その他のFD活動	118
第8章 医学部のFD活動	124
第1節 医学科	124
第2節 保健学科	126
第9章 工学部のFD活動	131
第1節 公開授業	131
第2節 授業評価表彰	141
第3節 全学FD研修会への参加	143
第10章 農学部のFD活動	145

第1節	はじめに.....	145
第2節	セミナー（農学部公開講演会）.....	145
第3節	ピアレビュー.....	146
第4節	全学FD研修会.....	147
第5節	その他のFD活動.....	149
第6節	学生授業評価と教員授業自己評価.....	149
第7節	まとめ.....	155
第11章	人文科学研究科のFD活動.....	157
第1節	教員間授業公開（ピア・レビュー）.....	157
第2節	人文学部IT研修会.....	157
第3節	大学教育機構主催FD研修・講演会への参加.....	157
第4節	人文科学研究科における自由記述式アンケート.....	157
第12章	教育学研究科のFD活動.....	161
第13章	経済学研究科のFD活動.....	162
第1節	平成19年度経済学研究科FD計画.....	162
第2節	事例研究・報告.....	162
第3節	その他.....	168
第14章	医学系研究科.....	169
第1節	概要.....	169
第2節	実施内容.....	169
第3節	研修会などの企画・実施実績：.....	170
第4節	今後の課題について.....	170
第5節	資料・平成19年度大学院FD活動文部科学省報告書項目.....	171
第15章	理工学研究科のFD活動.....	172
第1節	理学系.....	172
第2節	工学系.....	177
第16章	農学研究科のFD活動.....	179
第1節	はじめに.....	179
第2節	セミナー（農学部公開講演会と共催）.....	179
第3節	教員授業自己評価.....	181
第4節	全学FD研修会.....	186
第5節	まとめ.....	186
第17章	東アジア研究科のFD活動.....	188
第1節	平成19年度東アジア研究科FD計画.....	188
第2節	東アジア研究科FD研修会.....	188
第3節	東アジア研究科修了後動向アンケート.....	193
第18章	技術経営研究科.....	197
第1節	公開授業.....	197
第2節	全学FD研修会.....	199
第3節	教育改善を目的とした評価活動.....	204
第4節	その他のFD活動.....	208
第19章	連合獣医学研究科のFD活動.....	209

第1節	はじめに.....	209
第2節	共通ゼミナール.....	209
第3節	特別講義.....	213
第4節	FD研修会.....	214
平成19年度	国立大学法人山口大学教育職員能力開発(FD)委員会 名簿.....	215

第1章 大学教育機構主催のFD活動

山口大学のFD活動において、全学レベルのFD活動を推進しているのが大学教育機構である。大学教育機構では、大学教育センターが中心となって各学部・研究科のFD委員の協力のもとに様々なニーズに応じた講演会・研修会を開催し、できるだけ多くの教員に参加を呼びかけている。なお、対象者が限定されている一部の研修会(新任研修等)を除き、教員は希望する講演会・研修会に自由に参加できる。このようなアラカルト方式の採用は平成17年度から実施しているが、3年目となる本年度の参加者は合計388名であり、2年目の2倍以上となった。以下に、本年度開催した講演会・研修会の一覧とその内容を報告する。

第1節 講演会及び研修会一覧

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地	開催場所	講師	対象者	内容	参加人数
1	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう (共催 大学コンソーシアムやまぐち)	平成19年07月31日(火)	13:30~17:00	吉田地区	事務局2号館4階会議室	羽根 拓也(本学客員教授、株式会社アクティブラーニング社長)	希望者	日米の教育手法を比較しながら能動的人材を育成する教育手法を紹介する。また、後半のパネルディスカッションでは学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法について議論する	教員67名
2	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう (共催 大学コンソーシアムやまぐち)	平成19年08月09日(木)	13:00~17:00	吉田地区	大学会館	白澤 麻弓(筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター准教授) 平尾 智隆(愛媛大学 教育・学生支援機構学生支援センター講師) 埴田 和史(滋賀医科大学准教授)	希望者	全国の大学における聴覚障害学生支援の状況について述べるとともに、先進的な大学で行われている支援の体制や今後大学が取り組んでいくべき支援の内容について概説する。あわせて、実際に聴覚障害学生を前にして教員や大学が提供することのできる支援や配慮の内容について具体的に解説し、聴覚障害学生が在籍する授業における支援の方法について学ぶ	教職員59名 学生7名
II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地	開催場所	講師	対象者	内容	参加人数
1	共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会	平成19年04月02日(月)	13:00~15:30	吉田地区	共通教育SCS教室、工学部E21番教室、医学部第3講義室	岩部 浩三(大学教育センター長) 山崎 行宏(学務部学務課共通教育係) 小川 勤(大学教育センター教授) 森本 宏志(保健管理センター講師)	共通教育において前期にTAに採用された大学院生及びTAを採用する教員	共通教育におけるTAの役割や責任について理解を深める	教職員22名 学生78名
2	聴覚障害学生の授業方法についての研修 (共催 農学部)	平成19年04月06日(金)	15:00~16:00	吉田地区	農学部会議室(農学部2階)	小川 勤(大学教育センター教授) 吉田 香奈(大学教育センター准教授)	獣医学科教員、受講科目担当教員(共通教育・専門教育)、大学教育機構、担当事務。	聴覚障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ	教職員27名

3	新規採用教育職員研修会 (共催 人事課)	平成19年08月02日 (木)	10:00~ 17:00	小串地区	霜仁会館会議室(医学部構内)	岩部 浩三(大学教育センター長) 北本 卓也(大学教育センター主事) 小川 勤(大学教育センター教授)	平成18年8月以降に新規採用された助教以上の教育職員	山口大学のGPとカリキュラムマップ、教務システム、観点別シラバスの作成方法及びWEBシラバスの入力法、学生授業評価システムと教員授業自己評価システムについて理解する	教員24名
4 5	授業技術研修会— 学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法—	平成19年09月14日 (金)[吉田地区] 平成20年03月18日 (火)[常盤地区]	13:30~ 16:00	吉田地区・常盤地区	吉田地区(共通教育本館棟2F 多目的ルーム 常盤地区(D23教室)	池田 幸夫(教育学部教授)	希望者	授業を受けた学生が、「分かった」と実感をもつ授業とは、どのような授業であろうか。実際の授業のVTRを見ながら授業分析を行い、授業改善に必要なノウハウについて考察する	教員7名 教員4名
6 7	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法	平成19年09月18日 (火)[吉田地区] 平成20年03月13日 (木)[常盤地区]	13:30~ 16:00	吉田地区・常盤地区	吉田地区(共通教育本館棟2F 多目的ルーム 常盤地区(D24教室)	小川 勤(大学教育センター教授)	希望者	青少年の学習観や生活観について、最近の学生の特徴を学ぶ。また、厳格な成績評価とは、いったいどのような評価を言うのかをわかりやすく解説する。	教員8名 教員17名
8	脱初心者！MS Office (Word, Excel, PowerPoint) 実践的活用法	平成19年09月20日 (木)	13:30~ 16:00	吉田地区	吉田地区(共通教育本館棟2F 多目的ルーム)	岡田 耕一(大学教育センター助教)	希望者	教材作成や教務事務に不可欠なMS-WordとMS-Excelの便利な使い方やエディタとの違い及びパワーポイントとの連携を、講義と実習で学ぶ	教員3名
9	パワーポイント教材の作り方	平成19年09月21日 (金)	13:30~ 16:00	吉田地区	吉田地区(共通教育本館棟2F 多目的ルーム)	小川 勤(大学教育センター教授)	希望者	パワーポイントを用いた教材作成の方法を実習する	教員2名
10 11	情報セキュリティ・情報モラルの教え方	平成19年12月25日 (火)[吉田地区] 平成20年03月26日 (水)[小串地区]	14:30~ 17:00 14:30~ 16:30	吉田地区・小串地区	吉田地区(共通教育本館棟2F 会議室) 小串地区(医学部総合研究棟3階S4教室)	糸長 雅弘(教育学部教授)	20年度からの授業担当者予定者	授業科目「情報セキュリティ概論」の概要、一般目標及び到達目標並びに各週の項目、内容及び指導上の留意点について解説するとともに、教材についても紹介を行う	教員11名 教員9名
12	Approaches to Learning in Language Education	平成19年10月19日 (金)	16:10~ 17:40	吉田地区	吉田地区(共通教育本館棟2F 多目的ルーム)	Edwards Nathaniel(外国語センター准教授)	希望者	パワーポイントプレゼンテーションを元にしてこの50年の世界の主な語学教育方法の進化を振り返る	教員12名
13	専門教育課程における聴覚障害学生修学支援についての研修	平成20年2月13日 (水)	13:00~ 15:00	吉田地区	農学部会議室(農学部2階)	埜田 和史(滋賀医科大学准教授)	獣医学科教員、受講科目担当教員(専門教育)、大学教育機構、担当事務	聴覚障害のある学生への修学支援の方法。特に、専門教育課程における支援方法を学ぶ	教職員31名
									参加者計 388名

第2節 講演会及び研修会の概要・報告

(1) 講演会

1) 学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう

主催：大学教育機構

共催：大学コンソーシアムやまぐち

日程：平成19年07月31日(火) 13:30～17:00

場所：事務局2号館4階会議室(予定)

対象：教職員・学生

第1部 基調講演

テーマ：学生を能動的な人材に育てる教える技術

講師 羽根 拓也(本学客員教授、株式会社アクティブラーニング社長)

司会 北本 卓也(大学教育センター主事)

内容 本研修では、日米の教育手法を比較しながら能動的な人材を育成する教育手法を紹介します。人間の脳がいかに関係を受け取るかといった脳生理学の話、実際に教室で使える、学生を巻き込む指導テクニックもあわせて紹介します。また、最新教育トレンドとして、経産省が主導する、「社会人基礎力」の必要性もお話する予定です。本研修は、ワークショップスタイルで行う参加型ものとなります。筆記用具、A4の紙を4、5枚、おもちください。



第2部 パネルディスカッション

テーマ：学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法とは？

パネリスト

羽根 拓也(本学客員教授、株式会社アクティブラーニング社長)

大内 俊二(下関市立大学経済学部 教授)

ジュマリ・アラム(人文学部准教授)

柳澤 旭(経済学部教授)

石井 由理(教育学部教授)

石黒 勝也(理学部教授)

内海 俊彦(農学部教授)

川崎 勝(医学部准教授)

上村 明男(工学部教授)

司会 小川 勤(大学教育センター教授)

内容 基礎セミナーの授業担当者にとって、実施方法や教育内容が担当教員に任されていることや、教員間の横の連携(情報交換・共通認識)の不足などから、指導方法に悩みを抱えている教員も多いと聞く。そこで、本研修会では各学部・学科ではどのような指導が行われているかについて情報交換を行う。また、当日は各学部代表のパネリストから、実際に実施して効果のあった指導方法などの成功事例を紹介してもらうことにより、指導方法のノウハウの共有を図るとともに、日頃、指導する上で困っていること、悩んでいることに対する解決の

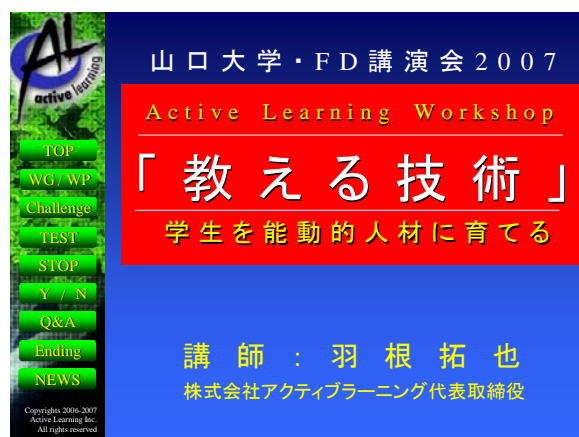
ヒントを得る機会にしてもらいたい。

報告：

7月31日(火)、事務局2号館4階会議室にて「学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう」をテーマにFD講演会が開催された。第1部の基調講演では株式会社アクティブラーニング社長で本学客員教授でもある羽根拓也氏を講師に迎え「学生を能動的な人材に育てる教える技術」と題して約1時間半にわたる講演・ワークショップが行われた。ハーバード大学で日本語教育に携わられた経験を基に、日米の教育手法の比較や能動的な人材を育成する教育手法が紹介され、また、学生を巻き込む指導テクニックもあわせて紹介された。特に「学習したこと」を他者に「教える」ことで記憶の定着効果をあげる Lite(ライト)=Learning in Teaching と呼ばれる技法を参加者全員が体験学習し、能動的学習に高い効果を発揮することを実感した。

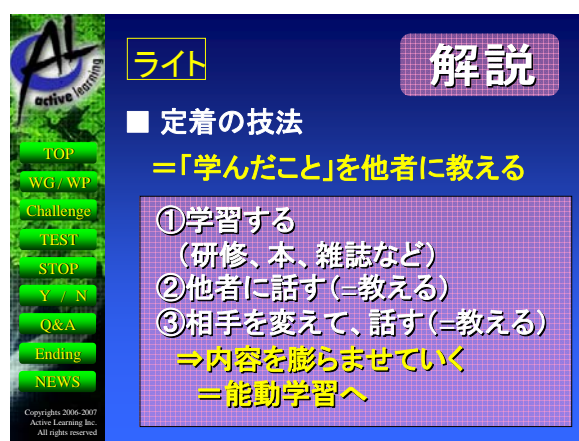
続いて、第2部のパネルディスカッションでは「学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法は？」をテーマに約1時間半にわたって議論が行われた。まず、下関市立大学経済学部の大内俊二教授より「下関市立大学における導入教育「基礎演習」への取り組みと課題」について報告が行われ、続いて本学の各学部代表のパネリストより各学部・学科における基礎セミナーの具体的な取り組みについて報告が行われた。会場からは「基礎セミナーはなぜ重要なのか?」「半期しかないが通年でやるべきか?」「どのような内容を教えるべきか?」等について様々な質問があり、活発な議論が行われた。基礎セミナーは学習へのモチベーションの維持・向上や、文書力・問題解決能力の育成といった点から非常に重要であることが再確認され、各学部においてFD活動のテーマとして積極的に取りあげていくべきであるとの方向性が確認された。

終了後のアンケートでは、「良かった・非常に良かった」の合計が全体の約85%を占めた。また、「講演会の内容は非常に説得力があり参考になった」「授業の改善法の具体的な話があってよかった」「基礎セミナーの具体的なあり方、問題点がよくわかった」という肯定的意見が寄せられたが、一方で「学生の意欲を喚起する...学ぼう」という本来のディスカッションに至らなかった」「研修会の時間が長い。後半のパネルディスカッションはもう少し短くても良いのではないか」「下関私立大学のみならず、他大学の状況も聞きたかった」という意見も寄せられた。今回のパネルディスカッションは情報交換が主な目的であったため、参加者からはもっと深い議論を望む声が多かった。今回の取り組みをきっかけとして今後も継続的に基礎セミナーのあり方を議論し、内容の改善・充実を図っていく必要が感じられた。



山口大学・FD講演会2007
Active Learning Workshop
「教える技術」
学生を能動的な人材に育てる
講師：羽根拓也
株式会社アクティブラーニング代表取締役

AL active learning
TOP
WG/ WP
Challenge
TEST
STOP
Y / N
Q&A
Ending
NEWS
Copyrights 2006-2007
Active Learning Inc.
All rights reserved



ライト 解説
■ 定着の技法
=「学んだこと」を他者に教える
①学習する (研修、本、雑誌など)
②他者に話す (=教える)
③相手を変えて、話す (=教える)
⇒内容を膨らませていく
=能動学習へ

AL active learning
TOP
WG/ WP
Challenge
TEST
STOP
Y / N
Q&A
Ending
NEWS
Copyrights 2006-2007
Active Learning Inc.
All rights reserved

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか?

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	2	4.3%
どちらとも言えない	4	8.7%
良かった	23	50.0%
非常に良かった	16	34.8%
無回答	1	2.2%
合計	46	100.0%

2) 特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう

主催：大学教育機構

共催：大学コンソーシアムやまぐち

日程：平成19年08月09日(木)13:00~17:00

場所：大学会館

対象：教職員・学生

第1部 基調講演

演題：聴覚障害学生支援の全国的状況と個々の教員ができる配慮事項

講演者：白澤 麻弓 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター准教授)

司会：北本 卓也 (大学教育センター主事)

概要：近年聴覚障害学生を受け入れ、支援を行う大学が増加している。

本講演では、全国の大学における聴覚障害学生支援の状況について述べるとともに、先進的な大学で行われている支援の体制や今後大学が取り組んでいくべき支援の内容について概説する。あわせて、実際に聴覚障害学生を前にして教員や大学が提供することのできる支援や配慮の内容について具体的に解説し、聴覚障害学生が在籍する授業における支援の方法について学ぶこととする。



第2部 体験研修

テーマ：難聴及びノートテイクについての体験ワークショップ

指導：平尾 智隆 (愛媛大学 教育・学生支援機構学生支援センター講師)

白澤 麻弓 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター准教授)

愛媛大学 障害者支援ボランティア学生 ほか

概要 ノートテイクを携わった愛媛大学の学生の指導のもと、参加者や学生ボランティアが実際にノートの取り方などを体験します。また、パソコンノートテイクについての概要とビデオ視聴を実施します。

第3部 パネルディスカッション

課題：障害学生の修学支援や情報保障はどのようにやっていくべきか？

パネリスト

白澤 麻弓 (筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター准教授)

平尾 智隆 (愛媛大学教育学生支援機構学生支援センター講師)

埤田 和史 (滋賀医科大学准教授)

佐藤 晃一 (農学部准教授)

愛媛大学障害者支援ボランティア(ノートテイク)学生

二川 雄一 (農学部学生)

司会 小川 勤 (大学教育センター教授)

概要 パネルディスカッションに参加している大学において、どのような障害者に対する修学支援や情報保障が行われているかを各パネリストから事例紹介をしてもらいます。また、講演会参加者からの障害者支援に対するさまざまな質問に対して、パネリストから具体的な解決策や参考になる意見を述べてもらいます。これらによって障害者支援に対する共通理解を深めるとともに、今後の授業保障に役立つような情報交換を行います。

*当日は「LIVE 山口大学」より会場の様子を学内へストリーミング配信いたします。 ご来場

できない方は是非ご利用ください。

報告：

8月9日(木)、大学会館で「特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう」をテーマにFD講演会が開催された。この講演会は昨年度山口大学で「修学に障害のある学生に対する支援に関する基本方針」が決められたことに伴い、教職員や障害学生を支援するボランティア学生等を対象に、入学前から卒業に至るまでに、どのような修学支援を実施していったらよいのかについて研修するために開催された。研修会では先進校で実際に障害学生の支援に携わっている先生や学生を招聘し、修学支援の実際の状況や課題について発表していただいた。研修会には、教職員57人、学生7人、他大学教員2人を合わせて66人という多数の方々に参加した。丸本学長の挨拶の後、筑波技術大学の白澤麻弓准教授より聴覚障害学生支援の全国的状況と個々の教員ができる配慮事項について基調講演が行われ、続いて難聴及びノートテイクについての体験ワークショップが実施された。さらに「障害学生の修学支援や情報保障はどのようにやっていくべきか？」をテーマに障害学生本人を含めたパネルディスカッションも実施された。研修内容が盛り沢山であったにも拘らず、参加者からは難聴ということを経験してみてよく分かった、実習や演習が多い獣医学科や医学系学科において聴覚障害学生に対して授業保障・情報保障をどのようにしたらよいかについて具体的な事例を示していただけて有意義であった、という意見とともに、大学として障害学生支援への取り組みの難しさも実感できた、という意見をいただくことができた。研修会終了後も、出席者による意見交換会が会場のあちこちで行われ、盛会のうちに全てのプログラムを終了した。



ノートテイクを体験する参加者たち



パネルディスカッションの様子

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	2.6%
どちらとも言えない	1	2.6%
良かった	18	46.2%
非常に良かった	18	46.2%
無回答	1	2.6%
合計	39	100.0%

(2) 研修会

1) 共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会

主催 大学教育機構

日時 平成 19 年 4 月 2 日 (月) 13:00-15:30

場所 共通教育 SCS 教室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

対象 共通教育において前期に TA に採用された大学院生及び TA を採用する教員

内容 ティーチング・アシスタント(TA)制度は、「優秀な大学院生に対し、教育的配慮の下に教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や大学院学生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会の提供を図るとともに、これに対する手当での支給により大学院生の処遇の改善の一助とする」ことを目的として実施されています。本学で共通教育の TA に採用されている大学院生は年間 200 名を超えており、特にその充実が求められています。そこで、今年度より研修会を開催し、TA の役割や責任について理解を深めていきたいと思ひます。

スケジュール

第 1 部 全体研修 13:00~14:15

場所：共通教育 SCS 教室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

13:00~13:15 挨拶 (大学教育センター長 岩部浩三)

・ 共通教育の理念・目標と TA の役割

13:15~13:30 TA の任用について (学務部学務課共通教育係 梅木哲也)

・ 勤務時間、共通教育の仕組み等について。教務手帳。

13:30~13:55 TA の業務と学習指導の基本 (大学教育センター教授 小川勤)

・ TA の業務内容、学習指導の方法、注意事項等

13:55~14:15 大学の授業における安全衛生 ((全学) 労働安全衛生管理室主任、保健管理センター講師 森本宏志)

・ 授業における安全衛生と教職員・TA の責務

第 2 部 個別研修 14:30~

場所：共通教育 SCS 教室、共通教育棟実験室等

グループ別に TA の心得や機器の使用方法等について研修を実施

- 情報処理演習
- 自然科学実験 (化学)
- 自然科学実験 (生物学)
- 自然科学実験 (物理学)
- 自然科学実験 (地球科学)
- 自然科学系列のうち実験以外の授業科目 (化学 I・II)
- 自然科学系列のうち実験以外の授業科目 (数学 I・II)
- 自然科学系列のうち実験以外の授業科目 (物理学 I・II)
- 自然科学系列のうち実験以外の授業科目 (地球科学 I、総説)
- スポーツ運動実習
- 多人数・講義系授業科目

報告：

今年度より初めての試みとして共通教育の TA とその授業担当教員を対象とした研修会を開始した。研修会は第 1 部の全体研修と第 2 部の個別研修に分け、第 1 部は全員 SCS 教室で受講し、第 2 部は上記のグループに分かれて研修を行った。

まず、第 1 部では、岩部浩三・大学教育センター長の挨拶があり、続いて TA の任用について学務部学務課共通教育係より説明が行われた。また、小川勤・大学教育センター教授からは TA の業務と学習指導の基本について、さらに（全学）労働安全衛生管理室主任・保健管理センターの森本宏志講師より授業における安全衛生と教職員・TA の責務について解説があった。

続いて第 2 部では、場所を共通教育棟の各教室に移し、具体的な機器の使用法や心得等についてグループごとに説明が行われた。各グループの講師は共通教育授業科目別分科会の分科会長の先生方にお引き受けいただいた。

参加した大学院生・教員からは有意義・大変有意義との意見が 6 割であり、他の研修会と比較して若干低い結果となった。また、自由記述では「TA 予定学生に対しては、いい内容だったと思う」といった肯定的な意見が寄せられた一方で、「挨拶の後の話と TA の任用、業務はまとめてもよいのではないだろうか?」「資料は事前に配布しておくべき。個別研修はすべて別室で行うべき。」「内容が多くて時間が少ない」といった意見も多く寄せられた。今回初めての試みであったため、次年度以降はこれらの意見を活かして研修内容・方法の改善を図りたい。

選択肢	人数	パーセント
有意義ではなかった	1	2%
あまり有意義ではなかった	4	7%
どちらとも言えない	19	31%
有意義であった	33	54%
大変有意義であった	4	7%
合計	61	100%

2) 聴覚障害学生の授業方法についての研修

主催：大学教育機構・農学部（共催）

日時：平成 19 年 04 月 06 日(金) 15:00～16:00

場所：農学部会議室（農学部 2 階）

対象：獣医学科教員、受講科目担当教員(共通教育・専門教育)、大学教育センター、担当事務。

講師：小川 勤（大学教育センター教授）、吉田香奈（大学教育センター准教授）

内容：聴覚障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。

報告：

本年度、農学部獣医学科に、聴覚障害を持った学生が入学してきたことにもなると、授業のやり方や情報保障についての研修会を開催した。当日は、聴覚障害学生の授業を担当する教員のほか、農学部の教員も多数参加した。また、聴覚障害学生本人も研修会に参加した。本人からは、先生方に授業のやり方で注意することや要望することを直接述べてもらった。参加者全員が障害の程度を理解するよい機会になった。

参加者の意見としては、「障害学生の指導方法がわかってよかった」、「障害学生支援については、個別に考えるべき点が多くあると思う。一般的な対応としては、本日のような点であろう。」という意見

とともに、「場合には少し授業法を変えれば対応できますが、場合には全く新しい授業内容を準備しなければなりません。後者の場合の支援をいただきたい。」というような要望事項も寄せられた。また、研修会の開催時期について、「研修会は授業開始3日前ではなく、もっと前にしてほしい。」という早期開催を望む声が多かった。

研修に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	4.0%
どちらとも言えない	5	20.0%
良かった	16	64.0%
非常に良かった	3	12.0%
合計	25	100.0%

3) 新規採用教育職員研修会

主催：大学教育機構（人事課と共催）

日時：平成19年08月02日(木)

場所：霜仁会館会議室（医学部構内）

対象：平成18年8月以降に新規採用された助教以上の教育職員

講義1 山口大学のGPとカリキュラムマップについて

講師：岩部 浩三（大学教育センター長）

内容：本学は教養教育及び専門教育において、それぞれ GP（グラジュエーション・ポリシー）を作成した。また GP に対応したカリキュラムマップも作成した。その仕組み、意義等について説明する。

講義2 シラバスの作成

講師：北本 卓也（大学教育センター主事）

内容：教務システムの説明と山口大学の観点別シラバスの作成方法及びWEBシラバスの入力法など。

講義3 学生授業評価と教員授業自己評価

講師：小川 勤（大学教育センター教授）

内容：山口大学の学生授業評価システムと教員授業自己評価システムの内容説明など。

報告：

本年度から総務部人事課職員係と一体となった、新規採用職職員研修会を実施することになった。このため、昨年度の大学教育機構主催（大学教育センター担当）単独による参加人数9名よりも、24名という大幅に増加する結果となった。午前中は、学長や副学長による大学経営に関する講話やメディア基盤センターによる山口大学の情報セキュリティに関する説明が行われた。大学教育センターが担当したのは、午後の14:30～17:00で、「山口大学のGPとカリキュラムマップについて（講師：岩部大学教育センター長）」、「Webシラバスの作成について（講師：北本主事）」、「学生授業評価と教員授業自己評価について（講師：小川センター専任教員）」の3つのテーマで研修会が実施された。受講者のそれぞれの研修内容について評価は以下の通りである。

今回は、総務部人事課職員係が従来実施していた新規採用職職員研修会に、加わる形で研修会が編成された関係で、本学に初めて赴任した先生方に、山口大学における教育改善の考え方やしくみ、W

e b シラバスの書き方、I Y O C A N を活用した学生授業評価と教員授業自己評価について、ほぼ全員近い新規採用職員に対して研修が行われた意義は高いものと考えられる。

・山口大学のGPとカリキュラムマップについて

良かった 5名、やや良かった 18名、やや悪かった 1名、無回答 1名

- 1) 山口大学の教育の在り方、教員としての取組み方についての意義が理解できた。
- 2) 着任直後にこの部分だけ独立して研修してほしい。プロジェクタ、画面の文字が小さすぎて見えなかった。

・Webシラバスの作成について

良かった 6名、やや良かった 12名、やや悪かった 1名、無回答 1名

- 1) 考え方と入力の手順が理解できた。
- 2) 着任直後にこの部分だけ独立して研修してほしい。プロジェクタ、画面の文字が小さすぎて見えなかった。
- 3) リンクの説明は、大学教育センターからでなく、山口大学から説明しHPでほしい。

・学生授業評価と教員授業自己評価について

良かった 9名、やや良かった 8名、やや悪かった 1名 無回答 4名

- 1) 評価についての考え方が整理できて良かった。
- 2) 質疑応答の時間がなかった。困る。
- 3) 着任直後にこの部分だけ独立して研修してほしい。すでに前期末に学生授業評価を実施したが、的確な説明を学生達にすることができなかった。

4) 5) 授業技術研修会ー学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法ー

主催：大学教育機構

日程：平成19年09月14日(金) [吉田地区] 13:30~16:00

平成20年03月18日(火) [常盤地区] 13:30~16:00

場所：吉田地区（共通教育本館棟2F 多目的ルーム）、常盤地区（D23 教室）

対象：希望者

講師：池田 幸夫（教育学部教授）

内容：

吉田地区：授業を受けた学生が、「分かった」と実感をもつ授業とは、どのような授業であろうか。そのような授業を行うためには、どのような方法をとればよいのか。また、授業に活気があって、授業中に眠気を感じさせない授業にするためにはどうすればよいのか。実際の授業のVTRを見ながら授業分析を行い、授業改善に必要なノウハウについて考察する。

常盤地区：授業を受けた学生が、「分かった」と実感をもつ授業とは、どのような授業であろうか。実際の授業のVTRを見ながら授業分析を行い、授業改善に必要なノウハウについて考察する。
(在山地区と違う内容の予定)

報告：

平成19年9月14日に行われた研修会では、学生が積極的に参加し、「分かった」と実感をもてる授業を行うための手法が紹介された。研修会では、小中高における教育の歴史的な変遷の解説と今の学生にはどのような授業方法が必要かについて説明があり、実際の授業のVTRを見ながら授業分析を行い、授業改善に必要なノウハウについてディスカッションが行われた。本研修の後のアンケート調査では、有意義であったとの回答を得た（表1）。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	7	100.0%
非常に良かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	7	100.0%

また、具体的な感想としては、以下の回答が寄せられた（表2）。

表2 感想に関して、具体的に何かありましたらお書きください

教育に対する具体的な手法(思考実験)を学ぶことができた。これは良かった。
大変参考になりました。
参加者は10名弱の程度が良かった
学生が講義中に頭を使うようにアクションをかける点、工夫について。

平成20年3月18日に行われた研修会では、温度計に関する実験の実演とともに、どのように授業を進行すると、学生を授業へ参加させることができるかについてのポイントが示された。また、その後のディスカッションでは、各教員が担当する講義への応用方法などの活発なディスカッションが行われた。

研修後のアンケートでは、有意義であったとの回答が得られた（表3）。

表3 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	2	50.0%
非常に良かった	2	50.0%
無回答	0	0.0%
合計	4	100.0%

また、具体的な感想として以下が寄せられた。

表4 感想に関して、具体的に何かありましたらお書きください

教育の歴史について知ることができた。
自分の授業を振り返るにはたいへん良かった。自分の授業に取り入れたいと思った。
新しい授業法にふれることができた。

大学の授業は教員から学生へと一方的な教授法になりがちであるが、特に実験などの演習では、理

解を深めさせるために、学生を積極的に授業に参加させるスキルが必要とされている。今後もこのような研修会を通じて、教員の授業のスキルを磨くことは有用だといえよう。

6) 7) 最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法

主催：大学教育機構

日程：平成19年09月18日(火) [在山地区] 13:30~16:00

平成20年03月13日(木) [宇部地区] 13:30~16:00

場所：吉田地区（共通教育本館棟2F 多目的ルーム）、常盤地区（D24 教室）

対象：希望者

講師：小川 勤（大学教育センター教授）

内容：本研修の前半は青少年の学習観や生活観について、各種の調査結果から分析した結果を示し、最近の学生の特徴に学ぶ。後半は、厳格な成績評価とは、いったいどのような評価を言うのかをわかりやすく解説する。また、厳格な評価の一つの評価方法として「ルーブリック評価」を紹介し、情意的領域や向上目標などの達成度を客観的に測定し、形成的評価や総括的評価に生かす方法や技術について学ぶ。

報告：

昨年度に引き続いて、同じ研修テーマで本年度も実施した。第1回目は昨年度の研修内の内容に加えて、ルーブリック評価を実際に導入した事例を挙げながら分かりやすく説明した。また、最新の統計データをなるべく利用するように努めた。第2回目は、第1回目の内容を大幅に変更し、今社会から求められている「社会人基礎力」という概念を紹介した。また、2006年度のPISA（国際学習到達度調査）の調査結果を分析しながら最近の学生の学力や青少年の生き方や意欲について、統計データを分析した結果を踏まえて解説した。2回の研修会とも受講者から様々な意見を寄せられ充実した研修会になった。なお、2回目の3月の研修会には、琉球大学大学教育センターの天野智水先生も参加した。研修会後のフリートーキングの際に、天野先生から琉球大学の学生の様子を聞くことができ有意義な研修会であった。受講生の感想としては、「大変参考になりました。講義をされていて学生の変化が気になり、周囲からの情報を得ていましたが、今日きちんと教えていただき理解に役立つものだと思います。」「沢山の資料、スライドを準備していただき分かりやすい講義内容でした。」という意見が寄せられた。



第1回目の研修会（9月18日）の感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	1	16.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	5	83.3%
非常に良かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	6	100.0%

第2回目の研修会（3月13日）の感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	7.1%
良かった	10	71.4%
非常に良かった	3	21.4%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

8) 脱初心者！ MS Office (Word, Excel, PowerPoint) 実践的活用法

主催：大学教育機構

日程：平成19年09月20日(木) [吉田地区] 13:30～16:00

場所：吉田地区 (共通教育本館棟 2F 多目的ルーム)

対象：希望者 (初心者対象)

講師：岡田 耕一 (大学教育センター助教)

内容：教材作成や教務事務に不可欠な MS-Word と MS-Excel の便利な使い方やエディタとの違い及びパワーポイントとの連携を、講義と実習で学ぶ。※各自、必ず MS-Word と MS-Excel と PowerPoint のインストールされたノートパソコンを持参すること。

報告：

昨年度、医学部の川崎勝准教授が担当されていたものを引き継ぐ形で行った。

少人数であったため、事前にメールにて参加者の環境や要望等を伺い、Microsoft Office 2003 を前提とした講習を行った。PowerPoint に関しては基本的には箇条書きの一言に尽きるため、2 時間半という限られた時間もあって、翌日開催予定だった小川先生の講習会に任せる形で割愛し、Word と Excel に絞り講習を行ったが、それでも内容的にはかなり限られたものに成らざるを得なかったと言える。

Word の講習では、ワープロとしての特徴的な機能、特に文書作成の支援機能を中心に、校正、スタイルによる意味付け、章立て、目次の生成、文書の比較、変更履歴、版の管理、ヘルプの活用法、アクセスキー、ショートカットキー等について、演習を交えながら講習を行った。脱初心者という意味で、ワープロは単なる文字装飾ツールではなく、文書作成を効率的に行うための支援ツールであるという点について徹底するとともに、ショートカットキー等も駆使した効率的操作も目指した内容とした。

Excel の講習では、セルへの名前付け、オートフィルタ、入力規則、近似曲線等について演習を交えながら講習を行った。データの整理に関して便利な機能を中心に紹介したが、脱初心者と言えるだけの内容とするには時間が不足していたと言わざるを得ないだろう。

受講後の感想としては『とても丁寧で親切な解説でした。すぐにでも自分のパソコンでやってみたくなるような点を取り上げていただきました。ありがとうございました。時間がもう少しあれば、Excel のことも手を動かしながら練習できたのかもしれませんが、それでも参考になりました。』、『結



局のところ、様々あるやり方で、自分が使いこなせるものを選択し、習熟しておくことが重要であると思う。→パソコン「脱初心者』の2つを頂いた。

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	2	66.7%
非常に良かった	1	33.3%
無回答	0	0.0%
合計	3	100.0%

9) パワーポイント教材の作り方

主催：大学教育機構

日程：平成19年09月21日(金) [吉田地区] 13:30~16:00

場所：吉田地区 (共通教育本館棟 2F 多目的ルーム)

対象：希望者

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

内容：本研修会では、パワーポイントを用いた教材作成の方法を実習する。はじめに、パワーポイントの基本スキルやスライド作成の基本パターンについて説明し、操作して頂く。その後、考えてきて頂いた10分程度の授業内容をパワーポイント教材として作成して頂く。

受講対象者の条件：

PowerPoint の入ったノートパソコン持参できること。

Word や一太郎を使って文章や図が書けること。

研修会当日までに、PowerPoint 教材を利用するような10分程度の授業場面(内容)を考えてきて頂けること。

報告：

昨年度に引き続いて、同じ研修テーマで本年度も実施した。夏期休業中ということで当初、申し込みが6名あったが、当日は2名のみの参加であった。

はじめに「PowerPoint (以下、P P)」の概要や利用の利点と欠点について説明した後で、P Pによる教材例の紹介、スライドの作成の基本的なスキルである、「文字入力と編集」、「オートシェイプの使い方」、「表の入力と編集」、「グラフの入力と編集」、「アニメーションの設定」などについて説明と実習を行った。

また、最後に、研修参加者に、自分の専門授業の場面を想定して、「5分程度」のP P教材を自分で作成させる実習を行った。

研修会参加者からは、「細かいノウハウが良かった。」、「少人数で丁寧に教えていただき、ありがたかった。」という意見であった。

研修に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	2	100.0%
非常に良かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	2	100.0%

10) 11) 情報セキュリティ・情報モラルの教え方

主催：大学教育機構

日程：平成19年12月25日(水) [吉田地区] 14:30～17:00

平成20年03月26日(水) [小串地区] 14:30～16:30

場所：吉田地区(共通教育本館棟2F会議室)、小串地区(医学部総合研究棟3階S4教室)

対象：希望者

講師：糸長 雅弘(教育学部教授)

内容：授業科目「情報セキュリティ概論」の概要、一般目標及び到達目標並びに各週の項目、内容及び指導上の留意点について解説するとともに、教材についても紹介を行う。

報告：

ユビキタス社会の本格的な到来を迎えた現在、大学における初期の情報教育では基本的なパソコンやネットワークの利用方法だけではなく、セキュリティやモラルに関する教育も必須といえる。平成20年度より山口大学共通教育における情報教育では、これまでのパソコンやネットワークの使い方に加えて、セキュリティやモラルについての教育に注力する予定である。しかし、共通教育で演習を担当する大学の教員の多くは、セキュリティやモラルに関する知識について必ずしも熟知しているとは限らない。これらの研修では、情報セキュリティとモラルについての知識を確認しながら、講義「情報セキュリティ・モラル」の内容及び指導上の留意点についての解説や、教材についての紹介がなされた。

平成19年12月25日に行われた研修会では、リスクアセスメントについての解説が行われた(資料1)。リスクアセスメントに関しては、多くの教員にとって日常的になじみのない内容であるため、研修においては活発な質疑応答が行われた。また、教えることができるかどうかといった不安の声も聞かれた。本研修会後のアンケート結果では、本研修が有意義であったという感想が得られた(表1)。また、以下の感想が寄せられた(表2)。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	4	44.4%
非常に良かった	5	55.6%

無回答	0	0.0%
合計	9	100.0%

表2 感想に関して、具体的に何かありましたらお書きください

情報セキュリティ・モラルについて具体的な教え方が分りました。 まだわからない部分もあるため、もっと内容を知りたいと思っています。
具体的な事例が豊富であれば良い
リスクアセスメントに関する用語の意味や定義について学生から多くの質問が出来るように思います。 想定 Q&A を用意しておく方が良いのではないのでしょうか。
目的が明確で実践的であった。
このテーマについてさっそくゼミ生に伝えたいです。

平成 20 年 3 月 26 日に行われた研修会では、情報セキュリティ・モラルの第 1 週および第 2 週の内容および教材が示された。第 1 週では、情報および情報処理の本質を理解させた後に、デジタル情報とアナログ情報の違いを理解させることに主眼を置いている。第 2 週では、符号と暗号、共通鍵暗号と公開鍵暗号、認証とデジタル署名、暗号化の具体的な方法をテーマとしている。研修会では、これらの内容について議論がされたが、特に第 2 週に関して、学部の違いを考慮して盛り込む内容をどのようにするかなどについてさまざまな意見が出た。

研修会後のアンケートでは、おおむね有意義であったという回答が得られた（表 3）。また、以下の感想が寄せられた（表 4）。

表3 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	9.1%
どちらとも言えない	1	9.1%
良かった	6	54.5%
非常に良かった	3	27.3%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

表4 感想に関して、具体的に何かありましたらお書きください

授業計画を立てることができた。
1～8週までの大きな流れの解説をしていただけたらきっと良かったように思います。
学生の学力レベルを想定していないので、趣味の話に思えた。
講義をしないので関係がなかった感じがした。
高校時代にもある程度教育を受けているはずなので、1年生の授業で用いる教育資料であるなら、理系文系にこだわらずに、一定のレベルでよいのではないのでしょうか。

これまで、山口大学の共通教育では、情報処理演習で教える内容はパソコンやネットワークの基本的な使い方などが主であって、情報セキュリティやモラルに関する教育は十分に行われてきたとはいえない。今後も FD 研修会等を通じて情報セキュリティ・モラルに関する教育を充実し、社会のニーズに対応する必要がある。

1 2) Approaches to Learning in Language Education

主催：大学教育機構

日程：平成 19 年 10 月 19 日(金) [吉田地区] 16:10～17:40

場所：吉田地区 (共通教育本館棟 2F 会議室)

対象：希望者

講師：Edwards Nathaniel (外国語センター准教授)

内容：パワーポイントプレゼンテーションを元にしてこの 50 年の世界の主な語学教育方法の進化を振り返る。

報告：

平成 19 年度アラカルトFDの語学教育関係プログラムとして、本学外国語センター准教授のエドワーズ先生をお招きし、共通教育棟の多目的室において研修会を行った。参加者は主に語学教育に従事している学内の先生方 10 人であった。

エドワーズ先生は語学教育に長年携わった経験と見識に基づき、この 50 年間の世界の主な語学教育の方法及びその進化について説明された。まず Behaviorism、Humanism、Developmental Theories という三大理論を紹介し、それから、B. F. Skinner、Noam Chomsky、William Littlewood、Marc Helgesen、Michael McCarthy、Kenji Kitao、J. R. Martin、Jack C. Richards という八大理論家の功績や理論が紹介された。参加者からは、良かったと非常に良かったが合わせて 90%という、高い評価が寄せられた。具体的には「こういう academic な話を FD でやるのは個人的には賛成です」、「語学教育について大変広い観点から論じられていたと思います」、「教授法の歴史の勉強になった」、「50 年間の語学教育の歴史がよく分かりました」、「教育の理論と教育効果をあげることとの違い」など声が寄せられた。

一方、今後は「具体的なスキルやテクニックなど」、「教育方法について」、「モデル授業のスタイルで (理論の説明よりも)」、「外国語教育について」といった FD の要望や、場所がやや狭いなどの意見もあった。

研修会に参加した感想は？

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	10.0%
良かった	6	60.0%
非常に良かった	3	30.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

1 3) 専門教育課程における聴覚障害学生修学支援についての研修

主催：大学教育機構・農学部 (共催)

日程：平成 20 年 2 月 13 日 (水) 13:00～15:00

場所：吉田地区 農学部会議室 (農学部 2 階)

対象：獣医学科教員、受講科目担当教員(専門教育)、大学教育機構、担当事務

講師：埴田 和史 (滋賀医科大学准教授)

内容：聴覚障害のある学生への修学支援の方法。特に、専門教育課程における支援方法を学ぶ

報告：

本年度の 4 月に開催された「聴覚障害学生の授業方法」、及び 8 月の全学講演会・シンポジウム「特

別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう」に引き続いて、農学部と大学教育機構が共催で、専門教育課程における聴覚学生の修学支援の方法について、滋賀医科大学の埜田和史准教授をお招きして、聴覚障害学生が専門課程に進学した際の授業支援や情報保障、実習の際の安全確保等について、滋賀医科大学でこれまでに実際に実践してきた事例紹介を交えて講演会および質疑応答が行われた。研修会参加者からは様々な具体的なケースについて、どのように教員集団が対応していったらよいのかについて多くの質問がでた。講師の埜田先生からは、その都度的確なアドバイスをしていただき、大変有意義な研修会となった。

研修会後の参加者の意見としては、「具体的な不安のある事項でしたので、勉強になりました。」、「具体的な対処方法が聞けてよかった」、「時には力を抜くことも必要と思った。健常者を越えた能力に期待する。」、との意見が寄せられた。また、当日宮崎大学から2名の先生が当研修会に参加した。宮崎大学でも来年度障害学生が入学する可能性があるということでぜひ研修会に参加させて欲しいという要望があり参加を認めた。参加した先生方は、「宮崎からきましたが、全く知ることの出来ない世界で、周囲の環境、教員、学生の意識改革が必要であることを認識しましたが、社会に直接ぶつかる必要もあるともわかりました。」といった意見が寄せられた。



研修に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	5.9%
良かった	6	35.3%
非常に良かった	9	52.9%
無回答	1	11.1%
合計	17	100.0%

第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動

授業科目別分科会は共通教育の授業の担当と実施について責任を有する組織であり、全部で23分科会が置かれている。年度末に提出される活動報告書には年間のFD活動に関する報告も併せて行われている。本章では、まず第1節において、今年度FD活動に取り組んだ分科会の活動内容を報告する。続いて第2節では、毎年、中国・四国地区の大学が共同で行っている「中国・四国地区大学教育研究会」へ出席した共通教育の各分科会の代表者からの報告を掲載する。

第1節 FD活動

<FD活動を実施した授業科目別分科会>

1. 情報処理（分科会長：教育学部 古賀和利）

情報セキュリティ・モラルの講義を実施する教員を育成するため、教育学部系長教授を講師として講習会を実施した。

2. 初習外国語分科会（分科会長：人文学部 更科慎一）

部会長は5月26、27両日に香川大学で開催された第55回中国・四国地区大学教育研究会に出席した。27日には外国語(初修)分科会に出席し、中国・四国地区の大学における初習外国語教育の体制や実践について、意見を交換した。

3. 英語分科会（分科会長：教育学部 石井由理）

第2回から第5回までの英語分科会会議の大部分を20年度から新設となるBasic Englishのシラバス開発FDに当てた。

8月 ・第2回英語分科会会議開催（Basic English シラバス開発FDを含む）

9月 ・第3回英語分科会会議開催（Basic English シラバス開発FDを含む）

10月 ・第1回英語分科会運営委員会会議開催（Basic English シラバス開発）

・第4回英語分科会会議開催（Basic English シラバス開発FDを含む）

11月 ・第5回英語分科会会議開催（Basic English シラバス開発FDを含む）

4. 教育学分科会（分科会長：エクステンションセンター 長畑実）

5月26、27両日に香川大学で開催された第55回中国・四国地区大学教育研究会に出席（参加者1名）

5. 数学分科会（分科会長：理学部 安藤良文）

数学IA, IB, 数学IIの開講クラスの決定とプレースメントテストの実施、再履修生の増加対策、TA担当院生の割り当て。

6. 物理学分科会（分科会長：理学部 朝日孝尚）

物理学実験テキストの改訂を行った

7. 化学分科会（分科会長：理学部 青島均）

「化学教育についての、高校・大学・企業の交流会」の開催（日本化学会中国四国支部主催、理学部、山口県教育委員会後援）

共通教育化学部会のFDに指定し、理学部、工学部、農学部からの教員が参加した。中学、高校、企業の実情を話していただきながら討論し、共通教育における化学教育の改善に役立てた。なお、1名の中学教員、11名の高校教員、10名の大学教員、3名の企業研究者、29名の学生が参加した。

8. 運動健康科学分科会（分科会長：教育学部 海野勇三）

5月26、27両日に香川大学で開催された第55回中国・四国地区大学教育研究会に分科会長が出席し、意見交流を行った。

第2節 第55回 中国・四国地区大学教育研究会報告

（1）日程・テーマ

日程：平成19年5月26日（土）～27日（日）

会場：香川大学教育学部

◎平成19年5月26日（土） 9：00～19：30

・シンポジウム メインテーマ：大学における教養教育の充実をめざして

第1部 趣旨説明と講演

題目：「大学における教養教育の充実をめざして：教養教育と大学評価」

講演者：川口昭彦（独立行政法人大学評価・学位授与機構理事）

講演（その2）

題目：「学士課程教育の課題と教養教育」

講演者：寺崎昌男（立教大学大学教育開発・支援センター顧問、
大学教育学会会長）

第2部 質疑と討論

・総会

・部会（テーマ別セッション）

① 第1部会 「FD活動実践の最前線」

② 第2部会 「新課程教育を受けた入学生への対応」

③ 第3部会 「初年次少人数ゼミナール充実のために」

④ 第4部会 「学生の自主活動に基づく大学づくり」（学生参画を図る部会）

・部会報告

・懇親会

◎平成19年5月27日（日） 9：00～11：55

分科会（研究若しくは実践報告）

① 人文・社会科学分科会

「人文・社会科学における教養教育と専門教育の有機的連携」

- ② 自然科学分科会
「自然科学系科目における教育改善と新たな取り組み」
- ③ 情報科学分科会
「教育補助および教育の活性化のための情報環境およびネットワーク環境の活用」
- ④ 外国語（英語）分科会
「英語コミュニケーション能力向上のためのカリキュラム改革」
- ⑤ 外国語（初修）分科会
「初修外国語教育の充実のために」
- ⑥ 保健体育分科会
「より良いスポーツ（体育）実技授業を目指して」
- ⑦ 日本語・日本事情分科会
「中・短期留学生への対応について」

- ・分科会報告
- ・閉会行事

（２）報告

1) 本学からの参加者および参加部会・分科会

職名	ふりがな氏名	出席部会	出席分科会	報告書作成	山口大学授業科目別分科会等
講師	さらしな しんいち 更科 慎一	第1部会「FD活動実践の最前線」	オ 外国語（初修）	1 オ	初習外国語
助教	おかだ こういち 岡田 耕一	第2部会「新課程教育を受けた入学生への対応」	ウ 情報科学	2 ウ	情報処理
教授	あさひ たかなお 朝日 孝尚	第2部会「新課程教育を受けた入学生への対応」	イ 自然科学	イ	物理学
教授	いしい ゆり 石井 由理	第2部会「新課程教育を受けた入学生への対応」	エ 外国語（英語）	エ	英語
教授	おがわ つとむ 小川 勤	第3部会「初年次少人数ゼミナールの充実のために」	ウ 情報科学	3	情報処理
センター長 教授	いわべ こうぞう 岩部 浩三	第3部会「初年次少人数ゼミナールの充実のために」	エ 外国語（英語）		英語
准教授	なかみぞ ともこ 中溝 朋子	第4部会「学生の自主活動に基づく大学づくり」	キ 日本語・日本事情	4 キ	日本語
教授	ながはた みのる 長 畑 実	第4部会「学生の自主活動に基づく大学づくり」	ア 人文・社会科学	ア	教育学
教授	うんの ゆうぞう 海野 勇三	第4部会「学生の自主活動に基づく大学づくり」	カ 保健体育	カ	運動健康科学

2) 部会報告

①第1部会「FD活動実践の最前線」（初習外国語分科会：人文学部 更科伸一）

第1部会は、現状においてしばしば啓発型・啓蒙型にとどまり、実効性に乏しくなりがちなFD活動について、先進的な取り組みをしている大学の事例を紹介し、今後の問題点と課題を検討することを狙いとして進められた。

まず香川大学の中西俊介氏(工学部・大学教育開発センター調査研究部長)から、「香川大学におけるFD活動の現状と課題」と題する報告があった。香川大学では、2000年より全学FDが始動し、2002年からは大学教育開発センターを中心とした本格的な取り組みが始まった。全学FDの実施内容の主なものFD研修会であり、これには新任教員を対象としたものや共通教育実施に向けてのものがあほか、外部より講師を招いての研修会を随時(年一回程度)行っているという。また、新しい試みとして、e-learningコンテンツの作り方や、授業を聞いてもらう方法などに関する「FDスキルアップ

講座」を行っている。こうした全学 FD のほかに学部 FD があり、実施回数は年に 0～6 回で学部ごとに異なる。課題としては、全学 FD と学部 FD との連携(分散キャンパスがネックになっている)、学生授業評価の授業改善へのフィードバック、授業スキルの蓄積などが挙げられた。ピアレビューの導入も課題であるが、一部教員の反発を受けているとのことであった。山口大学を含め、他の大学でも問題となりそうな事柄である。

次に徳島大学の神藤貴昭氏(大学開放実践センター)により「徳島大学における全学 FD：日常化・個別化に向けて」と題する報告があった。報告では「FD 基礎プログラム」(初任教員を対象とした合宿)、「FD リーダーワークショップ」(FD リーダー層教員を対象とした合宿)、「授業コンサルテーション」(初任教員を対象とする個別研修)、「FD ラウンドテーブル」(講演会)、「徳島大学教育カンファレンス」(研究会)、「教育の質を向上させるための学生ワーキンググループ」などの多彩な活動成果について詳しく聞くことができた。中でも 2005 年度に始まった「授業コンサルテーション」は、FD 基礎プログラムに参加した新任教員の授業について、参観及び VTR 撮影が行われ、授業記録と学生アンケートが作成されたのち、授業研究会が開かれるという本格的なものである。コンサルテーション参加教員の心理的負担が大きいのではないかとも思ったが、参観者がまず授業のよい面を語るように心がけるなど、負担感を軽くする気配りがなされているとのことである。全学 FD の今後の課題としては、例えばシラバス作りや授業計画作成などの業務を FD 活動とするなどして、FD のための FD ではなく、日常の文脈に根を張った FD を志向していくことが提示された。

最後に愛媛大学の高瀬恵次氏(教育・学生支援機構副機構長)より「愛媛大学における FD/SD/TAD への取り組み」と題する報告が行われた。愛媛大学では FD ばかりでなく SD(事務職員の能力開発)、TAD(大学院生の能力開発)にも力を入れ、「三位一体型能力開発」と称している。報告ではまず、現在の取り組みに至るまでの経緯が明らかにされた。それによると、初め教員に対しては講演や研究発表を主とする「教育実践シンポジウム」が実施され、事務職員の間では自主的な新人研修が行われていたが、やがて限界と問題点が露呈し、実践・演習型 FD 及び組織的 SD への転換を迫られたという。かくして、限られた人的資源の中で最も効率的な教育改革が進められるよう、教職員および学生を対象とした系統的でかつ持続的な能力開発システムの構築への取り組みが始められたとして、「教育ワークショップ」の実施、FD・SD スキルアップ講座、TA 研修会、ツールの開発(FD ハンドブック、教育実践ジャーナルなど)など、一連の成果が紹介された。

私は本学に着任してもうすぐ 5 年目に入るが、着任前の教歴がなく、授業の改善には相変わらず日々頭を痛めている。今回紹介された取り組みの中には、このようなものを新任時に受けていれば、と思われるものも多々あった。よい授業をたちどころに可能にする魔法のマニュアルが存在するとは思わないが、FD 活動に関する大学間の経験交流を盛んにして、授業改善の優れた着想を共有していくことは、教師にとっても学生にとっても有益であるという感を、今回強くした。

②第 2 部会「新課程教育を受けた新生への対応」(情報処理分科会：大学教育センター岡田耕一)

1. 「教養基礎科目の実施目的とその効果」後藤和雄(鳥取大学大学教育総合センター)

鳥取大学における教養基礎科目の実施について、目的、実施状況、その効果について報告があった。

鳥取大学における教養基礎科目は、平成 12 年 3 月 29 日に鳥取県教育委員会と交わした「鳥取大学及び鳥取県立高等学校の相互派遣に関する協定書」により、高等学校から派遣された教員により行われている。開始当初の、平成 12 年度は単位認定なしの補習講義として実施され、平成 13 年度からは教養基礎科目となり単位認定された。実施時間帯は月～金の 17 時～19 時の 2 時間。科目は英語、数学、物理学、化学、生物学(植物)、生物学(動物)の 6 科目。英語は平成 14 年から平成 18 年度まで一旦開講から外されたが、TOEIC300 点に満たない学生の増加と、AO 及び推薦の学生増加により平成 19

年度から再度加えられた。

平成 12 年度当初の補習講義の位置づけでは、学生が専門教育を受講し、卒業研究等を滞りなく行える程度の基礎学力を付けることに目的が置かれた。中でも職業高校等出身者等は、専門教育を受けるための基礎学力が満たされていない場合があるため、教養教育における一般教育科目の役割の一つとして補習教育をすることにより、その基礎学力養成を補完することを狙っている。この背景には、平成 12 年度から、センター試験を課さない推薦入試を拡大したことにより職業学科及び総合学科卒業の志願者が増加に加え特別推薦入試の帰国子女、中国引揚者子女、社会人第 1 年次入学の存在がある。このような特別選抜により入学してきた学生や一般選抜で入学した総合学科卒業及び一般高校生で英語や数学等で特に基礎学力が不足する学生を対象に補習授業を行ったという事である。

講演では 18,19 年度のアンケート結果が示されいくつかコメントを述べられていた。受講する主な理由としては、物理、生物は高校で履修してなかった事を理由にする学生が多く、数学は自分の力不足を感じ基礎学力をつけたい事を理由に挙げる学生が多いとの事。しかし、中には先生に勧められた事を挙げる学生もおり、強制されたと誤解している学生も見られるとの事。また、履修を促しても本来取って欲しい基礎力の不足している学生や、未履修なので受けるべき学生が登録してくれないとの事に加え、数学、物理、英語は脱落(履修放棄)する学生も多いらしい。また、GPA 計算に入りますよと書いてあるので取り消しもあるとか。詳しい調査(インタビュー)してないので確かかどうかは分からないものの、データから見ると意欲のある人が登録はするものについていけずに脱落しているような気がするとの話であった。

2. 「日本語力教育のすすめ～文章作成からプレゼンテーションまで～」塚本真也(岡山大学工学部・創造工学センター)

「卒論指導における日本語の添削指導はほぼ全ての教員が行っており、おそらく多くの教員はこれを良い教育であると思っているであろう。しかしこのやり方は全く学習効果を期待できない。つまり教員の自己満足にしかない。」と喝破するところから講演は始まった。

時間のないなか 1 週間程度で指導をしたところで、学生は全く聞いておらず、修論の指導で全く同じ指導を繰り返す事がしばしばであった。およそ 10 年前、機械工学科の助手だった当時、この事に気付いたため「技術文章学」を開講。開講当初は、教員からは、「なぜ工学部で日本語教育なのか?」、「卒論・修論で訓練している」、「自分自身技術文書の書き方は独学だ」、学生からは「国語が嫌いだから工学部に入った」等、双方から猛烈な反発に合ったそうである。地道な活動の結果、現在は JABEE にもその教育効果を認められ、平成 16 年度には特色 GP にも採択されるに至っているらしい。力説されていたのは、技術者にとって文章がどれだけ重要か認識がないと言う事。反発の解消、認識の改善が必要であり、時間をかけて文章を書かせる事の必要性を説かれていた。

中でも強調されていたのは、理系学生にとってマニュアル作成のための日本語能力は重要であるという点である。マニュアルに不備があれば最悪の場合、業務上過失致死に問われ兼ねない。

面白かったのは、常用漢字の話題である。例えば、常用漢字以外の漢字としては「頃→ころ」、「誰→だれ」、「明瞭→明りょう」、「緻密→緻(ち)密」、常用漢字表外の音訓(音訓違反)としては「解る・判る→分かる」、「諸刃→もろ刃」、「全て→すべて」、「辛い→つらい」、「他の→ほかの」、「為→ため」などがある。ワープロを使っていると変換候補に出てきてしまうためつい使ってしまうことも多いがこれらは技術文書ではすべて使用禁止である。

学生からは当然のように「誤字や送りがなの間違いは当然許されないことは理解できる。しかし、ふだん使われている常用漢字以外の漢字がなぜきんじされているのか理解できない。」との反発が挙がるそうである。このような学生には鯛、鯉、鯛、鰻、鰻、鯖、etc.,, 魚辺の漢字を片っ端から挙げて、全て読めるなら君だけは常用漢字以外を使う事を認めても良い等、極端に誇張して伝えたいとい

は納得するとの事。

常用漢字以外を使った事が原因で事故が起きた場合、裁判をする前から負けている。」と言うのは印象的であった。言われてみればその通りではあるが、これは意外と見落としがちではないだろうか。

教育方法としては、当初は工夫を凝らしたレポートの添削を行われていたが、これは結果的に失敗してしまっただけで、当初のレポートの添削は、間違い箇所を直して学生に返却していたのだが、学生は間違い箇所を確認してくれないらしい。なぜなら、既に点数が決定しているため間違いを確認したところで点数は増えない事が原因ではないかと分析されていた。そこで、正解は示さずに間違い箇所にアンダーラインを引き、訂正後再提出されるようにしたそうである。こうする事で、学生は自分で考えて間違い箇所を修正するようになり、学習効果が飛躍的に高まったとの事である。ただし、レポート枚数が増加することで教員の負担も急増してしまい、結局うまく行かなくなってしまったとの事である。

そこで、演習問題集を執筆し、全問で解答時間が 20 時間程度の問題を宿題として課し徹底的に繰り返して行わせるようにし、熱心に取り組ませるための工夫として、くまなくやっている学生には+5点を与え、演習をきちんとやっている学生には簡単に解ける試験問題を課すようにしたそうである。学生からは「過剰な負担だ」とクレームが殺到したが、誤字の記載・基本的な作文ルール違反の比率を取ってみると演習取り組み前後は 49.8% が 1.2% へと格段の教育効果が見られたとの事。これをもって予防接種的教育と説明されていた。曰く「嫌がるのは針が怖いだけ、徹底的に訓練しないと絶対にだめ。安易に妥協すべきではない。」と。

特色 GP の期間がもう 1 年残っているので、今(2007 年 5 月現在)ならまだ無料で出前講義をやっているそうである。詳しくは岡山大学の特色ある教育(<http://www.eng.okayama-u.ac.jp/gp/>)を参照。

また、この講義で用いられている教科書と演習問題集は次の 2 冊である。

- ・ 中島利勝, 塚本真也, 「知的な科学・技術文章の書き方 実験レポート作成から学術論文構築まで」, コロナ社(1996/09), ISBN:4-339-07640-6, (http://www.coronasha.co.jp/np/detail.do?goods_id=1070)
- ・ 塚本真也, 「知的な科学・技術文書の徹底演習」, コロナ社(2007/04), ISBN:978-4-339-07784-1, http://www.coronasha.co.jp/np/detail.do?goods_id=2247

③第 3 部会「初年次少人数ゼミナール充実のために」(情報処理分科会：大学教育センター 小川勤)

第 3 部会では初年次少人数ゼミナールの充実のためにどのような方策や課題が考えられるかをを中心に討議が行われた。大会事務局からは各大学での特徴ある取り組み事例を聴取するとともに、教養教育における初年次ゼミの問題点や改善策について情報交換し、その意義と可能性を討議したいという開催趣旨が提起された。そこで、3つの大学から以下のような初年次少人数ゼミナールについての実施状況および課題が報告された。

1. 山口大学における「基礎セミナー」のカリキュラム的位置付けと内容充実のための方策……小川勤(山口大学大学教育センター)

大会事務局からの依頼を受けて、山口大学からは筆者がまず「教養教育における Graduation Policy」を設定した意義とその内容、および本学が実施している「基礎セミナー」が「教養教育の Graduation Policy」とどのような関係になっているのか、さらに、各学部で実施している「基礎セミナー」の内容と特徴、学生の評価、実施上の課題を報告した。本学の「基礎セミナー」は全体的に専門教育への導入教育的な色彩が強いこと。全学的に統一した内容で基礎セミナーを実施することの困難性、20 年度カリキュラムからは通年科目として「基礎セミナー」を設置する方向であることを報告した。

2. 下関市立大学における導入教育「基礎演習」への取り組みと課題……大内俊二(下関市立大学経済

学部)

下関市立大学では、「基礎演習」を3つの趣旨(大学への適応力、コミュニケーション能力、少数人数教育)で対応している。開講講座ゼミ数は全部で33ゼミ(2007年度)あり、各ゼミの内容としては、図書館の使い方、文献検索の方法、聞き手に配慮のあるプレゼンの仕方、問題意識を持って本を読む、コンピュータ基礎演習などが実施されている。受講した学生に対するアンケート結果は65%という高い満足度を示しているそうである。担当教員の改善意見としては、「共通の指導事項は全教員が行うべきである。」、「半期で実施する場合には発表か論文にしたほうがいい。」、「ゼミの定員を減らした方がいい(10名程度に)。」、「半年ではメニューが多すぎる。」、「演習の一貫体制が出来ないか?(基礎演習(1年春:10%学生が受講)→教養演習(1年秋)→共同自主研究(2年から3年生)→卒業研究(4年生))などの改善意見が出ているそうである。今後の課題としては、通年の科目として「基礎演習」を設定することや上記の「演習の一貫体制」を太くしていきたいことなどが報告された。

3. 「教養ゼミ」の取組みについて-----布川弘(広島大学大学院総合科学研究科)

広島大学では、4つの観点(リベラルアーツ:個の確立、前専門基礎教育、脱専門、学際性・総合性)から「教養ゼミ」を開講している。また、「高校教育の補充」や「視野を広げること」、「視点を変えること」、「大学教育へのオリエンテーション」などが主な実施上の目的となっていることが報告された。展開方法としては、「教養ゼミ→超域研究→展開研究(ミニ卒論的役割)」の3つの段階で実施している。このうち、「展開研究」ではポスターセッションや展開研究の表彰を実施している。また、「映像と言葉で表現された広島」(担当教員:平手友彦先生)というゼミテーマで開講されている総合科学部での教養ゼミの事例が紹介された。テーマ設定のポイントとしては、「ヒロシマ」をキーワードとして「ひろしまに対するイメージ」や「広島大学の見学の理念」、「平和を希求する精神」、「ユニバーシティ・アイデンティティ」などをテーマとして、学生たちに平和記念資料館の訪問者にインタビューした結果を「対話ノート」としてまとめたり、「広島モナムール」という映画を上映し、視聴後にディベートなどを行っている事例が紹介された。「教養ゼミ」は学生におおむね好評だそうである。課題としては、教養教育の一環として位置付けたが、教員に丸投げの状態で、大学での学び方といっても、各先生の専門の学び方を中心に教えているので、どうしても、「学び方=専門基礎」という構図になってしまうそうである。また、「教養」についての共通理念に対するコンセンサスが不足していることなどが課題と挙げられた。

3つの大学の事例紹介の後、質疑応答や討議が行われ、香川大学からは、学部混成型の初年次基礎ゼミナールの設置を目指しているが、キャンパスが離れているため「FDハンドブック」を作成して、共通理解に努めた事例などが紹介された。また、各大学とも「教養」という概念が教員によって異なっているため、本来、初年次学生に対する少人数参加型の教育は、高校から大学への橋渡しをおこなうと同時に、大学における基本的な学習技法や学習態度を身につけさせ、その後の大学教育への道筋をつけるという、きわめて重要な役割を持っていると考えられるにもかかわらず、担当教員によって教育内容がかなり異なることや、担当教員に基礎ゼミナールの運営を丸投げしているために、少人数ゼミナールの教育内容が、担当教育の専門分野の基礎教育・導入教育になってしまうことが指摘された。しかし、初年次少数ゼミナールで共通に実施すべき教育内容を記載した全学的な「統一シラバス」を策定することは、各大学ともキャンパスの状況や学部の事情、担当する教員の指導方法などの事情で実現が難しいことも明らかになった。

④第4部会「学生の自主活動に基づく大学づくり」(日本語分科会:国際センター 中溝朋子)

第4部会では、学生の自主活動による大学づくりの取り組みを行っている大学の学生から、その具体的な活動の報告を聞き、その問題点・課題などについて検討を行った。

1 「学生の自主企画としての履修相談会」 佐伯亮子（岡山大学環境理工学部2年、学生・教職員教育改善委員会委員、履修相談会実行委員長）

岡山大学では、「学生参画」による教育改善システムのひとつとして、学生・教職員が同じテーブルにつき、大学の教育全般の更なる向上を目指す「学生・教職員教育改善委員会」を設けている。本部会では、この委員会の活動の中で2002年より毎年入学式前に新入生を対象に学生が行っている履修相談会についての発表があった。本相談会は、いわゆる楽勝科目の伝授、部活の勧誘などは一切なく、在学生在が新入生に対して自分たちの体験を基に、履修の方法、シラバスの見方等を教えるものである。

今年は新入生の約87%の参加があったようで、毎回、参加者アンケートを行い翌年に活かしたり、準備の際はトラブルを想定したシミュレーションを実施したりするなど相談会自体の質の向上にも努力をし、毎年新入生からわかりやすいとの好評を得ている。既に大学の準公式行事としての位置付けをされているとのことである。

2 「学生による組織的ボランティア活動」

竹下愛（愛媛大学法文学部3年、キャンパス・ボランティア）

上田勇仁（愛媛大学法文学部3年、キャンパス・ボランティア）

愛媛大学では、学生と教職員が一体となり、キャンパス・ボランティア制度を組織し、学内新聞の発行、社会人との交流会、映像による学内情報活動などを行っている。本部会では、実際に学生が作成した学内新聞の配布、ミニ情報番組の上映が行われ、その具体的な活動、感想、検討課題などについて発表があった。学生はこれらの活動を通じて、様々なスキルやコミュニケーション能力が向上したことを実感したり、大学OB（社会人）や地域社会との繋がりが強まることで、就職先として地元の魅力を感じたりする人が増えているそうである。

3 「香川大学の学生活動の現状と課題」

上野秀敏（兵庫教育大学学校教育研究科1年、香川大学教育学部平成18年度卒業）

香川大学では、学生の自主活動に依拠する団体は、「大学づくり委員会」「大学際実行委員会」「就職自主サークル」など複数存在するそうであるが、こうした団体に所属する学生は年々減少しているそうである。理由としては、人数不足から後継者がおらず、一部の学生に過剰な負担がかかるなどして、活発な活動が長期に維持できないこと、各団体の連携、教職員の協力もなかなか得られないことなどが挙げられた。

香川大学の問題は、多くの大学が抱えている問題であると考えられる。こうした問題について岡山大学の場合は、上記委員会には学部から代表で選ばれて参加するため、基本的に参加している学生の責任感が強く、活動を続けているうちに人間関係もでき、活動が維持されていること、また学生には伝統を守りつつ新しいアイデアを出してもらい、学生からの発想を大切にしているとの発言があった。また愛媛大学からは、学外の人と折衝する時には顧問の教員が指導やサポートをしていること、大学としては学生が元気になる雰囲気作り、自己表現・自己実現の場を提供していくことの大切さが述べられた。

3) 分科会報告

①人文・社会科学分科会「人文・社会科学における教養教育と専門教育の有機的連携」（教育学分科会：エクステンションセンター 長畑実）

本分科会の冒頭、「最近、教養教育における導入教育の重要性が高まっているが、大学の教育全体における教養教育の意義や在り方を考えると、教養教育と専門教育との連携が従来よりも一層必要となってきた。この分科会では、会員大学における高学年向け教養科目や、ディシプリン導入としての教養科目の実践例報告をもとに、人文・社会科学における教養教育と専門教育との有機的連携につ

いて、各大学での取り組みについて情報交換を行ない、ともに考えたい」との分科会趣旨が示され、3本の事例報告に基づいて質疑応答、意見交換が行われた。

最初に、香川大学教育学部・大学教育開発センター共通教育部長・中谷博幸教授から「高学年向け教養科目の可能性」と題した発表が行われた。香川大学では、中期目標として「4年（6年）一貫した学士課程教育を実現するため、専門教育と有機的に連携する教養教育カリキュラムを作成する」と設定し、2005年に「全学共通教育の再編成」に取り組み、①共通科目を「ディシプリン入門」として位置づけ、専門教育との関わりを明確にする、②4年（6年）一貫教育の観点から高学年教養科目を設置できるよう、早急に検討すること、を決定した。この方針に基づき、2007年度から高学年向け教養科目を開設し、全学共通科目の単位として卒業要件に加えた。同時に、それらは専門科目、自由科目の単位に読み替えることも可とされた。

報告では、実施体制、全学共通科目の区分の解説に続き、高学年向け教養科目として開講した「高学年向け主題科目」（本年度のテーマは「高齢化社会へのアプローチ」）、「キャリア・デザイン実践講座」（職業人として必要とされる論理的発想力、問題解決技法、コミュニケーション能力等のコア・スキルの育成）、「上級英語」（1，2年次の学習に加えさらに高度な英語運用能力を目指す）、「西洋古典語」（古典ギリシア語とラテン語を隔年で開講）の概要が示され、課題としては、①分散キャンパスの問題（遠隔授業）、②学部間の履修単位数の違い（学部によって高学年向け教養科目に割り振る単位数がない場合や少ない）、③教員の負担増、などがあるが、非常勤講師の採用減少の中では大学内の人材や講義科目の活用が重要であり、今後、全学共通科目と学部開設科目を学部の枠を超えて相互活用することが求められるとして、高学年向け教養科目はその方向性を示しているとまとめられた。質疑、意見交換では、他大学からも専門基礎など学部生のみという制限を開放することが課題との意見が出されていた。

次に、香川大学大学教育開発センター・松根伸治講師から「教養科目としてのラテン語」と題した報告が行われた。この講義は「高学年向け教養科目」の一つとして2年生以上の全学部対象で開講されたもので、開講の意図や経緯、実際の授業の様子が報告された。履修状況は、登録21名、教員2名（自主参加）であり、経済学部、教育学部、工学部の2～4年生がそれぞれ三分の一ずつ受講していること、週1コマであり、専門科目としての古典語授業との違いを意識して教材選定に取り組んでいることなどが述べられ、第二外国語（初修外国語）とも異なり、歴史学や文学の専門研究者のための古典語教育とも異なる、こうした授業に対して、現在の一般の学生からどのようなニーズがあるのか、授業参加者の意見・感想が紹介され、これからの人文学教育の可能性について言及された。

最後に、香川大学法学部・辻上佳輝准教授から「ディシプリン入門としての共通科目－法学の場合」が報告された。発表では、法学部生が選択できない共通科目「法学」のあり方について、①広く法学一般の②入門的要素を③法学部生を含まない多くの学生に伝える④比較的低学年に提供される科目、として位置づけた上で、「法学」「法学入門」「法律学入門」などの題名を掲げる教科書類の構成や、その「はしがき」等に現れた教育方針・指針を題材として、入門的な法律学の講義に必要な要素や講義の構成について詳細に検討された内容が示された。

以上のような分科会報告が行われたが、発表の時間が守られなかったために、討論の時間がほとんどなかったことは残念なことであった。運営方法の再考を求めたい。いずれにせよ、今回の大学教育研究会では、学士課程教員のFD義務化を目前にして、学士課程教育における教養教育のあり方が大学教育改革の重要な課題であり、「学部」のあり方も含めた大学の未来像について示唆を得たことは大きな成果であった。

②自然科学分科会「自然科学系科目における教育改善と新たな取り組み」（物理学分科会：理学部 朝

日孝尚)

本分科会では、教育改善のための新たな取り組みとして3つの事例が報告され、質疑応答がなされた。

1. 「クイズ作成を通して学ぶ自然科学の問題解決学習法」 細田宏樹 (愛媛大学教育学部)

愛媛大学共通教育の教養教育科目「雑学のすすめ」(2001～2004年度)、「自然の法則」(2006年度)において実施された演習方式の授業が紹介された。この授業では、自分一人では解決できない“暮らしの中でふと感じる疑問”を出し合い、オリジナルの科学クイズを作り上げる。大まかな流れは次の6段階になる。①受講生一人あたり二つ以上の「疑問」＝「テーマ」を出す。②予備調査によって解決できる可能性を判断してテーマを絞る。③テーマと担当者を決める。④受講生はすべてのテーマについて「自己の直感による答え」を「回答カード」に書いて提出する。⑤各テーマの担当者はクイズの原案・解答・解説を発表する。⑥すべての受講生で討論してクイズを完成させる。(完成させたクイズをもとに定期試験も実施する。)

例えば、誤答例は上記④の回答カードから選んで作り、一つ一つ検討することを通して理解を深めているというように、さまざまな工夫がなされている。2006年度の履修者は、法文学部3名、教育学部4名、工学部14名で全員が最後まで受講し、授業評価アンケートの結果も良好だったそうである。テーマの範囲、討論への参加度はどの程度かという質問に対して、担当者の専門の物理にテーマを限定していないこと、討論や質問をしない学生が1/4程度いるという回答があった。

2. 「文系および理系学生へのパソコン演習を導入した生化学教育の試み」 古賀理和 (愛媛大学教育・学生支援機構)

愛媛大学共通教育の教養教育科目の「知の展開科目」の一つとして開講されている「生体分子の構造と機能」(2006年度前期)、「生体分子を覗いてみよう！パソコンで触ってみよう」(2006, 2007年度後期)、「パソコンで見る葉のはたらき」(2007年度前期)が紹介された。これらの授業では、3次元コンピュータグラフィックスのソフトウェアを用いて、生体分子(核酸やたんぱく質など)を表示させ、構造と機能の関係を理解させることを目指している。受講生は、ソフトウェアの使い方、表示された画像が意味するものの読み取り方を学ぶ。最終的には、データベースに登録されている生体分子の構造データを与えられたときに、特定の構造(機能)を持つ部位を探し出すというようなことができるようになる。理系だけでなく文系の学生も履修するが、文系の学生が不利になることは無く、むしろ良い成績を取ることが多いそうである。相当高度な化学および生物の知識が必要だと思われるがどのようにしているのかという質問に対しては、授業中の説明で対応しているという答えであった。

3. 「岡山県立大学の「現代GP」への取り組み」 高井研一 (岡山県立大学保健福祉学部)

平成18年度「現代GP」のテーマ(5)「実践的総合キャリア教育の推進」に採択された「実践的チームガバナビリティ育成教育」の内容が紹介された。平成19年4月から始まったばかりの「チームガバナビリティ演習」という授業では、看護学科、栄養学科、保健福祉学科の3学科の学生が6名程度のグループを作り、教員が考えた状況設定の下で模擬患者のケアをするという演習を行っている。この演習のねらいは、多くの職種の人と連携・協働できるような能力を身に付けさせることにある。キーワードとしては、キャリア教育、多職種連携、領域横断カリキュラムの3つが挙げられた。演習の様子を外部の専門家(看護師、保健師、医師、管理栄養士、社会福祉士、ケアマネージャーなど)が見て、助言をするという点も特徴的である。学生が状況設定をすることはできないか、市民啓発のための「演劇化」ではどのようなことをする予定か、などの質問があった。

今回の報告は、いずれもこれまでにない新しいタイプの演習形式の授業の報告で、それぞれに刺激的であった。機会があれば、講義形式の授業改善例についても聞いてみたい。

③情報科学分科会「教育補助および教育の活性化のための情報環境およびネットワーク環境の活用」(情報処理分科会：大学教育センター 岡田耕一)

1. 「デジタルノートテイクによる障がい学生への情報保障の取り組み」佐藤匡(吉備国際大学社会学部)

吉備国際大学における、デジタルノートテイクによる情報保障についての取り組みについて報告があった。ノートテイクとは、耳の不自由な学生に対する講義内容の保障のため、ノートテイクと呼ばれる人を割り当てて講義内容を随時紙に手書きして伝える方法。同大学では2003年まで有志学生によって行われていたが、2004年より大学として取り組む体制を整備し、ボランティアセンターの障がい学生支援セクションを全面バックアップするようになったそうである。しかし、手書きのノートテイクはいくつか問題があったとの事。まず、口頭で約300字/分ある情報を、筆記の約60字/分で伝えるには要約が必要であり、提示できる情報量(文字集)に制限が生じる。複数人での連携してノートテイクを行う事も困難である。紙へ記録は、文字の拡大・訂正・再利用も難しい。式典・講演会ではノートテイクをOHC/OHPで投影するが、一度にテイクを行える人数に制限があり集合練習をする事も難しい。そこで2006年からはデジタルノートテイク(PC要約筆記)と称して、ノートパソコンとプロジェクタを使ったノートテイクを開始したそうである。ノートテイクには専用ソフトである

IPtalk(<http://iptalk.hp.infoseek.co.jp/>)を利用。これはいわゆるチャットソフトに近いソフトで、LANで繋がった複数台のPCで共同作業が行えるようだ。導入に当たっては、ノートテイクのリーダー的存在の学生に声をかけ、人材の確保を行うと共に、タイピングや要約の練習を半年。その後、2006年1月の学内共同研究発表会にて試験導入と共にPRを行い、2005年度学位授与式にて公式な場での公開練習を経て、2006年度入学宣誓式で正式なお披露目に至っている。2006年4月からは試行講義として、手書きのテイクに加え、PCによるテイクを行い、これならば行けると判断。5月より正式に開始された。デジタルノートテイクのメリットとしては、文字が見やすい書体・大きさ・色になる点、タイピングでは約200字/分と入力速度に余裕が生まれる事で情報量が増える点が挙げられる。また、ノートテイクされた結果(テイクログと呼称)はテキストファイルであるため二次利用も容易である。更にLANによる共同作業が可能のため、集合練習も容易となったほか、講演会・式典における情報提供も容易になったとの事。ノートテイクの技術・品質維持には練習が必要であるため、自主練習のために必要となる場所と機材は大学で提供しているとの事。学生達は、タイピング練習のためのソフトを探してきては評価を行ったり、タッチタイピング習得のために手元を隠す機材を考案する等、意欲的な取り組みをしているらしい。また、大学としては、養成講習会(週1回づつ3回程度)を開催しているそうである。昨年まで要約筆記の仕事をされている方をお願いしていたが、今年からは自信もついて、全て学生でまかなえるようになったとの事。継続的なメンバーの確保と言う点では、全学生がテイクについて具体的なイメージを与えると意味で、入学宣誓式でのテイクが非常に役立っているそうである。また、養成講習会を修了した学生には認定証を発行する事で、学内資格のような位置づけにして動機付けをすると共に、デジタルノートテイク用の名刺を作って各所へ出て行く際の手助けをしたり、ネームプレートを作って身分の証明や責任感を持たせるようにしているらしい。教育効果としては、テイク者達へも、良い影響が現れているそうである。講義の間の15分の間にノートテイク機材を迅速な設営・撤収し報告まで行う手際の良さや、ネットワーク・機器のトラブル対応の能力が養われる、式典で誤字や脱字を出したくないためニュースや新聞・用語にも興味を持つようになった、他の学部の講義でも事前にテキストを入手して勉強したりしている、地域の行事に出て行くこともあるので社会人との接触でシビアな状況を肌で感じる機会が生じたなどの例を挙げられていた。他にも、ノートテイクをやっていた事をア

ピールしたら就職活動で内定をもらった学生の逸話も紹介されていた。今後の展望としては、打ったものがテキストファイルとして残るので、これが有効活用できるのではないかと話であった。昨年のテイクログは 120 コマ分に上り、これは、次の年の事前配布資料や、出版などへ活用出来ないかを模索中のようである。ノートテイクについては、実際に対象となる学生にヒアリングを行い、他に方法がない場合に行っているとの事。本学のように FM 補聴器で十分な対応可能な状況の場合であれば、それが一番ではないかとコメントされていた。また、ノートテイク学生へのインセンティブという点では、吉備国際大学では時給 730 円を支給しているが、これは特殊技能という意味に加えて、利用者が言いたい事を言える環境を作るためにもそうしているとの事である。音声認識ソフトを利用できれば、もっと容易にデジタルノートテイクが可能なのではないかと思われるが、これは雑音の多い環境ではまだまだ認識が難しいだろうとの意見であった。以上、本学でも障害を持つ学生への支援、中でも聴覚に関する問題は早急に取り組むべき課題となっているだけに、参考とすべき点も多く、非常に興味深い発表であった。実際問題、予算さえ付けば、本学でも同様の取り組みを行う事はそれほど難しくはないだろう。ただし、手書きノートテイクの組織が下地として存在した吉備国際大学と比べると、下地の組織がない本学の場合、立ち上げ時の人材確保の点がネックになる事が予想される。

2. 「超高速ネットワーク JGN II を用いた遠隔講義ならびにネットワークを用いた指来たす医療への取り組み」原 量宏(香川大学医学部付属病院医療情報部)

まず JGN II (Japan Gigabit Network II: <http://www.jgn.nict.go.jp/>) の簡単な紹介、これを利用した遠隔講義の事例として、2005 年 10 月の未来 ICT フェスタにおいて南極昭和基地で行われた講演のライブ中継、JGN II への常時接続校である札幌医科大学との間で行われている遠隔講義が挙げられていた。次に、本題として香川大学医学部における医療 IT 化の取り組みについて、特に周産期医療に関する話題を中心に紹介が行われた。周産期医療において IT 化が必要である背景として、現在、産婦人科医の減少が進んでいる事が挙げられるとの事。今後は大病院でしか出産できない時代が訪れ、5 年後にはお産難民が 50 万人を超えるであろうという予想が示された。妊婦検診はぎりぎりまで開業医で行い出産は大病院へ搬送する環境が必要となってくるため、病院間の連携のためにもカルテの電子化は最重要課題だそうである。香川大学では、全国の国立大学の中でも最新と言える電子カルテのシステムを導入しており、高速ネットワークを利用して電子化したカルテや X 線、CT 等患者データ (J-MIX, HL7 v3 形式) を医療機関の間で高速に転送できる環境にあるとの事。開始当初は、大学内にサーバー設置していたが、教員がやめるとそれっきりになってしまう可能性がある等の問題があるため、県に話を持って行った所、道路予算を少し削れば簡単に出来ると快諾されたようである。世界初の医療情報データセンターとして開設された K-MIX かがわ遠隔医療ネットワーク (<http://www.m-ix.jp/>) は、香川県の予算で作ったデータセンターだったため、当初は香川県限定だったものの、今年から全国で利用可能になり、1 医療施設 6500 円/月の低価格で香川県から価格破壊を行ったとの事。因みに放射線医を 1 人雇うと 1000 万円/年らしい。今後はカルテを電子化することで、例えば、蓄積された電子カルテの情報から、同じ病気に有効とされる別の治療法について効果を比較検証する事も容易になる等、いろいろな可能性も出てくるとの事。カルテの電子化については EHR (Electronic Health Record) が注目されているという話もあった。詳細については、ネットで検索して欲しいとの事だったが、これは、一元化された個々の患者の健康情報を、医療情報のネットワーク化を行う事で、地域～国のレベルで共有し、患者のために有効活用しようという取り組みのようである。患者生涯の情報を管理する事でより充実した医療が可能となると期待されているが、胎児期からの情報を蓄積しているのは香川県だけらしく、先進事例として注目されているようである。ネットワークを生かした e-learning 教材の事例紹介もあり、学生だけでなく、一般へ向けのコンテンツとして、香川大学医学部付属病院 医療情報部 (<http://www.kms.ac.jp/~hospinfo/Medinfo/>) で一般公開されている「妊娠出産のポータルサイト・ママ

大好きネット」や「メタボリックシンドロームの自動診断システム」の紹介もされていた。周産期の在宅医療の例としては、モバイル CTG モニタを用いた在宅妊娠管理システムの事例が紹介されていた。これは、専用の計測機具により 20～60 分かけて計測した胎児の心拍・胎動、子宮のはり・収縮の時系列情報をパケット通信(NTT DoCoMo の DoPa)を用いて伝送するシステムで、担当医は携帯電話(i アプリ)により出先からでも胎児の状況を確認できるとの事。愛子様出産の折には万全を期すために雅子さまも使われた折り紙つきシステムだそうである。陣痛の兆候も分かるらしく、電子カルテによる病院間の連携に加えて、周産期の在宅医療の大きな味方と言えそうだった。高齢者の遠隔医療の話などもあった。高齢者に関して最初も IT 機器に抵抗があるのではないかという質問が出たが、やっているうちに慣れるとの事。讃岐市では平成 7 年くらいから 10 年くらいやっているが、独居高齢者に喜ばれているそうである。国民健康保険の経費も 2 億くらい下がるという話も出ていた。

以上、どちらかと言えば大学教育と言うよりも医療 IT 化の事例紹介的側面の強い発表であったように思う。しかし、少子化が進む中で周産期医療の問題は、将来の学生確保という点を考えると大学にとっても重要な問題であろう。大学として行う事の出来る教育活動は何も大学の中だけに限らない。将来の学生を出産前から終生にわたりサポートして行く取り組みと考えると、多くの可能性を見出す事の出来る発表であったのではないかと思う。

3. 「多キャンパスを結ぶ e-Learning・遠隔教育環境への取り組み」林 敏浩(香川大学図書館・情報機構)

まず、教育環境の向上のために e-Learning や遠隔教育環境が必要とされる背景として、香川大学はキャンパスが 4 箇所に分散している事に由来する教員・学生の移動問題などの弊害と、中期目標に掲げられた学内 LAN の高速化、遠隔講義システムの整備、遠隔講義環境の整備等の目標について説明があった。これまでも、全学的な e-Learning の取り組みはあったらしい。2003 年～2006 年にかけて NEC の i-Collabo (<http://www.nec.co.jp/educate/products/i-collabo/>) を導入し運用試験を行ったとの事。これは、履修管理を行う教務システムとの連携の不備、誰が運用するかが不明瞭であった事、学内への利用アナウンス不足等の問題があったそうである。2005 年には学内のプロジェクト研究として大学教育開発センタによる e-Learning の研究を行い、講義収録に基づくストーリーミング配信などを行ったとの事。これは、単年度予算であったため次年度への継続性で問題が生じたそうである。現在の e-Learning の取り組みとしては、大学教育開発センターと総合情報基盤センターが中核となった e-Learning WG を形成。2006 年に 500 万円の学内予算措置(単年度予算)を得て、教員への IT 活用に関する意識調査と、e-Learning と遠隔講義の支援環境の検討を行ったとの事。意識調査の結果は、e-Learning 導入のニーズはあり、コンテンツの作成にもネガティブな印象はなかったとの分析が示された。ただし、得られた回答は全教員に対して 54 件(約一割)の回答だったらしい。今回導入したシステムとして紹介されていたのは、EduCanvas Infinity (http://www.mqsys.jp/product/product_intro.asp) である。明治薬科大が大量導入し、国家試験対策に効果を挙げているシステムとの説明であった。システムとしては、従来の板書型講義を貴重とした電子黒板システム型の遠隔講義システムで、最大 4 拠点を接続してリアルタイムで講義を相互配信できる。主にタブレット PC での利用が念頭にあるようで、画面に手書きするのが基本ではあるが、Microsoft Office のファイルや PDF をビットマップ化して張り付けたり、リアルタイムで講義の音声や映像を付ける事も可能な模様。講義内容は、時系列を再現可能な形で記録する事が出来るため、講義のデジタルコンテンツ化も進める事ができるという話である。記録したデータは無償で配布されている専用の再生ソフトを用いて再生できる。ただし、ライセンス上の問題から、専用の USB ドングルによるプロテクトが施されているため、講義や記録を行う際には、各講義でマスターとなっている PC に 1 つ挿しておく必要があるとの事。単価は 1 個 75 万円で、同大学では 40 個導入しているという話であった。問題点としては、コンテンツが増えないと学生が使ってくれないという問題、ライセンス数を増やしたいが結構高価なこと、コンテンツ作成者へのインセ

ンティブをどうするかと言う問題、クライアント PC の準備など多キャンパス間におけるサポート体制の必要性、ネットワーク帯域の必要性等が挙げられていた。質疑応答では、教員だけでなく、学生へのアンケートも必要ではないかとの質問があり、それについては、まず教員へのアンケートから行った経緯から、学生へのアンケートは今年度行う方向で WG を動かそうとしているとの事である。アンケート調査で全教員の九割が未解答だった件について方策はないのかとの質問に対しては、単に e-Learning 環境があるだけではなかなか使ってもらえないため、まず地道に下地作りを行い、成功例を作るべきであろうとの事である。実際、前の大学では、草の根的にはじめて普及させて行った事例が存在したそうである。Power Point 等のほうが良いのではないかとの質問に対しては、電子黒板型を選択したのは板書の講義にこだわっている教員への配慮との事である。4 拠点を超える場合はどうなるのかとの質問に対しては、香川大学の場合 4 拠点に収まっているので問題ないが、4 拠点を越える場合は EduCanvas の制約から無理ではないかとの事である。キャンパス間の連携についての質問もあった。各キャンパスにシステムを起動してくれる人がいないと 1 人では遠隔講義が出来ないため、事務系の人には仕事が増えるのではないかと懸念されているらしい。この点については出来るだけ先生同士でタッグを組んでやる事を考えているとの事。配信される側のキャンパスでは、私語が多くなる傾向があるが、誰か後ろで先生に見てもらっていると改善が見られるらしい。その他、インフラとして B フレッツで 10 拠点繋げるサービスを利用している(おそらく法人向け VPN プランの事)とか、ウェブテレビ会議システムの nice to meet you (<http://www.nice2meet.us/ja/>) が使い易かったなどの情報も交換されていた。キャンパスが分散しているという意味では、本学も同様の問題を抱えており、取り組みとしては、参考になる部分も多いのではないかと感じた。しかし、導入されていたシステムについては、難点も多いように思う。再生環境が Windows に限定されるのはともかくとして、手書きデータや画像は検索が困難であるし、独自データ形式は二次利用も難しい。システム自体がオープンソースである必要はないと思うが、データ形式がオープンな仕様でない場合、システムの販売終了と同時に折角作ったコンテンツがただのゴミとなり兼ねない点については熟考すべきであろう。個人的感想としては、コンテンツをデジタル化するメリットを考えた場合、データの二次利用や検索が出来ないのであれば、単純にデジタル化された映像のストリーミング配信と記録だけでも十分なように思われる。講義のデジタルコンテンツに関する具体的な事例や方法については、MIT を発端とする OCW (Open Course Ware) に対する国内外の取り組みも参考にすべきであろうと思う。これについては JOCW コンソーシアム (<http://www.jocw.jp/>) が参考になるだろう。

④外国語(英語)分科会「英語コミュニケーション能力向上のためのカリキュラム改革」(英語分科会: 教育学部 石井由理)

この分科会では、山口大学大学教育センターと香川大学大学教育開発センターから報告がなされ、各報告後に質疑・討論が行われた。はじめの報告は山口大学の岩部浩三教授による「TOEIC を活用した英語教育の現状」についてで、6 年目に入った TOEIC を活用した英語教育の効果と問題点、その改善策として予定されている 20 年度からのカリキュラムの手直し、今年度から始められたオンライン自主課題についての説明、TOEIC 担当教員の FD、海外語学研修と教員のための ESL 研修などについて報告された。平成 14 年度から実施している山口大学の TOEIC を活用した英語教育に対し、少し後れて同様のカリキュラムを導入した他大学教員の関心は高く、活発な質疑応答が行われた。以下に質問を要約する。

- ・ 今年度始まったオンライン自習課題では、学生はどの程度自宅でコンピューターを使って自習できる状態にあるのか。
- ・ TOEIC スコアにはテスト間の誤差があるが、それには対処をしているのか。

- ・ 4年間の教育の中の TOEIC の位置づけはどうか。
- ・ 組織の問題として、外国語センターと英語分科会の関係はどうか。
- ・ 個々の学生の4年間の変化は追跡調査をしていないのか。
- ・ 各学部の目標スコアが6月にとるべきスコアなのか。
- ・ 低得点者への救済はどうか。
- ・ オンライン学習と授業の関連はどうか。

これらに対し、学生の半数は自宅でオンライン学習ができる状態にあること、TOEIC テスト間の誤差は考慮にいていないこと、4年一貫の教育という観点から見た場合、1年を主とする共通教育という位置づけの限界が存在すること、また、組織面でも、英語分科会の責任範囲は共通教育に限られるが、その後の英語教育を担当できるほど外国語センターが充実していないこと、高学年で受験した IP テストスコアは追跡できること、各学部のスコアは卒業するためのものであり、共通教育を終えるためのスコアとは異なる場合もあること、20年度からの手直しでも、低得点の学生も最終的には各学部が課した卒業するためのスコアを取らなくてはならないこと、オンライン学習と授業の内容は直接には関連していないこと、などが答えとして述べられた。

次に香川大学大学教育開発センターの長井克己准教授から、「香川大学における英語カリキュラムの改革」についての報告があった。香川大学のカリキュラム改革は、それ以前のカリキュラムに対する、「文学作品ばかり」「英文和訳ばかり」という批判に対し、コミュニケーション中心であることを明確にしたものであるが、実際には旧カリキュラムにおいても前述の批判は当てはまらず、多くの授業で時事問題や異文化理解に関する文章を読み、リスニングも行ってた。新カリキュラムでは、1クラスの人数を70人から30人～40人に減らしたが、非常勤講師を増やせないという問題が残った。このため、自律型学習として、TOEIC のテキストと音読課題を課し、それらをやって提出することで2単位分の単位を出すことにした。TOEIC 受験は必須だが、1年次 450 点、2年次 530 点というスコアは目標として設定しており、卒業のための条件にはなっていない。2年次では技能別の授業になる。学生のアンケートに基づいて新カリキュラムを評価すると、コミュニケーション重視はよく理解され、リスニング力は伸びたが、リーディングにはあまり役立っていない。また、自習課題は不評という結果になった。問題点として、クラスサイズを小さくするために減った授業数、最低基準をどうクリアしていくかがあり、検討課題として TOEIC 偏重によるリーディング力不足、教員の個性の埋没、習熟度別クラスを導入するか否かなどがある。質疑応答では、450 点、530 点というスコアの根拠、テスト実施の形はどうかなどの質問に対し、目標スコアは英検などとの換算値に基づく経験知であること、テストは土曜日1日を使って行うことが回答された。また、TOEIC のスコアが伸びることによってコミュニケーション能力は向上したといえるのかという問いかけをめぐって議論が展開し、TOEIC の点だけでコミュニケーション能力を測ることはできないが、300 点しかとれない学生にはコミュニケーション能力はないと考えるよりも、300 点分の能力はあると考える方がポジティブなのではないかといった意見が出された。議論から、コミュニケーション能力をどのように測ればいいのか、各大学とも試行錯誤をしている現状がよく理解できた。

⑤外国語（初修）分科会「初修外国語教育の充実のために」（初習外国語分科会：人文学部 更科慎一）

この分科会では、初修外国語教育と関連して、二つのテーマが議論された。

第一に、香川大学経済学部の高木文夫氏から「初修外国語教育と海外語学研修」と題する発表が行われた。香川大学においては、平成 14 年度からドイツ語の、平成 17 年度からは中国語の海外語学研修がそれぞれ実施されている。発表ではドイツ語の語学研修を中心として、年間のスケジュール、研修期間(2週間)の日程、費用、学生の参加状況などについて詳しい紹介が行われた。ドイツ語教育にお

ける海外語学研修の意義については、学習の動機付けや、教室授業ではできない体験をさせることなどが挙げられ、「習った単語が実際に使われているのが体験できてうれしい」などの学生の感想も披露された。実施に当たっての問題点も挙げられていたが、海外語学研修に消極的な学生や保護者の間に「海外は危険なところ」との思い込みがあるなどの指摘は考えさせられる。単位面や金銭面で学生に手厚くするなどして参加者を増やす考えはなく、学生の意欲を重視するという姿勢には同感した。

第二に、香川大学大学教育開発センターの最上英明氏による発表「初修外国語教育の運営組織」があった。香川大学では、1995年度に、初修外国語担当教員全員が経済学部地域社会システム学科に移籍したが、2003年度に設置された大学教育開発センター外国語教育部にも初修外国語教員が配置されるなどして、現在の実施体制は複雑なものとなっているという。発表では、このような現状を踏まえて打ち出された「香川大学将来構想」において、「全学共通教育における外国語教育においては、『実用的な語学力』、『コミュニケーション能力』の向上を主目的とし、授業担当者もこの方針に沿って採用されることが望ましい。その意味で、全学共通教育における外国語教育の担当を一元的に管理する体制を構築することも検討すべきである」としていることを取り上げ、初修外国語教育の充実という観点から、運営組織のあり方について問題を提起した。香川大学の初修外国語教育実施体制は、経済学部地域社会システム学科がドイツ語1名、フランス語2名、中国語2名、韓国語1名であり、大学教育開発センター外国語教育部がドイツ語2名（他に外国人教員1名）とのことであり、本学のように人文学部を有する大学と比べると小規模である。

今回、大学教育に関する学会に参加したのは初めてであり、個人的には普段得られない知見を多く得ることができて有意義であったと考えている。初修外国語教育に関して言えば、第一発表者の高木先生が言っておられたことであるが、複数言語を学ぶことによって言語感覚を磨くことができるということもその目的の一つであると思う。この点は一般に必ずしも認識されていない。思えばわが国は、人口のほとんどが単一言語話者であり、日常生活において外国語が必要とされる場面と、外国語を緊張感の中で耳にする機会とが稀である。これは、外国語の習得にとっては敵対的とも言える風土である。日本語ブームなどでことばに関する関心が高まっているようにも見えるが、その関心はもっぱら正誤の問題、中でも言語の本質から言って瑣末な敬語法や表記法の問題に集中する傾向があり、思考表現方法の多様性をはぐくむ上では役に立っていないと思う。未知の外国語を学ぶことは、未知の思考表現様式を学ぶことでもあり、本来的に知的で、刺激的な営みであり、大学教育には最もふさわしい基礎的学問であると言える。精神的自由にとっての初修外国語教育の重要性が広く認識されることを願ってやまない。

⑥保健体育分科会「より良いスポーツ（体育）実技授業を目指して」（運動健康科学分科会：海野勇三）
報告なし

⑦日本語・日本事情分科会「中・短期留学生への対応について」（日本語分科会：国際センター 中溝 朋子）

本分科会では、「中・短期留学生への対応について」というテーマで、以下の2大学から事例報告がなされ、多くの質問、意見が出された。

1「香川大学における中・短期留学生の受け入れ事例」高水徹・塩井実香（香川大学留学生センター）

香川大学においては、近年特に協定校からの留学生の受け入れ方が多様化しており、本分科会ではその中から教育学部が受け入れた中国・台湾の協定校からの留学生11名の受け入れ事例（入門セミナー（国際教育理解教育コースとの合同授業）の開講、生協と協力した宿舍の確保、ボランティア・チューターのサポート等）と、2005年から年2回（夏・冬）行われている協定校からの学生を対象と

した2週間の語学研修プログラムの事例（研修内容、ホームステイや協定校との問題等）について発表があった。

2 『日本語・日本事情』科目の戦略化」村上和弘（愛媛大学国際センター）

愛媛大学では、多様化する留学生のニーズへの対応、国際交流に関する体制整備の一環として、「日本語・日本事情」科目の組み替え・センター補講科目の組み込みなどの作業を進めつつある。この背景には、近年協定校からの交換留学生が増加し、日本語科目の単位認定への要望が高まったこと、留学生の身分や留学目的がますます多様化していること、留学生センターから国際センターと再編されることで留学生の受け入れは国際交流の一部として位置づけられ、教育スタッフも限られていることなどが挙げられた。こうした中で、具体的に同大学が行った科目の再編、配当年次の変更、および将来的な課題について発表が行われた。

近年、どの大学でも協定校との交流が年々盛んになるなどして、留学生の多様化が進み、どのセンターも対応に苦慮している。愛媛大学と同じ国際センターを持つ山口大学において、両大学の取り組みは学ぶところが多かった。特に香川大学の教育学部国際理解教育コースと留学生センターとの合同授業の取り組みは、日本人学生の異文化への興味・関心を高め、留学への意欲向上を図るために大変意義のある取り組みであると言え、生協と協力した宿舎の確保も、同様の悩みを抱える本学にとって大変参考になった。また、分散キャンパスの国際センターという同じ環境にある愛媛大学の日本語カリキュラムの再編は、本学においても参考にすべき点が多く、本学においても優秀な留学生の獲得、大学の国際化といった戦略的な視点を加えて考えるべき急務であると言える。そのような意味でも、今回のような情報・意見交換は大変有意義であった。

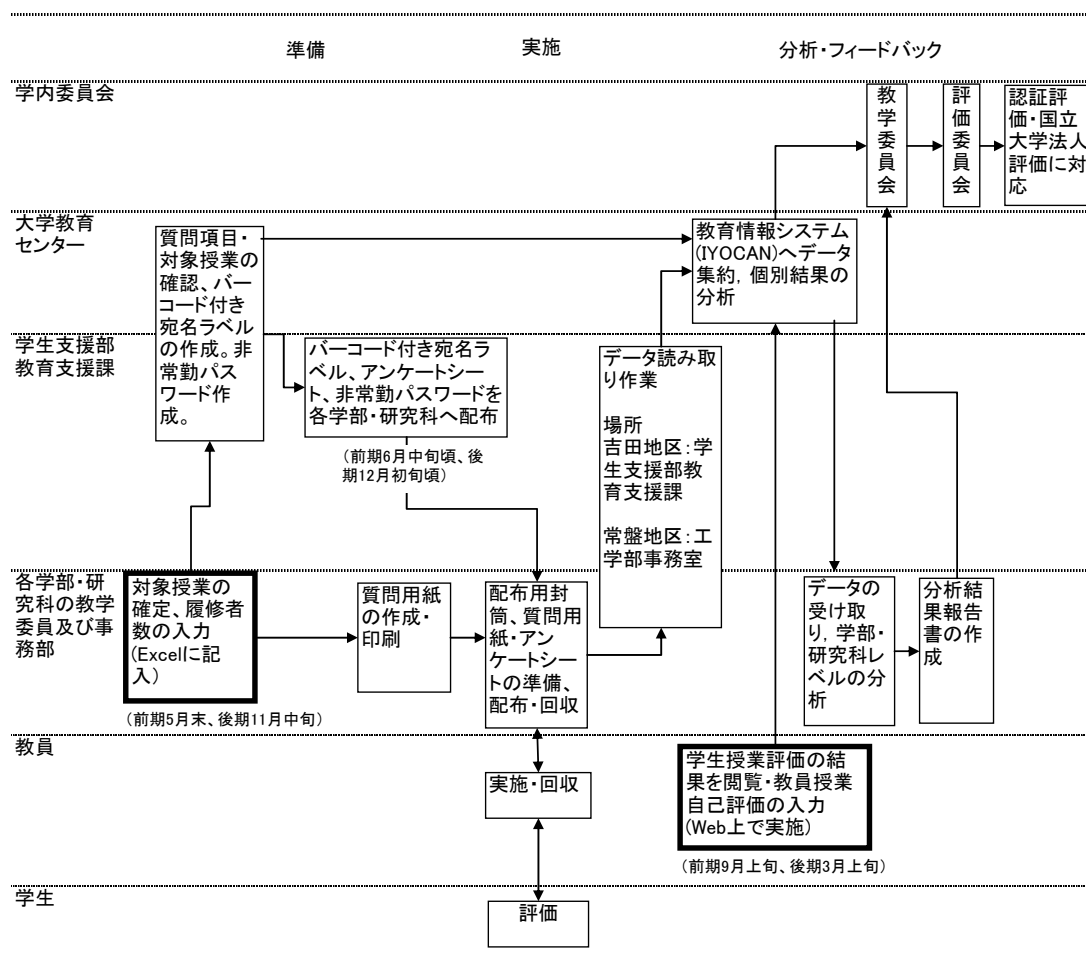
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

(1) 実施方法

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部が独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of Your Course ANalysisの略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員はWeb上で結果の確認と自己評価を行っている。なお、医学部(医学科、保健学科)は全学に先駆けてWebによる授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため、IYOCANは利用していない。

1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※共通教育、全学部、一部の研究科で実施。ただし、医学部のみ独自のシステムで実施。



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。



3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内

にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。



(2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列	語学用 もしくは TOEIC 準備用

「講義」の場合	
共通教育・外国語系列	語学用
「演習」の場合	

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

(3) 質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ① <授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習(予習・復習・宿題や関連した学習)を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ② <学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③ <理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？(講義、語学、TOEIC 準備)、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？(演習、実験・実習)
- ④ <満足>この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤ <出席>あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

(4) 実施対象授業

1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項 (H17ー)

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が5名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わりに、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法（H18ー）

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科（修士）	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法（H18ー）

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科（修士）	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28.授業実施上の工夫】(10項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

（5）学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web 上での閲覧システムの導入が共通教育は平成 16 年度から、また専門教育は平成 17 年度から導入された(医学部医学科は平成 13 年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web 上では過去の評価結果も閲覧でき、PDF でダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が 5 人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、個々の教員が学生授業評価の結果を見る前にまず自己評価を行う点である。教員による自己評価と学生授業評価はほぼ裏返しの問題項目であるため、自分の認識と学生による評価の「ずれ」を確認できる。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点

を記入することになっている。

(6) 学生への結果のフィードバックについて

平成 18 年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】を Web 上で公開した。



第2節 学生授業評価の結果について（全学）

（1）実施状況

2007(平成19)年度の学生授業評価の回答数および実施率は以下の表のとおりである。学部・大学院をあわせて約10.5万枚のマークシートが回収された。このうち学士課程教育では4割を共通教育が占め、残り6割が専門教育であった。

また、大学院では理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科がIYOCANを利用した授業評価を実施し、約3,700枚のマークシートが回収された。自由記述方式を採用した研究科(人文科学・農学)については次章以降の報告を参照していただきたい。

<学生授業評価：有効回答数>

回答数

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	合計
共通教育(2005)	32,922		4,425		2,590	25	39,962
共通教育(2006)	34,504		3,701		2,682		40,887
共通教育(2007)	33,743		3,657		2,491	9	39,900
人文(2005)	5,519		998	567	15		7,099
人文(2006)	4,977		1,042	568			6,587
人文(2007)	5,017		1,117	531			6,665
教育学部(2005)	7,607	2,524	817	97	714	155	11,914
教育学部(2006)	8,268	2,706	1,002	76	762	214	13,028
教育学部(2007)	8,325	2,520	894	68	811	274	12,892
経済(2005)	7,657					14	7,671
経済(2006)	10,057						10,057
経済(2007)	10,627						10,627
理(2005)	5,431		1,159		458		7,048
理(2006)	5,329	167	860		550		6,906
理(2007)	5,132	400	428		577		6,537
工(昼)(2005)	14,807	1,297	1,391		1,526	49	19,070
工(昼)(2006)	14,128	1,264	1,639		1,464	48	18,543
工(昼)(2007)	13,920	1,199	1,532		1,432	65	18,148
工(夜)(2005)	1,394	168	69		171	39	1,841
工(夜)(2006)	992	64	61		97	29	1,243
工(夜)(2007)	584	21	14		64		683
農(2005)	3,473		325		1,083		4,881
農(2006)	3,483		252		1,051		4,786
農(2007)	3,753		365		1,023		5,141
大学院・理工(2005)	3,344		29			24	3,397
大学院・理工(2006)	2,653						2,653
大学院・理工(2007)	3,062		118				3,180
大学院・技術経営(2005)	167		49				216
大学院・技術経営(2006)	247		67				314
大学院・技術経営(2007)	371		57				428
大学院・医学系(2006)	92		37				129
大学院・医学系(2007)	213		150				363
合計(2005)	82,321	3,989	9,262	664	6,557	306	103,099
合計(2006)	84,730	4,201	8,661	644	6,606	291	105,133
合計(2007)	84,747	4,140	8,332	599	6,398	348	104,564

また、次の表は学生授業評価の実施率である。一昨年度、昨年度と比較して若干の変動はあるが、全体的にみて良好であるといえよう。なお、医学部医学科と医学部保健学科は先述のように独自のデ

データベースで学生授業評価を処理しているため、これまで本報告書には実施率のデータを掲載していません。しかし、全学的な実施状況の把握を目指すため今年度より掲載することとなった。医学科は過去3年間非常に高い実施率を維持している。一方、保健学科は約半数の授業で実施することとなっている。

また、今年度より教員授業自己評価の入力率についても掲載することとした。入力率は平均で3~4割程度であり、5割を越えている学部・研究科がある一方、2割にとどまっている研究科も存在する。来年度以降はこの数値をあげていくことが教学委員会・大学教育センターの目標となるであろう。

<学生授業評価および教員授業自己評価実施率>

2007(平成19)年度 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧

	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	対象外の授業	教員授業自己評価入力率(2007年度)
共通教育	89.1%	94.2%	94.4%		39.1%
人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く	49.7%
教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く	34.1%
経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	卒業論文演習、演習Ⅰ・Ⅱを除く	38.9%
理学部	96.9%	98.0%	97.3%	特別研究、集中講義、一部の実習等を除く	57.3%
工学部(昼)	81.6%	95.4%	89.0%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く	35.1%
工学部(夜)	79.0%	91.3%	81.5%	〃	37.0%
農学部	82.7%	89.7%	93.0%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く	50.6%
医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く	—
医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%		—

2007(平成19)年度 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (大学院)

理工学	90% 80%	79.7%	81.3%	学外特別演習、特別講義、演習等を除く	36.9%
技術経営	—	90.9%	100.0%		56.3%
医学系	—	46.5%	54.5%	特別研究除く	53.5%
人文科学研究科					27.3%
教育学研究科					22.4%
経済学研究科					36.5%
農学研究科					48.8%

※理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除く

(2) 全学共通質問項目の分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の評定平均を算出し、授業区分別（講義、演習、実験・実習など）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科のみの結果を整理した。

1) 共通質問項目1「授業外学習時間」（表1、図1）

Q. あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習(予習・復習・宿題や関連した学習)を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください

共通質問項目1は、授業1コマあたりの授業外学習時間を尋ねたものである。表1・図1は選択肢1)30分未満、2)30分～1時間、3)1時間～1時間30分、4)1時間30分～2時間、5)2時間以上、の平均値を授業区分別に示したものである。各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業は授業外学習時間が長い傾向にあり、特に理系学部・研究科でその傾向が強くなっている。全体平均をみると、一昨年度、昨年度と比較してあまり大きな変動が見られない学部・研究科が大半であるが、技術経営研究科が徐々に上昇している。

2) 共通質問項目2「学習目標達成」（表2、図2）

Q. あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、1.そう思わない 2.あまりそう思わない 3.どちらとも言えない 4.ややそう思う 5.そう思う、の5段階の平均値を授業区分別に示した。各学部・研究科とも講義形式の授業よりも演習や実験・実習の方が平均は高い傾向にある。また、全体平均では理工学研究科と技術経営研究科で徐々に平均値が上昇している。

3) 共通質問項目3「理解」（表3、図3）

Q. あなたは授業の内容を理解しましたか？(講義、語学、TOEIC 準備)、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？(演習、実験・実習)

共通質問項目3は授業の理解や技能の向上のレベルについて尋ねた設問である。表・図には選択肢1.そう思わない 2.あまりそう思わない 3.どちらとも言えない 4.ややそう思う 5.そう思う、の5段階の平均値を示している。全体的にみて実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあり、授業の内容に関する高い理解や技能の向上が得られていることが分かる。全体平均を経年比較すると、殆どの学部では大きな変化はないが、研究科では理工学・技術経営研究科で上昇傾向にある。

4) 共通質問項目 4「満足」 (表4、図4)

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

共通質問項目 4 は授業の満足度について尋ねた設問である。表・図は選択肢 1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う、の 5 段階の平均値を示している。全体的にみて講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均は高い傾向にあり、なかには 4.0 を超える学部も見られる。学生が実際に問題を解いたり、グループで作業を行ったりする演習や実験は学生の高い満足を得ていることが指摘できる。全体平均を経年比較すると、殆どの学部で大きな変化はないが、大学院は他の設問と同様に理工学・技術経営研究科で上昇傾向にある。

5) 共通質問項目 5「出席」 (表5、図5)

Q. あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

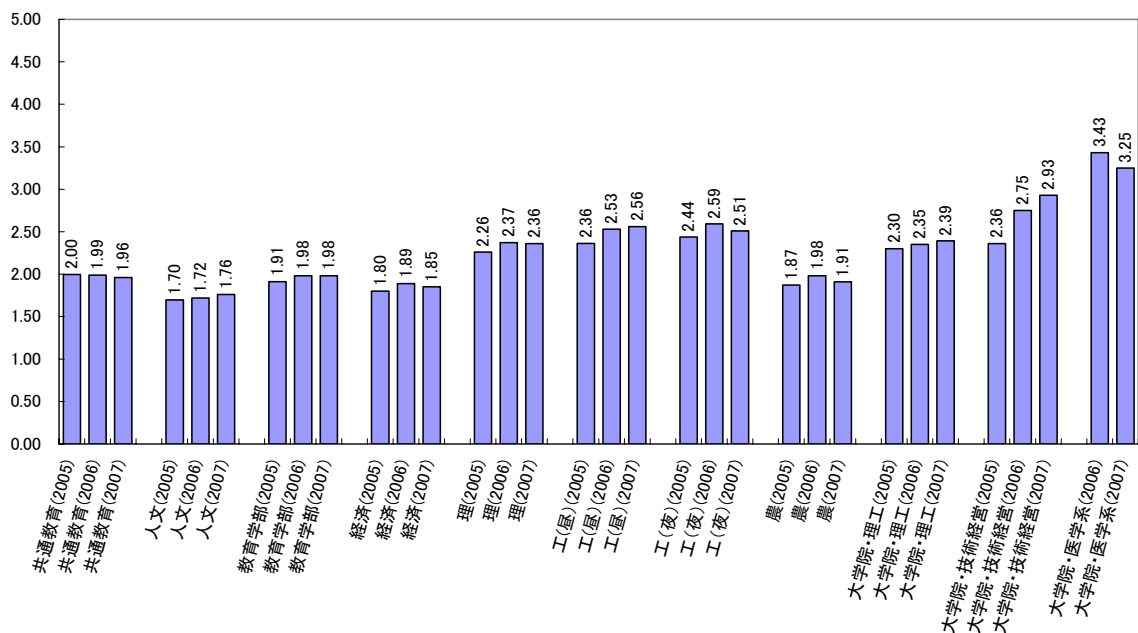
共通質問項目 5 は授業への出席状況について尋ねた設問である。表・図は 1) 20%未満、2) 20%～40%、3) 40%～60%、4) 60%～80%、5) 80%以上、の 5 段階の平均値を示している。ほぼすべての学部・研究科で全体平均が 4.5 を超えており、山口大学の学生は授業への出席状況が極めて良いことが明らかとなった。ただし、学生授業評価のアンケートに回答した学生は学期の最後まで出席した学生である、ということに留意しておく必要がある。なお、全体平均を経年比較すると、殆どの学部では大きな変化はないが、大学院では特に技術経営研究科の学生の出席率が上昇している。

<全学共通質問項目1 授業外学習時間>

授業外学習時間

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	1.95		2.00		2.62	0.44	2.00
共通教育(2006)	1.93		2.04		2.71		1.99
共通教育(2007)	1.88		2.09		2.79	1.89	1.96
人文(2005)	1.44		2.54	2.67	2.33		1.70
人文(2006)	1.38		2.70	2.89			1.72
人文(2007)	1.48		2.53	2.75			1.76
教育学部(2005)	1.65	2.19	2.57	1.74	2.66	3.50	1.91
教育学部(2006)	1.73	2.31	2.51	1.61	2.75	2.13	1.98
教育学部(2007)	1.74	2.30	2.57	1.66	2.87	2.10	1.98
経済(2005)	1.80					2.93	1.80
経済(2006)	1.89						1.89
経済(2007)	1.85						1.85
理(2005)	2.08		2.66		3.32		2.26
理(2006)	2.16	2.60	2.96		3.39		2.37
理(2007)	2.19	2.20	3.32		3.27		2.36
工(昼)(2005)	2.17	2.07	3.07		3.84	1.78	2.36
工(昼)(2006)	2.37	2.25	3.05		3.70	2.65	2.53
工(昼)(2007)	2.43	2.25	2.91		3.73	2.34	2.56
工(夜)(2005)	2.22	2.15	3.48		4.23	1.72	2.44
工(夜)(2006)	2.83	2.86	3.67		4.13	2.83	2.59
工(夜)(2007)	2.30	2.62	3.93		4.06		2.51
農(2005)	1.75		2.22		2.16		1.87
農(2006)	1.83		2.49		2.35		1.98
農(2007)	1.78		2.34		2.22		1.91
大学院・理工(2005)	2.29		3.24			2.50	2.30
大学院・理工(2006)	2.35						2.35
大学院・理工(2007)	2.36		3.08				2.39
大学院・技術経営(2005)	2.19		2.92				2.36
大学院・技術経営(2006)	2.58		3.39				2.75
大学院・技術経営(2007)	2.92		3.02				2.93
大学院・医学系(2006)	3.40		3.51				3.43
大学院・医学系(2007)	2.97		3.65				3.25

授業外学習時間(全体平均)一経年変化一

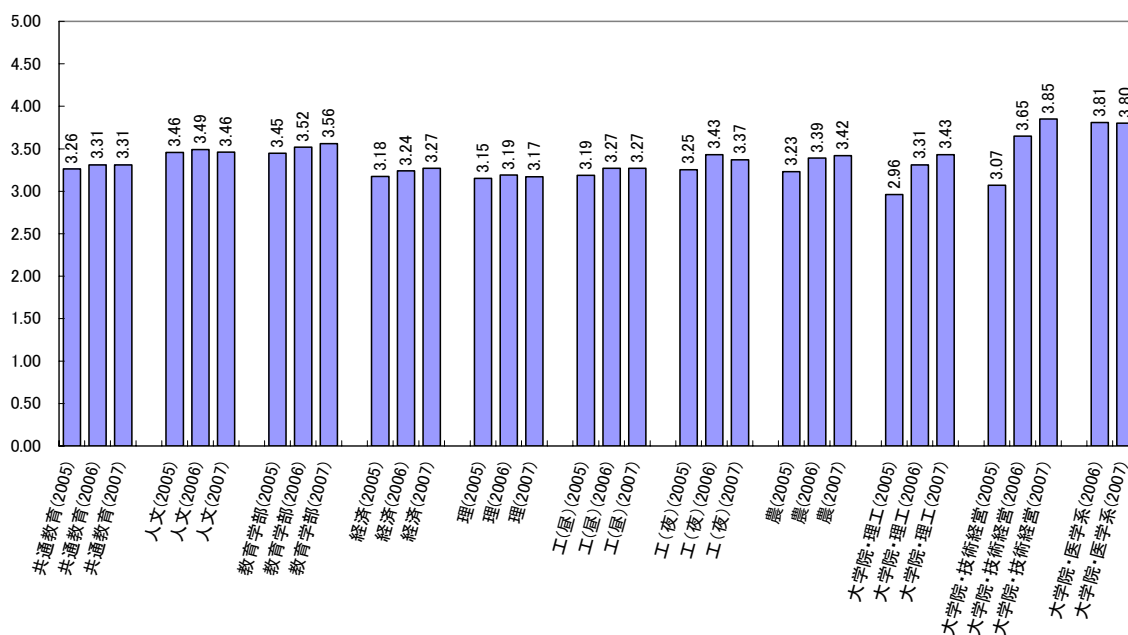


<全学共通質問項目2 学習目標達成>

学習目標達成

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	3.22		3.38		3.69	1.96	3.26
共通教育(2006)	3.27		3.40		3.70		3.31
共通教育(2007)	3.27		3.37		3.69	3.78	3.31
人文(2005)	3.39		3.72	3.64	3.47		3.46
人文(2006)	3.40		3.76	3.78			3.49
人文(2007)	3.37		3.76	3.75			3.46
教育学部(2005)	3.42	3.44	3.74	2.94	3.54	3.04	3.45
教育学部(2006)	3.45	3.58	3.86	3.07	3.73	3.47	3.52
教育学部(2007)	3.49	3.63	3.76	3.16	3.85	3.43	3.56
経済(2005)	3.17					3.86	3.18
経済(2006)	3.24						3.24
経済(2007)	3.27						3.27
理(2005)	3.11		3.17		3.56		3.15
理(2006)	3.14	3.04	3.32		3.48		3.19
理(2007)	3.12	2.96	3.45		3.51		3.17
工(昼)(2005)	3.15	2.91	3.45		3.54	3.71	3.19
工(昼)(2006)	3.24	3.28	3.38		3.50	3.35	3.27
工(昼)(2007)	3.25	3.23	3.35		3.48	3.25	3.27
工(夜)(2005)	3.22	2.92	3.58		3.82	2.85	3.25
工(夜)(2006)	3.36	3.72	3.66		3.79	3.52	3.43
工(夜)(2007)	3.35	3.14	3.29		3.62		3.37
農(2005)	3.15		3.16		3.50		3.23
農(2006)	3.31		3.45		3.61		3.39
農(2007)	3.34		3.72		3.60		3.42
大学院・理工(2005)	3.12		3.38			3.38	2.96
大学院・理工(2006)	3.31						3.31
大学院・理工(2007)	3.41		3.86				3.43
大学院・技術経営(2005)	3.08		3.06				3.07
大学院・技術経営(2006)	3.62		3.76				3.65
大学院・技術経営(2007)	3.85		3.86				3.85
大学院・医学系(2006)	3.92		3.54				3.81
大学院・医学系(2007)	3.76		3.86				3.80

学習目標達成(全体平均)一経年変化一

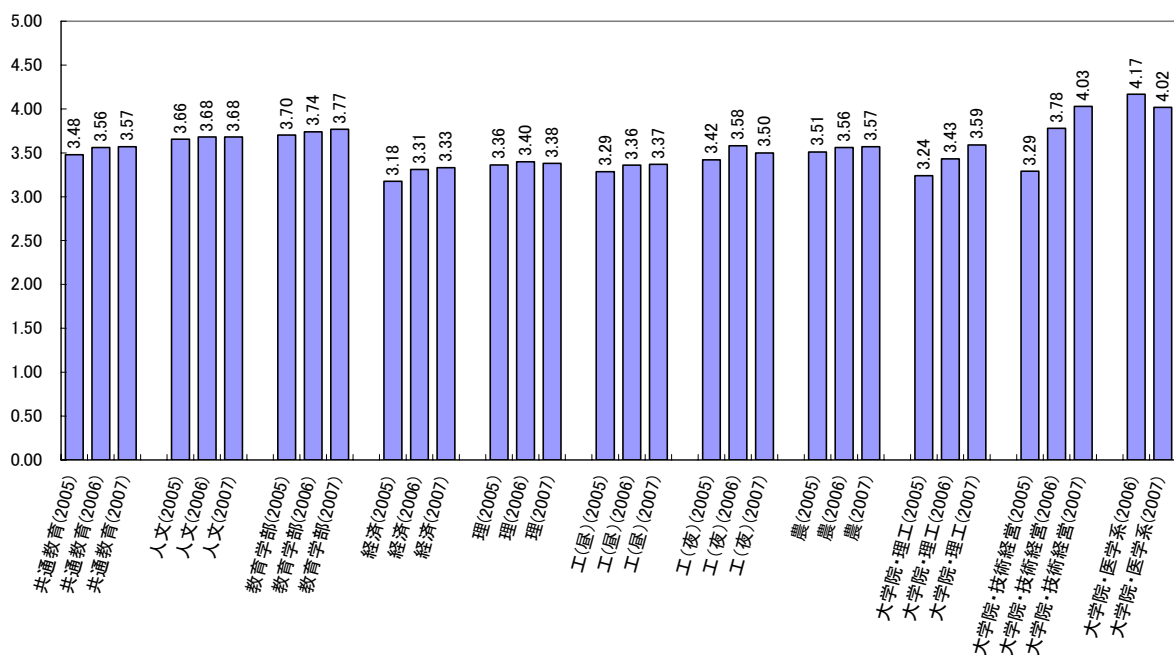


<全学共通質問項目 3 理解>

理解

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	3.42		3.68		3.84	2.56	3.48
共通教育(2006)	3.50		3.78		3.93		3.56
共通教育(2007)	3.52		3.77		3.96	4.33	3.57
人文(2005)	3.58		3.92	3.89	4.07		3.66
人文(2006)	3.58		3.98	4.02			3.68
人文(2007)	3.57		4.02	3.95			3.68
教育学部(2005)	3.69	3.64	3.97	3.27	3.84	3.71	3.70
教育学部(2006)	3.68	3.76	4.06	3.29	4.01	3.70	3.74
教育学部(2007)	3.72	3.79	3.95	3.32	4.07	3.62	3.77
経済(2005)	3.17					4.71	3.18
経済(2006)	3.31						3.31
経済(2007)	3.33						3.33
理(2005)	3.32		3.39		3.81		3.36
理(2006)	3.35	3.23	3.62		3.85		3.40
理(2007)	3.34	2.98	3.74		3.76		3.38
工(昼)(2005)	3.24	2.95	3.64		3.70	3.41	3.29
工(昼)(2006)	3.30	3.42	3.56		3.68	3.29	3.36
工(昼)(2007)	3.31	3.38	3.56		3.72	3.34	3.37
工(夜)(2005)	3.38	3.12	3.96		3.91	2.97	3.42
工(夜)(2006)	3.51	3.77	4.11		3.94	3.55	3.58
工(夜)(2007)	3.48	3.33	3.50		3.67		3.50
農(2005)	3.36		3.68		3.92		3.51
農(2006)	3.43		3.87		3.94		3.56
農(2007)	3.42		4.16		3.91		3.57
大学院・理工(2005)	3.24		3.41			3.58	3.24
大学院・理工(2006)	3.43						3.43
大学院・理工(2007)	3.57		4.14				3.59
大学院・技術経営(2005)	3.28		3.33				3.29
大学院・技術経営(2006)	3.74		3.94				3.78
大学院・技術経営(2007)	4.03		4.02				4.03
大学院・医学系(2006)	4.21		4.08				4.17
大学院・医学系(2007)	3.92		4.16				4.02

理解(全体平均)－経年変化－

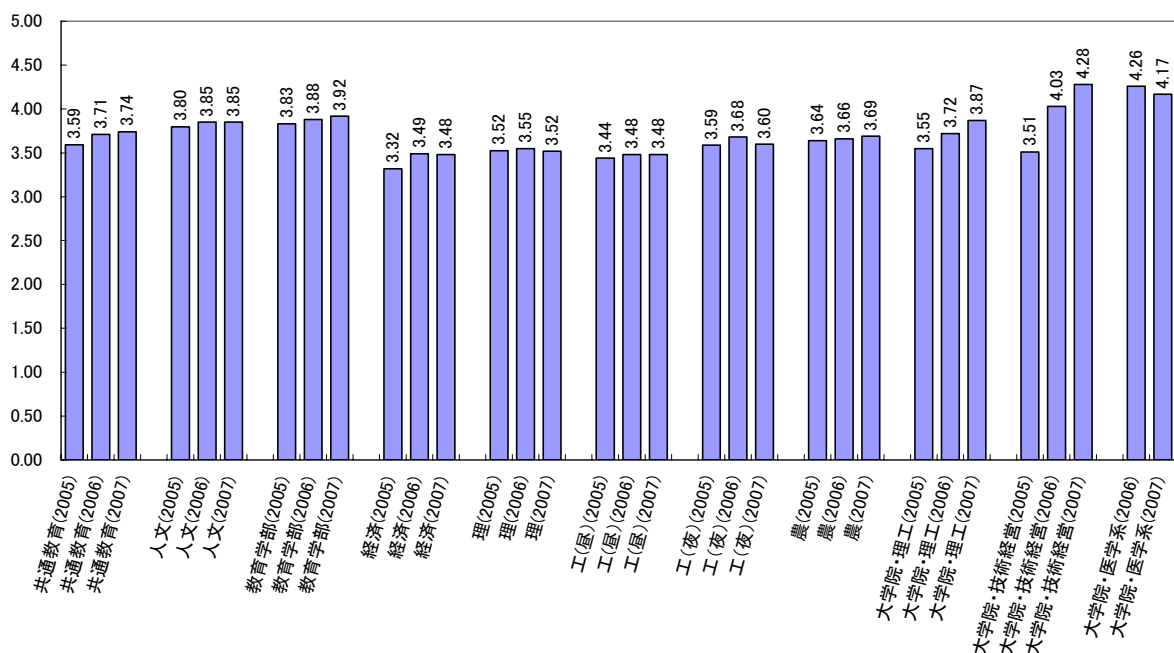


<全学共通質問項目 4 満足>

満足

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	3.57		3.60		3.93	2.40	3.59
共通教育(2006)	3.69		3.69		4.05		3.71
共通教育(2007)	3.72		3.75		4.07	4.33	3.74
人文(2005)	3.72		4.08	4.06	3.93		3.80
人文(2006)	3.74		4.13	4.22			3.85
人文(2007)	3.75		4.12	4.21			3.85
教育学部(2005)	3.79	3.77	4.19	3.42	3.97	4.54	3.83
教育学部(2006)	3.82	3.88	4.27	3.49	4.17	3.82	3.88
教育学部(2007)	3.87	3.93	4.16	3.51	4.27	3.70	3.92
経済(2005)	3.32					4.43	3.32
経済(2006)	3.49						3.49
経済(2007)	3.48						3.48
理(2005)	3.48		3.57		3.91		3.52
理(2006)	3.52	3.25	3.62		3.85		3.55
理(2007)	3.48	3.16	3.95		3.78		3.52
工(昼)(2005)	3.42	3.07	3.68		3.68	3.94	3.44
工(昼)(2006)	3.44	3.49	3.60		3.69	3.31	3.48
工(昼)(2007)	3.46	3.39	3.58		3.62	3.55	3.48
工(夜)(2005)	3.57	3.33	3.99		4.02	2.74	3.59
工(夜)(2006)	3.63	3.81	4.00		3.87	3.62	3.68
工(夜)(2007)	3.60	3.71	3.71		3.53		3.60
農(2005)	3.61		3.18		3.86		3.64
農(2006)	3.63		2.92		3.94		3.66
農(2007)	3.65		3.47		3.91		3.69
大学院・理工(2005)	3.55		3.97			3.75	3.55
大学院・理工(2006)	3.72						3.72
大学院・理工(2007)	3.85		4.31				3.87
大学院・技術経営(2005)	3.54		3.43				3.51
大学院・技術経営(2006)	4.00		4.13				4.03
大学院・技術経営(2007)	4.29		4.19				4.28
大学院・医学系(2006)	4.36		4.03				4.26
大学院・医学系(2007)	4.05		4.34				4.17

満足(全体平均)－経年変化－

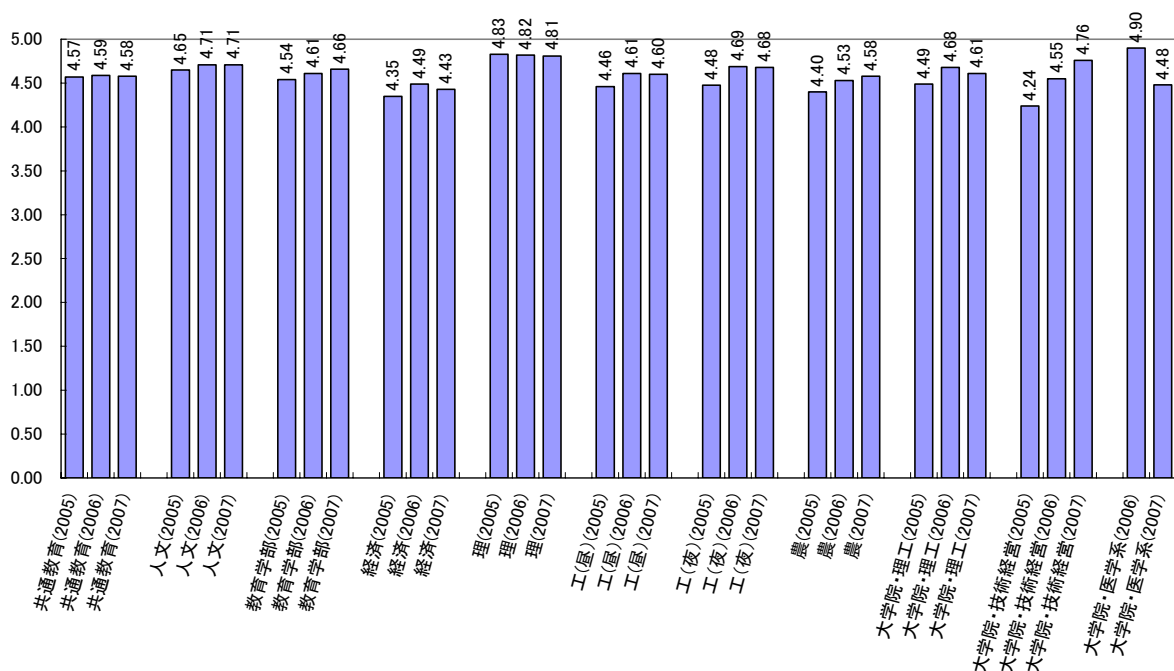


<全学共通質問項目5 出席>

出席

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	4.55		4.65		4.68	3.28	4.57
共通教育(2006)	4.58		4.65		4.63		4.59
共通教育(2007)	4.57		4.64		4.65	4.89	4.58
人文(2005)	4.66		4.57	4.68	4.87		4.65
人文(2006)	4.71		4.73	4.73			4.71
人文(2007)	4.70		4.72	4.72			4.71
教育学部(2005)	4.55	4.57	4.54	4.66	4.48	3.66	4.54
教育学部(2006)	4.60	4.65	4.58	4.68	4.69	4.48	4.61
教育学部(2007)	4.65	4.69	4.57	4.69	4.74	4.65	4.66
経済(2005)	4.35					5.00	4.35
経済(2006)	4.49						4.49
経済(2007)	4.43						4.43
理(2005)	4.81		4.87		4.94		4.83
理(2006)	4.80	4.72	4.88		4.92		4.82
理(2007)	4.81	4.73	4.84		4.91		4.81
工(昼)(2005)	4.46	4.04	4.60		4.64	4.73	4.46
工(昼)(2006)	4.59	4.62	4.65		4.75	4.88	4.61
工(昼)(2007)	4.59	4.55	4.64		4.74	4.65	4.60
工(夜)(2005)	4.48	4.08	4.48		4.80	4.85	4.48
工(夜)(2006)	4.68	4.97	4.75		4.74	4.24	4.69
工(夜)(2007)	4.67	4.67	4.57		4.83		4.68
農(2005)	4.52		3.49		4.29		4.40
農(2006)	4.63		3.67		4.43		4.53
農(2007)	4.64		3.78		4.61		4.58
大学院・理工(2005)	4.49		4.03			4.50	4.49
大学院・理工(2006)	4.68						4.68
大学院・理工(2007)	4.76		4.77				4.61
大学院・技術経営(2005)	4.28		4.10				4.24
大学院・技術経営(2006)	4.64		4.21				4.55
大学院・技術経営(2007)	4.74		4.44				4.76
大学院・医学系(2006)	4.87		4.97				4.90
大学院・医学系(2007)	4.54		4.41				4.48

出席(全体平均)－経年変化－



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2007年度の学生授業評価の結果を考察する。共通教育ではすべての授業で授業評価を実施しており、本年度は850の授業で実施された(実施率94.4%)。

本節では第2節で取り上げた全学レベルの集計と同様に、全学共通質問項目5項目を取り上げ、選択肢1～5の評定平均を算出し、その結果を学部別・授業区分別(講義、演習、実験・実習)に示した。なお、分析にあたっては共通教育の「系列」(①初期教育系列、②人文科学系列、③社会科学系列、④自然科学系列、⑤応用科学系列、⑥外国語教育系列、⑦主題系列、⑧一般系列)および授業の分野別に平均値を算出した。例えば、初期教育系列の初期教育分野は57の基礎セミナーの授業の平均値を示している。節末の一覧表(表3-1)に示しているのも併せてご参照いただきたい。

(1) 共通質問項目1「授業外学習時間」(共通教育) <図3-1、表3-3>

Q. あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習(予習・復習・宿題や関連した学習)を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください

共通質問項目1は、授業1コマあたりの授業外学習時間を尋ねたものである。選択肢1)30分未満、2)30分～1時間、3)1時間～1時間30分、4)1時間30分～2時間、5)2時間以上、の平均値を系列・分野別に算出した結果、全体平均は1.96であり、過去3年間の比較では2.06→1.99→1.96と徐々に低下している。8つの系列の平均を比較すると外国語教育と自然科学が最も高い(平均2.25)。外国語教育は昨年度も8系列中最も高かったが、平均値で見ると今年度はやや低下している(2.56→2.25)。これは英語・医療英語の学習時間が低下しているためである。初習外国語入門やドイツ語等の他の分野は大きな変動はない。また、自然科学では自然科学実験の平均値が3.56と非常に高く、授業外学習時間が十分に確保されている。これは過去3年間伸び続けている。自然科学実験は予習(教科書精読、実験手順を記したフローチャート作成)が必須であり、さらに実験後はフローチャート、実験結果、関係資料等をまとめてレポートを作成し、ただちに提出しなければならない。

授業を聞いただけで「分かったつもり」になっている学生が予習や復習といった個別学習を通じて内容をしっかりと理解できるよう、授業担当者は宿題やレポート等を課して授業学習時間の確保に努めなければならない。

(2) 共通質問項目2「学習目標達成」(共通教育) <図3-2、表3-3>

Q. あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を達成できたかどうかについて尋ねたものである。選択肢1.そう思わない 2.余りそう思わない 3.どちらとも言えない 4.ややそう思う 5.そう思う、の5段階の平均値を系列、分野別に算出した結果、全体平均は3.31であり昨年度と変化はない。8系列中最も高いのは一般系列の総合科目である(平均3.52)。総合科目は2年次以上を対象としており、現代的なテーマについて、学問の高度な進歩による過度に専門化した授業を避けて、分野の境界を越えた多角的な視野から問題を捉えられる視点を養成することを目指した授業科目群である。この授業科目群については、マネージャー役の担当教員を中心として、複数の学問領域の担当教員がオムニバス形式で講義を行っている。「キャリアと就職」、「やまぐち学」、「時間学」といった学際領域の科目が多く、例えば「キャリアと就職」の場合、学習目標は「自分のキャリアを考えることの重要性を理解し、そ

の方法論習得する。働く前に知っておくべき経済・社会・企業に関する基礎知識を習得する。キャリア意識を高め、学業ならびに就職活動への意欲を増す」といった非常に学生のニーズにマッチした具体的な目標が設定されており、そのため目標達成状況も非常に良好である。

(3) 共通質問項目 3「理解度」(共通教育) <図 3-3、表 3-3>

Q. あなたは授業の内容を理解しましたか？(講義、語学、TOEIC 準備)、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？(演習、実験・実習)

共通質問項目 3 は授業の内容の理解や技能のレベルの向上について尋ねた設問である。選択肢 1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う、の平均値を系列、分野別に算出した結果、全体平均は 3.57 で昨年と変化がなかった。8 系列のうち最も高かったのは一般総合の 3.79 であり、続いて初期教育系列が 3.77 と高かった。初期教育系列では留学生向けの科目である「日本事情」の平均値が 4.44 と非常に高かった。また、同じく平均値が 4.0 を超えている科目には「医療英語」(4.17)がある。これは医学部保健学科向けの開設科目群である。医療一般に関する知識の英文速読や、医療英単語の習得、リスニング力を高める授業が行われており、学生の理解度も非常に高い。反対に理解度が 3.0 を下回った分野には「経済学」(2.95)、「社会科学概論」(2.77)、「統計学」(2.90)が挙げられる。授業担当者は教員授業自己評価において様々な要因を分析しており、次年度には改善が図られると思われる。

(4) 共通質問項目 4「満足度」(共通教育) <図 3-4、表 3-3>

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

共通質問項目 4 は授業の満足度について尋ねた設問である。選択肢 1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う、の 5 段階の平均値を系列、分野別に算出した結果、全体平均は 3.74 で過去 3 年間のうち最も高かった。8 系列のうち最も高かったのは主題系列(3.94)である。主題系列とは、1 年次の学生を対象とした転換期教養科目であり、知的興味を喚起し、将来にも及ぶ豊かな知識を育成することを目指した科目群である。授業科目としては「思想と文化」「芸術と表現」「社会と組織」「環境と人間」「自然と科学」「健康とスポーツ」の 6 つの主題から構成され、それぞれの主題はいくつもの副題(テーマ)で構成されている。1 年生にとっては〇〇学というタイトルの授業はやや敷居が高く感じられるが、主題系列はテーマ型(例えば「香りと人間」「加齢と健康」「性をめぐる今日的状況」「歴史の中の動物」「戦争はどうして起きるのか」等)であるため身近に感じられるという特徴を持っている。こうしたテーマ型の授業は人気が高く、今後も充実させていく必要があるだろう。

(5) 共通質問項目 5「出席」(共通教育) <図 3-5、表 3-3>

Q. あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

共通質問項目 5 は授業への出席について尋ねた設問である。選択肢 1) 20%未満、2) 20%~40%、3) 40%~60%、4) 60%~80%、5) 80%以上、の平均値を算出した結果、過去 3 年間の比較では徐々に値が低下しているものの、4.58 という高い値を維持しており、共通教育への授業の参加状況は極めて良好であるといえよう。ただし、学生授業評価を行った学生は授業に最後まで参加した学生が多いと考えられるため、平均値が必然的に高くなる傾向にあることに留意しておく必要があるだろう。

図3-1

授業外学習
時間(経年変
化)

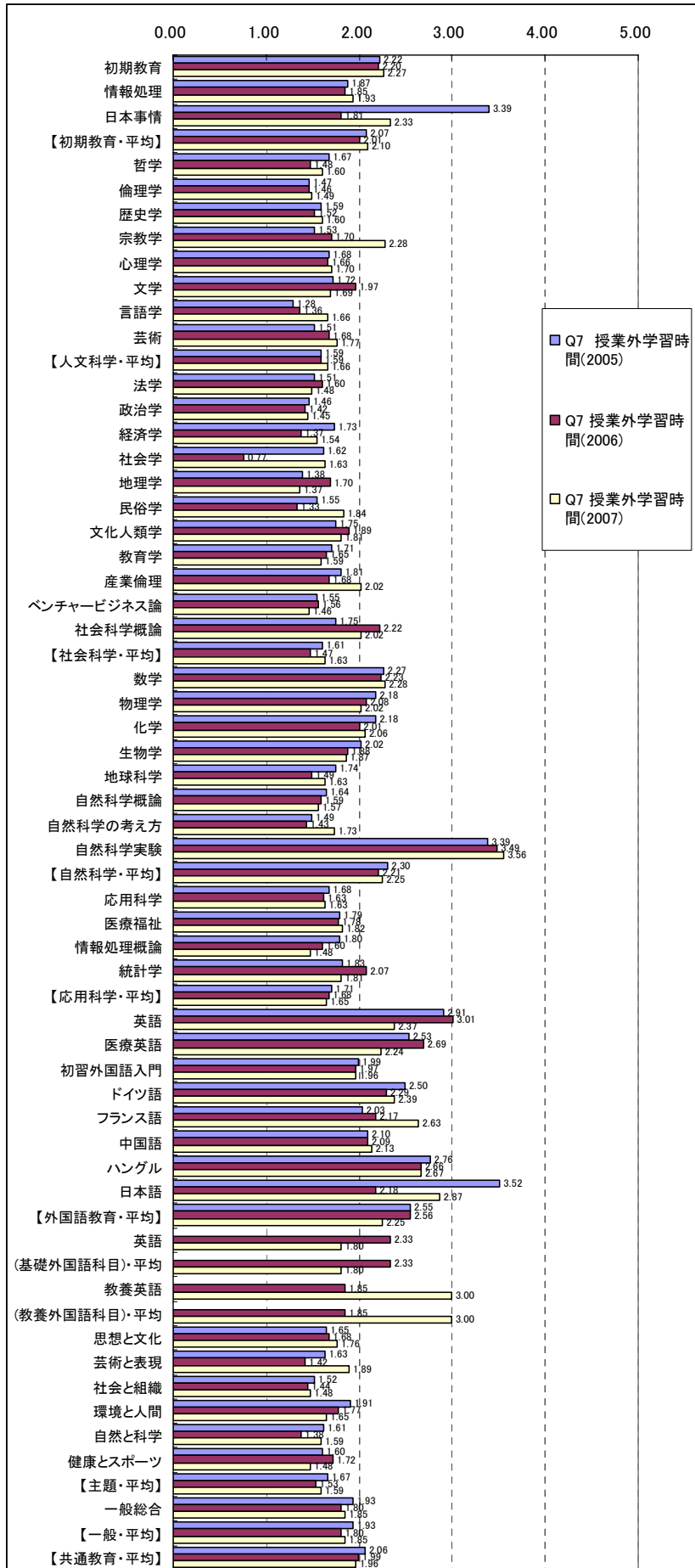


図 3-2

学習目標達成
(経年変化)

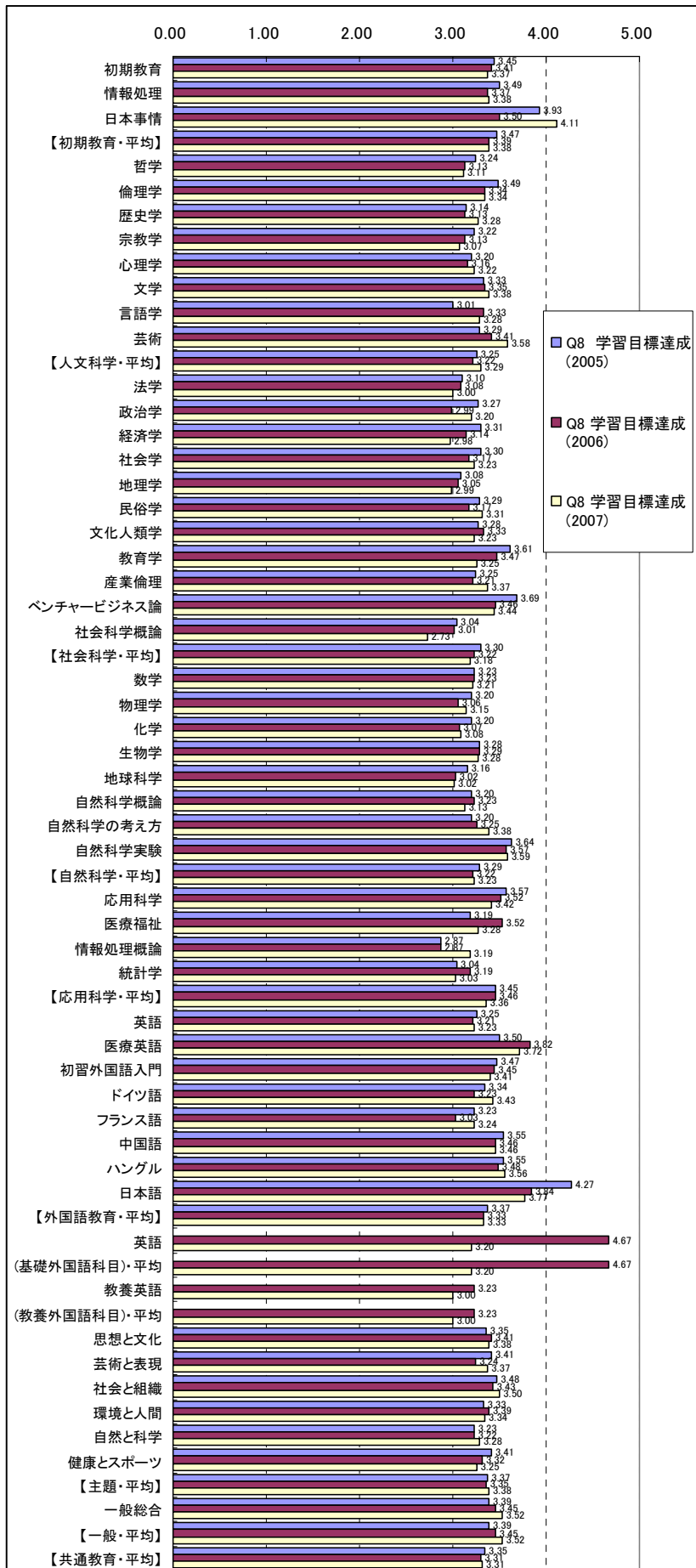


図3-3

理解（経年変化）

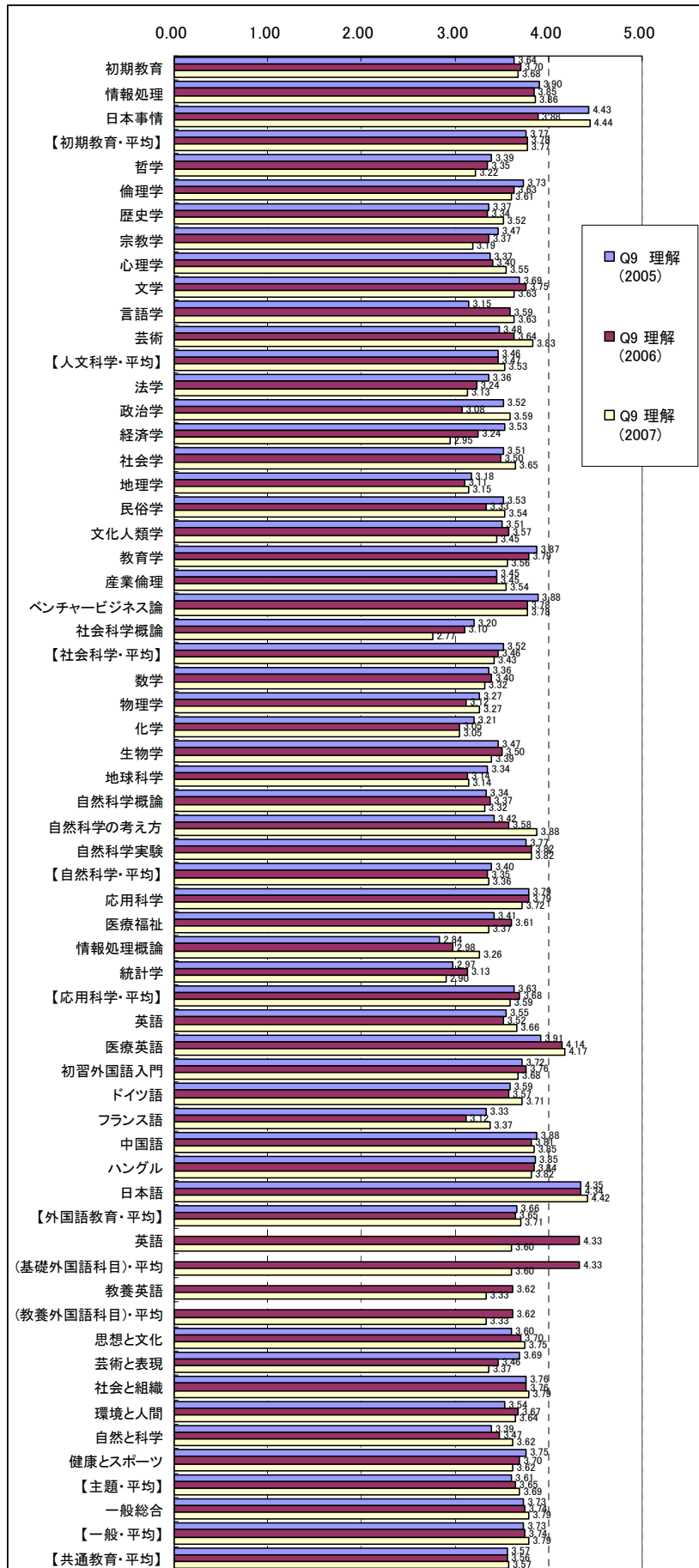


図 3-4

満足（経年変化）

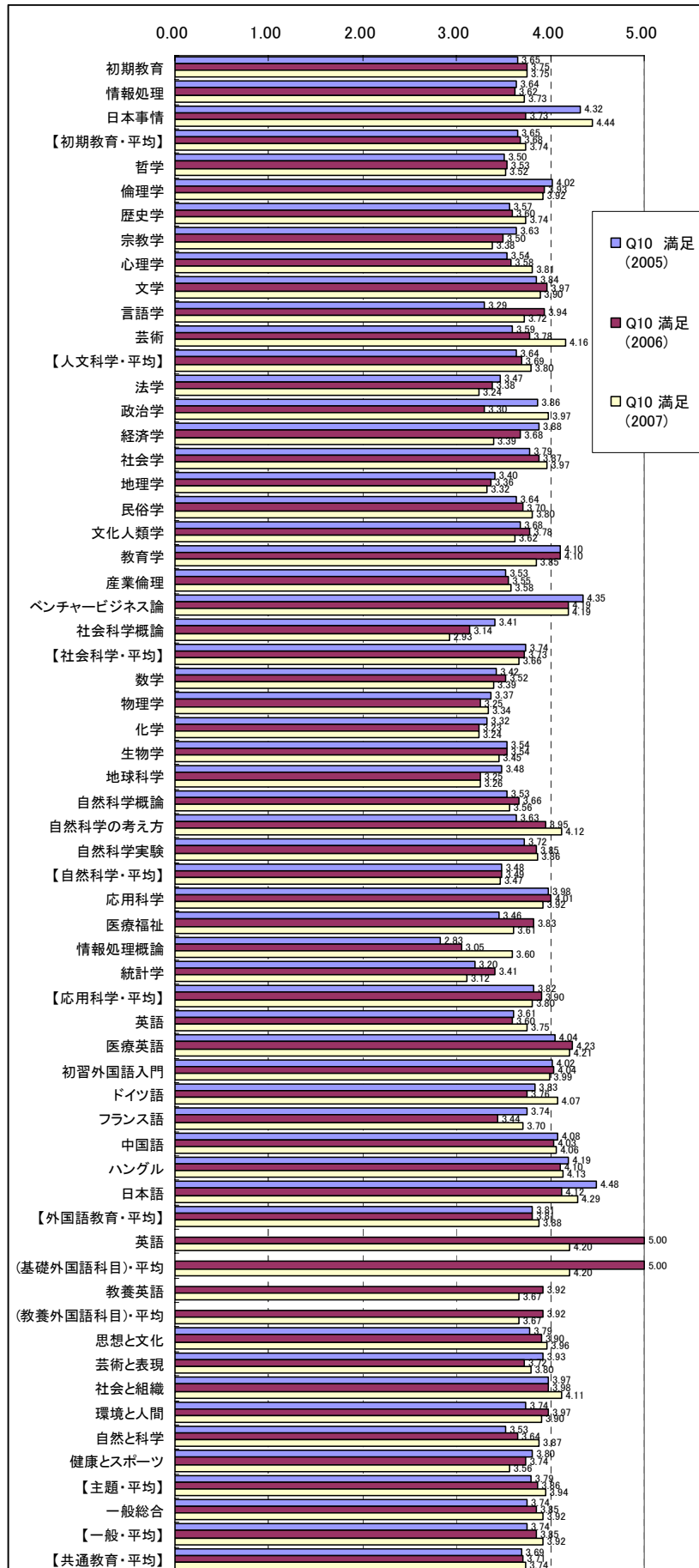


図 3-5

出席（経年変化）

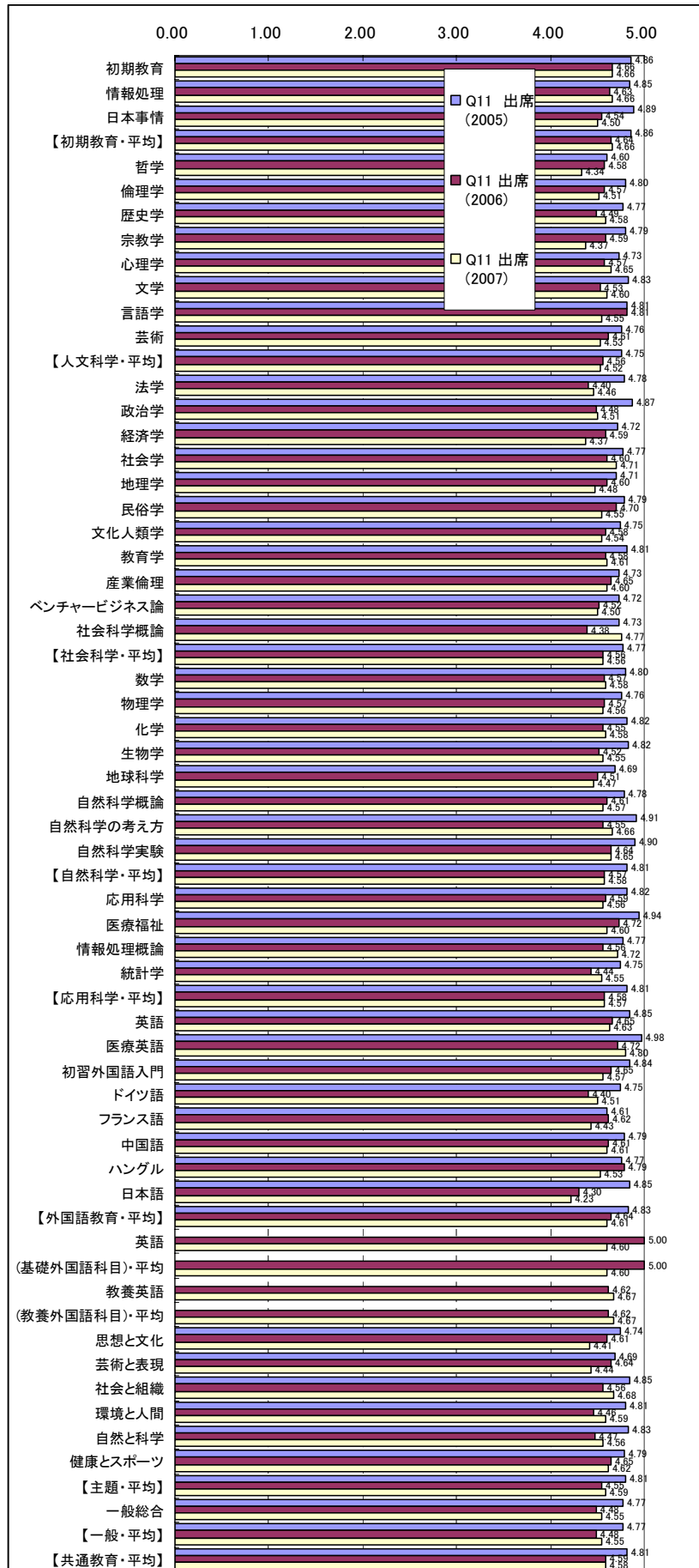


表3-1 授業評価を実施した授業数（系列・分野別、質問紙別集計）

系列	分野	授業区分(質問紙別)				合計	
		講義	演習・実験 実習	語学	TOEIC準 備		
初期教育	初期教育	0	57			57	
	情報処理	0	37			37	
	日本事情	6				6	
	合計	6	94			100	
人文学	哲学	4				4	
	倫理学	8				8	
	歴史学	12				12	
	宗教学	2				2	
	心理学	7				7	
	文学	4				4	
	言語学	2				2	
	芸術	11				11	
	合計	50				50	
	社会科学	法学	11				11
政治学		2				2	
経済学		2				2	
社会学		6				6	
地理学		4				4	
民俗学		2				2	
文化人類学		3				3	
教育学		6				6	
産業倫理		7				7	
ベンチャービジネス論		3				3	
社会科学概論		1				1	
合計		47				47	
自然科学		数学	31				31
		物理学	27				27
	化学	27				27	
	生物学	13				13	
	地球科学	6				6	
	自然科学概論	16				16	
	自然科学の考え方	3				3	
	自然科学実験	0	18			18	
	合計	123	18			141	
	応用科学	応用科学	28	29			57
医療福祉		2				2	
情報処理概論		3				3	
統計学		6				6	
合計		39	29			68	
外国語教育	英語			141	49	190	
	医療英語			3		3	
	初習外国語入門			62		62	
	ドイツ語			14		14	
	フランス語			8		8	
	中国語			71		71	
	ハングル			12		12	
	日本語			10		10	
	合計			321	49	370	
	(基礎外国語科目)	英語			1		1
合計				1		1	
(教養外国語科目)	教養英語			1		1	
	合計			1		1	
主題	思想と文化	7				7	
	芸術と表現	2				2	
	社会と組織	13				13	
	環境と人間	8				8	
	自然と科学	10				10	
	健康とスポーツ	4				4	
	合計	44				44	
一般	一般総合	29				29	
	合計	29				29	
合計		338	141	322	49	850	

表3-2 全学共通質問項目の結果一覧（共通教育）2007年度のみ

系列	分野	Q7 授業 外学習時 間(2007)	Q8 学習 目標達成 (2007)	Q9 理解 (2007)	Q10 満足 (2007)	Q11 出席 (2007)	有効回答数 (N)	
初期教育	初期教育	2.27	3.37	3.68	3.75	4.66	1729	
	情報処理	1.93	3.38	3.86	3.73	4.66	1780	
	日本事情	2.33	4.11	4.44	4.44	4.50	18	
	初期教育・平均	2.10	3.38	3.77	3.74	4.66	3527	
人文学	哲学	1.60	3.11	3.22	3.52	4.34	731	
	倫理学	1.49	3.34	3.61	3.92	4.51	1020	
	歴史学	1.60	3.28	3.52	3.74	4.58	1011	
	宗教学	2.28	3.07	3.19	3.38	4.37	280	
	心理学	1.70	3.22	3.55	3.81	4.65	710	
	文学	1.69	3.38	3.63	3.90	4.60	431	
	言語学	1.66	3.28	3.63	3.72	4.55	279	
	芸術	1.77	3.58	3.83	4.16	4.53	628	
	人文学・平均	1.66	3.29	3.53	3.80	4.52	5090	
社会科学	法学	1.48	3.00	3.13	3.24	4.46	792	
	政治学	1.45	3.20	3.59	3.97	4.51	170	
	経済学	1.54	2.98	2.95	3.39	4.37	205	
	社会学	1.63	3.23	3.65	3.97	4.71	697	
	地理学	1.37	2.99	3.15	3.32	4.48	343	
	民俗学	1.84	3.31	3.54	3.80	4.55	244	
	文化人類学	1.81	3.23	3.45	3.62	4.54	351	
	教育学	1.59	3.25	3.56	3.85	4.61	641	
	産業倫理	2.02	3.37	3.54	3.58	4.60	457	
	ベンチャービジネス論	1.46	3.44	3.78	4.19	4.50	334	
	社会科学概論	2.02	2.73	2.77	2.93	4.77	81	
	社会科学・平均	1.63	3.18	3.43	3.66	4.56	4315	
	自然科学	数学	2.28	3.21	3.32	3.39	4.58	1526
		物理学	2.02	3.15	3.27	3.34	4.56	1506
化学		2.06	3.08	3.05	3.24	4.58	1549	
生物学		1.87	3.28	3.39	3.45	4.55	867	
地球科学		1.63	3.02	3.14	3.26	4.47	510	
自然科学概論		1.57	3.13	3.32	3.56	4.57	1114	
自然科学の考え方		1.73	3.38	3.88	4.12	4.66	107	
自然科学実験		3.56	3.59	3.82	3.86	4.65	1552	
自然科学・平均		2.25	3.23	3.36	3.47	4.58	8731	
応用科学		応用科学	1.63	3.42	3.72	3.92	4.56	3496
	医療福祉	1.82	3.28	3.37	3.61	4.60	174	
	情報処理概論	1.48	3.19	3.26	3.60	4.72	246	
	統計学	1.81	3.03	2.90	3.12	4.55	465	
	応用科学・平均	1.65	3.36	3.59	3.80	4.57	4381	
外国語教育	英語	2.37	3.23	3.66	3.75	4.63	4586	
	医療英語	2.24	3.72	4.17	4.21	4.80	125	
	初習外国語入門	1.96	3.41	3.68	3.99	4.57	1915	
	ドイツ語	2.39	3.43	3.71	4.07	4.51	244	
	フランス語	2.63	3.24	3.37	3.70	4.43	174	
	中国語	2.13	3.46	3.85	4.06	4.61	1836	
	ハンガール	2.67	3.56	3.82	4.13	4.53	159	
	日本語	2.87	3.77	4.42	4.29	4.23	31	
	外国語教育・平均	2.25	3.33	3.71	3.88	4.61	9070	
(基礎外国語科目)	英語	1.80	3.20	3.60	4.20	4.60	5	
	(基礎外国語科目)・平均	1.80	3.20	3.60	4.20	4.60	5	
(教養外国語科目)	教養英語	3.00	3.00	3.33	3.67	4.67	3	
	(教養外国語科目)・平均	3.00	3.00	3.33	3.67	4.67	3	
主題	思想と文化	1.76	3.38	3.75	3.96	4.41	528	
	芸術と表現	1.89	3.37	3.37	3.80	4.44	114	
	社会と組織	1.48	3.50	3.79	4.11	4.68	1178	
	環境と人間	1.65	3.34	3.64	3.90	4.59	684	
	自然と科学	1.59	3.28	3.62	3.87	4.56	620	
	健康とスポーツ	1.48	3.25	3.62	3.56	4.62	333	
	主題・平均	1.59	3.38	3.69	3.94	4.59	3457	
一般	一般総合	1.85	3.52	3.79	3.92	4.55	1321	
	一般・平均	1.85	3.52	3.79	3.92	4.55	1321	
全体平均	共通教育・平均	1.96	3.31	3.57	3.74	4.58	39900	

表3-3 全学共通質問項目の結果一覧（共通教育）2005～2007年

系列	分野	Q7 授業 外学習時 間(2005)	Q7 授業 外学習時 間(2006)	Q7 授業 外学習時 間(2007)	Q8 学習 目標達成 (2005)	Q8 学習 目標達成 (2006)	Q8 学習 目標達成 (2007)	
初期教育	初期教育	2.22	2.20	2.27	3.45	3.41	3.37	
	情報処理	1.87	1.85	1.93	3.49	3.37	3.38	
	日本事情	3.39	1.81	2.33	3.93	3.50	4.11	
	【初期教育・平均】	2.07	2.01	2.10	3.47	3.39	3.38	
人文科学	哲学	1.67	1.48	1.60	3.24	3.13	3.11	
	倫理学	1.47	1.46	1.49	3.49	3.34	3.34	
	歴史学	1.59	1.52	1.60	3.14	3.13	3.28	
	宗教学	1.53	1.70	2.28	3.22	3.13	3.07	
	心理学	1.68	1.66	1.70	3.20	3.16	3.22	
	文学	1.72	1.97	1.69	3.33	3.35	3.38	
	言語学	1.28	1.36	1.66	3.01	3.33	3.28	
	芸術	1.51	1.68	1.77	3.29	3.41	3.58	
	【人文科学・平均】	1.59	1.59	1.66	3.25	3.22	3.29	
社会科学	法学	1.51	1.60	1.48	3.10	3.08	3.00	
	政治学	1.46	1.42	1.45	3.27	2.99	3.20	
	経済学	1.73	1.37	1.54	3.31	3.14	2.98	
	社会学	1.62	0.77	1.63	3.30	3.17	3.23	
	地理学	1.38	1.70	1.37	3.08	3.05	2.99	
	民俗学	1.55	1.33	1.84	3.29	3.17	3.31	
	文化人類学	1.75	1.89	1.81	3.28	3.33	3.23	
	教育学	1.71	1.65	1.59	3.61	3.47	3.25	
	産業倫理	1.81	1.68	2.02	3.25	3.21	3.37	
	ベンチャービジネス論	1.55	1.56	1.46	3.69	3.46	3.44	
	社会科学概論	1.75	2.22	2.02	3.04	3.01	2.73	
	【社会科学・平均】	1.61	1.47	1.63	3.30	3.22	3.18	
	自然科学	数学	2.27	2.23	2.28	3.23	3.23	3.21
物理学		2.18	2.08	2.02	3.20	3.06	3.15	
化学		2.18	2.01	2.06	3.20	3.07	3.08	
生物学		2.02	1.88	1.87	3.28	3.29	3.28	
地球科学		1.74	1.49	1.63	3.16	3.02	3.02	
自然科学概論		1.64	1.59	1.57	3.20	3.23	3.13	
自然科学の考え方		1.49	1.43	1.73	3.20	3.25	3.38	
自然科学実験		3.39	3.49	3.56	3.64	3.57	3.59	
【自然科学・平均】		2.30	2.21	2.25	3.29	3.22	3.23	
応用科学		応用科学	1.68	1.63	1.63	3.57	3.52	3.42
		医療福祉	1.79	1.78	1.82	3.19	3.52	3.28
	情報処理概論	1.80	1.60	1.48	2.87	2.87	3.19	
	統計学	1.83	2.07	1.81	3.04	3.19	3.03	
	【応用科学・平均】	1.71	1.68	1.65	3.45	3.46	3.36	
外国語教育	英語	2.91	3.01	2.37	3.25	3.21	3.23	
	医療英語	2.53	2.69	2.24	3.50	3.82	3.72	
	初習外国語入門	1.99	1.97	1.96	3.47	3.45	3.41	
	ドイツ語	2.50	2.29	2.39	3.34	3.23	3.43	
	フランス語	2.03	2.17	2.63	3.23	3.03	3.24	
	中国語	2.10	2.09	2.13	3.55	3.46	3.46	
	ハンデル	2.76	2.66	2.67	3.55	3.48	3.56	
	日本語	3.52	2.18	2.87	4.27	3.84	3.77	
	【外国語教育・平均】	2.55	2.56	2.25	3.37	3.33	3.33	
(基礎外国語科目)	英語		2.33	1.80		4.67	3.20	
	(基礎外国語科目)・平均		2.33	1.80		4.67	3.20	
(教養外国語科目)	教養英語		1.85	3.00		3.23	3.00	
	(教養外国語科目)・平均		1.85	3.00		3.23	3.00	
主題	思想と文化	1.65	1.68	1.76	3.35	3.41	3.38	
	芸術と表現	1.63	1.42	1.89	3.41	3.24	3.37	
	社会と組織	1.52	1.44	1.48	3.48	3.43	3.50	
	環境と人間	1.91	1.77	1.65	3.33	3.39	3.34	
	自然と科学	1.61	1.38	1.59	3.23	3.22	3.28	
	健康とスポーツ	1.60	1.72	1.48	3.41	3.32	3.25	
	【主題・平均】	1.67	1.53	1.59	3.37	3.35	3.38	
一般	一般総合	1.93	1.80	1.85	3.39	3.45	3.52	
	【一般・平均】	1.93	1.80	1.85	3.39	3.45	3.52	
合計	【共通教育・平均】	2.06	1.99	1.96	3.35	3.31	3.31	

表3-3 共通質問項目の結果一覧（共通教育）2005～2007年 <続き>

分野	Q9 理解 (2005)	Q9 理解 (2006)	Q9 理解 (2007)	Q10 満足 (2005)	Q10 満足 (2006)	Q10 満足 (2007)	Q11 出席 (2005)	Q11 出席 (2006)	Q11 出席 (2007)
初期教育	3.64	3.70	3.68	3.65	3.75	3.75	4.86	4.66	4.66
情報処理	3.90	3.85	3.86	3.64	3.62	3.73	4.85	4.63	4.66
日本事情	4.43	3.88	4.44	4.32	3.73	4.44	4.89	4.54	4.50
【初期教育・平均】	3.77	3.78	3.77	3.65	3.68	3.74	4.86	4.64	4.66
哲学	3.39	3.35	3.22	3.50	3.53	3.52	4.60	4.58	4.34
倫理学	3.73	3.63	3.61	4.02	3.93	3.92	4.80	4.57	4.51
歴史学	3.37	3.34	3.52	3.57	3.60	3.74	4.77	4.49	4.58
宗教学	3.47	3.37	3.19	3.63	3.50	3.38	4.79	4.59	4.37
心理学	3.37	3.40	3.55	3.54	3.58	3.81	4.73	4.57	4.65
文学	3.69	3.75	3.63	3.84	3.97	3.90	4.83	4.53	4.60
言語学	3.15	3.59	3.63	3.29	3.94	3.72	4.81	4.81	4.55
芸術	3.48	3.64	3.83	3.59	3.78	4.16	4.76	4.61	4.53
【人文科学・平均】	3.46	3.47	3.53	3.64	3.69	3.80	4.75	4.56	4.52
法学	3.36	3.24	3.13	3.47	3.38	3.24	4.78	4.40	4.46
政治学	3.52	3.08	3.59	3.86	3.30	3.97	4.87	4.48	4.51
経済学	3.53	3.24	2.95	3.88	3.68	3.39	4.72	4.59	4.37
社会学	3.51	3.50	3.65	3.79	3.87	3.97	4.77	4.60	4.71
地理学	3.18	3.11	3.15	3.40	3.36	3.32	4.71	4.60	4.48
民俗学	3.53	3.33	3.54	3.64	3.70	3.80	4.79	4.70	4.55
文化人類学	3.51	3.57	3.45	3.68	3.78	3.62	4.75	4.58	4.54
教育学	3.87	3.79	3.56	4.10	4.10	3.85	4.81	4.58	4.61
産業倫理	3.45	3.45	3.54	3.53	3.55	3.58	4.73	4.65	4.60
ベンチャービジネス論	3.88	3.78	3.78	4.35	4.19	4.19	4.72	4.52	4.50
社会科学概論	3.20	3.10	2.77	3.41	3.14	2.93	4.73	4.38	4.77
【社会科学・平均】	3.52	3.46	3.43	3.74	3.73	3.66	4.77	4.56	4.56
数学	3.36	3.40	3.32	3.42	3.52	3.39	4.80	4.57	4.58
物理学	3.27	3.12	3.27	3.37	3.25	3.34	4.76	4.57	4.56
化学	3.21	3.05	3.05	3.32	3.23	3.24	4.82	4.55	4.58
生物学	3.47	3.50	3.39	3.54	3.54	3.45	4.82	4.52	4.55
地球科学	3.34	3.14	3.14	3.48	3.25	3.26	4.69	4.51	4.47
自然科学概論	3.34	3.37	3.32	3.53	3.66	3.56	4.78	4.61	4.57
自然科学の考え方	3.42	3.58	3.88	3.63	3.95	4.12	4.91	4.55	4.66
自然科学実験	3.77	3.82	3.82	3.72	3.85	3.86	4.90	4.64	4.65
【自然科学・平均】	3.40	3.35	3.36	3.48	3.49	3.47	4.81	4.57	4.58
応用科学	3.79	3.79	3.72	3.98	4.01	3.92	4.82	4.59	4.56
医療福祉	3.41	3.61	3.37	3.46	3.83	3.61	4.94	4.72	4.60
情報処理概論	2.84	2.98	3.26	2.83	3.05	3.60	4.77	4.56	4.72
統計学	2.97	3.13	2.90	3.20	3.41	3.12	4.75	4.44	4.55
【応用科学・平均】	3.63	3.68	3.59	3.82	3.90	3.80	4.81	4.58	4.57
英語	3.55	3.52	3.66	3.61	3.60	3.75	4.85	4.65	4.63
医療英語	3.91	4.14	4.17	4.04	4.23	4.21	4.98	4.72	4.80
初習外国語入門	3.72	3.76	3.68	4.02	4.04	3.99	4.84	4.65	4.57
ドイツ語	3.59	3.57	3.71	3.83	3.76	4.07	4.75	4.40	4.51
フランス語	3.33	3.12	3.37	3.74	3.44	3.70	4.61	4.62	4.43
中国語	3.88	3.81	3.85	4.08	4.03	4.06	4.79	4.61	4.61
ハンガール	3.85	3.84	3.82	4.19	4.10	4.13	4.77	4.79	4.53
日本語	4.35	4.34	4.42	4.48	4.12	4.29	4.85	4.30	4.23
【外国語教育・平均】	3.66	3.65	3.71	3.81	3.81	3.88	4.83	4.64	4.61
英語		4.33	3.60		5.00	4.20		5.00	4.60
(基礎外国語科目)・平均		4.33	3.60		5.00	4.20		5.00	4.60
教養英語		3.62	3.33		3.92	3.67		4.62	4.67
(教養外国語科目)・平均		3.62	3.33		3.92	3.67		4.62	4.67
思想と文化	3.60	3.70	3.75	3.79	3.90	3.96	4.74	4.61	4.41
芸術と表現	3.69	3.46	3.37	3.93	3.72	3.80	4.69	4.64	4.44
社会と組織	3.76	3.76	3.79	3.97	3.98	4.11	4.85	4.56	4.68
環境と人間	3.54	3.67	3.64	3.74	3.97	3.90	4.81	4.46	4.59
自然と科学	3.39	3.47	3.62	3.53	3.64	3.87	4.83	4.47	4.56
健康とスポーツ	3.75	3.70	3.62	3.80	3.74	3.56	4.79	4.65	4.62
【主題・平均】	3.61	3.65	3.69	3.79	3.86	3.94	4.81	4.55	4.59
一般総合	3.73	3.74	3.79	3.74	3.85	3.92	4.77	4.48	4.55
【一般・平均】	3.73	3.74	3.79	3.74	3.85	3.92	4.77	4.48	4.55
【共通教育・平均】	3.57	3.56	3.57	3.69	3.71	3.74	4.81	4.59	4.58

第4章 人文学部のFD活動

今年度の人文学部のFD活動としては、全学的におこなっているFD活動の一環として、大学教育機構主催のFD研修会・講演会への参加、学生による授業評価アンケート（マークシート方式）の実施、教員による授業自己評価のウェブ入力、以上を例年どおり推進した。また、人文学部独自のFD活動として、教員間授業公開（ピア・レビュー）、人文学部IT研修会、以上についても前年度に引きつづき実施した。

第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

今年度の人文学部における教員間授業公開（ピア・レビュー）については、1教員が授業1コマを公開する従来型のものを1回実施したほか、新たな試みとして、オムニバス形式の授業のうち多くの回を対象とする連続公開形式のものも実施した（全14回うち5教員の授業10回分を公開）。そのため、授業公開の1年度内実施回数は、従来は2回であったのに対し、今年度は合計11回分となった。いずれも授業参観の部に引き続き、事後検討会もあわせて実施した。参観教員には参観に際して「参観コメント票」を配布し、内容に関する所感、および質問、授業技術面に関する所感、および質問、授業目標に関する所感、質問、その他、授業公開に関する意見や要望、以上を記入していただき、事後検討会における議論に活用した。

1. オムニバス形式の教員間授業公開

（1）概要

- 1) 対象授業：総合演習（人文学部学生対象の教職に関する科目）
- 2) 日 時：平成19年度後期の月曜日（日付は後述）8時40分～
- 3) 講 義 室：人文学部第1講義室
- 4) 授業担当：林伸一先生ほか全7名の担当教員のうち、高橋俊章先生（教育学部）、更科慎一先生、武本雅嗣先生、富平美波先生、林伸一先生の各担当授業の公開（下記参照）
- 5) 授業対象：人文学部の教職免許修得希望3回生の受講者
- 6) 授業概要とその位置づけ

* 授業計画（シラバスより抜粋）

本授業は、教員免許の取得を目指す学生のための授業で、今年度は「言語教育を通して学ぶもの、言語と価値観」というテーマで7名の教員が各自の授業内容を2回で講義する。言語と文化の観点で講義または演習をする。

* 公開授業の位置づけ（シラバスより抜粋、うち 印が公開授業回、実際の論題は下記参照）

第1回(10/1)：高橋俊章先生（教育学部）「言語教育を通じて学ぶものは？（1）」

第2回(10/15)： 同 「言語教育を通じて学ぶものは？（2）」

第3回(10/22)：更科慎一先生「中国における異言語学習とその歴史（1）」

第4回(10/29)：同 「中国における異言語学習とその歴史(2)」

第5回(11/5)：添田建治郎先生「価値観と異文化(1)」

第6回(11/12)：同 「価値観と異文化(2)」

第7回(11/19)：武本雅嗣先生「日常の言語表現の分析(1)」

第8回(11/26)：同 「日常の言語表現の分析(2)」

第9回(12/3)：富平美波先生「漢字と私たち(1)」

第10回(12/10)：同 「漢字と私たち(2)」

第11回(12/17)：根ヶ山徹先生「詩を読む」とはどういうことか(1)」

第12回(1/8)：同 「詩を読む」とはどういうことか(2)」

第13回(1/15)：林伸一先生「言語と価値観(1)」

第14回(1/21)：同 「言語と価値観(2)」

(第15回：課題レポート提出)

7) 事後検討会：授業終了直後、第3講義室にて実施。



(2) 高橋俊章先生授業公開

1) 初回授業参観の部

- ・ 平成19年10月1日(月)
- ・ 論題：「言語教育を通じて学ぶものは？(1) 言語と価値観・異文化理解について」
- ・ 概要(予告)：言語と価値観との密接な関連性を知り、また、異文化理解と言語の学習がどのように関わりあっているかについて学ぶ。
- ・ 参観教員：林伸一・富平美波・宮原一成・更科慎一・真木隆行(敬称略、以下同じ)

2) 第2回授業参観の部

- ・ 平成19年10月15日(月)
- ・ 論題：「言語教育を通じて学ぶものは？(2) 教授内容と自分との関連性について」
- ・ 概要(予告)：前回にひきつづき、言語教育の目的が単にテキストの学習を通して文法や語彙を学習するだけではないことを知り、テキストの内容と自分との関連性を理解させることが重要であることを学ぶ。
- ・ 参観教員：林・富平・更科・真木

3) 事後検討会の部

- ・ 参加教員：高橋(授業担当)・林・富平・更科・真木(司会)
- ・ 概要：初回分と第2回分をあわせて事後検討会を実施した。コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

(3) 更科慎一先生授業公開

1) 初回授業参観の部

- ・ 平成19年10月22日(月)
- ・ 論題「中国における異言語学習とその歴史」
- ・ 概要(予告)：中国が多言語の国であることを紹介した後、現代の中国における各民族の言語使用のありさまを検討し、中国で行われている非母語によるコミュニケーションについて学ぶ。
- ・ 参観教員：林・富平・真木



2) 初回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員：更科（授業担当）・林・富平・真木（司会）
- ・ 概要：コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

3) 第2回授業参観の部

- ・ 平成19年10月29日（月）
- ・ 論題「中国人の異言語学習の歴史 明代の多言語教育」
- ・ 概要（予告）：中国明、清代に存在した外国語学校、及びそこで用いられた外国語の教科書を中心に、中国人の異言語学習の歴史について学ぶ。
- ・ 参観教員：林・富平・村田裕一・真木

4) 第2回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員：更科（授業担当）・富平・村田・真木（司会）
- ・ 概要：コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

（4）武本雅嗣先生授業公開

1) 初回授業参観の部

- ・ 平成19年11月19日（月）
- ・ 論題「言語能力と認知能力」
- ・ 概要（予告）：言語（獲得）能力はモジュール的に機能していると考えられるが、言語活動には人間の様々な認知能力・認知的習性が深くかかわっているということを、日常の言語表現とくに比喩の分析を通して学ぶ。
- ・ 参観教員：林・真木



2) 初回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員：武本（授業担当）・林・真木（司会）
- ・ 概要：コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

3) 第2回授業参観の部

- ・ 平成19年11月26日（月）
- ・ 論題「形式と意味」
- ・ 概要（予告）：形式が異なれば意味も異なるが、形式あるいは構文が同じであれば認知構造や認知プロセスに何らかの共通性があるということ、また語彙の意味が希薄化すると、その形態が微妙に変わり、ときに機能変化が起こることがあるということ、身近な表現の用法拡張の分析を通して学ぶ。
- ・ 参観教員：林・富平・真木

4) 第2回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員：武本（授業担当）・林・真木（司会）
- ・ 概要：コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

（5）富平美波先生授業公開

1) 初回授業参観の部

- ・ 平成19年12月3日（月）
- ・ 論題「漢字（1）」



- ・ 概要(予告): 現在、世界の言語で使用されている文字は、表音文字を主体としています。その中で、漢字は、その性格において異彩を放っているともいえます。私たちの日本語が、一般に漢字仮名交じり文で表記される以上、日本の教育現場にたずさわる者として、漢字についての初歩的な知識を備えていることは必要なことだと思います。本講義では、もともと中国語を表すために産まれた漢字の性質と、その造字の法則性について略述します。

- ・ 参観教員: 林・柏木寧子・更科・真木

2) 初回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員: 富平(授業担当)・林・柏木・更科・真木(司会)
- ・ 概要: コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

3) 第2回授業参観の部

- ・ 平成19年12月10日(月)
- ・ 論題「漢字(2)」
- ・ 概要(予告): 前半は、第1回に引き続き、漢字の造字法について。漢字が、その内に表音機能を備え、「形声」という手法を手にすることによって、一気に増殖する途についてをお話します。後半は、教育の普及のために戦後中国において行われた漢字の簡略化に触れる予定です。

- ・ 参観教員: 参観教員: 更科・真木

4) 第2回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員: 富平(授業担当)・更科・真木(司会)
- ・ 概要: コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

(6) 林伸一先生授業公開

1) 初回授業参観の部

- ・ 平成20年1月15日(火)月曜授業日
- ・ 論題「言語と価値観(1)」
- ・ 概要(予告): 言語に表現されるその人特有の価値観について学ぶ。特に、日本語における「ほめる」言語表現とほめられてうれしい言語表現の価値観の面から、男女差、年齢差などによって、違いがあるかを検討する。
- ・ 参観教員: 滝野正二郎・更科・富平・真木



2) 初回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員: 林(授業担当)・滝野・更科・富平・真木(司会)
- ・ 概要: コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

3) 第2回授業参観の部

- ・ 平成20年1月21日(月)
- ・ 論題「言語と価値観(2)」
- ・ 概要(予告): マインドマップのつくりかたについて学ぶ。同じ中心概念から異なる連想語が出てきたり、連想の広がりや違いを比べることにより、個々人の言語文化の相違を検討する。
- ・ 参観教員: 富平・更科・真木

4) 第2回授業事後検討会の部

- ・ 参加教員: 林(授業担当)・富平・更科・真木(司会)
- ・ 概要: コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

2. 通常形式の教員間授業公開 奥津聖先生授業公開

(1) 授業参観の部

1) 対象授業：芸術論特殊講義 第10回講義

2) 日 時：平成19年12月21日(金) 14時30分～

3) 講義室：人文学部第4講義室

4) 授業担当：奥津 聖 先生

5) 授業対象：人文学部の受講者

6) 本時の内容と位置づけ

* 論題：「美学的な『イメージの解釈学』の可能性について」

* 概要(予告): 美術史と美学の狭間を埋めうるような方法論の在り方を具体例を引きつつ探求する。

* 公開授業までの位置づけ(事前配布資料からの抜粋、 印が公開授業回)

第1回(10/5)：「序論 オリエンテーション」

第2回(10/12)：「コンピュータを活用した資料の収集と蓄積の方法」

第3回(10/19)：「美学とは何か、美術史とは何か、解釈学とは何か」

第4回(10/26)：「イメージの解釈学の系譜、パノフスキーのイコノロジーについて」

第5回(11/2)：「イコノロジーとイコニク」

第6回(11/9)：「イコノロジーとイコニクを総合するベツチュマンの「美術史的解釈学」の可能性」

第7回(11/16)：「図像解釈学の限界あるいは不可能性」

第8回(11/30)：「ジャック・ラカンの論理的時間」

第9回(12/7)：「イコノグラフィー再論」

第10回(12/14)：「美学的な『イメージの解釈学』の可能性について」

(以下略)

7) 参観教員： 柏木寧子・豊澤 一・藤川 哲・古荘真敬・真木隆行

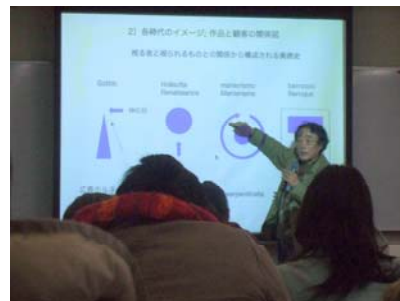
(2) 事後検討会の部

1) 日 時： 平成19年12月21日(金) 公開授業終了直後

2) 場 所： 人文学部第1演習室

3) 参加教員： 奥津聖(授業担当)・藤川・古荘・真木(司会)

4) 概要： コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。



第 2 節 人文学部 I T 研修会

今年度も前期に 1 回、I T 研修会を実施した。前年度同様に 2 部構成とし、前年度から継続する内容によって実施した。

1) 日 時：平成 19 年 9 月 21 日(水) 16 時～

2) 会 場：人文学部第 4 講義室

3) 構 成：第 1 部「学生授業評価と教員授業自己評価について」

講師：真木隆行

第 2 部「ペーパーレス授業の試み(2) 演習・講読編」

講師：橋本義則

4) 参加教員：池園 宏・柏木寧子・橋本義則(講師)・真木隆行(講師・司会)・村田裕一
・中村友博・横田尚俊

5) 概 要

第 1 部「学生授業評価と教員授業自己評価について」

講師が、前年度までの学生授業評価に関する報告およびデータ修正の説明をおこない、教員授業自己評価の入力方法に関する説明もおこなった。あわせて他大学における事例紹介をおこなった。その後、質疑応答がおこなわれた。



第 2 部「ペーパーレス授業の試み(2) 演習・講読編」

まずは講師のパソコン歴が語られ、その後、平成 14 年度以来のペーパーレス授業実践状況について、その概要紹介があった。教員および受講者との間でデータの共有や送受信をするための機器環境については、当初、ハブを活用してプライベートネットワークを構築する方式を採用していたが、その頃はまだパソコン OS が発展途上にあり、しかも受講者持ち込みパソコンの OS がまちまちであったため、トラブルが続出したという。ところがその後、USB メモリーの大容量化と価格低下が生じ、データ共有が容易となったため、安定的な授業運営が可能になった旨、説明があった。

つぎに、報告担当者によるレジユメ作成に関して、ワードやスキャナーなどの活用方法、過去のレジユメの共有化と検索機能の活用方法などの説明があった。また、授業時間中の作業に関して、レジユメデータの配布およびそのプロジェクター投影、投影画面に基づく報告および指導、受講者全員によるレジユメデータの校正やコメント挿入によるノート取り、以上がなされる旨の説明があった。レポート提出もペーパーレスとのことであり、完全なペーパーレス授業を実践している様子が浮き彫りになった。

最後に、将来的な見通しとして、LAN-HD の低価格化や OS が Windows Vista になることによって、ネットワーク方式に再チャレンジできる環境が整いつつあるとし、他の機器類の積極的活用も模索中である旨、紹介があった。あわせて、学生側にとってのペーパーレス授業の意義、教員側にとっての意義、それぞれの確認がなされた。以上の後、質疑応答がおこなわれた。

第3節 大学教育機構主催FD研修・講演会への参加

平成19年度の大学教育機構主催FD研修およびFD講演会において、人文学部・人文科学研究科から参加した教員一覧は以下の通りである。

実施年月日	会場	研修内容	参加教員
平成19年4月2日	吉田	共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会	湯川洋司
平成19年7月31日	吉田	FD講演会 “学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう”	岩部浩三(センター長)、ジュマリ・アラム(パネリスト)、エムデ・フランツ、尾崎千佳、添田建治郎、坪郷英彦、古荘真敬、真木隆行
平成19年8月9日	吉田	FD講演会 “特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう”	岩部浩三(センター長)
平成19年10月19日	吉田	Approaches to Learning in Language Education	岩部浩三(センター長)、井上三朗・太田聡、宮原一成、武本雅嗣
平成20年2月13日	吉田	専門教職課程における聴覚障害学生修学支援の研修	岩部浩三(センター長)

(以上13名、のべ16名)

第4節 人文学部における学部学生むけアンケート

1. 概要

(1) 経緯

平成14年度以来、人文学部で実施してきた学部生むけ授業アンケートは、初年度は講義のみを対象とし、しかも記述式であった。翌15年度にマークシート方式へ変更、平成16年度後期からは、全学共通の質問項目を加えた。その後、平成17年度からは、講義のみならず、演習や講読もアンケート対象に加えて実施することとなり、現行の方式がほぼ確立した。そして平成18年度からは、それらアンケート結果を踏まえて、教員自己評価入力のうち1項目を学内ウェブ上で公開することとなった。

昨年平成19年度のFD報告では、平成16年度後期から集積し続けてきた講義アンケートの実施データと、翌17年度から新たに合わせた講義アンケートと、演習講読授業アンケートの実施データとを比較し、これらの分析結果をとりまとめた。ところがその後、学部内の教員から、これまでのデータの集計結果に疑問点がある旨の指摘を受けたため、そのご指導のもと、人文学部・理学部学務第一係の水凌美和子氏のご尽力により、これまでのデータを集計し直してみたところ、下記のような集計ミスや比較ミスの存在が明らかとなった。そこで今回、まずはこれらのデータの修正をおこなった上で、今年度のデータ分析結果を報告する。

(2) 既存報告データの修正点

今回の修正点に関しては、まず第一に、平成16年度以来のすべてのアンケート回答率

の算出方法を修正した。従来、「個別選択枝回答数÷全選択枝回答数」の計算式によってこれを求めてきたが、「個別選択枝回答数÷全回答者数」の計算式に基づくべきであり、今回すべて算出し直した。

第二に、平成16年度後期分のデータについては別扱いとした。この年度の集計上の問題点として、この年度のみ「非回答数」が計上されていなかった点、小数点以下が表示されていなかった点、またこの年度の複数回答項目（問7・問9・問10）のデータ処理にミスがあった点、以上が発覚した。ところが、この年度の基データがすでに廃棄済みで、もはや再集計が困難であったため、この年度については他年度とは異質なデータとして扱うこととし、下記のように参考資料にとどめ、別途掲載した。

第三に、平成17年度に関する集計上の問題点を修正した。その問題点として、「講義」と「講読・演習」の区分が錯綜していた点、そして「講義」のうち質問11のデータが実際には17.8%であったところを「71.8%」として誤表示してしまっていた点が発覚した。そこでこれらを集計し直した。

最後に、平成18年度のデータに関しては、上述した回答率の修正点を除けば、その他に修正すべき点はない。但し、FD報告書の中で、全学共通の質問項目を1～6と記していたが、そのうち6は学部独自の質問項目であるため、正しくは1～5とすべきであった。この場を借りて、訂正したい。

なお、平成16年度後期～平成18年度分のデータ修正については、上述のとおり、人文学部・理学部学務第一係の水凌美和子氏にご尽力いただいた。今年度分のデータ集計と旧年度修正データを踏まえた作表については、同じく人文学部・理学部学務第一係の七條友歩氏にご尽力いただいた。記して謝意を表したい。

（3）質問項目と実施をめぐって

人文学部の授業アンケートについては、質問をマークシート方式、質問を自由記述方式としている。そのうち、質問のマークシート方式の質問項目については、講義用として全13項目、演習講読用として全12項目からなり、それぞれ5項目が全学共通のものとしている。今年度前期については、前年までの質問項目と同じものを使用した。今年度後期については、文面を改稿した。但し、アンケート結果に大きく影響を及ぼすような変更にならぬよう、文言の微修正にとどめた。

今年度前期に使用した講義用質問項目は、次の通り。

1. あなたは、この授業のために、授業時間以外のどのくらい学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか。講義1コマあたりの平均時間で答えてください。
2. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成しましたか。
3. 講義の内容はよく理解できましたか。
4. この講義は、あなたにとって満足のいくものでしたか。
5. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。
6. この講義では、出席の確認がなされましたか。
7. あなたがこの講義を受講した動機を教えてください。もっとも当てはまるものから2つまで選んでください。
8. この講義を受けた結果、どんな変化がありましたか。1つ選んでください。
9. この講義を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
10. この講義を受けて不満に感じたことを、いくつでもあげてください。
11. この講義の授業時間外に、どのような活動をしましたか。いくつでもあげてください。
12. この講義は、今まで自分が常識と思っていた（考えていた）ことに疑問を感じたり、別の角度から物事を考えたりするきっかけになりましたか。

13. この講義の内容について、自分なりの意見を持ったり、問題点を発見したりすることがありましたか。

今年度前期に使用した演習講読用質問項目は、次の通り。

1. あなたは、この授業のために、授業時間以外のどのくらい学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか。授業1コマあたりの平均時間で答えてください。
2. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成しましたか。
3. 内容理解や研究・調査方法の習得などにおいて、レベルは向上しましたか。
4. この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか。
5. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。
6. この授業では、出席の確認がなされましたか。
7. あなたがこの授業を受講した動機を答えてください。もっとも当てはまるものから2つまで選んでください。
8. この授業を受けた結果、どんな変化がありましたか。1つ選んでください。
9. この授業を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
10. この授業を受けて不満を感じたことを、いくつでもあげてください。
11. この授業は、今まで自分が常識と思っていた（考えていた）ことに疑問を感じたり、別の角度から物事を考えたりするきっかけになりましたか。
12. この授業の内容について、自分なりの意見を持ったり、問題点を発見したりすることがありましたか。

今年度後期に使用した講義用質問項目は、次の通り。

1. あなたは、この講義のために、講義時間以外のどのくらい学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか。講義1コマあたりの平均時間で答えてください。
2. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成できましたか。
3. 講義の内容は、よく理解できましたか。
4. この講義は、あなたにとって満足のいくものでしたか。
5. あなたは、この講義にどのくらい出席しましたか。
6. この講義における出欠の確認は、どのようになされましたか。
7. あなたがこの講義を受講した動機のうち、もっとも当てはまるものを2つまで選んでください。
8. この講義を受けた結果、どのような変化がありましたか。1つ選んでください。
9. この講義を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
10. この講義を受けて不満を感じたことを、いくつでもあげてください。
11. この講義の授業時間外において、どのような活動をしましたか。いくつでもあげてください。
12. この講義は、それまであなたが常識と思っていたことを考え直したり、ある物事を別の視点から捉え直したりするきっかけになりましたか。
13. この講義の内容に関して、自分なりの意見を持ったり、何かに気づき発見するようなことがありましたか。

今年度後期に使用した演習講読用質問項目は、次の通り。

1. あなたは、この授業のために、授業時間以外のどのくらい学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか。授業1コマあたりの平均時間で答えてください。
2. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成できましたか。
3. 内容理解や研究・調査方法の習得などにおいて、レベルは向上しましたか。
4. この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか。
5. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。

6. この授業における出欠の確認は、どのようになされましたか。
7. あなたがこの授業を受講した動機のうち、もっとも当てはまるものを2つまで選んでください。
8. この授業を受けた結果、どのような変化がありましたか。1つ選んでください。
9. この授業を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
10. この授業を受けて不満に感じたことを、いくつでもあげてください。
11. この授業は、それまであなたが常識と思っていたことを考え直したり、ある物事を別の視点から捉え直したりするきっかけになりましたか。
12. この授業の内容に関して、自分なりの意見を持ったり、何かに気づき発見するようなことがありましたか。

なお、人文学部におけるアンケート実施にあたっては、集中講義、4年むけ演習や卒業論文、これらをその対象から除外することになっている。これらを除くと、今年度前期に実施対象とした科目数は178となり、このうち実際のアンケート実施数が158であったため、実施率は88.8%となった。後期については、実施対象とした科目数は179、このうち実際のアンケート実施数が156であったため、実施率は87.2%となった。従って、通年での実施率は88.0%となった。

ちなみに平成16年度（後期のみ）実施率は80.2%、平成17年度授業評価実施率は92%、平成18年度も92%。これらと比較すると、今年度の実施率は、前年度よりも若干後退したことになる。では、質問項目ごとに、今年度の学部としての全体傾向を見てゆきたい。

2. 講義の部

(1) 全学共通の質問項目1～5

人文学部の講義に関するアンケートのうち、まずは全学共通の質問項目1～5に関するアンケート結果について、以下に作表データを列挙した上で検討する。

表1. 講義用質問1

	0	1	2	3	4	5
	未回答	30分未満	30分～1時間	1時間～1.5時間	1.5時間～2時間	2時間以上
H17前期	1.2%	72.1%	16.8%	5.4%	2.0%	2.5%
H17後期	0.5%	70.1%	18.5%	5.9%	2.1%	3.0%
H18前期	0.6%	75.7%	16.3%	4.4%	1.0%	1.9%
H18後期	0.4%	72.8%	17.0%	5.0%	1.9%	2.8%
H19前期	0.5%	70.2%	19.8%	5.3%	1.7%	2.5%
H19後期	0.4%	67.2%	19.7%	8.0%	1.8%	3.0%

質問1 授業外学習時間

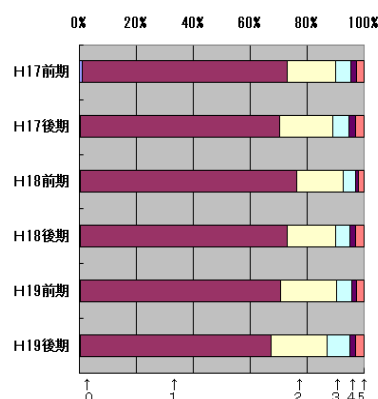


表2.講義用質問2

	0	1	2	3	4	5
	未回答	そう思 ない	あん まり思 わない	どちら も言え ない	ややそ う思 う	そう思 う
H17前期	1.4%	3.3%	10.3%	41.4%	33.0%	10.6%
H17後期	0.7%	2.5%	8.1%	39.3%	37.2%	12.3%
H18前期	0.5%	3.1%	9.0%	42.7%	35.0%	9.6%
H18後期	0.3%	3.0%	8.7%	38.2%	40.0%	9.8%
H19前期	0.5%	2.7%	10.2%	42.5%	36.2%	7.9%
H19後期	0.3%	2.3%	8.9%	43.1%	36.4%	9.0%

質問2 シラバス記載学習目標を達成できたか

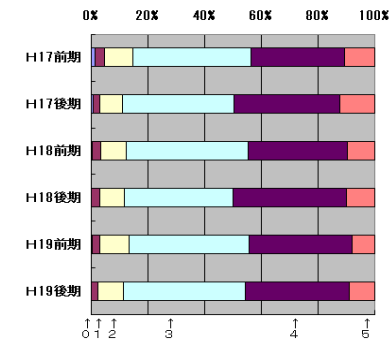


表3.講義用質問3

	0	1	2	3	4	5
	未回答	そう思 ない	あん まり思 わない	どちら も言え ない	ややそ う思 う	そう思 う
H17前期	1.2%	3.5%	11.3%	23.1%	46.6%	14.3%
H17後期	0.5%	2.8%	8.2%	25.0%	46.8%	16.7%
H18前期	0.5%	3.3%	10.8%	26.6%	45.0%	13.8%
H18後期	0.4%	2.6%	9.2%	23.2%	48.8%	15.7%
H19前期	0.5%	3.2%	10.4%	26.9%	46.0%	13.0%
H19後期	0.2%	2.5%	8.6%	26.1%	48.7%	13.8%

質問3 講義内容を理解できたか

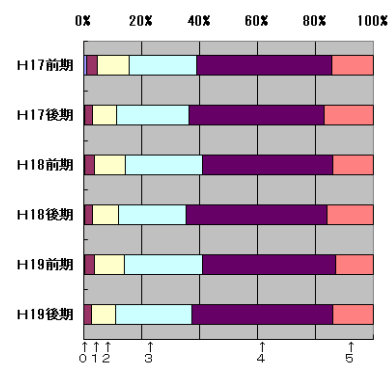


表4.講義用質問4

	0	1	2	3	4	5
	未回答	そう思 ない	あん まり思 わない	どちら も言え ない	ややそ う思 う	そう思 う
H17前期	1.0%	3.6%	9.7%	23.8%	36.8%	25.1%
H17後期	0.7%	2.7%	6.4%	24.3%	39.6%	26.4%
H18前期	0.3%	3.3%	9.0%	26.0%	36.7%	24.6%
H18後期	0.5%	2.5%	6.5%	23.1%	39.7%	27.5%
H19前期	0.5%	2.9%	8.8%	25.3%	39.3%	23.2%
H19後期	0.2%	1.8%	7.1%	24.4%	39.2%	27.3%

質問4 講義に対して満足できたか

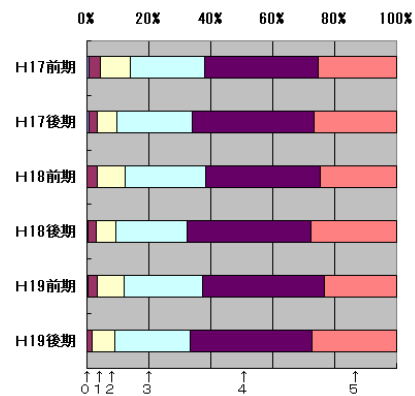
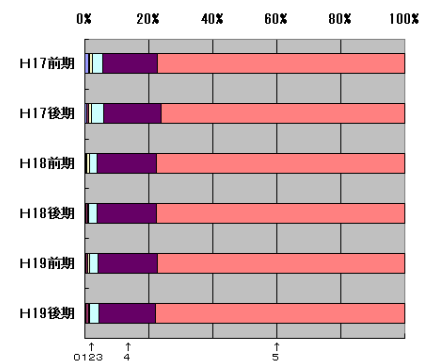


表5.講義用質問5

	0	1	2	3	4	5
	未回答	20%未満	20%~ 40%	40%~ 60%	60%~ 80%	80%以上
H17前期	1.3%	0.4%	0.7%	3.3%	17.1%	77.1%
H17後期	0.7%	0.6%	0.8%	3.8%	18.1%	75.9%
H18前期	0.4%	0.3%	0.8%	2.5%	18.4%	77.6%
H18後期	0.3%	0.7%	0.4%	2.6%	18.6%	77.4%
H19前期	0.3%	0.6%	0.6%	2.7%	18.7%	77.1%
H19後期	0.4%	1.0%	0.3%	2.9%	17.7%	77.7%

質問5 出席頻度



以上のうち、まずは学生側の授業態度に関する認識から検討しておきたい。学生側の出席頻度（質問5）に関しては、8割以上出席したという「自覚」のある学生の割合が、例

年77%代でほぼ一定している状況を確認できる。また、授業外学習時間（質問1）に関しては、毎回平均30分未満に過ぎないという「自覚」のある学生の割合が減少しつつあり、好ましい傾向と言える。全体としてみれば、この授業外学習時間に関する数値は少ないように見えるが、アンケート実施時期から考えれば、これらは試験期間に入る前の段階までの学生側の認識に過ぎず、試験期間中に費やされたであろう多くの時間がこれには反映していないと見られる。より実態に近い数値を把握するためには、講義最終回以降の学習時間についても別に調査した上で、総合的に判断する必要があるだろう。

つぎに、学習目標に対する達成度（質問2）、内容理解度（質問3）、満足度（質問4）に関する学生側の認識について検討しておきたい。まず、シラバスに提示された学習目標に対する達成度（質問2）に関しては、それなりに達成できたと思う学生が約45%、前年よりは微減。内容理解度（質問3）のほうは、それなりに理解したと思う学生が例年通り60%前後、満足度（質問4）については、それなりに満足に思う学生がやはり例年通り60%以上となった。これらのうち、明確な回答部分に注目して相互を比較してみると、理解度に自信をもつ学生が13%代で、学習目標達成度に自信をもつ学生が8%前後であるのに対し、明確に満足であるという学生はいずれをも上回る25%前後に達する点には注目しておきたい。つまり、講義を聴講した学生が必ずしも十分な理解に至らずとも、講義自体はこれでよいと評価してくれる学生諸君の存在が今年度も浮き彫りになった。謙虚でまじめな学生諸君からいただいた重要なメッセージとして、深く深く受けとめたい。

（2）人文学部独自の質問項目6～13

次に、人文学部の講義に関するアンケートのうち、人文学部独自の質問項目6～13に関するアンケート結果について検討したい。

教員が出欠確認をおこなった頻度（質問6）に関する回答は、つぎの通り。

表6. 講義用質問6

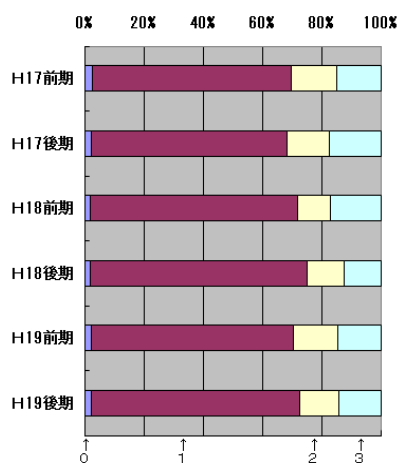
	0	1	2	3
	未回答等	毎回なされた	時々なされた	まったくなされず
H17前期	2.8%	67.1%	15.1%	14.9%
H17後期	2.2%	66.1%	14.5%	17.3%
H18前期	2.1%	69.8%	11.1%	17.0%
H18後期	2.0%	73.3%	12.4%	12.3%
H19前期	2.5%	68.0%	15.2%	14.3%
H19後期	2.4%	70.4%	13.3%	14.0%

表6 参考資料

	0	1	2	3
H16後期		63.0%	16.0%	21.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

質問6 出席確認の頻度



このように、毎回出欠確認がなされたという「認識」のある学生が70%前後に達している点を確認しておきたい。但しこの質問項目については、かかる回答を求められること自体に対して違和感がある旨、学生側からの所感として耳にすることがある（個人意見として同感である）。未回答数が上記の設問の場合（1%未満）よりも多く、毎年2%を超える点については、出席回数の少ない学生の存在との関連のみではないだろう。この設問自体の改廃を考える上で、注目しておきたい。

また、質問1の関連として、授業時間外学習時間として具体的に何をおこなったかという質問（質問11）に対する回答については、つぎの通り。

表11. 講義用質問1

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期	H16後期
1 担当教員に質問に行った	4.5%	5.5%	4.5%	5.0%	4.5%	6.0%	2.0%
2 担当教員の指示に従い, 予習・復習を行った	12.4%	14.7%	8.4%	10.8%	13.2%	12.9%	11.0%
3 担当教員の指示に従い, 宿題を行った	16.0%	15.1%	11.1%	13.7%	13.0%	20.5%	20.0%
4 テキストやプリントで自主的に予習復習	7.9%	7.8%	7.1%	8.1%	9.6%	6.3%	7.0%
5 紹介された参考文献を探してみた	4.7%	3.9%	4.5%	3.5%	4.1%	3.3%	5.0%
6 紹介された参考文献を実際に読んだ	5.1%	4.3%	3.5%	4.0%	3.5%	4.0%	5.0%
7 参考文献以外に, 関係する事項を調べてみた	5.6%	5.3%	6.0%	4.9%	4.8%	5.7%	5.0%
8 講義内容につき友人や一般の人と話題にした	22.7%	20.1%	22.6%	22.1%	19.8%	21.2%	22.0%
9 特に何もしていない	41.3%	40.4%	47.3%	43.3%	44.9%	39.4%	44.0%
0 未回答等	1.5%	0.6%	0.6%	0.9%	0.8%	0.6%	0.0%

表11参考資料

備考: この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

回答の中で最も多かったのは、授業時間外の学習として「特に何もしていない」という学生であり、40%前後に達している。前掲の授業外学習時間に関する質問1では、時間にして毎回平均30分未満に過ぎないという回答が60%前後であり、その多くがこの回答者であることがわかる。しかし上述の通り、試験対策やレポート準備がこれに含まれていないとみるべきであり、実態を把握する上で、この設問や選択肢の現状には問題が多いと言えよう。ただ、自分から教員に質問し、参考文献や関連事項を調べようとするような学生は少なく、近年の学生気質を物語っている。その一方で、平成19年度後期には、「特に何もしていない」学生が減り、「宿題」を行ったとする学生が急増した。教員側の努力の反映であろう。

学生側の受講動機（質問7）に関する回答は、つぎの通り。

質問11 授業外活動(複数回答)

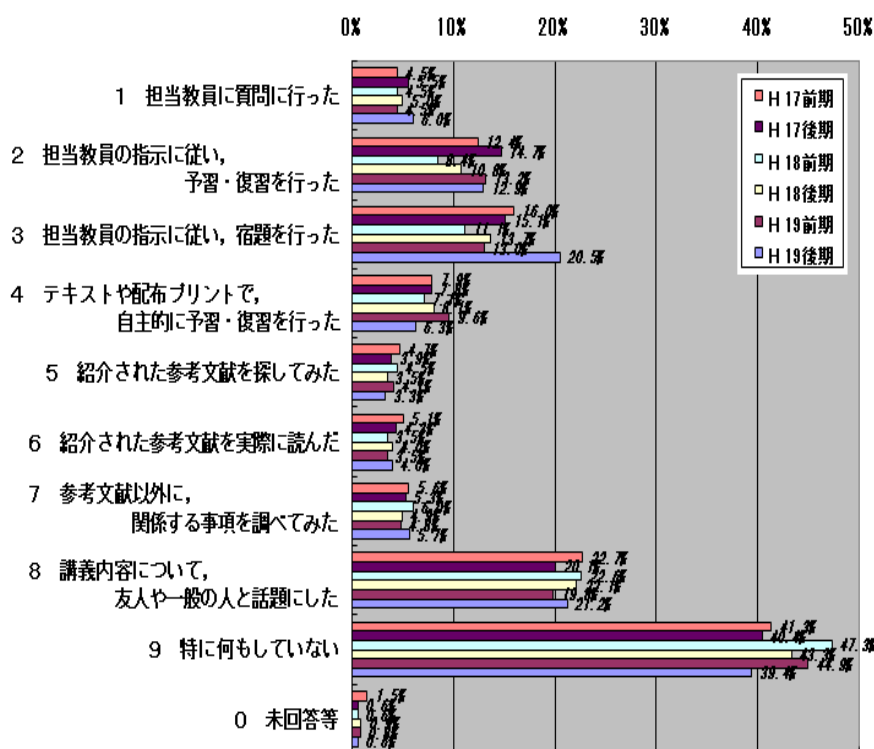


表7. 講義用質問7

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期
1 授業内容に、以前から関心をもっていた	13.6%	13.2%	13.6%	13.7%	12.7%	13.2%
2 「講義概要」を読んで関心をもった	13.1%	9.8%	13.4%	10.5%	13.8%	11.3%
3 担当教員の授業を以前受講し興味をもった	9.2%	10.4%	7.7%	11.0%	6.0%	10.7%
4 先輩や友人に履修を勧められた	2.6%	1.7%	2.0%	1.4%	1.8%	1.4%
5 自分の専攻分野にとって履修が望ましかった	20.5%	22.5%	18.9%	21.1%	18.3%	14.2%
6 特別の理由はなかつた何となく	1.9%	2.2%	2.4%	2.5%	2.1%	1.3%
7 単位修得の関係で履修の必要があった	16.2%	17.2%	13.9%	12.6%	13.7%	13.7%
8 時間割の都合	7.2%	6.2%	6.8%	6.0%	7.7%	7.6%
0 未回答等	57.8%	57.3%	60.7%	60.6%	62.0%	63.3%

表7参考資料

H16後期
22.0%
16.0%
22.0%
5.0%
32.0%
5.0%
39.0%
13.0%
0.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳 小数点以下不詳

このように、この設問に対する未回答率は60%を超えており、しかも毎年増える傾向にある。すでに動機の記憶が薄れていたためか、この設問自体が嫌がられているか、いずれかであろう。次に多い回答率を示したのは、「自分の専攻分野にとって履修が望ましかったから」という消極的な内容の動機であり、それさえ15%前後にとどまる。学生の多くが受講時に際しては、必ずしも明確な動機を有していなかったという様子が窺える。

このような動機に対して、受講後の所感に関する設問に対する回答は、以下の通り。

質問7 受講動機(2つまで選択)

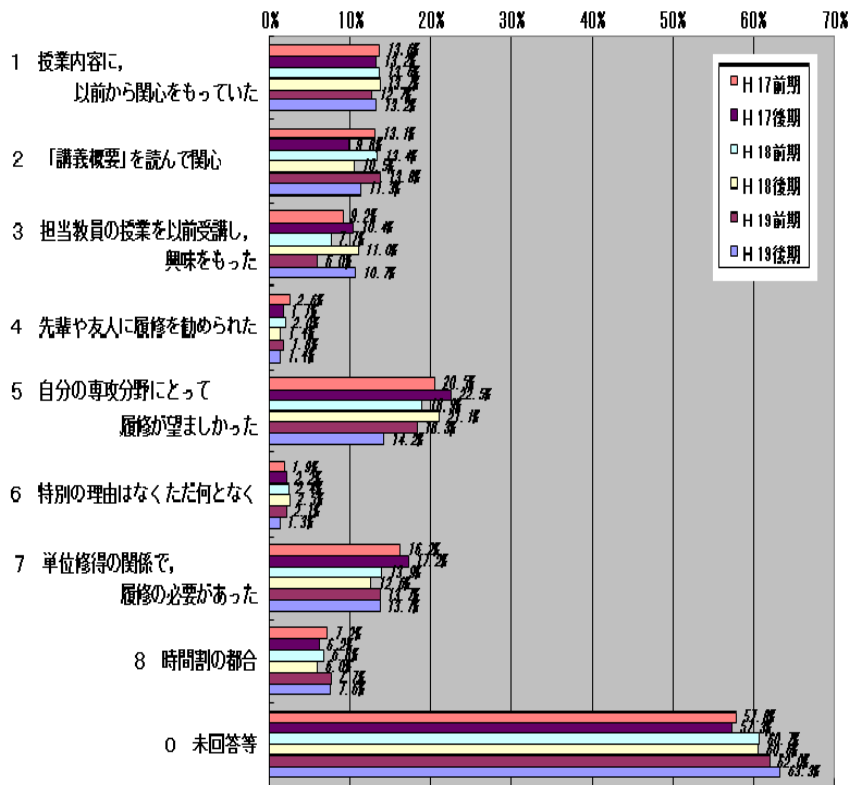


表8. 講義用質問8

	0	1	2	3	4
	未回答等	興味や理解が拡大深化	部分的に興味を持った	受講前と特に変化はない	受講前よりも興味が薄れた
H17前期	2.3%	38.3%	42.5%	14.3%	2.6%
H17後期	1.8%	40.6%	42.0%	13.8%	1.8%
H18前期	0.9%	39.4%	40.6%	16.5%	2.6%
H18後期	0.9%	40.6%	42.4%	14.6%	1.5%
H19前期	1.2%	38.5%	40.2%	17.8%	2.3%
H19後期	1.1%	39.2%	44.4%	13.2%	2.2%

表8 参考資料

	0	1	2	3	4
H16後期		41.0%	45.0%	13.0%	1.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

質問8 受講の知的影響

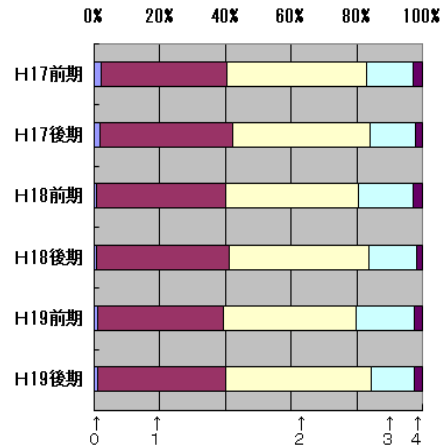


表9. 講義用質問9

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期	H16後期
1 講義内容の難易度が適切	24.5%	29.8%	26.7%	28.8%	23.2%	26.0%	28.0%
2 教え方に工夫が感じられわかり易い	21.8%	21.7%	17.4%	17.6%	17.5%	21.5%	25.0%
3 担当教員に熱意が感じられた	31.5%	29.8%	30.3%	29.4%	31.8%	30.6%	36.0%
4 受講前に想像していた以上に知見の広がり	26.1%	24.1%	23.6%	22.0%	26.0%	26.0%	24.0%
5 質問に充分対応してくれた	14.1%	9.9%	12.9%	10.9%	11.3%	11.1%	13.0%
6 講義が勝手な私語などで乱されず集中	31.8%	30.0%	27.0%	26.9%	26.8%	30.4%	40.0%
7 板書 OHP 機器などが、適切に活用	20.0%	16.0%	14.1%	16.1%	19.3%	10.0%	19.0%
8 よかったと思うことは何もない	7.0%	5.8%	8.0%	5.8%	6.6%	4.6%	3.0%
0 未回答等	2.4%	2.9%	1.5%	1.2%	1.1%	1.3%	0.0%

表9 参考資料

	H16後期
1 講義内容の難易度が適切	28.0%
2 教え方に工夫が感じられわかり易い	25.0%
3 担当教員に熱意が感じられた	36.0%
4 受講前に想像していた以上に知見の広がり	24.0%
5 質問に充分対応してくれた	13.0%
6 講義が勝手な私語などで乱されず集中	40.0%
7 板書 OHP 機器などが、適切に活用	19.0%
8 よかったと思うことは何もない	3.0%
0 未回答等	0.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

質問9 受講してよかった点(複数回答)

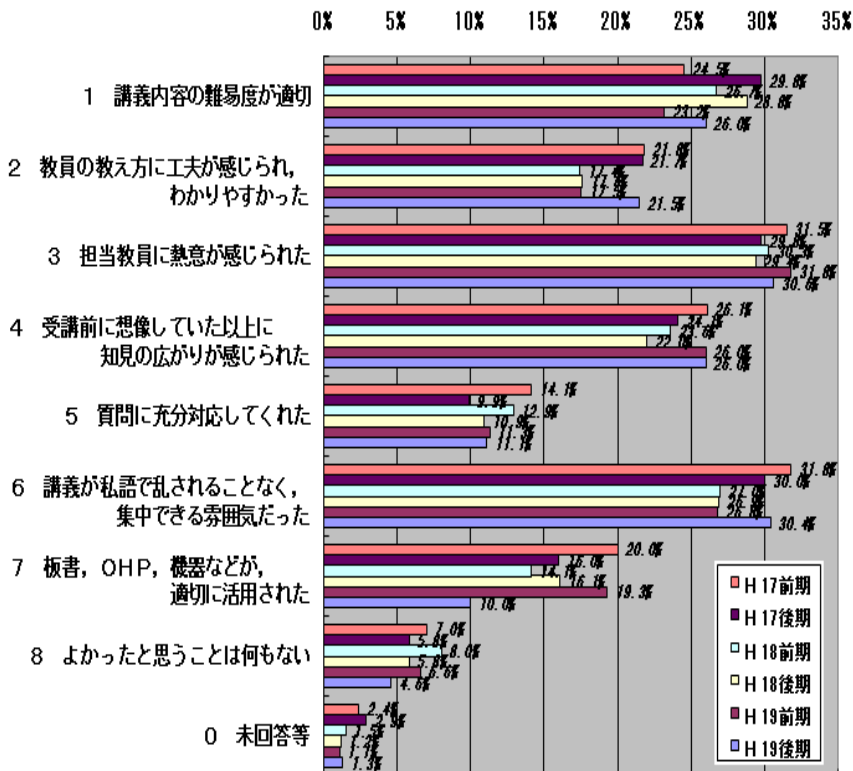


表10. 講義用質問10

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期
1 講義内容がやさしすぎた	0.8%	1.0%	1.1%	0.8%	1.1%	0.8%
2 講義内容がむずかしすぎた	16.5%	12.9%	13.4%	12.7%	16.7%	12.5%
3 教え方に工夫が感じられずわかりにくかった	10.9%	9.0%	10.4%	9.5%	10.1%	7.1%
4 担当教員に熱意が感じられなかった	2.4%	1.6%	2.4%	2.0%	1.6%	1.0%
5 受講前に想像していた内容とは食い違い	7.3%	5.1%	9.3%	6.1%	9.7%	7.1%
6 質問に充分対応してくれなかった	2.7%	1.4%	1.4%	0.9%	1.4%	1.4%
7 講義が勝手な私語などで乱され、集中できず	1.5%	0.9%	1.5%	1.2%	1.2%	0.8%
8 板書、OHP機器などが、適切に活用されず	7.2%	8.7%	8.0%	6.2%	6.4%	8.0%
9 不満に感じたことは何もない	57.0%	62.3%	59.3%	64.4%	57.5%	64.1%
0 未回答等	2.9%	2.2%	1.2%	1.9%	1.8%	1.3%

表10参考資料

H16後期
2.0%
16.0%
5.0%
1.0%
6.0%
2.0%
1.0%
10.0%
59.0%
0.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

質問10 講義を受けて不満な点(複数回答)

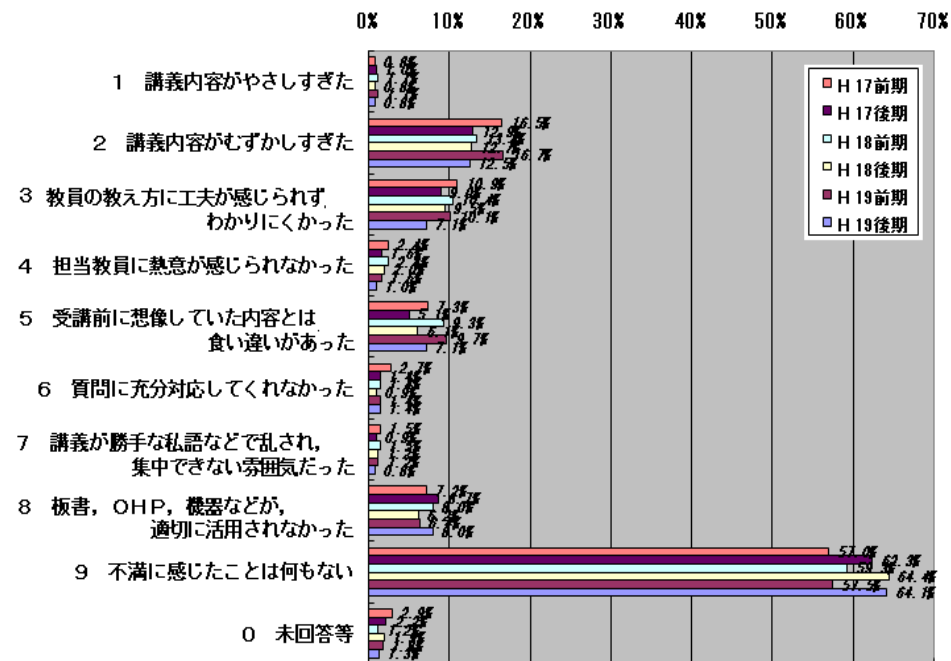


表12. 講義用質問12

	0	1	2	3	4
未回答等		大いにあった	少しはあった	あまりなかった	まったくなかった
H17前期	2.2%	24.8%	57.8%	12.6%	2.6%
H17後期	1.4%	26.6%	57.2%	12.7%	2.1%
H18前期	1.7%	28.6%	55.4%	12.4%	1.8%
H18後期	1.8%	27.2%	54.1%	13.4%	3.5%
H19前期	1.6%	25.9%	56.4%	13.2%	2.9%
H19後期	2.0%	27.0%	56.1%	12.6%	2.4%

表12参考資料

	0	1	2	3	4
H16後期		27.0%	58.0%	13.0%	2.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

質問12 受講効果としての常識の相対化や別の視点が可能となったか

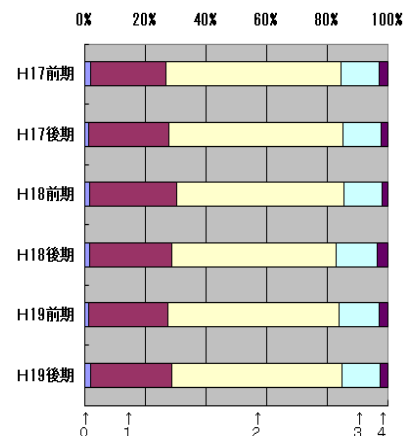


表13. 講義用質問3

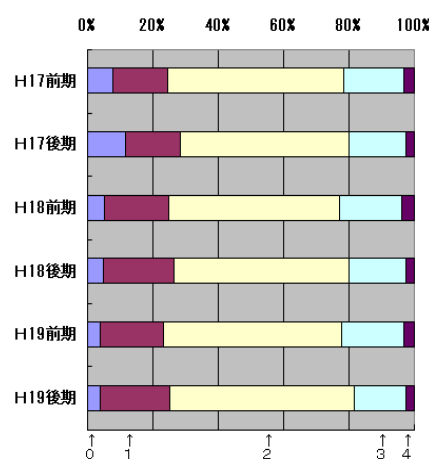
	0	1	2	3	4
	未回答等	大いにあった	少しはあった	あまりなかった	まったくなかった
H17前期	7.8%	16.8%	53.9%	18.3%	3.2%
H17後期	11.7%	16.8%	51.9%	17.4%	2.3%
H18前期	5.3%	19.8%	52.3%	19.0%	3.6%
H18後期	5.0%	21.5%	53.8%	17.3%	2.4%
H19前期	4.1%	19.2%	54.5%	19.0%	3.2%
H19後期	4.1%	21.2%	56.7%	15.6%	2.5%

表13参考資料

	0	1	2	3	4
H16後期		17.0%	57.0%	22.0%	4.0%

備考：この年度のみ未回答データ不詳、小数点以下不詳

質問13 自分なりの意見形成・問題発見



以上のうち、受講に伴う興味関心の変化（質問8）に関しては、部分的にせよ興味を持ったと回答してくれた学生が、例年通り80%以上に達していることがわかる。また、講義自体の良かった点と不満な点とを問う質問9と質問10によれば、「不満に感じたことは何もない」という回答が60%前後に達しており、全般的に見ても、良かった点を挙げてくれるほうが多く、不満な点を挙げるほうが少なめである。しかも「よかったと思うことは何もない」と感じる学生が前年度から減少傾向にあり、平成19年度後期には4%にまで下がったのは大変嬉しい回答結果である。個別に見ると、平成19年度後期に好評が急増したのは、教員の工夫や、講義室内の雰囲気であった。熱意に関する好評も、平成19年度前期には近年のうち最高値に達している。但し、板書や機器類の活用については、不満がさほど増えているわけではないものの、好評の変動（前期急増、後期急減）が目についた。また、前期には講義内容を難しいと感じる学生が増えたようだが、後期にはおさまっている。反面、講義内容が易しすぎたという反応も、僅かながら確認できる。

最後に、質問12と質問13について検討しておきたい。受講後は、多少でも常識を相対化できるようになったり、別の視点を得ることができたりという学生が例年80%を超えている。また、多少でも自分なりの意見を持ったり問題を発見できたりという学生も70%を超えるようになっている。

以上を総合すると、何となく受講した学生の多くが、受講後の効果については好評であったということがわかる。60%以上もの学生がそれなりの満足度を示しているが（質問4）、興味関心を持ったり（質問8）、新たな視点を獲得できたり（質問12）、自分の意見や問題点を発見できた（質問13）という実感はそれを上回っている。満足度以上に教育効果があがっていると評することもできよう。

3. 演習・講読の部

（1）全学共通の質問項目1～5

人文学部の演習・講読に関するアンケートのうち、まずは全学共通の質問項目1～5に関するアンケート結果について、作表データを列挙した上で検討したい。

表14. 演習講義用質問1

	0	1	2	3	4	5
	未回答等	30分未満	30分~ 1時間	1時間~ 1.5時間	1.5時間~ 2時間	2時間以上
H17前期	1.8%	22.9%	28.2%	20.4%	9.0%	17.7%
H17後期	1.1%	30.6%	24.6%	18.7%	7.6%	17.4%
H18前期	0.4%	18.3%	31.7%	21.6%	10.9%	17.1%
H18後期	0.4%	21.8%	26.1%	21.8%	10.1%	19.7%
H19前期	0.2%	23.9%	32.2%	19.6%	7.1%	16.9%
H19後期	0.5%	23.7%	30.8%	21.8%	6.3%	16.9%

質問1 授業外学習時間

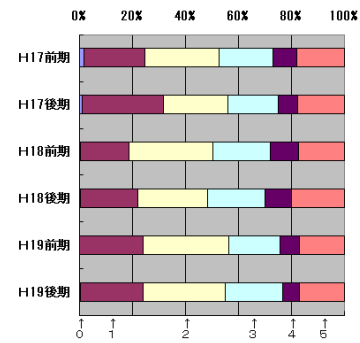


表15. 演習講義用質問2

	0	1	2	3	4	5
	未回答等	そう思わない	あまりそう思わない	どちらとも言えない	ややそう思う	そう思う
H17前期	1.9%	1.9%	4.5%	30.2%	44.0%	17.4%
H17後期	1.0%	1.4%	4.3%	27.5%	46.4%	19.5%
H18前期	0.2%	0.6%	5.0%	27.4%	50.2%	16.5%
H18後期	0.3%	1.6%	4.4%	25.8%	49.4%	18.6%
H19前期	0.2%	0.9%	4.6%	26.6%	50.2%	17.4%
H19後期	0.4%	1.1%	5.8%	26.8%	49.4%	16.5%

質問2 シラバス記載学習目標を達成できたか

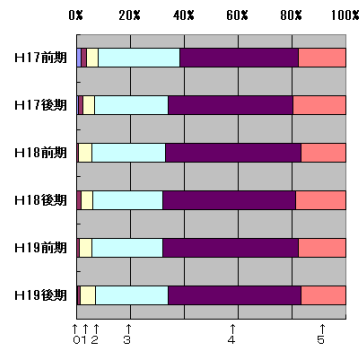


表16. 演習講義用質問3

	0	1	2	3	4	5
	未回答等	そう思わない	あまりそう思わない	どちらとも言えない	ややそう思う	そう思う
H17前期	1.7%	1.2%	3.8%	16.1%	53.6%	23.5%
H17後期	0.8%	1.0%	3.8%	17.6%	51.4%	25.4%
H18前期	0.0%	0.2%	2.9%	18.7%	56.4%	21.8%
H18後期	0.3%	0.5%	2.1%	17.0%	54.3%	25.8%
H19前期	0.1%	0.7%	3.9%	16.1%	54.9%	24.2%
H19後期	0.3%	0.8%	3.0%	13.8%	57.4%	24.8%

質問3 習得レベルが向上したか

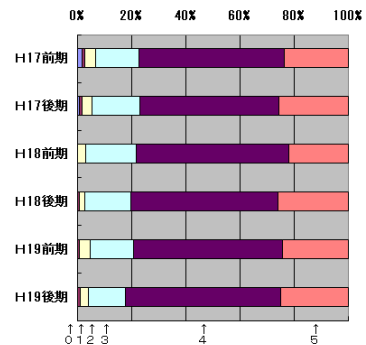


表17. 演習講義用質問4

	0	1	2	3	4	5
	未回答等	そう思わない	あまりそう思わない	どちらとも言えない	ややそう思う	そう思う
H17前期	1.6%	1.6%	3.2%	15.5%	42.2%	36.0%
H17後期	0.8%	1.2%	3.3%	12.5%	41.5%	40.7%
H18前期	0.2%	0.5%	3.1%	14.7%	43.9%	37.7%
H18後期	0.1%	0.8%	2.5%	14.9%	40.3%	41.4%
H19前期	0.4%	0.5%	3.3%	13.3%	40.7%	41.9%
H19後期	0.6%	1.0%	3.5%	15.3%	40.9%	38.7%

質問4 授業に対して満足できたか

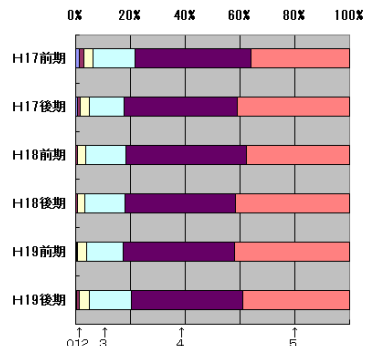
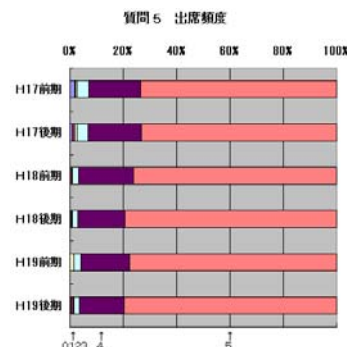


表18. 演習講読用質問5

	0	1	2	3	4	5
	未回答等	20%未満	20%～ 40%	40%～ 60%	60%～ 80%	80%以上
H17前期	1.8%	0.5%	0.5%	4.3%	19.5%	73.5%
H17後期	1.0%	0.8%	1.0%	4.1%	19.9%	73.2%
H18前期	0.2%	0.5%	0.4%	2.3%	20.7%	75.9%
H18後期	0.4%	0.3%	0.3%	2.1%	17.8%	79.2%
H19前期	0.0%	0.2%	1.3%	2.9%	18.1%	77.4%
H19後期	0.3%	0.9%	0.5%	1.9%	16.9%	79.6%



以上のうち、まずは学生側の授業態度に関する認識から検討しておきたい。学生側の出席頻度（質問5）に関しては、8割以上出席したという「自覚」のある学生の割合が毎年増加傾向にあり、80%近くに達するようになってきた。また、授業外学習時間（質問1）に関しては、講義の場合よりも十分な時間がかけられているのは当然であるが、2時間以上の時間をかけているという学生が減少し、30分未満であったという学生が昨年度より増えてしまった。シラバスに提示された学習目標に対する達成度（質問2）に関しては、講義と比較すればやはり肯定的評価が高いことがわかる。最後に、習得レベルの向上（質問3）と満足度（質問4）に関しては、肯定的評価がともにほぼ80%前後となっており、やはり講義よりも肯定的評価は高い。しかもはっきりと満足であると回答してくれた学生が、例年40%前後にまで達している（講義は25%前後）。但し、平成19年度の前期から後期にかけて、習得レベルが向上したという認識が微増したものの、満足度が逆に微減となっている。

(2) 人文学部独自の質問項目6～13

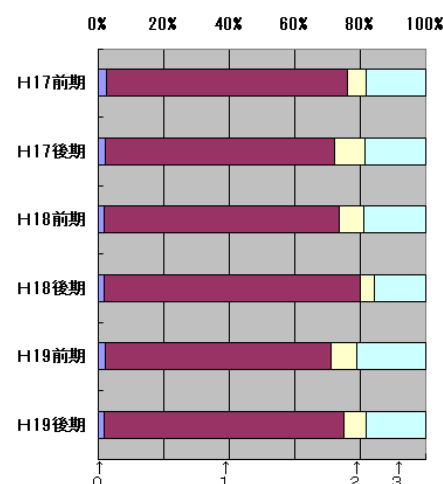
次に、人文学部の演習・講読に関するアンケートのうち、人文学部独自の質問項目6～12に関するアンケート結果について検討したい。

教員が出欠確認をおこなった頻度（質問6）に関する回答は、つぎの通り。

表19. 演習講読用質問6

	0	1	2	3
	未回答等	毎回なされた	時々なされた	まったくなされず
H17前期	2.6%	73.5%	5.9%	18.0%
H17後期	2.2%	70.2%	9.1%	18.5%
H18前期	1.8%	72.0%	7.6%	18.6%
H18後期	1.9%	78.4%	4.3%	15.4%
H19前期	2.5%	68.8%	7.8%	20.9%
H19後期	1.9%	73.2%	6.8%	18.2%

質問6 出席確認の頻度



このように、毎回出欠確認がなされたという「認識」のある学生が70%前後に達しているが、前年度よりはやや減少している。しかし実際には少人数教育のため、目視により確認で済む場合が多いことであろう。この設問自体の違和感については上述した通りだが、こうした演習講読の出欠確認の実態とアンケート結果とにズレが生じていないかどうか、この点からの再検討も必要であろう。

学生側の受講動機（質問7）に関する回答は、つぎの通り。

表20. 演習講義用質問7

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期
1 授業内容に、以前から関心をもっていた	15.2%	15.9%	18.0%	14.6%	16.2%	13.3%
2 「講義概要」を読んで関心をもった	11.2%	6.5%	10.6%	7.4%	12.4%	7.4%
3 担当教員の授業を以前受講し興味をもった	16.7%	14.1%	9.9%	16.9%	13.2%	13.9%
4 先輩や友人に履修を勧められた	1.7%	1.5%	1.3%	1.8%	1.6%	1.1%
5 自分の専攻分野にとって履修が望ましかった	34.5%	26.1%	32.4%	27.5%	30.5%	27.7%
6 特別の理由はなくただ何となく	1.0%	1.5%	1.1%	0.9%	0.9%	0.4%
7 単位修得の関係で履修の必要があった	24.1%	19.9%	21.1%	17.6%	20.4%	19.3%
8 時間割の都合	4.5%	4.5%	2.8%	2.9%	3.4%	3.9%
0 未回答等	45.5%	49.2%	51.3%	55.2%	50.7%	56.5%

この設問に対する未回答率は、講義ほどではないにしても、50%を超えている。やはり動機の記憶が薄れていたためか、この設問自体が嫌がられているか、いずれかであろう。次に多い回答率を示したのも、講義と同様、「自分の専攻分野にとって履修が望ましかったから」という消極的な内容の動機である。但しこれは30%前後となっている。

このような動機に対して、受講後の所感に関する設問に対する回答は、以下の通り。

質問7 受講動機(2つまで選択)

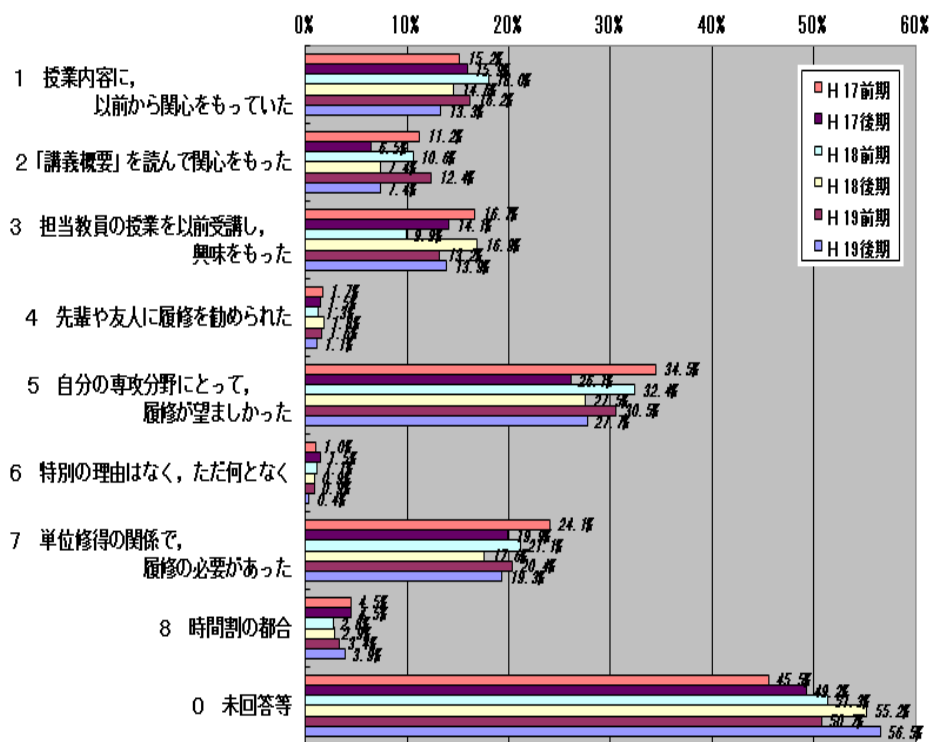


表21. 演習講義用質問8

	0	1	2	3	4
未回答等		興味や理解が拡大深化	部分的に興味を持った	受講前と特に変化はない	受講前よりも興味が薄れた
H17前期	2.6%	51.5%	37.0%	8.1%	0.7%
H17後期	2.1%	58.4%	32.3%	6.7%	0.5%
H18前期	1.1%	61.5%	31.8%	4.9%	0.7%
H18後期	1.3%	59.5%	33.3%	5.2%	0.8%
H19前期	0.8%	61.9%	29.6%	6.9%	0.7%
H19後期	1.1%	60.0%	31.3%	6.9%	0.6%

質問8 受講の知的影響

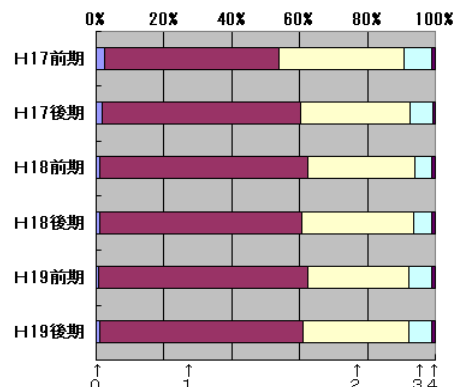


表22.演習講義質問9

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期
1 学習テーマ・内容の難易度が適切だった	30.2%	22.1%	25.3%	29.2%	29.2%	28.7%
2 演習等の方法や手順の指示がわかりやすい	25.0%	20.6%	22.9%	23.2%	24.2%	20.4%
3 担当教員による学生への助言指導が適切	35.2%	33.2%	35.7%	32.8%	33.2%	29.4%
4 受講前に想像していた以上に知見の広がり	30.9%	26.2%	31.2%	31.6%	34.8%	33.2%
5 質問に充分対応してくれた	25.3%	22.3%	25.9%	21.7%	22.9%	19.9%
6 授業内の作業が集中できる雰囲気	34.6%	23.2%	31.9%	28.7%	30.7%	28.2%
7 よかったと思うことは何もない	2.4%	5.8%	2.4%	3.5%	2.1%	3.4%
0 未回答等	2.9%	15.2%	0.9%	0.9%	0.9%	1.8%

質問9 受講してよかった点(複数回答)

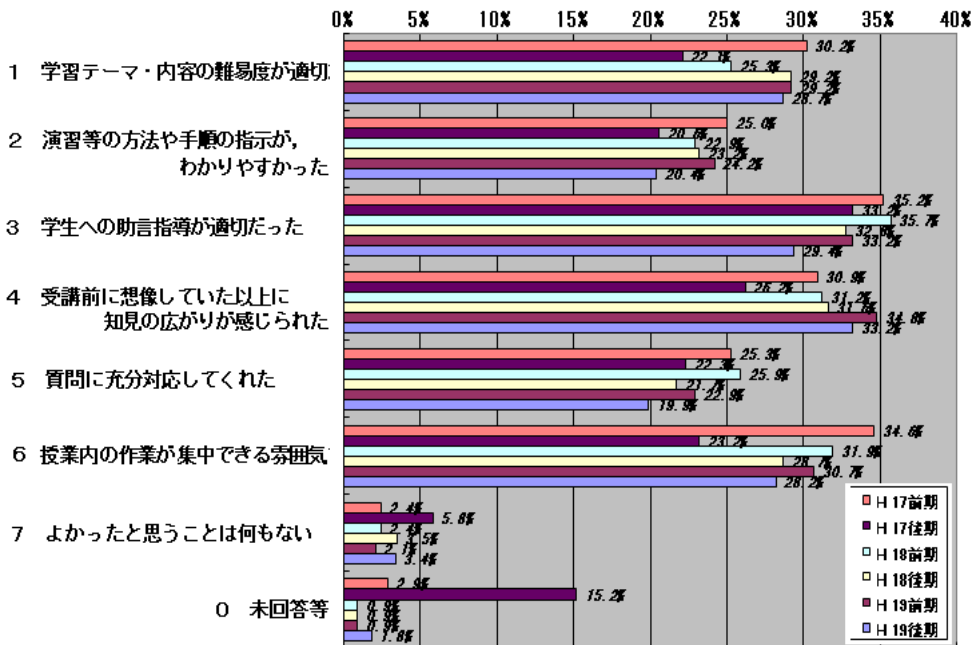


表23.演習講義用質問10

	H17前期	H17後期	H18前期	H18後期	H19前期	H19後期
1 学習テーマ・内容設定がやさしすぎた	2.4%	2.1%	3.1%	2.9%	2.9%	3.3%
2 学習テーマ・内容設定がむずかしすぎた	15.9%	14.0%	17.0%	11.2%	12.9%	9.4%
3 演習等の手法や手順の指示がわかりにくい	7.3%	5.4%	5.3%	7.3%	6.1%	6.8%
4 担当教員による学生への助言指導が不適切	2.4%	1.8%	2.7%	2.1%	2.1%	2.6%
5 受講前に想像していた内容とは食い違い	5.0%	3.3%	3.1%	2.5%	3.8%	3.4%
6 質問に充分対応してくれなかった	0.7%	0.5%	0.6%	0.8%	0.6%	0.5%
7 授業内の作業が集中できる雰囲気でなかった	1.1%	1.2%	2.4%	2.4%	2.0%	2.4%
8 不満に感じたことは何もない	63.3%	61.0%	67.8%	69.8%	68.5%	72.9%
0 未回答等	6.7%	14.3%	2.8%	4.8%	5.2%	4.9%

質問10 受講して不満な点(複数回答)

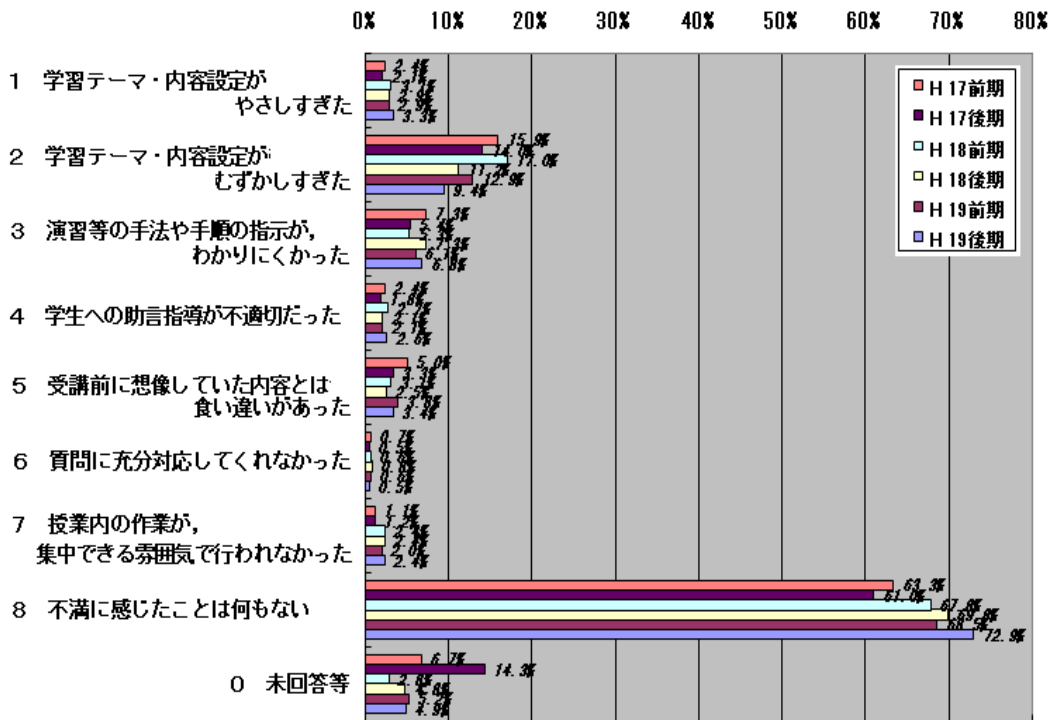


表24. 演習講読用質問11

	0	1	2	3	4
	未回答等	大に あった	少しは あった	あまりな かった	まったく なかった
H17前期	2.9%	36.7%	51.4%	8.7%	0.4%
H17後期	14.6%	39.3%	39.4%	5.2%	1.5%
H18前期	0.7%	43.8%	49.1%	6.0%	0.4%
H18後期	1.5%	47.5%	44.9%	5.4%	0.6%
H19前期	1.8%	42.4%	50.5%	4.9%	0.5%
H19後期	1.6%	46.5%	45.1%	6.3%	0.5%

質問11 受講効果としての常識の相対化や別の視点が可能となったか

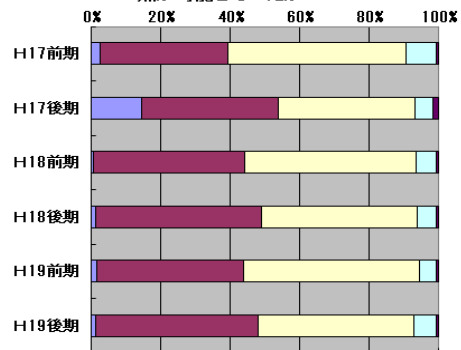
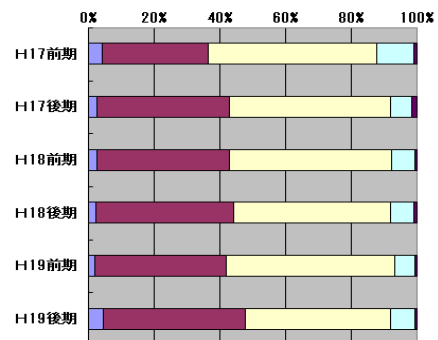


表25. 演習講読用質問12

	0	1	2	3	4
	未回答等	大に あった	少しは あった	あまりな かった	まったく なかった
H17前期	4.5%	32.1%	51.3%	11.2%	0.8%
H17後期	2.9%	40.2%	49.0%	6.3%	1.5%
H18前期	2.6%	40.5%	49.3%	7.2%	0.5%
H18後期	2.4%	42.0%	47.7%	7.1%	0.8%
H19前期	2.2%	40.0%	51.1%	6.1%	0.6%
H19後期	4.6%	43.2%	44.1%	7.5%	0.5%

質問12 自分なりの意見形成・問題発見



演習・講読を受講して良かった点と不満な点とを問う質問9と質問10によれば、「不満に感じたことは何もない」という回答は、講義よりも高く、しかも前年度よりも高く、平成18年度前期には64を超え(講義は55%超)、後期には67%を超えている点(講義は60%超)が注目される。「よかったと思うことは

何もない」と感じる学生は1～2%に留まっている。しかも講義内容が難しすぎたと感じる学生が減少傾向にあり、講義内容の難易度が適切だと感じる学生が増加する傾向があるのは、講義と同様の結果である。

いっぽう、受講前と受講後の変化に関連して、質問11と質問12に対する回答について検討しておきたい。受講後は、多少とも興味を持つようになる学生や(質問8)、多少とも常識を相対化できるようになったり、別の視点を得ることができたという学生(質問11)が、今年度はついに90%を突破した。多少とも自分なりの意見形成や問題発見ができたと感じた学生も90%に迫りつつある。

以上のうち、受講に伴う興味関心の変化(質問8)に関しては、部分的にせよ興味を持ったと回答してくれた学生が、90%以上に達していることがわかる(講義は80%前後)。また、演習・講読を受講して良かった点と不満な点を問う質問9と質問10によれば、まず「不満に感じたことは何もない」という回答がついに70%を突破するようになり(講義は60%前後)、全般的に見ても、良かった点を挙げてくれるほうが多く、不満な点を挙げるほうが少なめである。しかも質問9では、「よかったと思うことは何もない」と感じる学生が3%前後と極めて少なく(講義は5%前後)、未回答率についても、不満な点をあげる質問10より少ない。

最後に、質問11と質問12について検討しておきたい。受講後は、多少でも常識を相対化できるようになったり、別の視点を得ることができたりという学生が例年90%を超えている。また、多少でも自分なりの意見を持ったり問題を発見できたりという学生も90%を超えるようになった。いずれもそのうち約半数が「大いにあった」と回答しており、この点において、講義よりもはるかに積極的な好評を示してくれている。演習や講読の機会を積極的に活用してくれる良質の学生諸君に恵まれていると言えよう。彼らからの励ましのメッセージとして、しっかりと受けとめておきたい。

第5節 その他のFD関連活動

人文学部FD委員会では、毎年3月に京都大学高等教育研究開発推進センターが主催する全国的なFD関係の「大学教育研究フォーラム」に毎年出張参加している。この年度には、平成20年3月26日・27日両日に第14回フォーラムが開催されており、今回は2名が出張参加した(武本雅嗣氏・皆尾麻弥氏)。

このほか、山口大学内外において、全学や各学部のFD委員会が主催したものではないが、各種の研修会が開催されている。それらの参加状況については、当委員会としては掌握し切れていない。まして個別の自己研鑽努力についてはなおさらである。そもそも、FDすなわち「Faculty」の「Development」という本義に関連する活動としては、多様な形で実質的に存在するはずであり、それに費やされる時間と労力の総体については、第4節までに示してきたデータでは把握しきれない点を、ここで再確認しておきたい。

* * * * *

平成19年度 山口大学人文学部FD委員会

磯部	佳宏(副委員長)	井上	三朗	武本	雅嗣
藤川	哲	古荘	真敬	馬	彪
真木	隆行(委員長)	皆尾	麻弥		

第5章 教育学部のFD活動

第1節 はじめに

平成19年度における教育学部のFD活動として、大学教育機構主催全学FD研修会および講演会へ参加し、さらに、学生授業評価および教員授業自己評価を実施した。本章では、これらの参加状況と評価の実施状況・結果についてまとめる。

第2節 全学FD研修会および講演会への参加状況

平成9年度以降の、教育学部教員の参加状況の年変化を図1に示す。また、平成19年度に開催された大学教育機構主催・全学FD研修会および講演会への参加者名簿を表1に示す。参加者数の年変化については、平成12年度より大きく参加者数が増加し、平成14・15年度にピークを迎えた。その後、平成16年度に一旦参加者数が減少したが、その後、徐々に増加に転じ、特に今年度は大幅に増加し、21名の参加者があった。平成16年度以降、合宿方式・強制参加型から、アラカルト方式・自由参加型の研修になり、一時的に参加者数が減少した。しかしながら、今年度は、大学教育センターによる豊富な研修メニューの準備や広報活動、教員のFD活動に対する関心の高まりなどにより、大幅に参加者数が増加したものと考えられる。但し、教育学部構成員の約5分の1の参加者数であることや、参加教員が一部固定しているなどのこともあり、さらに多くの教員へ参加を呼びかけていくことが必要である。また、教育学部教員が講師を担当している研修会が多くあり、FD研修会の担い手としての役割を果たしている。

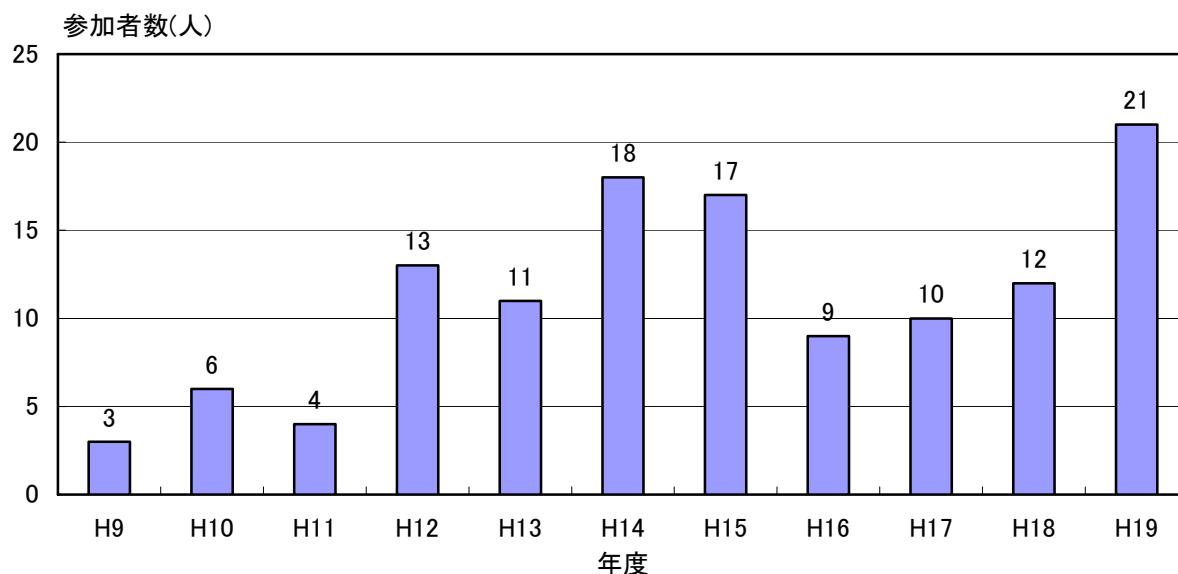


図1. 全学FD研修会への参加人数の年変化。

表 1. 平成 19 年度開催の大学教育機構主催全学 FD 研修会および講演会への教育学部教員の参加状況。

実施年月日	会場	研修内容／講師	教育学部参加者名
平成 19 年 4 月 2 日	吉田	TA 研修会	海野 勇三 古賀 和利 五島 淑子 丹 信介 白石 敏行 恒吉 徹三 松岡 勝彦
平成 19 年 4 月 6 日	吉田	聴覚障害学生の授業方法についての研修会	なし
平成 19 年 7 月 31 日	吉田	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう／羽根拓也、他	石井 由理 岡村 康夫 五島 淑子 高橋 俊章 丹 信介 山本 善積 北本 卓也 野村 厚志
平成 19 年 8 月 2 日	小串	新規採用教育職員研修会 ／岩部浩三、小川勤、北本卓也	阿濱 茂樹 佐伯 英人
平成 19 年 8 月 9 日	吉田	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう／白澤麻弓、他	岡村 康夫 山本 善積 北本 卓也 恒吉 徹三 崎里 節子 神田久美子 (教育学部学生 5 名)
平成 19 年 9 月 14 日	吉田	授業技術研修会－学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法 ／池田幸夫	なし
平成 19 年 9 月 18 日	吉田	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法／小川勤	曾根 涼子
平成 19 年 9 月 20 日	吉田	脱初心者！MS Office 実践的活用法 ／岡田耕一	なし
平成 19 年 9 月 21 日	吉田	パワーポイント教材の作り方／小川勤	なし
平成 19 年 10 月 19 日	吉田	Approaches to Learning Language Education／Edwards Nathaniel	前田 満 松谷 緑
平成 19 年 12 月 25 日	吉田	情報セキュリティ・情報モラルの教え方 ／糸長雅弘	古賀 和利 吉村 誠 野村 厚志
平成 20 年 3 月 13 日	常盤	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法／小川勤	なし
平成 20 年 3 月 18 日	常盤	授業技術研修会－学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法 ／池田幸夫	なし
平成 20 年 3 月 26 日	小串	情報セキュリティ・情報モラルの教え方 ／糸長雅弘	なし

第3節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生授業評価について

まず、学生授業評価の実施状況について述べる。全学で実施する現行方式の学生授業評価は平成17年度より実施している。平成17年度は実施率が低かったが、その後平成18,19年度と、実施率は同程度の86%となり、学生授業評価の実施について、概ね認識されてきているようである。なお、全学では、実施率が90%程度で推移しており、教育学部の実施率はそれと比較して若干低い。

次に、教育学部全体としての学生授業評価の結果の評価点を図2に示す。比較のため、平成17～19年度前期・後期の結果をあわせて示した。各質問項目の具体的な質問文は参考資料のとおりである。全体的な印象として、年度間・学期間で大きな傾向の相違は認められないものの、Q4, Q5, Q7で学期間のばらつきがやや大きいように見受けられる。Q4は視聴覚メディアの利用に関する質問であり、Q5は学生からの質問に答える機会の有無を問うもの、Q7は予習・復習の時間を問うものである。これらの質問項目で前期・後期の結果に差異が認められる原因としては、後期は演習や実験・実習科目の比率が高くなることが考えられる（シラバスの授業区分の項目を用いて確認したところ、平成19年度教育学部開講科目については、前期：講義45%、演習や実験・実習55%、後期：講義40%、演習や実験・実習60%であった）。Q4のメディアの利用に関する質問については、演習科目や実験・実習科目では、テキストやプリントなどの印刷物だけでなく、映像や音声、コンピュータなどの多様なメディアを利用する機会が多くなると考えられる。Q5の質問機会に関する問いについては、特に、演習の場合、少人数で教員とやり取りすることが多くなることを反映しているものと考えられる。Q7の予習・復習の時間を問う質問については、演習の場合、予習に時間をかけることが多くなり、また実験・実習の科目では、毎回の実験レポートの作成など、復習の時間が必要となる。以上のように授業形態の違いから、前期・後期に差異が生じたものと推測される。学生授業評価アンケートを通じて学生からの細かな意見を聴取するためには、講義科目と演習や実験・実習科目で異なる質問項目を準備するなどの工夫が必要であると感じる。

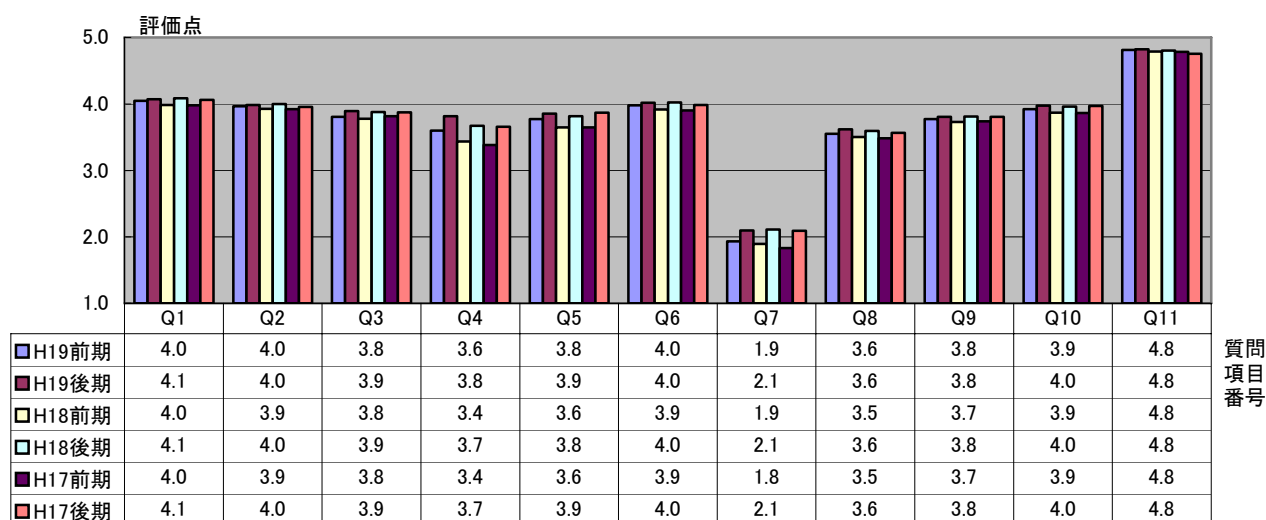


図2. 学生授業評価における評価点の年・学期変化。アンケート回収枚数は、平成19年度前期：7,612枚、平成19年度後期：5,280枚、平成18年度前期：7,265枚、平成18年度後期：5,763枚、平成17年度前期：6,844枚、平成17年度後期：5,070枚。

(2) 教員授業自己評価について

教員授業自己評価の実施状況についての年度・学期変化を図3に示す。本稿執筆の時点(平成20年5月)においては、平成19年度後期の教員授業自己評価の入力期間中であり、平成19年度後期の実施率は低い。このことを除くと、全体的には50%弱で推移している。学生授業評価の実施率と比較して、極めて実施率が低い。シラバス作成、学生授業評価、そして教員授業自己評価は一連のサイクルとして考えられているが、シラバス作成や学生授業評価については、高い割合で実施されている。学生授業評価においては、文書による依頼と質問用紙・アンケートシートの配布を行っているのに対し、教員授業自己評価は電子メールで入力を促すだけである。教員授業自己評価の入力を促す方法について、さらに検討する必要がある。

教員授業自己評価による自己評価点の教育学部全体での平均値の年度・学期変化を図4に示す。学習時間を除けば、どの質問項目もほぼ3~4点の間に分布しており、年度・学期で同様の傾向を示している。但し、Q4の結果は若干ばらつきが大きく、なおかつ、他の項目よりも評価点が低い印象を受ける。この質問項目は視聴覚メディアなどの利用に関するものであり、授業の進め方・方法に依存する回答しにくい質問であるためである考えられる。

教員授業自己評価の結果(図4)と学生授業評価の結果(図2)との間で、対応する質問項目に対する評価結果を比較すると、概ね学生の評価が教員の評価を上回っている。特に授業技術に関する項目(Q1~Q4,Q6)については、教員の自己評価が若干低く、教員がさらなる授業技術の向上の必要性を自覚している様子が見て取れる。しかしながら、それらの質問項目における自己評価点の年度・学期間での増減に大きな傾向は見られない。教員側が、授業技術の向上の必要性を自覚しながら、そのまま年・学期が経過していく状況になっている。FD活動としては、授業技術を改善するための研修の機会を増やすことが必要かもしれない。学習時間に関する質問については、教員授業自己評価の結果と学生授業評価の結果とはほぼ同様の値を示しているが(授業1回あたり0.5~1時間程度)、前者が後者よりも若干多くなっている。いずれにしても、予習・復習にかける時間は少なく、これを増やすための方策をFD研修会等の話題として扱うことが必要かもしれない。なお、学生授業評価のアンケート結果には、期末試験前の学習時間が含まれておらず、実際には、より多くの時間を学習に費やしている現状はあると考えられる。そのため、学生授業評価アンケートの実施方法及び実施時期については検討の余地がある。

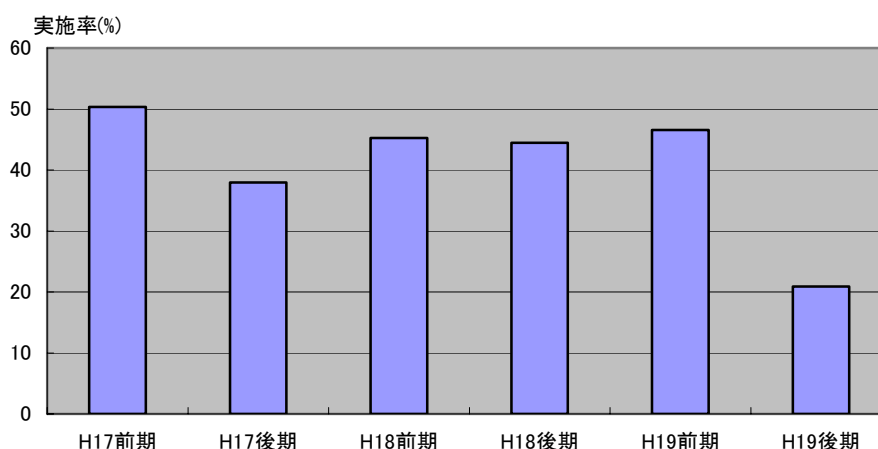


図3. 教員授業自己評価における実施率の年・学期変化。

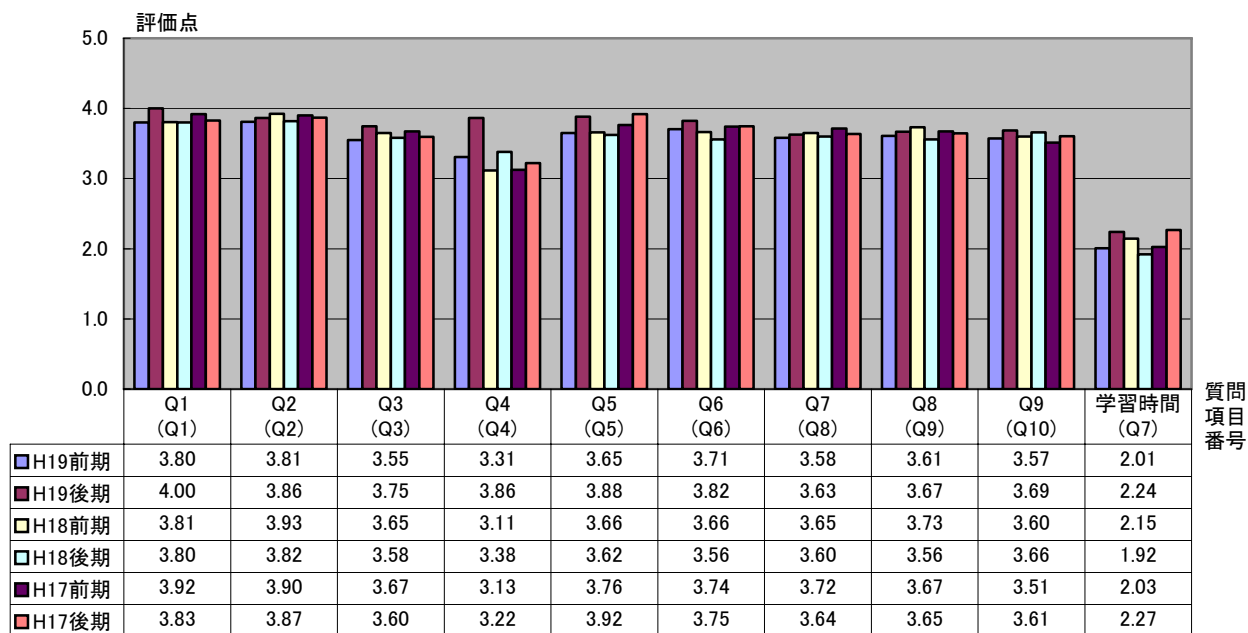


図 4. 教員授業自己評価における評価点の年度・学期変化。質問項目番号下の括弧内の番号は、対応する学生授業評価の質問項目番号を表す。

参考資料

教育学部・教育学研究科の学生用 授業評価質問用紙

○このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にするもので、成績評価とは無関係です。率直な回答をお寄せください。

○回答の多くは、あてはまる数字を選んで「マークシート」の指定された欄にマークするというものです。

○本紙（授業評価質問用紙）、マークシート、HBの鉛筆、消しゴムを用意して回答を始めてください。

<授業科目名> 授業科目名を記入してください

<担当教員名> 担当教員名を記入してください

<開設科目コード><開設年度><開設期><授業区分>については
マークする必要はありません。

<学年> 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

<学生区分> 1. 一般学生 2. 留学生

<学部・研究科> 下記区分に従い、あなたの所属学部等をマークしてください。教育学部生なら2、教育学研究科の大学院生なら9です。

- 1.人文学部 **2.教育学部** 3.経済学部 4.理学部 5.医学部 6.工学部 7.農学部
8.人文科学研究科 **9.教育学研究科** 10.経済学研究科 11.医学研究科(M) 12.医学研究科(D)
13.理工学研究科(M) 14.理工学研究科(D) 15.農学研究科 16.東アジア研究科
17.連合獣医学研究科 18.連合農学研究科

<学科・課程・専攻> 下記区分に従い、あなたの所属課程等をマークしてください。

教育学部 1)学校教育教員養成課程 2)実践臨床教育課程 3)情報科学教育課程 4)健康科学教育課程
5)総合文化教育課程

教育学研究科 1)学校教育専攻 2)教科教育専攻

<コース等1> 下記区分に従い、あなたの所属コース等をマークしてください。

教育学部 1)教科教育コース 2)幼児教育コース 3)障害児教育コース 4)国際理解教育コース
5)人間教育学コース 6)教育心理学コース 7)表現情報処理コース 8)数理情報コース
9)スポーツ健康科学コース 10)生活健康科学コース 11)国際文化コース 12)文芸・芸能コース

教育学研究科 1)学校教育専修 2)学校臨床心理学専修 3)国語教育専修 4)社会科教育専修 5)数学教育専修
6)理科教育専修 7)音楽教育専修 8)美術教育専修 9)保健体育専修 10)技術教育専修
11)家政教育専修 12)英語教育専修

<コース等2> 教育学部学校教育教員養成課程教科教育コースの学生のみ、あなたの所属選修をマークしてください。その他の学生はこの<コース等2>にマークする必要はありません。

教育学部 1)国語教育選修 2)社会科教育選修 3)数学教育選修 4)理科教育選修 5)音楽教育選修
6)美術教育選修 7)保健体育選修 8)技術教育選修 9)家政教育選修 10)英語教育選修

質問Ⅰ

- 1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 3) 板書は適切に行われましたか？また、テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 4) 必要に応じて OHP やビデオ、コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 5) 学生の疑問・質問などに答える機会が十分に与えられていましたか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 7) あなたは、この授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください。
1. 30分未満 2. 30分～1時間 3. 1時間～1時間30分 4. 1時間30分～2時間 5. 2時間以上
- 8) あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 9) あなたは授業の内容を理解しましたか
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 10) この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
1. そう思わない 2. 余りそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う
- 11) あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか？
1. 20%未満 2. 20%～40% 3. 40%～60% 4. 60%～80% 5. 80%以上
- 12) ～30) 授業担当教員の指示に従ってください。教員によって、ここに独自の質問を設ける場合と、まったく設けない場合があります。

質問Ⅱ

授業担当教員の指示に従ってください。教員によって、授業に関する感想や要望等を自由記述のかたちで求める場合と、求めない場合があります。なお、マークシートには「回答は質問用紙に記入のこと」とありますが、教育学部・教育学研究科の授業で質問Ⅱへの回答を求める場合、教員が別に記入用紙を配布することになっています。本紙（授業評価質問用紙）には、絶対に記入しないでください。

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。マークシートの回収方法は授業担当教員が指示することになっています。

教育学部・教育学研究科 教員による授業自己評価

【1.開設科目コード】	【2.系列】	【3.分野】						
【4.科目類型】	【5.開設科目名】	【6.単位数】 単位						
【7.担当教官】	【8.開設期】 年生 期	【9.開設時限】 曜日 ・ 時限(昼・夜)						
【10.授業区分】	【11.対象学生】	【12.】						
【13. 授業の概要】								
【14.授業の一般目標】								
【15.授業の到達目標】								
知識理解の観点								
思考・判断の観点								
関心・意欲の観点								
態度の観点								
技能・表現の観点								
その他の観点								
【16.授業の目標の記載】 1.シラバスに記載 2.授業中に開示								
【17.成績評価方法】								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合(%)	JABEE 収集資料
定期試験(中間・期末試験)								
小テスト・授業内レポート								
宿題・授業外レポート								
授業態度・授業への参加度								
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品								
演習								
出席								
その他								
合計								
【18.受講登録者数】 人	【19.受験者数】 人	【20.合格者数】 人	(うち秀) 人	(うち優) 人	(うち良) 人	(うち可) 人	【21.不合格者数】 人	
【22.授業回数】 回		【23.休講回数】 回		【24.補講回数】 回				

【25.出席管理】 1.毎回確認 2.()回確認 3.確認せず						
【26.出席の評価への利用】 1.出席による加点 最大()%程度 2.欠格に利用 欠席()回で欠格 3.利用せず						
【27.学生授業評価】 1) 学生授業評価 (中間) 1.実施 2.非実施 2) 学生授業評価 (期末) 1.実施 2.非実施						
【28.授業実施上の工夫】						
	ない	そうは思わない	余りそうは言えない	どちらとも	う	ややそう思う
1. 聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか?	1	2	3	4	5	
2. 理論や考え方, 専門用語などをわかりやすく説明しましたか?	1	2	3	4	5	
3. 板書を工夫しましたか。また、テキストやプリントなどの教材を効果的に使いましたか?	1	2	3	4	5	
4. 必要に応じて OHP やビデオ, コンピュータなどの視聴覚メディアを効果的に使いましたか?	1	2	3	4	5	
5. 学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか?	1	2	3	4	5	
6. 身振りや手振りを加えたり, 目を見て話すなどの態度を心がけましたか?	1	2	3	4	5	
7. 学生は、シラバス (授業案内) に記載された学習目標を達成したと思いますか?	1	2	3	4	5	
8. 学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか?	1	2	3	4	5	
9. 授業の内容に学生は満足していると思いますか?	1	2	3	4	5	
10. 授業外学習についてお尋ねします 1)宿題 1.毎回課した 2.ほぼ毎回課した 3.時々課した 4.ほとんど課さなかった 5.まったく課さなかった 2)その他授業外学習の指示 1.参考文献等の提示 2.予習・復習の指示 3.その他 () 4.特に何もしなかった 3)期待した授業外の学習時間 (授業1回あたり) 1. 0.5時間未満 2. 0.5~1時間 3. 1~1.5時間 4. 1.5~2時間 5. 2時間以上						
【29.授業実施上の工夫(自由記述)】						
【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】						

第6章 経済学部のFD活動

第1節 平成19年度経済学部FD計画

平成19年度経済学部FD計画は、

1. ピア・レビューの実施、
2. 全学FD研修会への参加

の2点である。この他に学生授業評価・教員授業自己評価がある。以下、ピア・レビューの実施について詳しく述べ、全学FD研修会の参加状況についても簡単に報告する。

第2節 ピア・レビュー

平成18年度は5学科すべてにおいてピア・レビューを行った。平成19年度は研究科のFD活動が始まったため、経済学科と経営学科が研究科を担当し、残りの国際経済学科、経済法学科、観光政策学科が学部のピア・レビューを担当した。各学科から1コマずつ公開授業を決めてもらい、その授業に各学科教員及び関係する教員の参加を得て、授業後にメールなどを用いて気付きなどを担当教員に伝えてもらった。国際経済学科のピア・レビューは読売新聞で取り上げられた。以下、各学科のピア・レビューを紹介する。

1. 国際経済学科

- (1) 授業名：経済発展論
- (2) 日時：平成19年6月19日（火）5・6時限
- (3) 担当教員：松井 範惇（大学院東アジア研究科教授）
- (4) 授業の目標：(i)アジア、アフリカなど途上国の経済発展の理論と現実を学ぶ、(ii)特に、貧困と不平等を、人間開発の観点から学ぶ、(iii)取り上げる各国の、経済成長と開発、日本との関係、援助と開発政策について議論する、(iv)これらの学習を通じて、読み・書き、報告し聞く訓練をする。
- (5) 当日の授業内容：
 - (i) 先週までのレビューとこれからの説明：5分
 - (ii) インドネシア語入門：30分
 - (iii) バングラデシュのスライド：25分
 - (iv) 教科書の第10章「インドネシアにおける民主主義・経済回復・人間開発」：30分
- (6) 参加教員数： 7名 （出席学生数：60名）
- (7) 授業内容：(ii)のインドネシア語入門は、配りもの1枚を使って、全員で発音をしながら、インドネシア語の基礎を学んだ。出席票に「インドネシア語とい

うものがあるのを知りませんでした」という学生がいた。学生は新しい言語学習を楽しんだ。(iii)バングラデシュのスライドでは、約250枚のバングラデシュの農村の人々とダッカの交通、スラムなどの人々の表情に触れることができた。(iv)教科書の第10章は、講師による内容の紹介と、この章における論点の整理、重要語句の説明を行った。あらかじめ読んでおくことになっているが、前もって読んできた学生はほとんどいなかった。

(8) コメント・助言：

- (i) 学生に質問させる難しさ：授業は学生に積極的に発言、質問させることが重要であり、内容に確認にも意義があるが、この点をいかに進めるかが難しい。
- (ii) 学生に、授業内容を飽きさせないよう、興味を持たせるよう進める工夫は重要である。
- (iii) 出席の取り方、授業の内容に関して質問票を書かせることは有効であると思われる。
- (iv) 大きな教室での授業で、その一部でも討論を持ち込むことは困難である。
- (v) この授業では、講師が学生の中へ入って行って、確認や問いを発していることは、他の授業でも出来るかもしれない。

参考：『読売新聞』、教育ルネサンス（平成19年7月13日、全国版）

<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/renai/20070713us41.htm?from=yoltop>

2. 経済法学科

- (1) 授業名：憲法 I
- (2) 日時：平成19年6月20日（水）1・2時限
- (3) 担当教員：立山紘毅 先生
- (4) 講義内容：司法審査制度の比較憲法学的な考察
- (5) 講義の目標：① 憲法 I は、憲法学の総論と位置づけているので、いわゆる「憲法判断基準論」の細かい解釈論の前提となる原理・原則を習得させる。② その際、いわゆる「アメリカ型」の付随的違憲審査制（具体的権利侵害に付随して憲法判断が行われる）と「大陸型（典型的にはドイツ型）」の抽象的違憲審査制（法令そのものの違憲性を抽象的に審査する）概念区分を明確にする。③ その中で、両者の間に「合一化傾向」とカペレッティが呼んだ現象が生まれていることを指摘し、日本の違憲審査制の「独特な司法消極主義」（樋口陽一の指摘）を明らかにする。
- (6) 参加教員数： 4名
- (7) コメントや助言など：便宜上、重複すると思われるコメントを一括して箇条書きする。
 - ① 学生の視点から：
 - ・法律成立過程における社会的背景の説明は興味深い。身分、階級、歴史的背景についての説明が詳しくなされ、社会的要因と法の関係がわかりやすかった。
 - ・アメリカ、イタリア、ドイツとの比較など豊富な話題がおもしろかった。
 - ・内容が豊かであるだけに、後で詳細が調べられるよう、プリントがほしい。ノートを取っていると追いつかない時がある。
 - ・六法や教科書を持参しているのだから、ときには講義中に開けさせることも必要と思われる。

② 教員としての観点から：

- ・講義の途中で学生に発言させるのは、学生にきちんと聞かせる上で必要と思う。
- ・歴史認識の重要性、非核法的開設は日本法の相対的位置づけを理解させるにきわめて有効。
- ・学生の理解の平均をあまり考慮せずに、やはり必要なレベルの講義は行うべきと思う。
- ・寝ている学生、遅刻する学生にどう対処するか。

③ その他：

- ・声が大きく離す速度が適切であった。
- ・文学作品の一節を引用するなど、教養豊かでお話しがおもしろかった。
- ・時間通りに講義が終わらない点は問題である。

- (8) 授業内容：かつて憲法の教科書は現在とはとうてい比較にならないほど薄く、判例・裁判例を引用することも稀であり、かつまた、それらのあまりの没論理性に辟易しながら講義する(?)、というのが常態であった。しかし、現在、学説における比較法的・歴史的・原理的哲学的研究の深化にとどまらず、判例・裁判例も一定の蓄積とそれなりの論理性を備えているだけに、教科書も分厚くなる一方であり、時間不足は悩みの種である。そのため、学生には、i) 講義全体の見通しをガイダンスした後、憲法 I ではどこを講義するかを明示する（その際、必ずしもテキストの順序どおりに講義するとは限らないことを伝達する）、ii) 各回の講義の最後に、今回講次回講義の内容と該当するテキストの章・節、あるいは頁を指摘して下読みしておくことを告知する、iii) 同時に、今回講義の該当箇所をもう一度指摘させ、復習をしておくよう告知することに努めて、時間不足をカバーしている。

実際のところ、基礎的な（広義の）社会認識を養うために画像教材を用いたのはやまやまであり、これが特殊講義であれば、それも可能であるが、総論・概論の講義では、ただでさえ窮屈な時間割をさらに圧迫することになり、実際には難しい（といって、ホームページに掲載するとなると、準備に多大な時間を要する……たとえば、NHK スペシャルなどには良質な素材があるが、これをホームページで閲覧できるよう準備するためには、1時間の素材の処理に数日を要するはめになるばかりか、著作権法上の問題（複製権・公衆送信権）も生じかねないため、現段階では難しい）。

なお、同時に、今回の講義テーマは憲法訴訟制度の比較法的・原理的な考察であったため、具体的な条文を指摘するに至らず、それだけに歴史的・社会的背景の解説に時間を割くこととなったが、別の内容の場合、憲法にかぎらず、多方面の法律を参照するよう要求することもしばしばである。そのため、高年次で初めて履修する科目の「先取り」をやってしまうこともしばしばであるのが実態である（たとえば、憲法 29 条の「相当な補償」については、一連の予防接種禍訴訟で、憲法 29 条に基づく直接補償という裁判所の判断が確立しているため、不法行為法や行政救済法（国家補償と国家賠償の違い等）を論じないと理解させることができない）。その意味で、あたかも憲法の講義が経済法学科の講義のインデックスであるかのように思えることも事実であるし、一方、「積み上げ式」を基本とする法学教育において、もっと相互参照（クロス・レファレンス）を積極的に活用できるようなカリキュラム編成や教員相互の連携協力が望まれる。

3. 観光政策学科

- (1) 授業名：観光コミュニケーション
- (2) 日時：平成19年6月22日（金）5・6時限
- (3) 担当教員：宮崎 充保 先生
- (4) 講義内容：「プロジェクト X」の ppt.を用いた中間報告会
- (5) 講義の目標：①・キャッチボールにたとえられる“コミュニケーション”することは何か、その基本と基礎を学び、それを実践へ向ける。②この“コミュニケーション”に観光を加えたとき、コミュニケーションの形態はどうなるか、要領を得た、まとまりのある言語表現ができるようになる
- (6) 参加教員数： 1名
- (7) コメントや助言など：教員の指導が、講義はじめになされ、本講義の趣旨、進め方、注意点が説明される。その後、グループに分けられた代表者がプレゼンテーションを行った。学生の報告は、学生の自らの意見をとりまとめた材料により生き生きした発表を作り上げていた。パワーポイント作成能力は2年生も含む中、かなり高いレベルである。学生が楽しいプレゼンテーションを心がけて、聞く人に自分の主張を心地よく伝えようとしている。山口の観光を様々な角度で、学生が考えていることのわかる報告である。教員が学生がそれぞれ報告を修了の際、毎回適切な指導を与え、注意点等を指摘していることで、学生が他の報告者の良いところを指摘するなど、教員の指導が徹底されている。
- (8) 授業内容：授業ではまず、コミュニケーションは伝えようとする相手を相手に伝達すること、そして、相手には理解あるいはいは何かの反応が生まれるようになることについて学ぶ。これに観光をかぶせて、観光地の発掘、発掘した観光地の歴史文化、観光企画、現地における観光産業（ホテル、土産店など）、観光ガイドに必要なコミュニケーションをプレゼンテーションによって進める。受講者のやりたいこと、やらなければならないことをリサーチしながら、上記の項目を取り入れながら、人に伝えるだけの話の種を持つような授業である。これまでの授業でさまざまな形のコミュニケーション形態を実践してきた中間成果としてグループごとの企画を ppt とハンドアウトをもちいながらプレゼンテーションをする。この講義では Q&A にコメントに焦点をあてる。尚、その際、受講者にはパワーポイントを利用してもらう。

講義計画全体におけるピアレビュー講義の位置づけ

■ プロジェクト X（企画 X）突入

【フェーズ1】6. 1/8

- 次の3つの中から、一つずつを選んで、「観光」の企画を立てる

🚩 定住者 vs. 非定住者

🚩 旅 vs. 旅行

🚩 山口市内の 既存観光資源の再開発 vs. 観光資源の新開発

- この3つの要素を組み合わせて企画を作成する。

例) 定住者—旅行—山口市内の観光資源の新開発

としたら、どのような「企画」が立てられるだろうか。

■ 企画編成

- 個人で組み合わせを考え、その根拠をまとめる。(学生記入用紙の A に記入)
- グループでディスカッションをして、グループとしての組み合わせを決める。
- 組み合わせの根拠をまとめる。第 2 の **司会者** (学生記入用紙の B に記入)
- 第 2 の **spokesperson**

■ 次週以降の計画

- Spokesperson によるプレゼンテーション
- Q & A セッション：Spokesperson が答えるがグループメンバーからの回答があってもよい。聞く側は必ず 1 つは質問を準備する。質問はグループ司会者が発言する。
- 評価——さらなる評価基準

【フェーズ 2】 6.15/22

- 企画の具体的内容展開 1：ブレインストーム (第 3 の **司会者**)
- 企画の具体的内容展開 2：フィールドワーク (グループ **リーダー** の設定)
- 企画の具体的内容展開 3：概略のまとめ (第 4 の **司会者**) ——ppt.作成
- 中間報告：プレゼンテーション (新たな 2-3 人の **Spokespersons**)
- Q & A と評価

【フェーズ 3】 7. 6

- フェーズ 2 を基にして、修正、肉付け
- グループディスカッション、フィールドワーク
- 最終版 ppt.とハンドアウト (企画書 (プロポーザル)) の作成 (A4 1 ページ)：担当者へメールで送る

【ファイナルフェーズ】 7.13/20

- 他のグループのプレゼンテーションの評価基準の設定
- 自己のグループのプレゼンテーション
- 他のグループの評価

- ファイナル：これまでのことをもとにして、「プロジェクト X」の、個人ごとのレポート作成 (提出期限：8.4, 経済学部学務係)

■ 学生記入用紙

観光コンソーシアム
2017年度 第1回 若者会議

グループ番号 名前 (参加者はTシャツに記入)

A.

B.

■ 当日の講義、発表資料（1部）

山口大学の観光地化
～若者を山口市に～

グループB

- ・ 組み合わせ…定住者一旅行一既成資源の再編成
- ・ 特色…山口大学を中心に山口の観光を考える
- ・ 目標…自然保護を基礎として、山口市への若年層の観光客を誘致する。

①学食

- ・ 目標…一般の方々も利用しやすいように
- ・ 建物…増築をして、デザインを清潔感のあるものに
- ・ 食事…特産物を使った直線感のある目玉商品(ふくホシ)でっさり(外部パフェ)の開発、デザートアイテムを作る
- ・ サービス…誰でも利用できるポイント制度等

②屋上の有効利用

- ・ 目標…空間を上手く活用する
- ・ 天体観測…人工芝を敷く、天体望遠鏡の設置
- ・ 太陽光発電(ソーラーパネル)…学校の電力を賄い、その余分の電力を地域に提供する

③足湯設置

- ・ 目標…山口の名物を山大にも設置する
- ・ 学内に足湯を永続的に設置する
- ・ 例えば、春は桜が見れる場所、秋は紅葉が見れる場所etc…

④フリーマーケット

- ・ 目標…環境を保全し、人々(特に若者)を呼び込む
- ・ 学生の不要となった春の服や商品を出品する(主に家電や自転車(無鉛鉛蓄電池))
- ・ 都市…農学部が野菜を作り、それを朝、学内で安値で販売する

1

⑤博物館

- ・ 目標…山大を中心に情報を発信する
- ・ 図書館の上に山口の名所をその歴史の変遷と合わせて展示した博物館を増築する

⑥交通整備

- ・ 目標…交通の便を良くし、市内の観光地も周ってもらう
- ・ ツアーバスを出す
- ・ 電車の本数を増やす

⑦広告(ブランド化)・マスコットキャラ

- ・ 目標…山口大学の認知度を上げる
- ・ メディアを使って波及効果を狙う(山大学生一地域住民一全国)
- ・ 山大学生の自転車・車・バイクに宣伝広告を貼り付ける
- ・ マスコットキャラ…名前:やまぐらさん

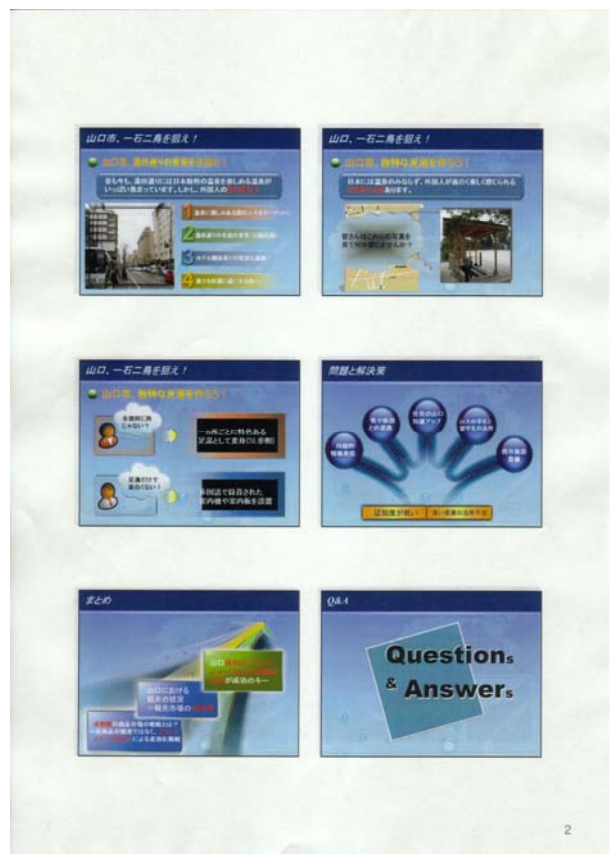
次へのステップとして

- ・ アンケート調査で得た意見を参考に、問題点の改善を進めていく

まとめ

- ・ 定住者…山大学生、旅行、既成資源の再編成＝山口大学
- ・ 山口市の景観を保持しつつ、山口大学に若者を中心とした一般人を招く

2



(ノート例) と (レポート例)

レポート例

Mr. M.

「観光コミュニケーション」
観光社会学科 2年

1. 定住者 対 非定住者
どちらかといえば非定住者

- 学習、感動、異文化体験の楽しさ(自地域との比較、キャンプ→非日常性)
- 移動中・目的地での人との交流
- 非定住者はおもてなしをされる側(気象→しかし問題もある/下)

○ 文化的効果、社会的効果、国際交流による相互理解も期待される

○ 経済的効果、社会的効果、国際交流による相互理解も期待される

× 非定住者のマナーの低下(旅行先でのゴミ、簡便・アメニティ破壊、犯罪、健康被害など or. 因国運動)

× 感化されるだけになるのでは?

2. 旅 対 旅行

- 旅情
- スナップアップでできそうな気がする

3. 新資源開発 対 既成資源の再編成(山口市)

新資源開発: 既成資源でやっていけない(不安)

- 既成資源少なく、交通は自家用車での移動は便利だがそれ以外は×
- 温泉地としての魅力は多少伝わっている感じはある
- 地域への位置づけがあまりないのでは? (実際の施策はホスピタリティに特化(果)アップレポート)

4. 1~3の連携を通してあがる観光コミュニケーション

- 山口市外の観光地を見て、当地の人とコミュニケーション
- 山口市外の観光地を見て、当地の人とコミュニケーション
- 市民同士、観光事業者同士の連携
- 観光客と市・市民のコミュニケーション
- 直接的に
- 宣伝などを媒介として間接的に

レポート例

Mr. M.

「観光コミュニケーション」
観光社会学科 2年

6. (1) 旅行-再開業...

○ (2) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (3) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (4) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (5) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (6) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (7) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (8) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (9) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

○ (10) 土曜に(休日)多い、観光の機会が多い、観光の再開業...

第3節 大学教育機構主催全学FD研修会等への参加状況

平成19年度は下記の大学教育機構主催・共催FD研修会等に参加した。延べ参加者数は15名であった。敬称略。

実施年月日	会場	研修内容	参加者
平成19年4月6日	吉田	聴覚障害学生の授業方法についての研修会	馬田 哲次 武本 ティモシー
平成19年7月31日	吉田	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう	柳澤 旭(パネリスト) 澤田 正 柏木 芳美 土生 英里 石 龍潭 成富 敬
平成19年8月2日	吉田	新規採用教育職員研修	土生 英里
平成19年8月9日	吉田	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう	成富 敬
平成19年9月18日	吉田	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法	中田 範夫 有村 貞則
平成19年9月20日	吉田	脱初心者! MS Office 実践的活用方法	正宗 聡
平成19年9月21日	吉田	パワーポイント教材の作り方	田淵 太一
平成19年12月25日	吉田	情報セキュリティ・情報モラルの教え方	マルク・レー ル

尚、8月9日の「特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう」には、学務係から久保田係長と杉山係員も参加した。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成19年度学生授業評価の実施率は89%であった。学生数が多いことを考慮すると、かなりの実施率であるといえる。経済学部の授業ではゼミ(演習I、演習II、卒業論文演習各4単位、合計12単位)の比重が高い。平成18年度まではゼミは評価の対象外であったが、平成19年度から教員の自己評価を行うこととした。

第 5 節 その他

平成 19 年度山口大学経済学部評価委員会委員

木部 和昭 渋谷 綾子 松井 範惇 三間地 光宏 朝日 幸代
柳澤 旭(委員長) 柏木 芳美(全学 FD 委員。文責)

第 7 章 理学部の FD 活動

平成 19 年 4 月 18 日の第 1 回理学部 FD 委員会において、平成 19 年度の理学部 FD 計画を次のように定めた。

- (1) ピア・レビューの実施：今まで学科単位で行っていたのを学部単位で試行する。
- (2) 全学 FD 研修会への参加。
- (3) 学生授業評価の実施。
- (4) 各学科で問題点、改善点を洗い出し FD 研修、討論等を行う。

以下、これらの実施内容について記述する。

第 1 節 理学部におけるピア・レビュー

本年度はピア・レビュー実施計画の第 4 年度にあたり、各学科、分野ごとでは定着していた実施を学部の公開授業として学部単位で実施した。すべての学科、分野において公開授業は用意されたが、分野内においてほぼ全員の教員が授業実施者、またはレビューアーとして参加している上、多忙で日程が合わないとか、専門分野の差が大きいこともあり、他分野からの参観者は殆どなかった。予想されたことではあったが、希望者を募るのみでは他分野からの参観者の増加は期待できず、学部単位に拡大するには何らかの策が必要のようである。

理学部で学科改組が行われて 2 年目であった今年も、学科による差はあるが、全学科において、講義、演習、実験、実習、セミナーなど種々のピア・レビューが実施された。

1. 数理科学科

(1) 実施科目：数理科学基礎セミナー

日時：クラス 1、2、5、6：2007 年 12 月 10 日（月）7、8 時限

クラス 3、4：2008 年 1 月 9 日（水）7、8 時限

場所：クラス 1：応用数学実験室、 クラス 2：代数実験室、
 クラス 3：解析実験室、 クラス 4：第 14 講義室、
 クラス 5：幾何実験室、 クラス 6：国際地域交流企画室

対象学生：数理科学科 2 年生

担当教員：クラス 1：安藤、 クラス 2：久田見、 クラス 3：菊政、
 クラス 4：宮澤、 クラス 5：幡谷、 クラス 6：廣澤

レビューアー：クラス 1：加藤、 クラス 2：内藤、 クラス 3：中内、
 クラス 4：木内、 クラス 5：吉村、 クラス 6：井上

(2) 授業の目標・概要

[授業の目標]

微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解し、さまざまな概念の運用方法を習得する。それらの概念の理解をもとに、数学や理系分野における様々な問題を解決

できるような力を養う。

[授業の概要]

2週をサイクルとして、1週目に全ての受講生がプリントの問題を解答し、2週目に6つのクラスに所属して、各クラスの担当教員の指導の下でその採点済みの答案を修正する事により、数学の基本を学習する。

(3) レビューアーによる授業評価

レビューアーによる観点別授業評価の結果を、「ほとんどできていない…1」、「ややできていない…2」、「ふつう…3」、「だいたいできている…4」、「じゅうぶんでできている…5」（問6では「できている」を「効果的である」と読み替える）と得点化し、平均をとった。以下の集計結果から知られるように、評価は極めて高いと言える。

問1.「知識・理解」の観点：微分積分学・線形代数学の基礎的・基本的な内容の理解およびその運用の能力を身につけているかどうかを判断するために、プリントの内容が適切なものになっていますか。

評価平均…4.80

問2.「思考・判断」の観点：学生が論理的な思考を身につけ、理解できた部分と出来ていない部分を峻別するよう、指導に注意が払われていますか。

評価平均…4.80

問3.「関心・意欲」の観点：学生が自ら進んで新しい概念を吸収して、それを理解できるまで考え抜く集中力と忍耐力を持つことができるよう指導がなされていますか。

評価平均…4.80点

問4.「技能・表現」の観点：学生が自分の思考過程を正確に人に伝えることができる記述の方法を身につけるような指導が行われていますか。

評価平均…4.60点

問5.「態度」の観点：学生が新しい概念を知り、その概念の新しさ、有用性を認識出来るような指導がされていますか。

評価平均…4.75点

問6. 学生にとって、この授業の授業内容あるいは授業方法は効果的だと思いますか。

評価平均…4.80点

(4) 授業に対する意見・コメント

- 学生の達成状況を確認しながら進行されている。発表においても適切な質問を投げかけ、学生の不明確な点を確認させている。授業中においても、学生とのコミュニケーションが良く図られている。発展的な課題を提示し、学生の興味を引き出している。学生自身からの質問もあり、改善すべき点は特に見あたらない。
- 各問の解答者はくじ引きで選び指名した。10名程度の学生に90分間滞ることなく授業が進められた。この授業では板書をしている学生との対応に終始していたが、最後に質問等を確認した。プリント問題に関する用語や定義等の確認は口頭でのみ与えたので、黒板に書いたほうが理解度が増すと考えられる。90分を通して静穏な環境で授業が進められた。この授業では、微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解・習得し、様々な問題を解決できるような力を養うという授業目的

を達成するための十分な取り組みが行われていた。

- 週により用意される問題の難易は異なるのであろうが、レビューした週は高校レベルの問題も含む、易しい問題が多く、学生の解答、説明はスムーズで、全て理解済みではとの印象を受けた。そのためもあってか、他人が説明しているときに聞かず、他の問題を解いている者が見受けられた。そのような演習問題の週であったが、授業担当者は別解とか関連事項についても解説し、さらに担当者自身で補足問題のプリントも用意して解答させるなどして、学生の理解、関心を深めるよう工夫されていたと感じた。この授業形態では演習問題のレベル、内容により効果が大きく左右されそうであるが、学生の理解度に大きな差があるので問題選択も容易ではなさそう。
- 学生の達成状況を考慮し、発表においても適切な質問を投げかけ、学生の不明確な点を確認させている。

2. 物理・情報科学科

2.1 物理学分野

(1) 授業科目： 物理学実験 III

日時：2008年1月21日（月）5・6・7時限

場所： 機器分析センター2F講習室

対象学生：3年生、自然情報科学科物理コースの必修科目

担当教員：藤澤 健太、藤原 哲也

レビューアー： 繁岡 透、野崎 浩二、輪島 清昭

実施要領：(1) 分野会議（メールによる持ち回り）で実施を決定し、講座全員に出席を依頼した。

(2) 実施直前に、実施場所と実施日を通知し講座全員に出席を依頼した。

(3) プロジェクターを用いた学生による実験の成果発表会。

(4) レビューアーからの授業に対する意見・コメントを収集した。

(2) 授業の目的・内容

この授業は、学生に課題を与え、それに自由に取り組み、実験をして成果を出させるものである。今回は、約半年間にわたって学生がグループに分かれて行ってきた実験テーマ：「誘電体」、「光回折」、「X線回折」、「超伝導」および「電波」の各グループによる成果発表会である。成果をうまくまとめこと、わかりやすく発表すること等、プレゼンテーション能力の向上を目的としたものである。

(3) 授業に対する意見・コメント

学生の発表が主だったこともあり、担当者からもコメントをいただいた。;

- 学生が主体的に参加していたことは認められる。
- 時間の管理がややルーズだったこと（規定の時間を多少超えていた）
- 学生の発表が中心となる内容だったのだから、事前の練習をもっと行うべきであった。
- 事前練習ができていなかったもので、発表の程度が低いものが散見された。
- 実験指導の詳細を拝見していませんが、昨日の発表会での各学生の発表内容

から丁寧な指導がなされていることが窺えましたので、実験の進め方は現行のままでもよいと考えます。改良点というほどのことではありませんが、発表会ではどのグループも実験結果の解釈にやや不十分な点がありましたので、その部分についても（ある程度）時間を割いて指導できる態勢を整えておくことさらによいと思いました。

- 最後に担当者が話された、上手な発表の大切さ等のまとめは、私自身としても大変役に立つものであり、たいへんよかった。これを発表準備の前にあらかじめ学生に聞かせておく方がいいと思います。
- グループによっては明らかに準備不足であると思われる発表もあった。事前のチェックも必要と思われる。
- 自分の学生の時と比較すると、みんなの発表は大変上手である。パワーポイント等のツールの進歩の恩恵もあると思うが、！

2.2 情報科学分野

(1) 実施科目：基礎セミナー

日時：2007年7月24日(火) 1・2時限

場所：理学部14・15番教室、理学部第3共用セミナー室

対象学生：物理・情報科学科1年生

担当教員：山本 隆、末竹 規哲

レビューアー：吉川、内野、西井、川村、松野、浦上、石黒、野崎、藤沢

(2) 授業の目的・内容

[授業目的]

本講義（基礎セミナー）の講義目標は、日本語力（読解力、作文力、論理的な文章力）を養成することである。この日の講義では、4月から行ってきた一連の講義の最終段階として、具体的に設定されたテーマに関して学生各人が小論文を作成し、その文章の添削・推敲を通して、基礎セミナーで目指す上記目標の完成を目指した。

[実施内容]

物理・情報科学科の60人程度の学生を、三つのグループに分け、物理コースの藤沢教官と3人で、作文テーマの説明を行い、次週に各人がそれぞれに割り当てられたテーマに関して小論文を作成した。そして、最終の週に、教官一人当たり20人の学生の論文を添削し、文章の推敲、陥りやすい文章の表現の誤り、などを解説した。

(3) 評価および指摘事項

小論文といっても、20人の文章を丁寧に添削し、誤りを個別に指導することは大変な労力を要する仕事である。前段階の授業において、文章作成の基本的な作法に関してはかなりの学習を積んでいるはずであるが、インターネットからの文章の借用がかなり一般的で、必ずしも自分の思考に基づいた文章を作成しているとは感じられないケースも多く見受けられた。

こういった、単独の授業の場以外でも、出来るだけ多くの機会を見つけて、日本語力や論理的な文章の作成に関してきめ細かい指導が必要であることが、多くの教員の一致した見解であった。

3. 生物・化学科

3.1 生物学分野

(1) 実施科目：生物学野外実習

日時：2007年9月29日、30日

場所：山口県美祢郡美東町秋吉台

対象学生：自然情報科学科情報コース3年生（約40名）

担当教員：松村 澄子、山中 明

レビュアー：村上 柳太郎、原田 由美子

(2) 授業の概略

生物学実習は生物コース3年生を対象とする選択必修科目で、履修上はプログラム演習などと同じ範疇の授業であるが、野外から資料を収集し、また野外の動植物を観察することを目的とする体験型の実習である。

(3) 実施内容

実習のはじめに班分けを行った後、資料収集についてのオリエンテーションを行った。

今回の資料収集は、秋吉台上で、昼間と夜間に活動する動物の音声録音である。授業が終了後、2名のレビュアーが講評を行った。

(4) レビュアーからの指摘

- 秋吉台という静寂な自然環境の中で、普段の生活では気に留めないような虫の声に注意を集中させて音声採集を行う課題は、自然や生物を観る集中力と感性を養うことができるので素晴らしい。
- 実習参加者への十分な指導を行うためのサポート体制をどのように確保するのか？
- 植物の専門家によるガイドがあると、実習内容がさらに充実すると思われる。
- 実習の際に配布される秋吉台の地図が、方向感覚の鈍い人間にはややわかりにくかった。安全の確保のためには、改善が望ましい。
- 音声採集の前に、採集後の分析についての実例を見せておくことによって、学生の実習に対するモチベーションがさらに高まるのではないか。
- 動物の痕跡を探る課題では、実習に先立って、より詳しい動物の紹介がなされるとよいのではないか。実習時間（1泊2日）がやや短いように感じられる。
- 秋芳洞内の観察が加わるとさらに充実したものになりそう。

(5) 今後の改善点のまとめ

- 実習参加者へのサポート体制について、再度、講座への働きかけを行う。
- 実習時間の延長や秋芳洞内見学などは上記同様に講座の理解が得られれば検討したい。
- 植物の指導者を依頼できるかについての検討（予算措置も含め）・交渉を行う。
- 配布資料および、事前のオリエンテーションについて改良を加える。

3.2 化学分野

化学分野の学部（生物・化学科1年生および化学・地球科学科・化学コース2・3年生）で行われる授業科目は、（1）講義形式の科目、（2）演習を含む科目、（3）実験科目、（4）研究室における発表形式の科目、の4種類に分けられる。化学分野では平成17年度より、この4形式についてそれぞれ1科目ずつを選んでピア・レビューを実施し、ほぼ全教員が実施者またはレビューアーとして参加することとしている。それぞれの内容と、レビューアーからの主な意見・コメントを以下に記す。

（1）講義形式の科目

授業科目：有機化学 I

担当教員：石黒 勝也

対象学生：生物・化学科1年生

実施日時：2008年1月25日（金）9・10 時限 16：10～17：40

実施場所：22番講義室

配布物：プリント(12p)・・前回の演習解答、講義資料の抜粋（重要部分を消してあり、講義資料を見て授業中に書き込みをさせる）、期末試験用演習問題

授業内容：環状化合物（教科書第5章）：シクロアルカンのひずみと配座・立体化学

授業概要：

- 前回の演習の解説、および、寄せられた質問等への返答
- 学生はPCを持参し、プリントを参照するとともに、講義資料をHPより閲覧
- 最後に演習（5～10分）を行い、レポート支援システムにて解答を提出

この授業は、生物・化学科の1年生（生物学コース・化学コースに分かれる前）を対象とした共通・必修科目である。生物学コースに進む学生への配慮として、また、各自が購入したPCに慣れることも目的として、プリントを配布し、授業・学習に必要な資料は全てプロジェクターにより提示、また、HPにて公開し、最後の演習はWebから解答を提出させる形式をとっている。

昨年のピア・レビューで指摘された事項や学生からの意見を参考に、今年度は以下の3点について授業方法の改良を行っている。

- 「説明を聞くばかりなので、学生の集中力が続いているかが疑問」という指摘があり、今年度のFD研修で紹介されたLITE(Learning in Teaching)を試行した。これは、授業の途中で、学生を2人1組として、与えたテーマに関して1人の学生がもう1人に説明し、人に教えることで学ぶという手法である。
- 昨年は、演習解答を電子メールにより送信させる方法をとっていたが、最近の迷惑メールの増加により、送信から着信が確認できるまでに、非常に時間がかかるという問題が発生した。そこで今年は、物理・情報学科・情報コースの授業で用いられている「レポート支援システム」を使わせていただき、Webから出席と演習解答を登録させる形とした。着信に時間がかかることがなくなり、学生はこれまでの出席状況や自分の解答を閲覧することができ、非常に有用なシステムと思われる。
- 教科書が改訂され、前の版までは各章の章末に掲載されていた重要語句の一覧とその解説がなくなった。教科書を購入しない生物学コース志望の学生への配慮もあわせ、重要語句と解説を、ホームページおよびプリント（一部穴埋め）にて閲覧・学習ができるようにした。

レビューアー：2名

レビューアーからの意見・コメント：

ちょうど最終回の授業であり、受講生への授業アンケートも行ったので、学生からの感想・指摘についても併せてまとめた。

1. 講義の内容についての指摘

- 頭の中で考えにくい3次元立体構造について、図を効果的に利用しており、学生の理解度が深まったと思う。
- 1回の講義でとりあげる内容としては多すぎたように思われる。そのため、演習を行う時間が不足し、後回し(後でメールで解答)にして帰る学生が何人かいた。

2. 講義の進め方についての指摘

- 最初に学生からの要望(質問)に答えていた。
- 講義導入部において前回のおさらいをしていた。
- 最初に本日の要旨を示し、講義目的を明確にしていた。
- 授業のテンポが速く、講義についていけない学生がいたたように見受けられる。
- 学生からは(時々板書しながら説明してほしい)という要望があった。
- LITEでは、説明役と聞き役としてほとんどの学生が真面目に取り組んでいたが、全くやる気がなく無視していた学生もいた(学生からは、LITEに関しては概ね理解に役だった、楽しかった、という感想が寄せられた)。

3. その他改善を要する点の指摘

- 今回が期末の最後の講義ということもあったが、少し進度が速く感じた。
- プロジェクターに映ったスライドをHPの資料から探すのに時間を取られている学生が見受けられた。すぐに見つけられるような工夫が望まれる。
- 遅刻者が目立った。

(2) 実習・演習形式の科目

授業科目：量子化学及び演習II

担当教員：右田 耕人

対象学生：化学・地球科学科 化学コース3年生

実施日時：2007年6月25日(月) 5・6 時限 12:50~14:20

実施場所：理学部2号館2階・理学部情報計算機実習室1

授業内容：分子の振動と赤外線吸収スペクトル—Gaussian03Wを用いた計算科学

レビューアー：回答：A、B、C、D 未回答：E、F

レビューアーからの意見・コメント

1. 実習・演習内容についての指摘

- 昨年後期の量子化学1からこの量子化学2にかけて理論を履修し、最後に計算プログラムを用いて実際の計算を行うことは、理論から得られる結果を視覚的に捕らえることができ、具体的なイメージをつかむために極めて有効であると思われる。学生達も専門的なソフトウェアを自分で操作することに興味を抱いている様子であった。この演習で用いられたGaussian 03は、世界標準とも言うべき本格的な量子化学計算プログラムである。最先端の研究に広く用いられており、使用した経験だけでも学生にとって有益なものになるであろう。
- 赤外およびラマン吸収は化学物質の構造の決定に欠かせないものであり、その理解は学生にとって必要・不可欠なものである。具体的な化学構造の決定法については有機化学、基礎理論については物理化学、物質の定性・定量分析への応用について

は分析化学で取り上げられているが、量子化学においては赤外およびラマン吸収を理解するための具体的な計算法の説明、演習による計算結果の確認、また、PCグラフィックを用いた視覚化などにより、学生に対してより深い理解と興味を与える事ができる。極力数式を出さずにソフトウェア上で分子の振動に関する理解を深められるように工夫されていると思う。よく練られた内容と思います。

- 簡単な分子について、エネルギー計算→構造最適化→分子軌道表示→電荷分布→振動計算と、一時間ずつテーマを決めて、ひとつひとつ自分で計算して確かめながら内容を進化させる授業となっており、量子化学的手法を理解するのに非常に有効であると思われる。

4. 地球圏システム科学科

当学科においては、各教員の授業改善のための参考とするため、毎年度学生授業評価をもとに最も学生からの評価の高かった教員がピア・レビューを実施している。今年度は下記の授業について行った。

(1) 実施概要

I. 公開授業の実施：2007年11月2日（金）、10時20分～11時50分、理11番教室

授業科目：水理地質学、3年生必修（2単位）、担当：田中和広

レビューアー：君波、加納、三浦、沢井、阿部、福地、鎌田、大和田

II. 授業研究会の実施：

2007年11月2日（金）、18時00～18時30分、地球科学セミナー室

参加者：君波、加納、三浦、沢井、阿部、福地、鎌田、大和田

(2) 実施報告

各々の項目で、評価できることや改善を要する点についての意見が出された。ここにそれらの概要をまとめた。また、レビューアーもこの講義を通じて自らの講義を点検できるよい機会となった。レビューアーから以下のような意見が出され、それに対する改善案が出された。

1. 授業技術について

○説明のやり方、速度および板書の工夫などについては、評価できる。特に、実演を交えた説明は説得力が増す。

○宿題の答えを黒板に書かせたり、学生同士で答え合わせをさせることは、理解を助けたり、自覚を持たせるのに効果的だろう。

2. 授業運営、授業構成について

○難易度については、標準的だろう。後半ややスピードアップしたので、フォローできない箇所もあったのではないか。

3. 授業の目標、達成度、理解度について

○授業の目標や意図については丁寧に伝達している。学生も概ね理解しているようだ

4. 学習活動、学生の参加度に関して

○説明の途中で学生に質問をして緊張感を持たせている。学生も眠る暇がなく、講義を円滑に進める上で効果的だろう。

(3) 講義の改善案

- ・後半が、だらけてしまった反省として、90分の講義の全体のバランスを考えながら、授業を進めるように努力する。
- ・宿題の採点など、不公平感がないように努力する。
- ・今後さらに授業中に使用する概念を理解するための教材開発を行う。
- ・板書を丁寧に行うように努力する。

第2節 大学教育機構主催全学FD研修会への参加状況

平成19年度の大学教育機構主催FD研修会およびFD講演会への理学部からの参加者は29名であったが、その内、4名は2回参加したので延べ参加者は33名である。これは理学部全教員の約4割が参加したことになる。理学部からの参加教員は以下のとおりである。

実施年月日	研修内容	理学部参加教員
平成19年4月2日	TA研修会	今岡 照喜 三浦 保範 永尾 隆志 福地 龍郎 朝日 孝尚 村上 良子 浦上 直人 青島 均
平成19年4月6日	聴覚障害学生の授業方法についての研修会	村上 良子
平成19年7月31日	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう	増本 誠 大和田正明 増山 博行 野崎 浩二 宮川 勇 田頭 昭二 石黒 勝也 右田 耕人 谷 誠治 西井 淳 川村 正樹 岩尾 康宏 川俣 純
平成19年8月9日	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう	小宮 克弘 宮川 勇 石黒 勝也

平成 19 年 9 月 14 日	授業技術研修会－学生を授業に参加させる課題 解決型の授業の方法	金折 裕司 田中 和広 阿部 利弥 野崎 浩二 藤沢 健太
平成 19 年 9 月 18 日	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法	幡谷 泰史
平成 19 年 9 月 20 日	脱初心者！MS Office 実践的活用法	加納 隆
平成 19 年 12 月 25 日	情報セキュリティ・情報モラルの教え方	芦田 正巳

第 3 節 学生授業評価

大学教育センターのデータによる平成 19 年度の理学部学生授業評価実施率では 94.8% となっているが、これには授業評価の対象として適さない科目とか、授業評価実施時期には既に終了していて実施できなかったクォータ授業も含まれていたようである。正確な実施状況を以下に示す。ただし、個別指導科目である特別研究など授業評価の対象として適さない科目とか、学外からの非常勤講師による、その年限りの集中講義は実施対象から除いている。

前期：

実施対象科目数 85

実施科目数 84

後期：

実施対象科目数 99

実施科目数 98

平成 19 年度実施率： 182/184 (98.9%)

第 4 節 その他の F D 活動

各学科においてピア・レビュー以外に、授業改善、教材開発、実験装置の改良、大学院入試改善、学生のケア、学習相談室による学習支援、など教育改善を含めた FD 活動が行われた他、高知大学で開催された「第 1 回理系大学教育に関する研究フォーラム」に理学部から 2 名が参加し、発表・討論を行う等の大学の枠を越えた取り組みもなされた。また、長年使用してきた学生授業評価の質問項目を見直し、改訂した。以下に、それぞれの概要を記す。

1. 数理科学科

(1) 授業改善活動

数理科学は新カリキュラムに移行して 2 年目を迎えた。少人数教育として新しく導

入した「数理科学入門セミナー」（1年次配当）と「数理科学基礎セミナー」（2年次配当）は、集団指導体制を取っているため、担当教員相互の連絡調整はよい授業を実施するための重要な活動である。

① 数理科学入門セミナー

昨年度の授業を反省し、それを今年度の授業にどう活かすかを5名の担当者全員で議論する会合を持った。ピア・レビューや学生の授業評価がおおむね好評であったことから授業方法の大枠は保つことにした。ただし、プリントの問題数が多すぎてゼミ演習で消化しきれなかったり駆け足で進まざるを得なかったりした点を踏まえ、問題を厳選することにした。

② 数理科学基礎セミナー

今年度から新しく始まる授業のため、担当者は授業の進め方、プリント問題作成方針、クラス編成方針、成績評価方法について議論する会合を複数回開いた。もちろん、メールによるやりとりも頻繁に行って議論を深めた。さらに、今後の授業改善の資料にするため、ピア・レビュー・シートを作成し、学部内ピア・レビューを実施したことは前述の通りである。

（2）教材開発

数理科学では、従来から、演習科目はもとより講義科目においてもプリントなど多数の補助教材が担当教員により作成されてきた。とくに、新カリキュラムに導入された「数理科学入門セミナー」と「数理科学基礎セミナー」は、他大学に例を見ない科目なので、すべての教材（プリント問題と解答例）は担当教員により開発された。

（3）学生ケア体制との連携

「数理科学入門セミナー」において、少人数教育の特質を活かしたまったく新しい試みとして、学期半ばの一コマを個人面談の時間とした。授業との関連で言えば教員と学生との間の垣根を低くすることにより授業をより活気のあるものにするのがねらいであるが、ケアの必要な学生の早期発見が隠されたねらいである。

2. 物理・情報科学科

2.1 物理学分野

（1）物理学実験Ⅲ 実験装置改良

物理学実験Ⅲの実験テーマの一つ「超伝導」では、高温超伝導体である $\text{YBa}_2\text{Cu}_3\text{O}_7$ という物質を合成し、その電気抵抗を測定する事により、ある臨界温度以下で電気抵抗が消失する興味深い物性現象である超伝導を観察し、超伝導状態における物理を実験により学ぶ。本年度は、これまでの、パソコンのCPUのヒートシンクで間に合わせ的に作製した電気抵抗測定用プローブでの測定をやめ、低温での熱伝導に優れた銅製のサンプルホルダーを有した、電気抵抗測定に最適化された本格的なプローブを設計から行い、より超伝導現象を詳細に観察できるように改善した。

3. 生物・化学科

3.1 生物学分野

学生のケアに関する意見交換

年に7回前後開催される分野会議（講座会議）の時間を利用して、授業の受講状況や研究室配属後の研究意欲に懸念が感じられる事例を教員が紹介し、他の教員が把握している事実やこれまでの経験を紹介し、対応策について意見交換を行った。教員が問題を1人で抱えて問題が深刻化することを未然に防ぎ、適切な対処ができる可能性が高まる効果があったと考えられ、今後も継続していきたい。

3.2 化学分野

「卒論配属と大学院入試の改善」について

平成19年2月13日に化学教室FD研修会として、4年生の研究室配属と大学院入試に関する議論を行った。化学分野の大学院は複雑であり、教員および学生は理工学研究科と医学系研究科の2つに属している。4年生は理学部化学・地球化学科（H21年度からは生物・化学科）の学生となる。一般に4年での卒論研究が修士論文に引き継がれる事が多く、4年での研究室配属が進学する大学院の決定に影響する。そのため従来の研究室配属方式の見直しを行った。配属には下記の4つの方法が考えられる。

- 1) くじ引き方式
- 2) 成績による振り分け
- 3) 学生の希望による自主的配属（従来方式）
- 4) 1と3、あるいは2と3による配属

1は議論の対象とならず、2の成績重視は過去の学生の努力の評価であり、3の希望による配属方式は将来への意欲を評価するものである。従来の学生の希望による配属は特定の研究室への学生の偏りが大きかった。化学系の卒論研究や大学院での研究には危険物や壊れやすい器具・装置を扱うため空間的なゆとりが必要である。化学教室として利用できる面積は不足しており、この状況での学生の偏在は危険と研究環境の悪化につながる。従って、今後3の従来方式を改良して4の方式で学生の研究環境を整えることとした。

また、2つの研究科への進学に偏りと不公平がでないように大学院の入試科目と方法について今後の継続課題とした。

4. 地球圏システム科学科

当学科及び理工学研究科地球科学分野（合わせて地球科学教室とする）においては、恒常的に教育改善検討WGが組織されており、ピア・レビューの実施にあたりとともに、教育改善の取り組みを行っている。本年度は、FD活動の重点項目として(1)ピア・レビューの実施をあげており、また例年と同様、(2)FD研修会への参加並びに教室独自のFD研修、(3)学生院生授業評価の実施とその活用、などを行っている。またこれらのほかに関連事項として、来年度の共通教育カリキュラムの大幅改定にむけて、教室会議において数度にわたり、共通教育の在り方について議論を行った。さらに教室FD委員(学科長)および将来構想検討WGを中心に、学部および大学院の教育目標およびアドミッションポリシーについての議論を行い、次期中期計画に関する議論を進めている。

○ ピア・レビューの実施

当学科においては、各教員の授業改善のための参考とするため、毎年度学生授業評価をもとに最も学生からの評価の高かった教員がピア・レビューを実施している。

○ FD 研修会への参加

全学的に実施された FD 研修会への参加状況は、以下のとおりである。

○授業技術研修会（阿部利弥、金折裕司、田中和広）、○基礎セミナーの展開方法(大和田正明)、○脱初心者 MS Office(加納 隆)。

また教室独自の取り組みとして、2007年7月18日第4回教室会議の中で、教員の出席者全員参加のもと、FD 研修として「卒業生アンケートを考える」を行った。これは学科長会議において学部長から指摘のあった事項で、卒業生のアンケートの中に、科目選択(必修が多すぎる)、教員との人間的関係、大学院の授業と野外調査(もっと野外に出たい)などの不満があったことを受けて討論を行ったものである。特に結論の出ることではないが、卒業生の中に「そのように感じる者がいる」という事実を認識して今後にあたることとした。

○ 学生及び大学院生による授業評価、その他

例年にならって、学部及び修士課程のほぼ全講義についての授業評価を実施した。評価項目等は理学部及び理工学研究科に同じである。また評価結果により今年度のベストティーチャー賞に田中和広を選出し、ピア・レビューを行った。また毎年、毎週水曜日 15～17時に「学習のテラス」を開設し、修士院生を相談員として、学部学生の学習支援や諸事相談にあたっている。

5. 大学の枠を越えた取り組み

2007年12月15日(土)～16日(日)に高知大学で「第1回理系大学教育に関する研究フォーラム」が開催された。中四国6国立大学理学部における理系教育の取り組みがあわせて9件紹介され、活発な意見交換や討論が行われた。

山口大学からは、数理科学科の増本教授と生物・化学科の村上教授が参加し、それぞれ、「数理科学学習相談室『茗茶房』」、「学科改組組織で経験した教育上の問題」という演題で発表した。増本教授は、2002年に開設された数理科学学習相談室について、その動機、実績、効果と問題点などを、具体的な資料に基づいて発表した。同様の試みは他大学でも計画中であつたりすでに実施していたりしていたが、何よりも相談室に訪れる学生数の多さに驚きの声上がり、その秘密を知りたがっていた。

6. 学生授業評価質問項目の見直し

全学 FD 委員会において見直しを検討していた共通教育学生授業評価の質問項目が承認されたのを受け、理学部・理工学研究科用の質問項目も理学部 FD 委員会で検討し、改訂した。毎学期末ごとの学生負担と実施効果の対費用効果を考慮して、質問項目数を従来 17であったのを 11 に減らす他、質問項目も改めた。新しい質問紙を掲載しておく。

理学部・理工学研究科 学生授業評価

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学部・研究科】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部 8. 人文科学研究科 9. 教育学研究科 10. 経済学研究科 11. 医学系研究科(M)
12. 医学系研究科(D) 13. 理工学研究科(M) 14. 理工学研究科(D) 15. 農学研究科
16. 東アジア研究科 17. 連合獣医学研究科 18. 連合農学研究科 19. 技術経営研究科

【学科・課程・専攻】

理学部(新課程) 1. 数理科学科 2. 物理・情報科学科 3. 生物・化学科 4. 地球圏システム科学科

理学部(旧課程) 1. 数理科学科 2. 自然情報科学科 3. 化学・地球科学科

理工学研究科(M 新課程)

1. 数理科学専攻
2. 物理・情報科学専攻
3. 地球科学専攻
4. 機械工学専攻
5. 社会建設工学専攻
6. 物質化学専攻
7. 電子デバイス工学専攻
8. 電子情報システム工学専攻
9. 感性デザイン工学専攻
10. 環境共生系専攻
11. 応用分子生命科学系専攻

理工学研究科(M 旧課程)

1. 機械工学専攻
2. 応用化学工学専攻
3. 社会建設工学専攻
4. 電気電子工学専攻
5. 知能情報システム工学専攻
6. 機能材料工学専攻
7. 感性デザイン工学専攻
8. 環境共生工学専攻
9. 数理科学専攻
10. 自然情報科学専攻
11. 化学・地球科学専攻

【 質 問 I 】

1) あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)

1. 90%以上 (14回以上)
2. 80~90% (12~13回)
3. 60~80% (9~11回)
4. 40~60% (6~8回)
5. 40%未満 (6回未満)

2) あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上
2. 2時間程度
3. 1時間程度
4. 30分~50分程度
5. 30分未満

3) あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う
2. ややそう思う
3. どちらとも言えない
4. あまりそう思わない
5. そう思わない
6. 答えられない

4) あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

1. そう思う
2. ややそう思う
3. どちらとも言えない
4. あまりそう思わない
5. そう思わない

5) 教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

6) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

7) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6. この授業は該当しない

8) コンピュータ、ビデオ、OHPの使用や板書は効果的になされましたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6. この授業は該当しない

9) 学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

10) この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

11) この授業を総合評価してください。

1. 非常に良い 2. 良い 3. どちらとも言えない 4. 悪い 5. 非常に悪い

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください (回答は下記に記入のこと)

平成19年度 理学部FD委員会委員

数理科学科	増本 誠	井上 透 (委員長)
物理・情報科学科	繁岡 透	吉川 学
生物・化学科	村上 柳太郎	田頭 昭二
地球圏システム科学科	加納 隆	

第 8 章 医学部の F D 活動

各学部の FD 活動報告は、本来、学部単位で取りまとめるべきであるが、医学科と保健学科では、医療人を養成するという教育目的は一致するものの、職種の違いに起因してカリキュラムと授業形態が根本的に異なり、必然的に教員に要求される技能も異なっている。さらに、FD 活動に関する歴史的経緯も異なることから、活動は医学科と保健学科で、それぞれ独立して行われている。

そのため、本報告においても、それぞれの活動を別個に記述する。

第 1 節 医学科

(1) 活動概要

医学科では、社会からの医学教育への強い期待に応え、また全国的に急ピッチで進行する医学教育改革の動きの中で主導的な役割を果たすため、全学規模での FD 活動が本格的に開始される以前の平成 9 (1997) 年度から、年 1, 2 回の 1 泊 2 日のワークショップを中心として独自の FD 活動を展開してきた。

継続的に展開してきた FD 活動は、平成 13 (2001) 年度以降、毎年、着実かつ具体的な教育改善に結実してきた (例：コース・ユニット制へのカリキュラムの根本的改変、展開医学系テュートリアルの実施、多肢選択型客観問題による統一試験の実施等)。

他方で、平成 15 年度以降は、ワークショップの必要回数が増大する一方、予算的制約もあり、1 泊 2 日型から 1 日で完結するワークショップに活動の中心が移行しつつある。

平成 19 年度も、基本的にはこの流れの延長線上に、教育改善上の具体的な個別テーマに基づいた 1 日完結型のワークショップを中心に活動を展開したが、これに加え山口大学の中期計画・中期目標に掲げられたピア・レビュー (公開授業&授業研究会) にも始めて本格的に取り組んだ。

(2) 具体的活動

1) ワークショップ (1 日完結型)

a. 「多肢選択型客観問題作成のためのワークショップ」

5 月 12 日 (土) 場所：医学部騒人会館および新テュートリアル室

※ 全国の共用試験 CBT 他、統一試験 (基盤系統一試験&卒業試験) で使用される、多肢選択型客観問題の作成技法を習得するためのワークショップ。

※ 参加者が事前に作成した問題を持ち寄り、ブラッシュアップを主体に実施した。

b. 「テュートリアル・ワークショップ」

1 月 12 日 (土) 場所：医学部第 1 講義室&テュートリアル室

※ 年間 11 ユニットにわたって実施される「展開医学系テュートリアル」のあり方に関するディスカッションと、実際に各ユニットで使用するシナリオの概要

の決定。

※ なお、実際に、実施するまでには、各ユニットから提出された原稿を約 10 名の WG 委員が集まって検討し、さらにメーリングリストを通じてやり取りすることで推敲を続けてから使用に供した。

2) 講習会

a. 「チューター講習会」

4月9日(月)・4月10日(火)(2回とも同一内容)

※ テュートリアル実施のための展開系教員を対象とした講習会。

b. 「多肢選択型客観問題作成講習会」

4月27日(金)「テュートリアル・ワークショップ」

※全国の共用試験 CBT 他、統一試験(基盤系統一試験&卒業試験)で使用される、多肢選択型客観問題の作成方法の講習会

3) 教育評価活動

平成 13(2001)年度から実施している「振り返り評価」(ユニット終了後、マークシートで実施)と平成 13(2002)年度から実施している「進行評価」(1回1回の講義終了後、オンラインで実施)を 19年度も引き続き実施した。

なお、「振り返り評価」に関しては、全学の統一様式との摺り合わせの問題が浮上し、大学教育センターとの協議の結果、19年度から全学フォーマットに合わせたデータを提供することで合意に達した。

4) ピア・レビュー

3)で言及した教育評価活動における優秀教員により、年間を通じて計 9 回の公開授業を実施した。

開催日時と担当教員等は下記の通りである。

6月15日(金)7・8時限	小林 誠(循環器系)
6月18日(月)3・4時限	三浦俊郎(循環器系)
7月11日(水)3・4時限	徳田信子(生殖器系)
9月6日(木)5・6時限	藏満保宏(血液・免疫系)
9月20日(木)3・4時限	中田雅彦(胎生・周産期医)
10月10日(水)1・2時限	中井 彰(分子細胞生物学)
10月10日(水)3・4時限	中井 彰(分子細胞生物学)
11月20日(火)1・2時限	鶴田良介(救急医学)
2月14日(木)1・2時限	良沢昭銘(消化器病態系)

第2節 保健学科

(1) 活動概要

平成20年度における全学中期目標の達成を目指すこと、また大学院／学部教育における今までの取り組みの展開および急務な課題を考え合わせ、保健学科独自のものとして以下の内容を企画し実施した。

- 1) アカデミック・ハラスメント防止について
- 2) 大学院生／学部学生による授業評価・教員自己評価のあり方とその徹底について
- 3) 学部授業ピア・レビュー
- 4) アラカルト方式研修会への参加：学生参加型授業の進め方など。

その結果、とくに3)ピア・レビューでは、実施後のアンケート調査からも、教員個人／組織全体においてFDへの関心が高く、教育改善における重要性の認識が明確になったといえる。また、今年度はピア・レビュー講師教員を学生の授業評価の高い教員を選び、自分の授業に直ぐ還元できる形にした。また、教員の今後のFD活動については、学生授業評価・教員自己評価の高い実施率、および、ピア・レビューの定着により、さらにその活動を促進していきたい。

本稿では、今年度保健学科における取り組みの内容を説明し、FD企画の実施実績、及び、企画実施に関するアンケート調査結果を示したのち、今後の課題を述べる。

(2) 実施内容

1) 教育、研究および管理における教員の資質向上について

今年は、大学院後期課程設置後の基盤作りの時期でも有り、また20年度における中期目標達成に向けて、組織力向上における人材育成の必要性にも注目し、活動全体を通して時代の変化に対応できる人材育成の啓発などに取り組んだ。自己改革をめざすよう啓発に努め、その後も教員がそれぞれ自分に合った自己改革を進め、教育・研究・管理などの改善に積極的に取り組み、自主・自立への認識を高める啓発を継続してきた。また、教育環境の基盤としてアカデミック・ハラスメント防止にも力を入れた。これらにより、組織改革が順調に進むとともに、整った教員・学生の関係性の中での教育の質向上が促進して、学生により一層の感動を与え、教育の改善につながっていると考えている。

2) 学生による授業評価実施率向上について

授業評価等の保健学科独自の授業支援システムを用いた実施、教育活動評価及び授業改善の企画等をより具体的に、実践的に行うための大学教育の企画、実施を推進してきた。さらに、このシステムにより、現在では保健学域・保健学科学生が授業評価を自身のパソコンから、毎回あるいは期間振り返りで実施できること、またきめ細かい学生からの意見の収集や、双方向教育として課題配信と個別教授など、教育の改善・向上につながっている。

3) ピア・レビューについて

山口大学の中期計画に示されてある、「授業改善のためのピア・レビューを段階的に進め、全学的に実施する」ことに基づき、ピア・レビューを実施することが義務づけられている。まず、平成16年度より、数回にわたる研修により、ピア・レビューの進め方を学びながら準備を始め、昨年度から公開授業および授業研究会の実施を開始した。今年度はその流れを継承し、教員の公開授業を実施した。この方法は、同一学科内の教員同士がお互いの授業を見学し合うことで、授業の目的や内容を理解し学びあうことを目指すもので、参加者に大きな反響が得られた。また、講師をされた教員には参加教員が実施した授業観察カードを手渡した。今後もさらに継続させて進めてゆく。

4) 全学アラカルト方式FD研修会への参加

全学アラカルト方式の研修では、ほぼ全員の教員がどれかの企画に参加した。

全学FD研修の主な内容は

- 1) [学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう]
- 2) 「最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法」
- 3) 授業技術研究会—学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法—
- 4) [情報セキュリティ・情報モラルの考え方]

などを具体的に学び、その認識を深めた。各専攻科における教員の能力開発に関するさまざまな課題に関しても継続的にその改善に取り組んでいる。

全学のFD研修1)・4)が保健学科の夏と3月の引越し日にかかり、急遽出席をとりやめた出席予定者がいた。また、2)・3)が実施場所が本年度は工学部になったことから、急遽出席をとりやめた出席予定者がいた。

研修開催場所が他学部になっても、研修に出向けるようになることが今後の課題であろう。

(3) 保健学科独自の研修会などの企画・実施実績

第1回 平成19年9月10日「アカデミック・ハラスメントの防止について」

保健学科教職員における本課題に関する啓蒙を押し進めるため、前イーコール・パートナーシップ委員 谷田 憲俊教授（医学部）を講師に迎え、研修を行った。教職員間、教員—学生間における互いの立場や人権を尊重し、健全な人間関係のあり方やその構築を図るためのノウハウを学んだ。

(40名：78%参加)

第2回 平成20年1月23日 「公開授業」の実施について

公開授業の実施については、山口大学中期計画に「授業改善のためのピア・レビューを段階的に進め、全学的に実施する」とあり、全学FD委員会から各学部での取り組みが求められている。平成20年度に中期計画・中期目標の内容を満たせるように、保健学科FD委員会で決定され実施したものである。授業技術や授業内容に関する改善方策を、学科単位で開かれる授業公開や授業研究会を中心とするピア・レビューで解決し実質的な授業改善につなげていくことが主旨である。

今回は、検査技術科学専攻「免疫学」；日野啓介教授担当、において、学生参加型授業として公開された。(39名：76%参加)

公開授業の資料：

授業研究会：「授業観察カード」

授 業 名（ 免疫学 ）

平成 20 年 1 月 23 日実施

授 業 者（ 日野 啓輔 教授 ）

観察者 所属・氏名（ ）

観察者の観点	参考になった点	疑問や課題が残った点
(1)発表者・参加者への演習問題、課題の提示が適切か。		
(2)学生が積極的に、授業に参加しているか(質疑・応答、思考努力が見られるか)。		
(3)教員による質疑、補足説明が適切になされたか。		
(4)AV 機器を適切に利用しているか。		
(5)学生にとって、興味を持てる内容となっているか。		
(6)授業の総括を適切に行い、一定の教育効果が得られたか。		

(4) 組織的ポートフォリオ作成

保健学科看護学専攻では大学として学生の看護実践能力を向上させるために、看護経験一覧表検討委員会を結成し、3年前に全国に先駆けて作成、使用し始めたポートフォリオ(看護経験一覧表)の検討を行うと共に改訂版を作成した。この看護経験一覧表は2年生から4年生まで、継続して使用している。

平成18年1月から卒業する全学生を対象に、その学生達が用いていた看護経験一覧表111項目の分析ならびに妥当性の検証、新人看護職員看護技術到達目標(厚生労働省)との比較検討、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標(日本看護系大学)」との比較検討、学生アンケートの分析等を行い、ポートフォリオを改訂した。平成19年度の2年生は9月の実習から新しいものを用いている。なお、この看護経験一覧表は、この学生達が、4年を卒業し、就職後に学生と就職先の卒業生担当指導者に対して事後評価を行う予定である。

また、組織として、レベルを保つため、領域間で押さえる部分の調整、実習施設における教育の質保証にも使用している。また、ポートフォリオ作成作業に連動して、実習評価・実習経験一覧のウェブ入力に伴うシステムの改善などもあわせて行った。

(5) 全学学生授業評価表の改善についてのアンケート調査

保健学科としての意見を集約するため、保健学科教員に対して、アンケート調査を実施した。アンケートによって寄せられた意見は、集約し、保健学科の意見として、本部に提出した。アンケートに対しては、教員から活発に意見が寄せられた。

(6) 今後の課題について

最近5年間における教員の能力開発についての取り組みから、1)教員の自己改革など資質向上、2)学生授業評価及び教員授業評価の実施とその活用、3)メディア利用の向上、さらには、4)ピア・レビュー・授業研究会の企画・実施による組織および個人レベルでの教員の能力開発など、着実に進んだと思われる。このことは、アンケート調査の結果にも反映されている。しかし、未だ課題が山積しているのも事実である。今後、以下のような課題に重点を置き、企画・実施し、さらにその解決を目指したい。

1)「自己改革などさらなる教員の資質向上」を計る

FD活動により、学生の授業に対するハード・ソフト両面による授業評価の満足度が年次的に向上し、独法化後の教育・研究活動における教員の自立に重要な意義があったと考える。しかし、社会の構造的、質的改革は益々加速されており、その中で大学の社会に果たす役割は非常に大きいと考えられ、さらなる自己改革により外部資金獲得による経済的基盤の安定化を計るとともに、柔軟で建設的な組織内連携・融和の促進によって、さらなる社会貢献をめざすことが必要であろう。

2)「学生による授業評価及び教員授業評価」の実施率向上とその活用を計る

昨年度の、学生による授業評価入力率は極めて高い。今後とも、教員が自らの教育改善のために客観的評価に注視し、教育改善をめざすことが必要であろう。

3)「教育メディア機器」の適切な教育効果が得られる利用にする

授業形態において、年次的にパワーポイントによる講義が増加してきたが、一方では、

従来の板書書きによる教員の熱意や個性の伝達による人間教育による効果が見直されている。さらに、最近の学生のあらゆる変容、つまりコミュニケーション不足、個性の低下、論理的思考のための連結式発想の不足など、高等教育を教授する上でパワーポイントによる講義が問題となっている。これらを考慮し、学生参加型授業や、チュートリアル型授業等、個別指導やアイコンタクトによる効果などを期待した授業形態をバランス良くよく取り入れることが重要であろう。

4)「ピア・レビュー」と「授業研究会」を定着させる

昨年度から開始した教育改善における基幹課題とされる「ピア・レビュー」を企画・実施した。経験や自分本位の知識伝授だけではなく、「学生にとってわかりやすい授業」、「如何に分らせるか」が重要と考えられた。今後、より多くの教員が互いに公開授業を実施し、さらに授業の改善を計りたい。

その他にも、「学生の変容（ゆとり教育後、資質変化など）にも、対策を講じ、如何に教育の効率化、個別指導の徹底、自立に向けた指導を如何に行うかが課題であろう。また、これらは学生の社会へ向けての自立を如何に促せられるか、「全入学時代」の学生の個別指導による自立などの取り組みは、キャリアデザインにも深く関連し、就職率の安定や国家試験合格率保証へ繋がる重要な課題と考えている。

第9章 工学部のFD活動

はじめに

工学部ではFD活動として以下のものに継続的に取り組んでおり、本年度も見直しを含め引き続き継続的な活動を行った。

1. 公開授業
2. 授業評価表彰
3. 全学FD研修会への参加

以下、本年度の活動をまとめる。

第1節 公開授業

工学部では毎年度前期と後期に各学科2科目を選び、それを公開授業として一般教員の授業参観を進めている。本年度も前後期それぞれについて行い、一般教員に参加してもらった。本年度公開した授業について以下の表にまとめた。

平成19年度(前期)公開授業一覧

学 科	授業科目名	授業実施者		実 施 日
		職	氏 名	月 日
機械工学科	流体工学Ⅱ	講 師	亀田 孝嗣	6月27日(水)
機械工学科	流体工学Ⅱ	講 師	亀田 孝嗣	6月29日(金)
機械工学科	材料力学Ⅰ	講 師	木下 勝之	6月28日(木)
機械工学科	材料力学Ⅰ	講 師	木下 勝之	7月 5日(木)
社会建設工学科	土質力学Ⅰ	教 授	松田 博	7月13日(金)
社会建設工学科	土質力学Ⅰ	教 授	松田 博	7月20日(金)
社会建設工学科	土木施工法	准教授	中田 幸男	7月13日(金)
社会建設工学科	土木施工法	准教授	中田 幸男	7月20日(金)
応用化学科	微生物学	教 授	赤田 倫治	7月12日(木)
応用化学科	微生物学	教 授	赤田 倫治	7月19日(木)
応用化学科	分析化学	准教授	吉本 信子	6月26日(火)
応用化学科	分析化学	准教授	吉本 信子	7月 3日(火)
電気電子工学科	電磁気学Ⅱ	准教授	原田 直幸	7月 3日(火)
電気電子工学科	電磁気学Ⅱ	准教授	原田 直幸	7月10日(火)
電気電子工学科	情報処理及び演習	准教授	若佐 裕治	6月25日(月)
電気電子工学科	情報処理及び演習	准教授	若佐 裕治	7月 2日(月)
知能情報工学科	システム理論	教 授	石川 昌明	6月25日(月)

知能情報工学科	システム理論	教授	石川 昌明	7月 2日(月)
知能情報工学科	コンピュータグラフィックス	准教授	平林 晃	7月 4日(水)
知能情報工学科	コンピュータグラフィックス	准教授	平林 晃	7月11日(水)
感性デザイン工学科	空間デザイン学	教授	内田 文雄	7月 5日(木)
感性デザイン工学科	情報デザイン実習 I	講師	木下 武志	7月17日(火)
工学基礎教育	応用解析II	准教授	西山 高弘	6月29日(金)
工学基礎教育	応用解析II	准教授	西山 高弘	7月 6日(金)
機能材料工学科	高分子材料化学	教授	喜多 英敏	6月28日(木)
機能材料工学科	高分子材料化学	教授	喜多 英敏	7月 5日(木)
機能材料工学科	有機量子化学 I	教授	笠谷 和男	7月13日(金)

平成19年度(後期)公開授業一覧

学 科	授 業 科 目 名	授 業 実 施 者		実 施 日
		職	氏 名	月 日
機 械 工 学 科	材料力学Ⅱ	准教授	森 浩二	11月12日(月)
機 械 工 学 科	材料力学Ⅱ	准教授	森 浩二	11月19日(月)
機 械 工 学 科	基礎制御工学	准教授	藤井 文武	11月14日(水)
機 械 工 学 科	基礎制御工学	准教授	藤井 文武	11月28日(水)
社会建設工学科	土木振動学	教授	山本 哲朗	11月28日(水)
社会建設工学科	土木振動学	教授	山本 哲朗	12月 5日(水)
社会建設工学科	衛生工学Ⅱ	教授	関根 雅彦	11月13日(火)
社会建設工学科	衛生工学Ⅱ	教授	関根 雅彦	12月 4日(火)
応 用 化 学 科	機能高分子化学	教授	堤 宏守	11月16日(金)
応 用 化 学 科	機能高分子化学	教授	堤 宏守	11月30日(金)
応 用 化 学 科	遺伝子工学	教授	赤田 倫治	11月14日(水)
応 用 化 学 科	遺伝子工学	教授	赤田 倫治	11月21日(水)
電気電子工学科	パワーエレクトロニクス	教授	田中 俊彦	11月30日(金)
電気電子工学科	パワーエレクトロニクス	教授	田中 俊彦	12月 7日(金)
電気電子工学科	アナログ回路	准教授	浅田 裕法	11月30日(金)
電気電子工学科	アナログ回路	准教授	浅田 裕法	12月14日(金)
知能情報工学科	数値計算	教授	中村 秀明	11月13日(火)
知能情報工学科	数値計算	教授	中村 秀明	12月 4日(火)
知能情報工学科	言語処理系	教授	田中 稔	11月16日(金)

知能情報工学科	言語処理系	教授	田中 稔	11月30日(金)
機能材料工学科	電子材料物理学 III	教授	諸橋 信一	12月 5日(水)
機能材料工学科	材料物理化学 II	准教授	酒多 喜久	12月 5日(水)
感性デザイン工学科	構造基礎力学 II・同演習	教授	稲井 栄一	11月12日(月)
感性デザイン工学科	ニューロコンピューティング	准教授	守田 了	11月19日(月)
感性デザイン工学科	ニューロコンピューティング	准教授	守田 了	11月26日(月)
工学基礎教育	材料設計シミュレーション	准教授	仙田 康浩	11月14日(水)
工学基礎教育	材料設計シミュレーション	准教授	仙田 康浩	11月21日(水)

これら前後期で 54 回（前期 27 回・後期 27 回）の公開授業を実施したところ、参加者は前期 21 名、後期 42 名、合計 63 名の参加があった。これは授業参観表提出者の人数であり、実際は多少多いと思われる。この人数は工学部の教員数の 32% に当たり、約 3 割の教員が授業参観に参加したことになる。しかし、工学部全教員に年 1 度の授業参観を目標に掲げているが、この数値はいささか目標達成までには程遠い。一昨年度からひとつの授業あたり公開可能な時間を増やしてなるべく参観しやすい体制を作っているが、教職員が超多忙なためと考えられる。今後、多忙な教員のニーズに合わせた工夫が必要と考えられる。

公開授業では授業参観した教員から感想や指摘などをレポートしてもらうことにしている。原文通り以下に列記する。

● 優れていると思われる点

説 明

- ・難しくなりがちである数式の説明を、極力、少なくして講義を行っていた。説明に際し、学生に考える時間を充分与えていた。
- ・多くを語らず、説明がまとまっているため、わかりやすいと思われる。
- ・話す速度が適度で聞き取りやすい。
- ・C11 のような大教室でありながら、マイクを使用せずに最後まではっきり聞き取れる大きく明瞭な声で講義がなされていた。大人数であるにもかかわらず、学生のおしゃべりがなかった。
- ・熱力学の微分式を用いる難しい内容ではあるが、導かれた式の物理的意味をわかりやすく説明していた。
- ・C11 教室は大きな教室であるが、その隅々にまで良く聞こえる大きな声で話しをされていた。
- ・声がよく通り、聞き取りやすい。
- ・説明がゆっくり丁寧で、理解しやすい。
- ・教室の端まで声がよく届き、聞き取りやすい。
- ・声が大きくて聞き取りやすかったです。説明も明快でした。
- ・話はゆっくりで理解しやすいと思います。
- ・話し方が丁寧であった。
- ・ポイントがわかりやすかった。
- ・声が十分大きい。
- ・教室の後ろからでも十分聞こえるよう、分かり易い口調で話されていた。

板 書

- ・重要な項目は、整理してカラー記述するなど板書が綺麗であるため、学生は要点の理解が容易になると思われる。
- ・黒板の文字が大きくてみやすい点。
- ・授業は黒板に板書しながら説明することで進められたが、板書も説明もゆっくりであり、また、適度に間が取られ、学生は理解しながら書き写すことができていると思われる。板書の文字も大きく、うしろの席から概ね見ることができた。これにより、昼食後すぐの授業であるにも係わらず、居眠りをしている学生はほとんどいなかった。
- ・黒板の字も大きくて良かったです。
- ・板書が丁寧である。
- ・板書は整然としている。教科書のページ数まで分かりやすく書いている。
- ・板書の字が大きくて分かりやすい。ノートが取りやすい。
- ・チョーク色の使い分けにより、重要なポイントを強調することができた。
- ・重要な計算を板書で強調する。板書の字が大きくて分かりやすい。

資 料

- ・PPT資料が丁寧。
- ・PPT（液晶プロジェクター、スクリーン）資料を配布して、聞き漏れや復習する際に役立つと思われる。

進め方と工夫

- ・授業開始時に、当日の講義内容を含む課題プリントを配布し、少し考えさせて問題を認識させたうえで授業を行っていること。また、その解答中常に質問を促している点。
- ・ビデオなどを用いて視覚的にわかりやすく説明している点。
- ・複雑な処理を順を追って開設しているところ。
- ・クラシカルなタイプの授業ですが、丁寧に板書して解説しています。学生側に集中を要求する雰囲気があってよいと思いました。
- ・パワーポイントを使用し、資料も配付されての講義で、ゆっくりと話（講義）されていたので、とてもわかりやすかったと思います。
- ・最初は、こんなにゆっくりでこの内容を全部お話しできるのかなと思いました。配布資料を2回に分けられたのは、授業の進み具合で調節されているのでしょうか。
- ・身近な問題から講義の対象へと誘導することで、受講生の興味の誘導がうまくなされている。
- ・講義内容の背景等に関する話題を全講義時間にわたって多く取り入れることで、講義に対する受講生の関心をうまくひきつけている。
- ・授業開始直後に復習のための小テストを実施している。
- ・配布資料の一部を中抜きにして板書させることで、学生の集中力を切らせないよう工夫している。
- ・講義するだけでなく、実務的な計算を実際に行なわせることで、内容を確実に習得させるよう工夫している。
- ・前回の授業の復習を丁寧に行っていた。PowerPointとWhiteboardを併用して基本項目、追加情報などを効果的に呈示していた。
- ・PowerPoint上に示された数式を書き取る時間を十分に与えている。

- ・今回の講義にはなかったが、今日の講義内容を体感するコンピュータ・シミュレーションを行うようである。内容を把握するためには効果的であろう。
- ・授業内に課題を課しておられるところ。
- ・ノートを取りやすくさせるため、板書を写させてから解説する工夫がされている。
- ・メモを取りやすくするために、事前に用意した資料を配布している。
- ・時折、質問することにより学生の集中力を保持している。
- ・授業の冒頭に、授業内容のアウトラインを明確（明示）している点。
- ・前回授業の復習をしながら、授業を進めている点。
- ・何度か学生に問いかけることで注意を促す工夫もされていた。
- ・利用されているB22教室にはマイク設備が無いので、自分で卓上スピーカーとヘッドホンマイクを持参し教室全体に声が届くよう配慮されている。また、タブレットPCを併用し、スキャナで取り込んだ教科書等の図表に、その場で手書きの書き込みを入れることで、学生が書き取る時間を確保し、同時に教科書に書き込みをさせることで教科書を有効に活用されていた。学生は書き取ることで授業に集中でき、頭を使いながら授業を聞くことができたとと思われる。これらの視聴覚機器を授業開始時刻の5分以上前からセッティングされ、授業開始時刻をしっかりと守られていた。レポートの提出期限も講義の開始時刻に設定されていた。遅刻者がほとんどいなかったのはそのためと考えられる。話はゆっくりと丁寧で、適度な間も入れられており、聞きやすかった。開始直後は騒がしかったが、特段の注意を与えなくても、前回の復習と宿題の解答から始めることで次第に静かになった。何度か学生に問いかけることで注意を促す工夫もされていた。
- ・講義内容をプリントし、学生に配布。
- ・板書、説明とも、急ぐところがなく、学生が比較的容易についていけるペースを十分考慮して授業を進めている。
- ・一般論だけでなく、具体例をあげて計算をしている。
- ・パワーポイントを用いて、教室の現場で計算結果などを示して見せること。
- ・数値計算のアルゴリズムを分かりやすく説明し、さらにその計算結果を見せ、その上にグラフ化し、近似解と厳密解と比較しその精度と計算誤差を、直感的に説明していること。オイラー法の限界と、その限界を克服するためにルンゲ・クッタ法の導入の準備をしていること。
- ・資料などを配布し、説明を聞くことに専念できるようにしていること。
- ・厳密解の求め方（変数分離法）の説明もきちんとしていること。
- ・学生が、プログラムの入力や計算を喜んでやっていること。
- ・プロジェクターを使用した講義であり、またその日の講義内容を印刷したものを配布しているために学生はノートをとる必要がなくスクリーンを向いたまま集中して講義を聴くことができる。
- ・後半には学生にパソコンを使っの演習時間を設けているので理解することが容易になる。
- ・演習時間中は机間を回って学生の出来具合を見ていることで各学生に適切なアドバイスができる。
- ・授業の始めに新聞を配り、新聞記事の中で興味を持った記事などに関し感想を書かせること。最近の学生は新聞を読まないこと、国語力が無い事が問題であるがその克服に役立つと思われる。
- ・授業中に積極的に学生に当てて答えさせている点。授業中学生に問題を解かせ、それを前に出て黒板に書かせている点。いずれも学生の授業への積極的な関与に役立つも

のと思う。

- ・ 汚水処理施設の設計演習を出題し、学生にその場で解かせるなど、双方向性を持たせている点。
- ・ 数値計算の諸概念を図解していた。
- ・ 学生の指名にプログラムを使っていることが、公平的で良いと感じた。
- ・ 学生を前に出させて回答をさせることにより、室内によい緊張感が保たれていた。そのため居眠り等の学生も少なく、進行が円滑であった。
- ・ 新聞等を読む習慣をつけさせる等の社会人としてのマナーともいえることを、講義内で促すことで、学生の将来のことをよく考えた方策だと感心した。
- ・ 学生が教壇において説明する機会を設けており、受講に当たって緊張感があってよい。
- ・ 落ちついた雰囲気です授業が進行されていた。
- ・ 学生の受講態度がよかった。最初に新聞を読ませる時間があったので、先生の学生に対する熱心が伝わったのではないかと推察される。
- ・ 小テストを実施し、学生同士による相互採点後に回収している点。
 - 前回の復習を、重要語句に焦点をあて、説明できる。
 - 学生とのコミュニケーションが生まれている。
- ・ 配布資料の語句埋めをさせながら講義を進めている点。
- ・ 新聞を講義のはじめに読ませることは良いことである。また講義科目とは直接関係のない図書の推薦なども大変興味深い。本や新聞を読み考える力を養わせることは大変重要である。
- ・ 学生に発言を促したり、ホワイトボードの前で実際に問題を解かせたりすることは大変良い。時間をかけてゆっくりと講義を行うことは良い。
- ・ 講義冒頭に当日の朝刊を配布し、学生に 10 分程度の間目を通させることは、社会情報に接する習慣を養う上で有効と考えられます。
- ・ 推薦図書を紹介し、回覧するとともに、その一部を配布することにも上記と同様の効果が期待できます。
- ・ 柔らかな口調で懇切な説明がなされ、また、学生を指名して質問に答えさせる、あるいは黒板で理論式の展開をさせることなどを通じて、対話的な講義が行われています。
- ・ 学習のポイントとその意義が丁寧に説明され、ゆったりとした雰囲気です講義が行われています。
- ・ 随所に適切なコメントや注意事項が述べられ、学生に対する深い愛情が感じられる講義です。
- ・ 最初の小テストはこれまでの講義と今回の講義を繋ぐ上でも有効かと思えます。
- ・ 実例の写真を示すことは、理解を深めるために有効かと思えます。
- ・ 授業の構成が分かりやすく、これまでの復習とそれを使って今回の問題をどう考えるかということが、理解しやすく感じました。
- ・ 演習のような時間が設けられ、先生が巡回されるのはいいことであると思えます。
- ・ 適宜、学生に回答させることで授業に緊張感を持たせている。
- ・ 授業の最初に半年間のスケジュールを説明し、現在の到達度を学生に示している。
- ・ 授業の間に練習問題を解かせることで学生の理解を助けている。
- ・ 定義や理論を説明するため、具体的な題を挙げ、分かり易く説明できた。
- ・ 時に学生に質問し、居眠り防止にもなるし、正解を出した人の名前を黒板に記す。
- ・ 授業が始まるとき、今後の授業計画を示している。
- ・ 抽象的な概念（固有値解析）を簡単な例題を用いて、分かり易く説明できた。

- ・学生の既知するやさしい問題をランダムプログラムによって選んだ人に質問し、居眠り防止にもなるし、正解を出した人に自信を与える。
- ・通常、パワーポイントを用いると、授業速度が速くなりがちだが、適度な速度で丁寧に説明されていた。パワーポイントのプリントも配布されていたので、学生の復習に十分役立つと思います。
- ・授業中、いくつか演習問題を解かせていた。学生の理解力の向上につながると思います。
- ・適宜、学生を指名し、答えさせていた。学生の集中力の持続につながると思います。
- ・パワーポイントを利用し、分かりやすく講義している点。
- ・パワーポイントの資料を配布し、講義の進捗についてこれない学生が出ないように配慮している点。
- ・適宜学生に質問をしている点。
- ・冒頭で、これまでの講義の課題を一覧として示していること。（記憶の定着）
- ・講義の主題の意味を中・高時代の知識を用いて理解させようとしていること。（今回は「非線形方程式の解」を数値計算で解く場合、方程式とは何か）
- ・乱数を用いて、ランダムに学生に質問している。（緊張感・公平感）
- ・講義の主題を、簡単で原始的な方法からじょじょに高度な計算方法へと説明及び手計算を移行し、目的の高度な数値計算方法へともっていつている。このことは、学生が初歩から高度な計算まで段階的に理解でき、優れた講義だと思う。（演習と段階的講義）
- ・この講義は、板書と教科書を併用して進めるスタイルであった。近年、視聴覚機器とPowerPointを使った講義が多い中（筆者も使用している）、いわば昔風の講義スタイルでしたが、板書の速さと教科書での説明が、学生がノートをとる時間と考えさせる時間を与えるので、講義の進捗の観点からよかったと思う。また、講義の途中で、教科書から離れて講義内容に関連した内容を例題としてあげるなどの工夫が見られた。さらに、学生に質問を投げかけた時など、積極的に手を上げさせるために、発表者に加点を与えるなどモチベーションを高める工夫があり、参考になった。
- ・申し分ない。学生の私語は多少あったが、許容範囲。スピードもあの程度でいいのでは（私はついて行けなかったが・・・）。声も最後列まで聞こえていたし、黒板の文字も問題ない。
- ・学生に問いかけ、理解しているかを確認しながら授業を進めており、一方的な講義にならないよう工夫されていた。
- ・授業中、何度か学生が自分で計算する時間（5分位）を取り、その間教室を回って質問などを受け付けていた。
- ・リープ・フロッグ法（蛙跳び法）とといいますか、そのような授業の進め方をしている点が良いと思いました。これは、授業を進めていく中で一気に話を進めていくのではなく、要所要所で止まって、学生に計算する時間をしばらく与えて、その様子を見て解説を進めるというものです。また、授業内容でこの部分はこの講義・当該分野においては重要であるということと、それとは関わりなく広く一般的に重要であることを明確に指摘していた点が良いと思いました。しかし残念ながら、全体を知るからこそ、その事項の重要性や学問体系の中の位置付けが理解できるのであって、学生にはそれが理解し難いでしょう。ここで得た知見が学生の中になんとなく記憶に残っていて、将来何かの形で活用されることを期待します。

その他

- ・授業中の教室内の雰囲気よかった。
- ・演習の実施状況を見学させて頂きました。学生が静かに問題に取り組んでいるのが印象的でした。基礎電子回路のときはもう少しざわざわした雰囲気でやっています。

●改善を検討すべきと思われる点とその理由

板書

- ・板書のタイミングが早く、その中に情報量が多く詰め込まれている点。周囲の学生は板書が追いつかず、話を聞き逃すことが多そうだった。
- ・ノートを取るところが、わかりにくかったように思います。
- ・授業内容は熱力学で抽象的であるので、概略図やイメージ図などを描くと良いのではないかと感じた。板書の文字は総じて大きく後ろからでも読めたが、添え字は読めなかった。また、授業の後半になるに従い、板書する文字の文字が小さくなっていった。
- ・字をもう少し大きく書いた方がよい。後ろの人には見えにくい大きさであった。
- ・学生に回答を書かせることはよいが、学生の文字も小さい。指摘して大きくさせるなどの処置があってもよかった。
- ・板書の字が若干小さく後方の席では見えにくい場合があります。
- ・板書の字の大きさについて：特に式の添字部分のように文字が小さい場合、最後列からは見えにくい箇所があった。教科書を見ればわかるのだとは思いますが。
- ・従来の黒板・白墨ではなく、ホワイトボードを使用して講義していることと、数式が多い内容であることに関係すると思いますが、文字の大きさを意識してもう少しだけ大きく書いた方がよいと思います。後方から見ると指数・添字部などがかなり小さく見えると思います。

資料

- ・スライドの文字がやや小さい。
- ・1枚のPowerPointに情報量が多すぎるページがあった。講義時間の都合上、仕方の無い場合もあるだろうが、受講者の意欲を削ぐ場合もあるのではなかろうか。また、せっかくのPowerPointなので、Whiteboardに板書した図もPowerPointで記載すれば、情報の伝達の流れ等を視覚的に（紙芝居的に）説明できて効果的ではないかと思うが、いかがだろうか？
- ・パワーポイントのスライド1枚あたりの情報量がやや多いように感じました。どこが重要な点かの確認が難しいようです。また、教室最後方から見ると、文字サイズがやや小さいです。

進め方等

- ・学生との対話や質問を出す工夫もあってもよいかもしれません。
- ・受講生に積極的に作業を行わせたのは、講義開始から40分後でした（板書）。講義に対する集中力を損なわないように、受講生に作業を行わせる工夫をもっと取り入れると良いと思われます。
- ・数学的な説明の板書解説だけでなく、ノートPCなどを用いて、計算結果などを視覚的に理解させる方法を取り入れることは可能であろうか？また、学生が自学自習時に、視覚的に理解する方法をい会得すると、興味の向上などにも効果があると思われる。

- ・内容が中途半端なところで授業が終了している。トータルの授業時間に余裕があれば、時間が少し余ったときは先に進むよりも、演習などに使った方がよいかもしれない。
- ・優れている点とバランスの問題になるが、もう少し板書を増やすことも検討されたらどうであろうか。
理由：学生が安心すぎるのか（？）、あまり説明を聞かずに自分のパソコンでゲームなどで遊んでいる学生が結構いる。
- ・上の点と裏表の関係になるが、学生に解かせたり前に出てやらせると時間が掛かり、進度が遅い点。これは仕方ないとは思いますが。
- ・学生の理解を深める上では好ましいペースで講義が進められているが、当該科目で教示される内容量に限界が生じないかが気に掛かりました。
- ・小テストの採点と解説を同時に行うために騒々しくなっていたように感じます。採点後に解説されてはいかがでしょうか。
- ・はじめの復習はかなり丁寧でしたが、そのことが時間配分の点で問題があったように思いました。
- ・後ろの学生には回路の細部が見えにくいだろうなあ、と感じることもありました。
- ・信号を増幅することの必要性、直流成分に交流がのっている信号の実際、そのそも信号とは、また消費電力を求める必要性など、意外に学生は分かっていないことが多いかもしれません。実際にどのような電子部品を使って、どのような時に学習したことが必要になるのかも、自身に必要性を感じる場面がないと、イメージとしてわかりにくいでしょう。それを理解するために学生実験があるのだと思いますが、授業と実験、演習が効果的に関連し合うように組み立てるのは難しいことです。私の学科もそのようなことを考えているつもりですが、なかなか難しいです。
- ・授業の最初に、前回授業の復習を少しした方がいいと思いました。学生の理解力の向上につながると思います。
- ・パワーポイント利用は一長一短あるので、注意が必要と思う。つまり、学生は聞いているだけの時間が長くなり、内容が頭に残らないおそれがある。また、資料を配付するので、ノートを取らなくなり、視覚的理解だけで終わる可能性がある。
- ・パワーポイントと板書をうまく組み合わせれば、すばらしい講義になると思う。
- ・2コマ目であるが遅刻者が10名近くいたのは残念だった。これが改善できればさらに優れた講義と言える。
- ・講義の内容的に、演習的内容（プログラムの作成など）が必要と思ったが、おそらく取り入れられていることと思います。

その他

- ・PowerPointとWhiteboardを併用しているので、証明やカーテンに気をつける必要がある。明るすぎればPowerPointが見えないし、暗すぎればWhiteboardが見えない。
- ・学生に質問を促した時、一人手を挙げかけた学生がいたが、担当教員が広い教室を見渡しているタイミングとずれてしまった。大教室では学生一人一人の様子を把握するのは困難なので、改善しようがないと思うが。
- ・現在の声で問題はないが、マイクを使われた方がより良く聞き取ることができるかもしれない。広い教室ということもあり、後ろの座席では内職をしている学生がわずかではあるが居たのは残念であるが、良い対処法は思いつかない。
- ・タブレット PC にタッチペンで手書きする際、腰をかがめた姿勢であったため、書き辛そうであった。イスに座りながらできると良かったと思われる。しかし、スピ

- ・カーやタブレット PC に加えてイスまで持参はできないので、教務係が B22 教室にイスを常備するべきだと思う。同じ理由で指示棒ではなく、レーザーポインタを使うべきだと思う。ただし、今回はたまたま忘れてきたとのことであった。
- ・学生に紙を回して行う出欠調査はあまり正確ではないので、成績評価の際に考慮しない方がよいと思われる。
- ・朝一番の講義ということもあり、遅刻学生が多いのでその対策を考える。
- ・教室内がかなり寒く感じられた。節電に努める必要性はあるが、すでに 12 月でもあり、暖房により快適な温度にした方がよいと思う。
- ・C11 の座席にいと、教壇にいるときよりずっと寒さがこたえることが分かりました。以前、学生に寒いと言われたときは気にも留めなかったのですが、今回の参観でそれを実感した次第です。
- ・パソコンでゲームをしている学生がいた。今後、このような学生に対する指導等考える必要がある。
- ・例題と施工実施例（写真等）を組み合わせる講義をしたら、学生も数式の持つ工学的な意味合いがイメージしやすいと思われる。
- ・聞いている分には講義のスピードは丁度よかったが、黒板を写す学生からすると若干早いかもしれない。
- ・講義中に新聞を読んでいる学生がみられました。
- ・自己学習のための教材が配布資料だけ？
- ・1 回ですすむ講義の分量は適切か？少なめ？今回は特別？
- ・遅刻の学生が数人おり、授業の妨害をしている。学期の初めに遅刻は厳禁であることを伝えるべき。
- ・学生の私語は注意した方がいいと思いました。私語はそれほど酷くはありませんでしたが、後ろに座っていると結構耳につく感じでした。他の学生への迷惑と同時に、そのような学生は授業に意識が向いていないので、結局理解力が低下すると思います。
- ・後方座席の学生の中にはメールをしたり、他教科(物理学IIのテキストを開いていた)の勉強をしているものが複数いたため、今後は注意が必要と思われる。
- ・大幅に遅刻（講義が半分ほど進んだところで入室）してきた学生に対して注意がなかった。

● その他

- ・担当教員も注意を促していたが、遅刻者が多い。この講義だけで何とかなるわけではないが、何らかの対策が必要かもしれない。
- ・私の授業は 3 コマ目ということもあり居眠りをする学生が多くて悩んでいたが、この参観で、学生に適度な速度で書き取りをさせることで居眠りの防止と授業への参加を促すことができることを実感できた。自分の授業で試してみたい。
- ・私の授業では、3 コマ目ということもあり居眠りをする学生が多くて悩んでいたが、この参観で、学生に多くの書き取りをさせることで居眠りの防止と授業への参加を促すことができることを実感できた。早速、自分の授業でも書き取りを取り入れたいと思う。
- ・漫画本を読んでいる学生、携帯電話をもてあそんでいる学生、ゲームをしている学生などがいる。先生の責任ではない（先生は分り易く一生懸命教えている）が、将来、山口大学工学部はどうなるのか心配である。
- ・1、2 時限目の授業であるため遅刻してくる学生が目につく。
- ・時間をかけてゆっくりするのは良いことであるが、一方でそのため講義内容や範囲が

削減するのではないかという懸念も生じる。どのように克服しているのか話し合いたい。また、このような教官間の議論を行うことがFDと思う。

- ・大変参考になりました。自分の講義が詰め込み主義的で、学生の理解を助けるコメントが不足していることを痛感し、反省しました。
- ・できるだけ多くのことを教えることと理解のためのゆとりを与えることのトレードオフを解決しなければと思っています。
- ・先生の講義に限らず、トイレなどで気軽に授業を抜け出す学生が気になります。講義を理解しながら受講していれば、途中で抜ける気にはならないはずですが。
- ・たいへん素晴らしい授業で今後の参考にさせて頂きたいと思っています。
- ・学生による質問が望ましい。
- ・遅刻する学生が9名程度いた。
- ・学生による質問が望ましい。
- ・遅刻する学生が6名程度いた。居眠りする学生が5 - 10名程度いた。
- ・学生が教室内に飲み物を持ち込んでいる。
- ・1回だけの講義の聴講では全体的なことはよく分かりませんが、大学で講義する数値計算の内容(レベル)としては適切なものなののでしょうか。他大学と比較した場合どうなののでしょうか。
- ・最近、学生のレベル低下が問題になっており、あまり高度なことを教えても学生が理解できない可能性があります、そのあたりが少し気になりました。
- ・講義準備を前もって行い、定刻まえに始めることなく、講義室外で待ち、定刻を待って始め、定刻に終了するという、講義の開始・終了時間を守るということを実践している。その態度は見習いたい。(時間に対する敬虔な態度)
- ・参加教員が少ない。私が参加した最初の30分は他学科の教員1名だけだった。教員参加実態を自学科だけでいいので公開してもらいたい。参加数があまりに少ないのならば、この制度自体を再検討すべきでは？
- ・公開対象教員の選定法については、今は学生評価の高い教員の講義が選ばれているが、そうでない教員の講義こそ拝見したい(学科側の選定の問題?)
- ・板書の文字を大きく書くと、ボードの端から端まで使って、頻繁に消さないといけけないので疲れます。ホワイトボードマーカーのペン先は黒板の白墨に比べて小さく書き易いので、注意しないとついつい文字が小さくなってしまいます。

このような感想や指摘点は担当教員にフィードバックされるので、今後の授業改善に役立てられるだけでなく、参観した教員にとっても自分の授業に当てはめながら改善を考えるためのいいチャンスを提供している。

第2節 授業評価表彰

工学部で行われているすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そこで、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業を表彰を行って来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更した。

評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか?)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
 を選び、各平均点の和(15点満点)が 12 点以上のものを「優秀授業」として表彰する。また、各学科の最高得点獲得授業を「最優秀授業」として表彰する。ただし、原則として受講生 10 名以上の授業を対象とする。

平成 18 年度優秀授業表彰一覧

番号	開設科目名	担当教員名	学科	コース	学年	表彰種類
1	機械工学実験	森浩二・他	機械	昼	3	最優秀授業
2	機械工学演習 A	栗間諄二・西村龍夫・望月信介	機械	昼	3	優秀授業
3	機械工学演習 A	栗間諄二・西村龍夫・望月信介	機械	昼	3	優秀授業
4	プログラミング言語	佐伯壮一	機械	昼	3	優秀授業
5	土木振動学	山本哲朗	社建	夜	3	最優秀授業
6	構造力学 II・同演習	吉武 勇	社建	夜	3	優秀授業
7	測量実習及び演習 I	鈴木素之	社建	夜	2	優秀授業
8	複合構造工学 I	濱田純夫	社建	夜	3	優秀授業
9	建設材料学	高海克彦	社建	夜	2	優秀授業
10	複合構造工学 II	濱田純夫	社建	夜	3	優秀授業
11	工業英語	吉武 勇	社建	昼	4	優秀授業
12	建設基礎実験 II	吉武 勇	社建	夜	3	優秀授業
13	測量実習及び演習 II	鈴木素之	社建	夜	2	優秀授業
14	土質力学 II	兵動正幸	社建	昼	2	優秀授業
15	構造力学 II	清水則一	社建	昼	2	優秀授業
16	構造力学演習 II	清水則一	社建	昼	2	優秀授業
17	マトリックス構造解析学	古川浩平	社建	夜	3	優秀授業
18	遺伝子工学	赤田倫治	応化		3	最優秀授業
19	分析化学	中山雅晴／吉本信子	応化		2	優秀授業
20	光化学	中山雅晴	応化		3	優秀授業
21	無機化学	中山雅晴	応化		2	優秀授業
22	微生物学	赤田倫治	応化		2	優秀授業
23	機能高分子化学	堤 宏守	応化		3	優秀授業
24	化学工学 I	佐伯 隆	応化		2	優秀授業
25	精密合成化学	山本豪紀	応化		3	優秀授業
26	数理計画法	若佐裕治	電電	昼	3	最優秀授業
27	半導体工学 I	山田陽一	電電	昼	3	優秀授業

28	コンピュータハードウェア	西藤聖二	電電	昼	3	優秀授業
29	電気回路 II	山田陽一	電電	昼	2	優秀授業
30	熱力学・統計力学	嶋村修二	電電	昼	2	優秀授業
31	プログラミング演習 I	庄野逸	知情	夜	2	最優秀授業
32	プログラミング I	庄野逸	知情	夜	2	優秀授業
33	コンピュータグラフィックス	平林晃	知情	夜	4	優秀授業
34	情報ネットワーク	庄野逸	知情	昼	3	優秀授業
35	数値計算	中村秀明	知情	昼	2	優秀授業
36	システム理論	石川昌明	知情	夜	4	優秀授業
37	ものづくり創成実習 II	岡本浩明、森田由紀 笠谷和男、竹中俊介	機材		2	最優秀授業
38	情報デザイン実習 II	木下武志	感性		2	最優秀授業
39	都市デザイン論	鷗心治	感性		4	優秀授業
40	造形実習	木下武志	感性		2	優秀授業
41	空間計画学 III	中園真人	感性		3	優秀授業
42	建築材料・構工法学実験	李柱国	感性		3	優秀授業
43	CAD・CGオペレーション I	長篤志	感性		2	優秀授業
44	景観計画学	鷗心治	感性		3	優秀授業
45	都市計画学	鷗心治	感性		3	優秀授業
46	情報デザイン実習 I	木下武志	感性		2	優秀授業
47	情報化社会と職業	山鹿光弘、多田村克己	感性		3	優秀授業
48	建築設備工学	中村安弘	感性		3	優秀授業
49	空間計画学 II	中園真人	感性		3	優秀授業
50	空間デザイン学総論	中村安弘	感性		1	優秀授業
51	色彩・平面構成	木下武志	感性		1	優秀授業
52	空間設計演習 III	内田文雄、中園真人 小川晋一、牧敦司	感性		3	優秀授業
53	熱力学・統計力学	嶋村修二	電電・ 知能	夜	3・4	最優秀授業

第3節 全学FD研修会への参加

平成19年度も山口大学FD研修会への参加を積極的に行った。しかし、アラカルト形式の内容が昨年とほぼ同じであったためか、参加者の伸びは見られなかった。工学部からの参加教職員を次の表に示す。

平成19年度FD研修会参加者名簿				
氏名	職名	開催年月日	開催地区	研修会等種別
三浦 房紀	教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
上村 明男	教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
羽野 光夫	教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
望月 信介	教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
小嶋 直哉	教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
山本 節夫	教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
藤井 文武	准教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
田中 義則	准教授	19.7.31	吉田地区	学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう
和崎 克司		19.8.9	吉田地区	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう
杉本 謙治		19.8.9	吉田地区	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう
長 篤志	講師	20.3.26	小串地区	情報セキュリティ・情報モラルの教え方

工学部におけるFD活動は、点検・評価委員会において審議される。構成員は柳研二郎委員長を始め、各学科の副学科長、工学基礎教育（数学・物理）の副主任であり、これに大学教育職員能力開発〔FD〕委員会委員（全学委員）、教務委員長、及び大学評価実施会議委員（全学委員）が加わる。なお、この委員会は理工学研究科工学系、及び医学系研究科工学系のFD活動についても審議する。

第10章 農学部のFD活動

第1節 はじめに

(1) 平成19年度FD計画

- 1) セミナー（農学部公開講演会）の実施
- 2) ピアレビューの実施
- 3) 全学FD研修会への参加
- 4) 学生による授業評価と教員による授業自己評価の実施

(2) 活動および報告内容について

平成19年度の農学部のFD活動は、上記の計画に基づき、「セミナー」、「ピアレビュー」、「全学FD研修会」を中心に、「その他のFD活動」も含めて前年度と同様の取組みが実施された。

以下にその具体的実施状況を報告し、それぞれについて総括するとともに、学生授業評価と教員授業自己評価の集計結果を分析する。

第2節 セミナー（農学部公開講演会）

(1) 開催セミナー一覧

	開催日	演題	講師	学科
1	4月11日	卵巣の凍結保存	利部 聡	獣医学
2	5月31日	植物の環境ストレスにおけるアルデヒド化合物の作用	真野純一	生物機能科学科
3	6月29日	発酵の基礎研究とバイオエタノール生産	山田守	生物機能科学科
4	7月4日	ウイルスの病原性解析～重症急性呼吸器症候群（SARS）および白血病	西垣一男	獣医学
5	11月2日	バクテリアべん毛モーターの回転	薬師寿治	生物機能科学科
6	11月9日	糖タンパク質の品質管理における糖鎖機能の解明～鶏卵白オボアルブミンをモデルとして～	松富直利	生物機能科学科
7	1月9日	分子昆虫学研究室立ち上げ4年間の主要研究成果報告	小林 淳	生物資源環境科学科

(2) セミナーの総括

農学部のセミナーでは、各学科の教員が農学部の全教員と学生および農学研究科と医学研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図っている。平成 19 年度は 7 回実施され、平成 17 年度の 20 回、平成 18 年度の 11 回と比べると減少傾向に歯止めがかかってきたように思われる。昨年度の報告書で分析したように、回数減少の原因が、セミナー活動に対する意欲の低下でないことは、各セミナーに多数の教員と院生・学生が参加し、活発な質疑が行われていることから明白である。減少の原因は、ほとんどの農学部教員がこの 1～2 年以内にセミナーを 1 度は実施しており、ある程度期間をあけて新しい成果を十分蓄積してから次のセミナーを担当したいと考えているためである。したがって、来年度以降も本年度と同程度の実施回数が妥当であろう。

第 3 節 ピアレビュー

(1) 実施授業一覧

実施日	授業科目	教員	学科	評価担当
5 月 21 日	基礎園芸学	執行正義	生物資源環境科学科	高橋 肇
5 月 30 日	応用動物生態学	細井栄嗣	生物資源環境科学科	荒木英樹
6 月 14 日	地域管理学	糸原義人	生物資源環境科学科	鈴木賢士
7 月 7 日	環境隔測学	荊木康臣	生物資源環境科学科	進藤晴夫
11 月 5 日	作物学汎論	高橋 肇	生物資源環境科学科	深田三夫
11 月 22 日	環境土壌学	藤間 充	生物資源環境科学科	小林 淳
12 月 21 日	環境昆虫学	小林 淳	生物資源環境科学科	細井栄嗣

(2) ピアレビューの総括

農学部のピアレビューは、平成 19 年度は 7 回実施され、平成 18 年度の 13 回には及ばなかったものの、平成 17 年度の 4 回を上回っている。このようにピアレビューの回数が比較的高レベルで維持されているのは、昨年度から実施された生物資源環境科学科におけるピアレビューのローテーション制が定着したためであり、評価担当教員のレポートによると、昨年度とは異なる担当授業から教授法や視聴覚機器の使用などで新たに学ぶ点が多かったようである。したがって、生物資源環境科学科に関しては、ローテーションが一巡するまで、このピア・レビューへの高い関心が維持され、授業改善に役立つと期待される。一方、それ以外の学科では授業のピアレビューが全く行われなかった。昨年度の報告書でも書いたように、授業の質が必ずしもピアレビューの回数に比例するというわけではないが、少なくとも年 1 回程度は各学科でピアレビューを開催すべきであろう。来年度の FD 活動の課題である。

第4節 全学FD研修会

(1) 参加教員一覧

開催日	研修会種別	教員	学科
4月2日	TA研修会	竹松葉子	生物資源環境科学科
		利部聰	獣医学科
4月6日	聴覚障害学生の授業方法についての研修会	深田三夫	生物資源環境科学科
		西山壮一	生物資源環境科学科
		荊木康臣	生物資源環境科学科
		古賀大三	生物機能科学科
		右田たい子	生物機能科学科
		藤井克彦	生物機能科学科
		甲斐一成	獣医学科
		山本芳実	獣医学科
		林俊春	獣医学科
		音井威重	獣医学科
		岩田祐之	獣医学科
		木曾康郎	獣医学科
		奥田優	獣医学科
		佐藤宏	獣医学科
		前田健	獣医学科
		加藤大智	獣医学科
		森大志	獣医学科
		佐藤晃一	獣医学科
		宇根智	獣医学科
本道栄一	獣医学科		
水野拓也	獣医学科		
藤田志歩	獣医学科		
8月2日	講演会：学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう	小林淳	生物資源環境科学科
		高橋肇	生物資源環境科学科
		内海俊彦	生物機能科学科
8月9日	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう	藤間充	生物資源環境科学科
		古賀大三	生物機能科学科
		滝本晃一	生物機能科学科
		那須哲之	獣医学科
		岩田祐之	獣医学科
		中市統三	獣医学科
		山本芳実	獣医学科
		音井威重	獣医学科
		和田直己	獣医学科
森本将弘	獣医学科		

		奥田優	獣医学科
		水野拓也	獣医学科
		佐藤宏	獣医学科
		佐藤晃一	獣医学科
		森大志	獣医学科
		前田健	獣医学科
		本道栄一	獣医学科
9月14日	授業技術研修会－学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法	田中秀平	生物資源環境科学科
9月18日	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法	荊木康臣	生物資源環境科学科
		松下一信	生物機能科学科
		板本和仁	獣医学科
9月20日	脱初心者！MS Office 実践的活用法	小崎紳一	生物機能科学科
9月21日	パワーポイント教材の作り方	細井栄嗣	生物資源環境科学科
2月13日	専門教育課程における聴覚障害学生 修学支援についての研修	右田たい子	生物機能科学科
		古賀大三	生物機能科学科
		和田直己	獣医学科
		那須哲之	獣医学科
		林 俊春	獣医学科
		岩田祐之	獣医学科
		田浦保穂	獣医学科
		山本芳実	獣医学科
		中市統三	獣医学科
		利部聰	獣医学科
		本道栄一	獣医学科
		森大志	獣医学科
		前田健	獣医学科
		佐藤晃一	獣医学科
		森本将弘	獣医学科
		加藤大智	獣医学科
		奥田優	獣医学科
		水野拓也	獣医学科
		佐藤宏	獣医学科
		中野敏彦	獣医学科
		角川博哉	獣医学科

(2) 全学 FD 研修会の総括

農学部教員の全学 FD 研修会への参加人数は、平成 19 年度はのべ 71 名（実数 41 名、農学部教員の 63%）で平成 18 年度の 18 名（農学部教員の約 28%）や平成 17 年度の 15 人（農学部教員の約 24%）を大きく上回っていた。これは、獣医学科に入学した特

別支援学生に対する修学支援のための研究会が3回開催され、学部長ならびに多くの獣医学科の教員がそれらに複数回出席したためである。このような特殊事情があったため、例年との単純な比較はできないが、農学部教員、とりわけ獣医学科の教員が組織を挙げて教育に真剣に取り組む姿勢が参加人数に反映したことは間違いない。

第5節 その他のFD活動

CPC（獣医学科臨床系教員の臨床例総合検討会）

動物医療センターのCPC(Clinico-Pathological-Conference)は、1996年1月からスタートし、医員や獣医学科教員のピアレビュー（相互評価）とともに、学生や学外の皆様へ総合臨床的な症例検討会の内容を紹介する事を目的としている。

平成19年度は第89～95回の合計7回開催され、平成18年度（7回）および平成17年度（7回）と同じであった。

開催日	担当教員	タイトル
第89回 5月29日	奥田 優 (獣医内科)	高分化型リンパ腫(low grade lymphomaの一例)
第90回 6月26日	田浦 保穂 (家畜外科)	バーニーズマウンテン犬の硬口蓋にみられた神経線維腫に対する凍結手術の応用
第91回 9月25日	前田健 (獣医微生物)	イヌ・ネコのウイルス感染症の最近の知見ーCDV, FIP, FVRを中心に
第92回 10月30日	音井 威重 (連合獣医)	黒毛和種牛における1年1産プラス1回採卵をめざした卵胞波解析
第93回 11月27日	水野 拓也 (獣医内科)	神経内分泌腫瘍のイヌの一例
第94回 12月18日	早崎峰夫 (獣医臨床診断)	北海道に蔓延している致死的な人畜共通寄生虫病、エキノコックス症について
第95回 2月26日	佐藤宏 (獣医寄生虫病)	糞線虫症の診断と最近の話題

第6節 学生授業評価と教員授業自己評価

(1) 共通項目の集計結果比較

1) 講義

質問1

学生：教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

教員：聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.1	19.6	75.0	4.3	3.8
教員	0	0	30.1	47.5	22.4	3.9

質問 2

学生：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

教員：理論や考え方、専門用語などをわかりやすく説明しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	15.2	81.5	3.3	3.8
教員	0	0	16.3	51.0	32.7	4.2

質問 3

学生：板書は適切に行われましたか？また、テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

教員：板書を工夫しましたか？また、テキストやプリントなどの教材を効果的に使いましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	22.8	73.9	3.3	3.8
教員	0	6.1	20.4	34.7	38.8	4.1

質問 4

学生：必要に応じて OHP やビデオ、コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

教員：必要に応じて OHP やビデオ、コンピュータなどの視聴覚メディアを効果的に使いましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	19.6	70.6	9.8	3.9
教員	2.0	4.1	22.4	26.5	45.0	4.1

質問 5

学生：学生の疑問・質問などに答える機会が十分に与えられていましたか？

教員：学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	22.8	73.9	3.3	3.7
教員	0	6.1	40.8	36.8	16.3	3.6

質問 6

学生：教員の身振り手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

教員：身振り手振りを加えたり、目を見て話すなどの態度を心がけましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	15.2	82.6	2.2	3.8
教員	0	2.0	38.8	40.8	18.4	3.8

質問 7

学生：あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？

教員：学生は、シラバス（授業案内）に記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.1	72.8	26.1	0	3.3
教員	0	6.1	30.6	51.1	12.2	3.7

質問 8

学生：あなたは授業の内容を理解しましたか？

教員：学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.1	40.2	58.7	0	3.5
教員	0	14.3	40.8	38.8	6.1	3.4

質問 9

学生：この授業はあなたにとって満足 of いくものでしたか？

教員：授業の内容に学生は満足していると思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.1	21.7	75.0	2.2	3.7
教員	2.0	0	57.1	36.8	4.1	3.4

質問 1 0

学生：あなたは、この授業のために授業時間以外にどのくらい学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業 1 コマ当たりの平均で教えてください。

教員：期待した授業外の学習時間（授業 1 回あたり）

回答：1) 0.5 時間未満、2) 0.5～1 時間、3) 1 時間～1.5 時間、4) 1.5～2 時間、5) 2 時間以上

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	7.6	90.2	2.2	0	0	1.8
教員	44.9	34.7	10.2	8.2	2.0	1.9

2) 演習・実験・実習

質問 1

学生：教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

教員：聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.9	9.1	67.2	21.8	4.1
教員	0	0	20.7	34.5	44.8	4.2

質問 2

学生：演習・実習・実験の手続や方法に関する指示はわかりやすく説明されましたか？

教員：演習・実習・実験の手続や方法に関しての指示はわかりやすく工夫しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	3.6	9.1	69.1	18.2	4.0
教員	0	0	10.3	34.5	55.2	4.4

質問 3

学生：必要な教材や器材が適切に使われましたか？

教員：必要な教材や器材を適切に使いましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	5.5	76.3	18.2	4.2
教員	0	3.4	20.7	20.7	55.2	4.3

質問 4

学生：学生の疑問・質問などに答える機会が十分に与えられていましたか？

教員：学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	3.6	70.9	25.5	4.2
教員	0	3.4	17.2	27.6	51.8	4.3

質問 5

学生：教員の手本・示範などが適切に示されましたか？

教員：学生に手本・示範などを適切に示しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.9	10.9	79.9	7.3	4.0
教員	0	0	20.7	41.4	37.9	4.2

質問 6

学生：個人またはグループの作業は集中できる雰囲気の中で実施されましたか？

教員：個人またはグループの作業は集中できる雰囲気の中で実施されたと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	7.3	81.8	10.9	4.1
教員	0	0	27.6	37.9	34.5	4.1

質問 7

学生：あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？

教員：学生は、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	1.9	16.4	79.8	1.9	3.7
教員	0	0	24.1	41.4	34.5	4.1

質問 8

学生：内容理解や技能のレベルは向上しましたか？

教員：学生は授業の内容理解や技能のレベルが向上したと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	9.1	80.0	10.9	4.0
教員	0	3.4	20.7	41.4	34.5	4.1

質問 9

学生：授業の内容はあなたにとって満足のいくものでしたか？

教員：授業の内容に学生は満足していると思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	0	0	9.3	74.0	16.7	4.1
教員	0	3.4	34.5	41.4	20.7	3.8

質問 10

学生：あなたは、この授業のために授業時間以外にどのくらい学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください。

教員：期待した授業外の学習時間（授業1回あたり）

回答：1) 0.5時間未満、2) 0.5～1時間、3) 1時間～1.5時間、4) 1.5～2時間、5) 2時間以上

	回答選択率 (%)					回答平均値
	1	2	3	4	5	
学生	5.5	58.1	27.3	9.1	0	2.3
教員	46.4	35.7	17.9	0	0	1.7

(2) 学生授業評価と教員授業自己評価の総括

農学部の学生授業評価の実施率は93%で、平成17年度の83%、平成18年度の90%という実施率の上昇傾向が持続しており、特に、前期だけみると実施率98.7%で全学トップであった。したがって、来年度は、後期の実施率を高めれば、100%近い実施率が実現できると期待される。一方、教員授業自己評価については、平成20年3月末日（入力締め切りは4月末日）の時点で、入力率が49%であった。これは昨年度の同時期の22%の倍以上であり、入力締め切りまでに後期授業の入力率が増加すると予想されるので、最終的に60%を上回る可能性は高い。教員の授業自己評価への取り組みがこの1年間でかなり定着したといえる結果である。来年度は、学生授業評価と教員授業自己評価がほぼ同レベルの高い実施率になるよう、FD委員が全教員に呼びかける努力も重要であろう。

学生授業評価と教員授業自己評価で共通する10項目の質問に関する集計結果の比較では、昨年度と同様、授業時間外の学習時間に関する質問（質問10）以外の全ての質問において、学生と教員の回答の分布範囲や平均値が比較的類似しており、特に平均値に関しては最高点の評価5にはならないものの、3.4～4.3の範囲にあり、学生と教員がそれぞれの授業に対して比較的良好であるという評価を下していた。

なお、昨年度同様、唯一、学生と教員の回答に比較的大きな差異が見られたのは質問10で、講義、演習、実験および実習を問わず、教員が学生に期待する学習時間がおおむね0.5時間未満であったのに対し、多くの学生は0.5～1.0時間の学習時間を費やしたと回答している。教員が学生の学習時間に関する実態に関する正確な情報を得ることができれば、この差異を解消できるかも知れない。

上記のように、昨年度から本年度にかけて学生授業評価アンケートの実施率と教員の授業自己評価の入力率が向上したが、双方の評価結果の全体的な傾向にはほとんど変化がなかった。今後、個別の授業の改善を通じて、これらの全体的数値をより望ましい方向にゆっくりであっても着実に変化させる努力が必要と思われる。

第7節 まとめ

平成19年度の農学部FD活動は、上記のように18年度のFD活動を継続する計画に基づいて実施された。その結果、18年度と比較して、学部独自の取り組みであるセミナー（農学部公開講座）の実施回数およびピアレビュー実施授業数はやや減少したものの、全学FD研修参加教員数と学生授業評価実施授業数はともに微増した。セミナー数については、適正な回数にほぼ落ち着いた結果と判断されるので、ピアレビューを除けば、全体としては着実にFD活動が実施され、いくつかの改善も達成されたと評価できる。特に、授業に関しては、教員授業自己評価の入力率が倍増以上となり、本年度も学生授業評価と教員授業自己評価の両方で昨年度同様の比較的良好な評価が下されているおり、教員各自が担当授業の問題点を十分認識し、改善策を考慮していることから、今後も各授業に対して安定して高い評価が下されると期待される。

以上の19年度FD活動の総括結果をふまえ、20年度のFD活動も、基本的に19年度の活動を継承・維持しつつ、ピアレビューの充実と教員授業自己評価の入力率のさらなるアップを重視して実施し、学部の教育研究のさらなる改善を図るべきであろう。

平成 19（2007）年度 農学部 FD 委員会

生物資源環境科学科 田中秀平、小林 淳（委員長、全学 FD 委員）

生物機能科学科 横山和平、阿座上弘行

獣医学科 中市統三、奥田 優

第 1 1 章 人文科学研究科の F D 活動

今年度の大学院人文科学研究科の F D 活動としては、当研究科の所属教員が人文学部のそれと重なることから、大学教育機構主催の F D 研修会・講演会への参加、教員間授業公開（ピア・レビュー）、人文学部 I T 研修会については、人文学部のそれと合同の実施となる。ただし、学生による授業評価アンケートについては、人文学部で実施しているようなマークシート方式のものを採用せず、研究科独自の記述方式のものによって実施した。教員自己評価入力については、全学的に実施している方式に準拠して実施した。

第 1 節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

人文学部との合同によって実施した。詳細については、第 4 章「人文学部の F D 活動」の第 1 節「教員間授業公開（ピア・レビュー）」を参照。

第 2 節 人文学部 I T 研修会

人文学部との合同によって実施した。詳細については、第 4 章「人文学部の F D 活動」の第 2 節「人文学部 IT 研修会」を参照。

第 3 節 大学教育機構主催 F D 研修・講演会への参加

人文学部教員の参加者と一致する。詳細については、第 4 章「人文学部の F D 活動」の第 3 節「大学教育機構主催 F D 研修・講演会への参加」を参照。

第 4 節 人文科学研究科における自由記述式アンケート

人文科学研究科における授業アンケートについては、前々年度以来、自由記述式のものを実施している。各授業における人文科学研究科の大学院生の受講者が極めて少数であるため、アンケート回答者の匿名性を確保することが難しく、個々の授業ごとにマークシート方式のアンケートを実施できないからである。仮に実施したとしても、ほとんどの授業における回答シート数は、教員が閲覧できる規定枚数を下回るため、教員が閲覧できず、アンケートを実施する実質的な意味がない。大学院生むけのアンケートとしては、自由記述式のほうが適切という観点からも、当研究科のアンケートは自由記述式とし、しかも授業別ではなく、研究科全体の範囲で回収する方式をとっている。

平成 19 年 7 月中旬、指導教員に依頼し、A 4 サイズのアンケート用紙を 1 枚ずつ大学院生に配布した。学務第一係に投函口を設け、前期試験最終日の 8 月 6 日を締め切りとし、大学院生各自の手で回答を直接投函していただくという回収方法を採用した。このアンケートの質問項目は、つぎの 3 点である。

「(1)人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、教えてください。

(2)人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、教えてください。

(3)その他、ご意見ご要望ご感想があれば、教えてください。」

なお、アンケート対象学生数は29名、うち回収された回答用紙は7枚であった（回収率24.1%）。この回答結果については、FD委員がとりまとめながらコメントを付し、人文科学研究科の全教員に配信した電子メールによって内容を伝えた。その内容は以下の通りである。

※アンケートにご協力いただいた方々からのご回答

■ Aさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→質問感想カードの形で学生さんと意見交流することは、とてもいいと思います。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→なし

(3)その他

→〔空欄〕

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・このアンケートの趣旨をご理解いただき、ありがとうございます。「意見交流」がたとえわずかでも、このような機会があること自体に意味がありますね。

■ Bさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→大学院に入って初めに演習の時間に出たんですが、一人一人が発表して自分の意見を出すとか、ほかの人から意見をもらうのがいいと思います。特に留学生にとっていい勉強になります。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→今学期に取った授業は全部おもしろかったんです。もちろんむずかしい内容がありますが、全部は理解してなかったんですが、いい授業でした。

(3)その他

→〔空欄〕

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・演習も講義も、ご好評いただき、どうもありがとうございます。いい学生さんがいらっしゃる事が、私たちにとって大きな励みになります。

■ Cさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→環境は大変恵まれています

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→ありません

(3)その他

→〔空欄〕

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・「環境」を前向きに捉えてくださっているそのお気持ちは、ありがたいことですね。今後
もそう感じてもらえるよう、努力したいと思います。

■ Dさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→演習が少人数で行えるのでよかったです。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→特になし

(3)その他

→特になし

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・少人数教育の利点を最大限に活かし、これからもよろしくお願いします。

■ Eさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→他専攻の授業がとれるところがよい。見識がひろがり、新しい視点・角度で物事がみ
れるようになる。専攻外の私でも、受け入れて下さってありがたい。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→〔空欄〕

(3)その他

→・院生の研究室のロッカーがつかいたいが、いまはいっぱいなので、つかえないのが
難。

・学務の方が、とても親切にしてくれていて、ありがたいし感謝します。

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・「親切」な学務係のかたに、お気持ちをお伝えしておきましたよ。「他専攻の授業がとれ
る」ことに対してご好評いただけるのも、嬉しい限りです。いっぽう、院生用のロッカー
関するご要望、確かに承りました。

■ Fさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→パソコン（インターネット）を使用する授業はとてもよいと思う。検索サイトなどが
よくわかった。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→学部学生と別に、自分の専攻分野と密接な関係のある講義を増やしてほしい。

(3)その他

→特にない。

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・講義内容のレベルを上げてほしいということでしょうかね。少人数の大学院生を学部学
生と別にし、しかも専攻分野と密接な講義を…ということは、ほぼ1対1になりそう。

■ Gさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→瀨瀨先生：「金曜5・6限目（現代政治社会論、分析論）現代政治社会変動論」
毎回の授業で学生さんの質問票について答えていく。分かりやすくなる。

林先生：水曜3・4限目 日本語論Ⅱ
毎回の授業で自分の意見等ストレートに表現できるので、
いろんな実際のもものがとても参考になる。

磯部先生：金曜7・8限目 日本語論Ⅱ
先生が自ら黒板に書きながら行う授業、重点がとても分かりやすい。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→**先生：*曜** * **論*
テキスト順番のまま授業を行ってほしい。
一つの内容について、このページあのページするというより
順番のままでいけば更に分かりやすいんじゃないだろう。

(3)その他

→演習の授業は、発表者に始めから最後まで一気読んでもらって、討論を行う
というより、一部分一部分読ませて、それに従って、
意見問題等について討論したほうがいいんじゃないかと思う。

【アンケート集計担当教師からのコメント】

・ご熱心なご要望ご提案を、ありがとうございます。無記名の立場からのものですので、
(2)のほうには、個人名が窺える部分に伏字「**」を入れさせていただきましたが、
全体を通して、先生方のご参考にしていただきましょう。

以上

* * * * *

平成19年度 山口大学大学院人文科学研究科FD委員会

磯部	佳宏（副委員長）	井上	三朗	武本	雅嗣
藤川	哲	古荘	真敬	馬	彪
真木	隆行（委員長）	皆尾	麻弥		

第 1 2 章 教育学研究科の FD 活動

平成 19 年度における教育学研究科の FD 活動として、教員授業自己評価を実施した。教育学研究科では、626 科目が開講され、そのうち 313 科目について、履修者があった。その中で、教員授業自己評価を実施したものが 70 科目であった。入力率は 22%であった（対象科目として、修士論文の研究指導のための科目も含む）。

教員授業自己評価の質問項目のうち、29 番の「授業実施上の工夫」及び 30 番の「授業実施上の問題点・改善点」に着目する。これらの項目が記入されているものはおよそ 25 件あった。これらの自由記述の内容は、概ね以下のように分類される。

- 対象学生に関するもの：学生、社会人学生（現職教員）、留学生のような多様な履修学生への対応
- 内容に関するもの：実践的なものと学術的ものがあり、それぞれの工夫・問題点などの記述
- その他：ゼミの運営方法・少人数ゼミへの対応に関する記述

教育学研究科では特に社会人学生（現職教員）が数多く在学し、他の修士課程レベルの研究科にはない特徴である。学部卒業後直ぐに進学してきた学生と社会人学生では、特に教育学の実践的な分野において、経験や知識の差が大きい。さらには、留学生も少なからず在学している。これらの多様な学生が共にゼミナール形式の授業を行っていくためには、運営方法において工夫が必要である。このことについての自由記述が多かったように感じる。また、教育学研究科では、様々な学問分野があり、教育学の実践的分野と基礎的な分野、各教科の基礎となる学問分野、学際的な分野など、極めて多様である。そのため、学生ごとに興味を持つ分野が多様であり、このことによる問題点や解決のための工夫に関する記述があった。以上のことから、教育学研究科における FD 活動として、多様な学生が多様な学問分野への興味の下で参加する授業：特にゼミナールの運営方法や研究指導について、教員の間で知識・経験や問題解決のための工夫・方法を共有しあうようなものが必要とされていると感じる。

今後、授業に対する学生からの意見・感想などを聴取するような仕組み、例えば学生授業評価を実施することが求められる。学部の授業科目については、多数の学生を対象とした授業における授業技術に関する質問項目が中心であった。それに対して、教育学研究科で学生授業評価を実施する場合、少人数の多様な学生を対象としたゼミナールのための授業運営の手法・工夫や、多様な学生に対する研究指導についての質問項目を設定することが必要となるであろう。

第13章 経済学研究科のFD活動

第1節 平成19年度経済学研究科FD計画

平成19年度経済学研究科FD計画は、

1. (授業の)事例研究・報告
2. 全学FD研修会への参加

の2点である。この他に学生授業評価・教員授業自己評価がある。全学FD研修会に関しては、経済学部の全学FD研修会と同じなのでそちらを見ていただきたい。ここでは、主として授業などの事例研究・報告について紹介する。

第2節 事例研究・報告

経済学研究科では本年度から独自のFD活動を始めることとした。一方、学生数が少ないという本質的な問題があり、学部のように実際の講義に教員が参加するピア・レビューを行うことは難しい。そこで、授業や演習などの事例を報告してもらい、意見交換し、それらを参考に各先生方の今後の教育活動に役立ててもらおうこととした。

研究科には経済学専攻と企業経営専攻の2専攻と公共管理コースがある。経済学専攻からは塚田先生、企業経営専攻からは古川先生に報告してもらった。報告会の開催日時は平成19年7月18日で、経済学研究科から22名、大教センターから3名の参加者を得た。

以下、報告会の内容を紹介する。尚、項目の番号付けなど、一部変えたものもある。

1. 塚田先生の報告

- (1) 経済政策論A、B (旧 経済政策論)

当初(20年前頃)4単位、現在、各2単位。

(開講頻度)

約20年前から、原則、毎年開講。[留学時除く]

当初の10年ほどは土曜日第2コマ。受講者7、8名~10名前後。学生が出席しやすいと言っていた。(当時、土曜日の講義は子育て期間にあった私にも好都合だった。)

ここ数年は私の体力面、大学運営関連業務から、週日の昼か夜に開講している。

(2007年度は評価室長業務ゆえ、不開講。非常勤を依頼。)

(講義内容)

J. ロールズの『正義論』の第一部、150ページほどを詳しく解説。一回3、4ページ。最後の質問を受け、続いて10分ほど、講義内容に関する時事問題(新聞記事)を取り上げ、意見交換をした。

留学生の理解度…留学生からの質問はほとんどなかった。(日本人学生からは1、2あった。)日本語理解の難しさがあるよう。日本人学生を10とすると留学生の理解度は平均して8割ほどか?

試験はレポート形式で期末に一回。ここでは留学生もかなり書いてくる。つまり、時間をかければ文章では書ける。

*これまで一人だけ、原著も手元に置き、日本語の講義を聴きながら原文を読む学生がいた(日本人、県庁からの社会人)。

(感想:受講者、教員)

受講者

*最年長の村田君(受講時70歳ぐらい)…「ロールズの正義論の授業はおもしろかった。」(数年後、ある場で再会した時の発言。)

*山根君(東アジア博士課程卒業)…「大学院の講義らしい内容だと思った。あ、やっぱりこういうことだったんだ(こういうことが大事だったんだ)と考えることができた。」(卒業時、挨拶に見えた時。)

塚田

この講義では毎年、ある種の手応えのようなものを感じて講義できている。「興味をもち、考え、楽しんで聞いてくれている」、そういったことを学生の反応から感じられたような気がする。(集中して講義内容に「入って」聞いてくれている、という、あの雰囲気。子供に読み聞かせをする時、子供が引き込まれているときに感じるあの感じ。)

授業をしていて、学生たちが興味を持って聞いてくれていると感じること、また、卒業後、あの講義は楽しかったといってくれることは、やりがいを感じさせてくれる。自分でも非常に楽しめた講義。

ロールズについては、「この人は私たちにジャングルの中で広い運動場を作ってくれたような人。その中で私たちはいろいろなことを考え、動きまわり、いろいろなものを作ろうとすることができる。でこぼこしていたり、草が残っていたりするところもあるが、それも含めてこの運動場自体を作ってくれたというパイオニアである。」と考えており、この点を、つまり、時折批判、疑問を示しつつも、このすばらしい運動場の構造、広がり伝えられればと思っている。

(今後)

来年度以降、これまでと同様の内容で続ける予定。

(2) 外国書購読

(講義内容)

2005年度に一回。ロールズの正義論について英語で講義。出席者は1名。(フィリピンからの留学生。)英語に堪能。学力、理解力も高かった。

最初の2、3回は、全体像を説明。その後はテキストに沿って解説。

(感想)

講義内容を非常に楽しんで聞いてくれ、講義に積極的に参加(質問、自分の意見を言う)してくれた。

終了時、「楽しかったので、ほかの留学生もこれに出席できれば良かったと思う」との感想があった。私も楽しかったが、他の学生たちも同様に理解でき、楽しんでくれるかは未知数である。

(3) 演習1、2

(指導内容)

研究テーマに沿って毎回、あるいは隔週報告をさせ、コメントする。

卒業生

嶋田 ハンナ・アレント研究 その後九大博士課程に進学。

中尾 医療保険研究 当時、県立大教員。その後九大 [医] 教員に転出。

在学生

朴 中国の所得格差研究 (家庭問題から種々な問題を経験)

吉野 現代社会の労働研究 現場で持ち続けた労働、福祉などへの問題意識が土台。
強い研究意欲、興味。

(4) 公共政策コース：Seminar I、II

卒業生

Khan 日本の地方行政研究 バングラディッシュ公務員

Iqbal 日本の地方行政研究 同上 [二年目から]

(5) 参考 研究者・研究生指導

・研究者

修了者

宋 日本の経済政策研究 山東大学教員

宋 日本の経済政策研究 遼寧大学教員

在日期间中の研究テーマについて指導。論文の原稿へのコメントも。

・研究生

全員が修士進学希望者なので、経済学の基本テキストを示し、それに沿って指導。

修了者

劉 佐賀大学に進学 現在、中国で教員

Ngiraibelas 米国4年生大学卒業。日本政府国費留学生。1年日本社会を研究し、帰国。

指導中

夏 修士進学希望

ペイ 修士進学希望

常 修士進学希望

(感想)

中国からの研究生志望者が増加。

留学中のまたは卒業後の留学生の知人が希望するケースと、私のHPを見て希望してくるケースに分かれる。

全員、スタート時の勉学意欲は強いが、日本語が最大の問題、難関。(東アジア研究科の学生を見ても、まだまだ日本語がしっかりと使いこなせていない中国人留学生も若干いる。…)

2. 古川先生の報告

(1) 古川先生の報告の内容

以下は、古川先生の報告の内容をメモしてもらったものである。(2)と(3)は古川先生の配布資料である。

大学院生指導の基本スタンスは、修士論文の5つの基準（形式要件、論理性、発展性、独創性、体系性など←主観的に評価）を満たさせることをめざしている。

台湾、韓国からの留学生は日本と同じような教育を受けている。中国からの留学生は高校まで中国、そのあと日本の大学を卒業した者だった。ただし、この場合の日本の大学は山大よりレベルが低い。したがって、論文を書く能力は学部1年生より低く、向学心があっても限界がある。

修士論文完成直前の正月は毎年返上状態。自宅に来させて指導しているが、かなり教員が書いているともいえる。

修論完成までのスケジュール

- ・ 1年生：論文素稿を前期と後期に提出させている
- ・ 前期は研究テーマ、研究手順の指導、
- ・ 後期は先行研究、独創性、論文構成について指導している。

1年生段階の問題点

1. 基礎知識レベルが問題意識形成に影響を与えている。入試関門の問題。
2. 独創性認識の欠如：在学目的が学位取得で論文は手段というスタンス。
3. 修士論文への認識不足：レポート感覚

中国の教育では暗記の訓練が重視されているため、独創的な思考や創造性というものに価値を置かない。剽窃が多い。

2年生：春・夏季指導で2回以上完成稿形式で提出させる。
指導の要点は、独創性、体系性、形式要件について。

秋季も9月から10月にかけて2回以上指導をしている。年末年始は自宅指導。

発表者の談話より

「論文作成手順の指導については、現状では教員が個々に行なっているが、科目として新設してもよいのではないか？」

「論文のレベル維持のため、修論の審査を2回にする。」

「評価のアンバランス（厳しい教員と甘い教員が並存している）」

「総じて、大学院の指導には非常にエネルギーをとられる。特に後期。」

(2) 修士論文作成スケジュール

○1年生

論文素稿を前期と後期に提出

前期の指導のポイント → 研究テーマ、研究手順の指導

後期の指導のポイント → 先行研究、独創性、論文構成

そして、論文作成2ヵ年プロジェクトを示す（スケジュール化）

○2年生

春～夏季指導（4～5月）

2回以上、完成稿形式で提出

この時期の指導のポイント → 独創性、体系性、形式要件

秋季指導（9～10月）

2回以上、完成稿提出

この時期の指導のポイント → 論理体系、形式要件

修論最終稿提出（11月初旬）

この時期の指導のポイント → 全文内容、字句詳細・厳密訂正

最終指導（12月中旬～1月初旬）

逐語的訂正指導。通常は年末年始に自宅指導になってしまう。

以上のスケジュールにて修士論文完成。

(3) 指導経験から得た問題意識と対応について

○1年生段階での問題点

- ・基礎知識レベルが問題意識形成に影響 → 入試関門の問題でもある
- ・独創性認識の欠如 → 在学目的とその手段についての認識が関係している
- ・修士論文への認識不足 → レポート感覚、剽窃に無頓着
- ・学部教育・社会経験が修士学生の知識・認識を縛る

○2年生前期段階での問題点と改善点

問題点	改善案
修士論文作成方法に対する知識の不足	論文作成に関する授業科目開設（1年次）
独創性認識の欠如と先行研究指導の必要性	授業科目開設（上記科目で指導）
修士論文への認識不足	評価基準の具体的提示と基準に従った指導

○2年生後期段階での問題点と改善点

問題点	改善案
修士論文の作成行き詰まり	論文作成に関する授業科目開設（1年次）
修士論文への認識不足	<p>評価基準の点数化</p> <p>論文2段階審査→10月初旬第1審査 無記名、形式要件、論理性の 3名教員による点数評価 面接無し</p> <p>第1審査合格者→1月最終審査（独創性、体系 性の3名教員による点数評 価。面接有り。</p> <p>第1審査では指導教官は審査委員を外れる。</p>

	<p>点数評価では詳細なチェックリストを作成する。</p> <p>3名の審査委員は各自評価点封印提出。</p> <p>研究科委員会が平均点を出し、研究科会議へ原案提出→合否決定</p>
--	--

2. 参加教員から出された意見や感想など

以下、参加教員の意見、感想、質疑応答等を報告する。複数の教員がメモしたものであり、一部重複などがあるが、個別教員名などは除きそのまま載せておく。

- [教員 A] 上級生に下級生の指導をさせてはどうか？有益だと思うが。
- [教員 B] 悪くはないが、山大にはないシステム。
- [教員 C] 修士2年生には修士1年生を教える力量がない。2年生は修論で忙しい。
- [教員 D] 博士課程があればできるが、修士課程だけだと困難。

- [教員 A] (留学生は) 論文の書き方が分かってない。
- [教員 B] 論文の書き方を理解させるため、修士課程の留学生を学部の卒論演習に参加させている。
- [教員 C] アメリカでは最初にリサーチ・メソドロジーを教えている。
- [教員 D] 昔は先輩のやり方を見ていれば良かったが、今はそういう時代ではなく、リサーチ・メソドロジーを教える必要がある。
- [教員 E] 論文の体裁(?) とリサーチメソドロジーは違う。リサーチメソドロジーだけではいけない。
- [教員 B] リサーチメソドロジーというのはもっと広いものだ。
- [教員 F] 神戸大学の経営学研究科では(リサーチメソドロジーについて?) 外部の方に集中講義をお願いし、それをもとに作成したものを使っている。

- Q 大学院生同士(1年生と2年生等)の相互交流はないのか
- A 複数いなかったため、相互交流というものはなかった。

- Q 大学院生の修了後の進路と入学のことも踏まえてどのようなことが大切か。
- A 修士論文を書ける能力が重要である。そのために、授業科目として修士論文の書き方を教える講義科目があった方がよい。就職の紹介については、いずれの学生も研究者志望であったため、博士課程へ進学したため、就職の問題はなかった。
- A 学生からは就職の紹介をしてほしいとの依頼はあるが、就職先についての情報を持っていないので、できない。

- Q 中国の研究者はどのような経緯によって塚田先生の研究室で指導することになったか
- A 学部からの紹介である。

- Q 東アジア研究科への進学等など連携した指導をしているか。
- A 進学を予定している学生がいた時はまだ、東アジア研究科がなかったので、九州大学、山口大学の医学部の大学院に進学した。

- Q どのような人材を院生として受け入れているか。
- A 国費の学生、企業に勤めている人、他の修士課程でまなんだことのある人は受け入れている。

A テーマで募集をしているが、志望する本人がテーマを持ってくる場合もある。

Q 修士論文の指導はどのようにしているか

A 海外からの留学生は、日本語の修正が大変である。秋から 3 回程度論文の手直しをするが、最後には日本語を全面的に書き直す方が早いときがある。

A 4 年生の卒業論文レベルには書いてほしい。修士の学生も 4 年生の卒業論文指導にも参加させるようにしている。

その他の意見

研究の方法論、論文の書き方を学ぶことも必要である。米国では、**Research Methodology** は大学院では必ず履修するシステムになっている。神戸大学大学院では、この科目の専門家を招いて講義をもらい、映像として残して、利用できるようにしている。科目を設けるべきである。だれかの論文を見て、個人で学ぶというものではない。共通教育で、論文の書き方を学ぶ講義として、小論文の書き方を教え、実際に何度か書かせることをしている。

第 3 節 その他

平成 19 年度山口大学経済学部・経済学研究科評価委員会委員

木部 和昭 渋谷 綾子 松井 範惇 三間地 光宏 朝日 幸代
柳澤 旭(委員長) 柏木 芳美(全学 FD 委員。文責)

第14章 医学系研究科

第1節 概要

平成19年4月より、大学院FD活動が法律で義務付けられた。本年度は法律施行の初年度であることで、本研究科では大学院FD活動の基盤づくりに重点をおき、以下の内容を企画し、実施した。

- 1) 大学院教育の実質化をめざして
- 2) 研究計画書の書き方について
- 3) 大学院生による授業評価・教員自己評価のあり方とその徹底について
- 4) FD活動のための組織の基盤づくり

その結果、1)「大学院教育の実質化をめざして」において、実施後のアンケート調査からも、参加した教員は大学院教育の実質化の重要性について、認識できたといえる。また、大学院の学生授業評価実施率については、実施率計算に由来から、開講はしているが、学生が受講していない科目も入っていたため、実際の実施率とかけ離れた低い実施率となっていた。そこで、今年度は実際の実施率が反映されるように受講していない科目は計算式からはずしてもらい働きかけ、改善した。今後のFD活動については、組織づくりの推進、学生授業評価・教員自己評価の高い実施率、研修会の開催およびピア・レビューの定着により、さらにその活動を促進していきたい。

本稿では、今年度医学系研究科における取り組みの内容を説明し、FD企画の実施実績、今後の課題を述べる。

第2節 実施内容

(1) 教育、研究および管理における教員の資質向上について

今年は、教員の研究指導能力を高めることを目的に研修会「研究計画書の書き方について」を開催した。これにより、研究活動が促進して、科学研究費、受託・共同研究など外部資金獲得が増加し、組織の経済基盤の安定化がはかれるとともに、研究活動から得られる科学的思考の向上は学生により一層の感動を与え、教育の改善につながっていると考えている。

(2) 学生による授業評価実施率向上について

授業評価等の保健学科独自の授業支援システムを用いた実施、教育活動評価及び授業改善の企画等をより具体的に、実践的に行うための大学教育の企画、実施を推進してきた。さらに、このシステムにより、現在では保健学専攻の学生が授業評価を自身のパソコンから、毎回あるいは期間振り返りで実施できること、またきめ細かい学生からの意見の収集や、双方向教育として課題配信と個別教授など、教育の改善・向上につながっている。

尚、学生が少数であるため、開講しても受講者のいない科目があり、従来はこれが学生の授業評価実施率に計算されていたため、実施率が実際よりたいへん低く算出されていたが、改善を求め、実際の学生授業評価実施率に反映されるよう改善した。

(3) 組織の基盤作り

初年度であり、予算化されていない中で大学院FD活動の開始であったが、本学との懇談会において、FD委員として予算化を要望し、学長から次年度からの予算化を確約していただいた。

医学系研究科は学部の違い 5 領域からなり、所属教員への研修会の案内等の連絡は総務課企画・評価係より配信してもらった。

研究科教員が「大学院教育の実質化」を認識でき、今後、全教員が一丸となって教育の質向上に励むことができるように、大学教育センター長岩部浩三先生の協力をえて、研修会を開催した。

第 3 節 研修会などの企画・実施実績：

第 1 回 平成 19 年 9 月 2 日「研究計画書作成指導について」

講師：医学系研究科教員 小林 誠 先生、医学系研究科教員 岡 正朗 先生

研究協力課の科学研究費申請説明会と医学系研究科 FD 活動の共催の形で実施した。

大学院で学生を指導する上での研究計画書作成指導ならびに学生の研究が円滑に指導できるように科学研究が採択されるための申請の仕方やつなどについてのノウハウを学んだ。

(参加者 96 名)

第 2 回 平成 20 年 2 月 28 日「大学院教育の実質化をめざして」

講師：大学教育センター センター長 岩部 浩三 先生

研究科教員が「大学院教育の実質化」を認識でき、全教員が大学院教育の質向上に励むことができるように、大学教育センター長岩部浩三先生の協力をえて、研修会を開催した。

結果、研修会直後のアンケート調査により、出席した教員は各自、大学院教育の実質化の必要性を認識できていた。

(参加者 44 名)

第 4 節 今後の課題について

大学院 FD 活動が義務化され、初年であったが、今後、大学院教育の実質化に向けて FD 活動が円滑に進むよう基盤作りを推進することが必要である。平成 19 年度は大学院 FD 活動の組織づくりの基盤に着手し、一定の成果は得られたと思われる。平成 20 年度から FD 活動が予算化されるので、より活発に FD 活動が展開できると思われる。しかし、一方で全学 FD 委員会がなくなるので、教学委員と連携をとり、FD 活動を進める必要があろう。さらに法律との関連により、早急に研究科 FD 委員会規則を作成する必要がある。また、偏りなく、5 領域全ての教員が積極的に FD 活動に取り組むことが必要である。その上で、1) 教員の自己改革など資質向上、2) 学生授業評価及び教員授業評価の実施とその活用、3) ピア・レビュー・授業研究会の企画・実施による組織および個人レベルでの教員の能力開発などの課題に重点を置き、企画・実施を目指すことが必要であろう。

1) 医学系研究科 FD 委員会の設立と大学院委員会規則の作成

平成 19 年度は全学委員会に医学系研究科選出委員として 1 名選出されており、初年度として企画・運営は保健学科 FD 委員と研究科長との相談の上で、実施した。大学院には FD の委員会規則が法律上求められるが、平成 20 年度より全学 FD 委員会がなくなるため、早急に、研究科として、医学系研究科 FD 委員会の設立と大学院 FD 委員会規則を作成することが必要である。

2) 「自己改革など更なる教員の資質向上」をはかる

社会は大学院教育に大きな期待をしている。その中で大学の社会に果たす役割は非常に大きいと考えられ、さらなる自己改革により教育の質向上を行うと共に、外部資金獲得による経済的基盤の

安定化を計るとともに、柔軟で建設的な組織内連携・融和の促進によって、さらなる社会貢献をめざすことが必要であろう。

3) 「学生による授業評価及び教員授業評価」の実施率向上とその活用を計る

昨年度の、学生による授業評価入力率は 80%と極めて高い。今後とも、教員が自らの教育改善のために客観的評価に注視し、教育改善をめざすことが必要であろう。

今年度は、「ピア・レビュー」及び「授業研究会」は、実施していない。しかし、教育改善における基幹課題とされる「ピア・レビュー」及び「授業研究会」を企画・実施は重要である。経験や自分本位の知識伝授だけではなく、「学生にとってわかりやすい授業」、「如何に分からせるか」が重要と考えられた。今後、より多くの教員が互いに公開授業を実施し、さらに授業の改善を計りたい。

4) 「各領域の教員が大学院 FD 活動に参加すること」を意識づけ、定着させる。

医学系大学院は 5 領域から構成されており、FD 研修を開催しても、参加する教員の領域に偏りがある。大学院 FD 活動は法律で義務化されており、また、大学院教育改革などの研究費は大学院 FD 活動が審査時の条件として組み込まれていること、第三者による大学評価にも FD 活動の実施状況・内容なども入っていることを考えるならば、研究科全教員に関心を持っていただくよう、委員会として積極的に働きかけることが必要であろう。

特に保健学専攻と応用分子専攻は完成年度を迎えておらず、学年進行中であることも教員全員が認識し、大学院 FD 活動に取り組む必要がある。

第 5 節 資料・平成 19 年度大学院 FD 活動文部科学省報告書 項目

平成 20 年 3 月に文部科学省からの要請により、以下の項目平成 19 年度大学院 FD 活動報告書を文部科学省に提出した。

- 設問 1) 委員会の設置状況(委員会規則も添えて)
- 設問 2) 委員会の開催状況(教員の参加状況含む)
- 設問 3) 委員会の審議事項等
- 設問 4) FD 活動実施内容
- 設問 5) FD 活動実施方法
- 設問 6) 開催状況(教員の参加状況含む)

第15章 理工学研究科のFD活動

第1節 理学系

平成19年度の理工学研究科理学系の主なFD活動は次の3点である。

- (1) 全学FD研修会への参加
- (2) ピア・レビューの実施
- (3) 授業評価の実施

(1)の全学FD研修会への参加については、理学部のFD活動の部分と重複するので、そちらを参照して頂きたい。ここでは、それ以外の活動内容について記す。

1. ピア・レビュー

理工学研究科理学系のピア・レビューは物理学、化学、地球科学の各分野で行われた。

1.1 物理学分野

(1) 授業科目：物理学ゼミナールⅠ・Ⅱ

日時：2007年4月17日(月)1・2時限

場所：第15講義室

対象学生：大学院1・2年生、物理・情報科学専攻

担当教員：輪島 清昭

レビューアー：鏑木 修、増山 博行、原 純一郎、繁岡 透、朝日 孝尚、白石 清、芦田 正巳、野崎 浩二、藤澤 健太、藤原 哲也

実施要領：(1) 分野会議(メールによる持ち回り)で実施を決定し、講座全員に出席を依頼した。

(2) 実施直前に、実施場所と実施日を通知し講座全員に出席を依頼した。

(3) プロジェクターを用いた教員による研究概要説明

(2) 授業の目的・内容

教員による研究経過講演会。講演題目：「短時間強度変動を示す活動銀河中心核の高分解能観測」
大学院生に、教員が行っている研究内容を知らせること、プレゼテーションの手本を示すことを目的とした。

(3) 授業に対する意見・コメント

- ・大変わかりやすい講演であった。
- ・学生にいい見本となると思います。
- ・図や写真など聴衆の興味をひく工夫が大変よくなされている。
- ・話し方は大変よく、聞き取りやすかった。
- ・学生の質問が少なかった。

1.2 化学分野

(1) 授業科目：環境共生化学・生物科学ゼミナールⅠ及びⅡ

日時：2007年12月10日 18:30～19:30

場所：機器分析実験施設 講習室

対象学生：理工学研究科M1 & M2

担当教員：佐々木 義明、田頭 昭二、山崎 鈴子、村上 良子

レビュアー：5名

配布物：プリント

(2) 授業の目的・内容

「環境共生化学・生物科学ゼミナール I」（修士1年・通年）、「環境共生化学・生物科学ゼミナール II」（修士2年・通年）、及び「文献講読」（学部4年生・通年）の合同授業。

研究室毎で個別に行われる上記授業であるが、月1回程度、2研究室合同で開催。レポーターとなった院生・学生は、修士論文研究あるいは卒業論文研究に関連するテーマについて、英語で書かれた専門書や原著論文を自分で見つけ出し、事前に読んで理解しておきます。発表当日は、レジメを使いながらその内容を紹介し、その後、出席者とのディスカッションを行った。

レポーターとしての役割を果たす中で、研究内容のより一層の理解、新規な問題点への興味の喚起および文献調査・プレゼンテーションの能力を高めることを狙いとしている。また、聞き手として参加している院生・学生には、積極的に質問し議論に参加することを求めており、そうすることで、研究分野の異なる発表をその場で理解し、質問する能力を養うこともこの授業の目的としている。

(3) レビュアーからの意見・コメント

1. 講義&演習の内容についての指摘

- 充実した内容の授業となるかどうかは、レポーター及び参加学生・院生が、授業の意義を自覚し、どれだけ積極的に関わろうとするかどうかにかかっていると思われる。今日の授業においては一定程度の積極性が見られ、目的が達せられていたと思う。
- LITEでは、説明役と聞き役としてほとんどの学生が真面目に取り組んでいたが、全くやる気がなく無視していた学生もいた（学生からは、LITEに関しては概ね理解に役だった、楽しかった、という感想が寄せられた）。

2. その他改善を要する点の指摘

- 良い授業形態であると思います。
- 最初なかなか質問がでなかったが、教員がコメントをする（説明の仕方についてのアドバイス）ことにより、発表者が図を説明し直した後は、活発に質疑応答がなされた。学生同士での議論が進みやすい様に工夫されており、授業自体が十分達せられているように思う。
- 質問者が少ない。もっと多くの人が質問する工夫を。
- 発表する学生にとっては発表するスキルや質問に答える練習となり、参加している学生にとっては質問する練習になっており、全体に良い効果があると思う。
- 意見を言おうとする姿勢が見られ、受身になっている学生があまりいなかった。自分の研究室のゼミではそのような姿勢が見られないのを残念に思った。他の研究室のゼミがどのような感じなのか、以前から見学したかったのですが、今回勉強になりました。見習いたいと思います。
- 全般にもう少し詳しく説明してもらいたかった。板書ももっと具体的な説明がほしかった。インジウムが分離操作により、どの存在状態で溶液に移動するのかまたは固相に存在するのか詳しい説明がほしかった。また、共存するイオンについても、条件下での存在状態について説明が必要と思われた。
- 全体を通して、もう少し大きい声で、はっきりと説明して欲しかった。

3. 担当教員コメント

今回の発表もそうでしたが、発表者は当日話す台詞を書いた台本を準備しており、当日はそれを読み上げます。しかし、話し始めると文字を追うことに夢中で、参加者の表情を読み取るこ

ともなく、理解されているかどうか、興味をもたれているかどうかなど全く関心がないように見えます。このゼミナールの目的の一つにプレゼンテーション能力を高めるとことも含まれているので、発表者がその論文を理解することだけでなく、よりわかりやすい説明がなされるよう指導する必要があると思います。

1.3 地球科学分野

例年「地球科学セミナーI、II」に関して、教員・大学院生全員参加のもと「教室談話会」を設け、毎月1回、水曜日に2～3時間にわたって、研究発表と討論を行っている。毎回M1大学院生から2件、教員から1件の演題を提供し、相互に討論を行っている。教員は、個別の研究紹介ではなく、自分の専門分野の全般的レビューを行うよう努めている。

今年度実施した演題は下記のとおりである。

○第1回：2007年5月30日

相山 光太郎 (M1)：山口県北東部迫田一層雲断層の性状と活動性

芦澤 政臣 (M1)：佐賀県天山における山体内の地下水流動及び結晶質岩盤の透水性割れ目の発達

加納 隆(教員)：飛騨帯とはどのような地帯かー日本の地質における飛騨帯の位置

○第2回：2007年7月4日

池永 佐依 (M1)：大陸地殻の組成と火星隕石の岩石学的特徴

江里口 裕也 (M1)：九州全域の地震活動解析

君波 和雄(教員)：西南日本の中生界テクトニクスに関するいくつかの問題

○第3回：2007年7月25日

尾崎 かおり (M1)：重力流堆積物の塊状部にみられるトラフ状浸食構造と高角度インブリケーション

木下 生一 (M1)：西南日本ジュラ紀付加体砂岩の地球化学層序

澤井 長雄(教員)：西南北海道積丹ー洞爺ー支笏地域の熱水鉱床の形成時期

○第4回：2007年10月3日

浜田 好弘 (M1)：紀伊半島田辺層群のダイアピル、泥岩岩脈、含礫泥岩

山田 周作 (M1)：佐賀県・天山周辺の岩石構成と変成作用

鎌田 祥仁(教員)：ジュラ紀付加体におけるユニット境界断層としてのウルタクレーサイト

2. 授業評価の実施

大学教育センターのデータによる平成19年度の理工学研究科の学生授業評価実施率は79.5%であるが、理学系修士課程のみの授業評価実施状況は以下のとおりである。ただし、個別指導科目である特別研究とか、学外からの非常勤講師による、その年限りの集中講義は実施対象から除いている。

前期：

実施対象科目数 21

実施科目数 20

後期：

実施対象科目数 19

実施科目数 17

平成19年度実施率： 37/40 (92.5%)

平成19年度理工学研究科授業評価対象科目(理学系修士課程)

開設科目コード	学期	曜日	時限	授業科目名	担当教員	受講者数
27000003001	前			化学・生物科学特論	田頭昭二	41
27001002001	前	木	5・6	解析学特論Ⅱ	加藤崇雄	20
27001006001	前	火	5・6	代数学特論Ⅱ	吉村浩	25
27001008001	前	木	7・8	表現論特論	井上透	18
27001012001	前	火	7・8	位相幾何学特論	宮澤康行	27
27002001001	前	月	3・4	統計物理学特論	原純一郎	8
27002004001	前	水	3・4	物理数学特論	芦田正巳	14
27002009001	前	木	3・4	結晶物理学特論	笠野裕修	12
27002011001	前	火	5・6	宇宙物理学特論	鎬木修	15
27002012001	前	金	3・4	電波天文学特論	藤澤健太	22
27002019001	前	月	5・6	情報伝達特論	吉川学	21
27003003001	前	月	5・6	惑星鉱物学特論	三浦保範	8
27003004001	前	火	7・8	資源物質学特論	澤井長雄	8
27003005001	前	月	3・4	結晶成長学特論	阿部利弥	8
27003006001	前	火	3・4	岩石化学特論	大和田正明	16
27003013001	前	火	5・6	微化石層序学特論	鎌田祥仁	16
27010204001	前	火	1・2	反応有機化学特論	石黒勝也	27
27010211001	前	月	1・2	環境共生化学特論	石黒勝也	14
27010239001	前	火	1・2	分子生物化学特論	山中明	43
27010244001	前	金	1・2	天然物有機化学特論	阿部憲孝	35
27010245001	前	木	1・2	物性化学特論	川俣純	39
27000002001	後			物理・地球科学特論	加納隆	19
27001005001	後	火	3・4	応用代数学特論	菊政勲	14
27001011001	後	火	5・6	特異点論	安藤良文	15
27002002001	後	水	3・4	素粒子物理学特論	白石清	3
27002010001	後	木	3・4	固体物理学特論	朝日孝尚	9
27002014001	後	月	5・6	計算構造学特論	松野浩嗣	7
27002015001	後	木	5・6	バイオメカニクス特論	西井淳	9
27002017001	後	水	5・6	知的画像処理特論	末竹規哲	17
27002018001	後	火	3・4	計算物理学特論	山本隆	11
27002021001	後	水	3・4	応用シミュレーション特論	吉川学	14
27002023001	後	金	3・4	情報科学特論Ⅱ	山本隆	10
27003008001	後	月	5・6	構造地質学特論	金折裕司	6
27003009001	後	火	5・6	自然防災学特論	田中和広	8
27003010001	後	火	3・4	堆積学特論	宮田雄一郎	13
27010003001	後			環境共生学原論Ⅱ	藤島政博	90
27010201001	後	金	1・2	分析学特論	佐々木義明	25
27010203001	後	月	1・2	配位化学特論	右田耕人	17
27010207001	後	月	3・4	有機金属反応化学特論	藤井寛之	21
27010209001	後			細胞進化学特論	藤島政博	19

3. その他のFD活動

「情報科学ゼミナールの改善」について

情報科学分野においては、従来、大学院での情報科学ゼミナールの実施形態は、各研究室でのゼミ形式として行われていた。

これの改善として、平成17年度から、修士1年の段階で修士論文発表会と類似の形式で発表する発表会を上記ゼミ形式に追加することとなり、他の研究室の院生が互いの研究内容を見聞する機会が与えられた。また、他の教員からの質問も可能であり、2年生の差し迫った段階での発表への質問と異なり、質問自体が特別研究における早めの段階での有意義な助言となりうることになり、院生に対する教育が改善されることが期待された。

平成18年度から改組となり物理・情報科学専攻となったが、情報科学分野では引き続き、情報科学ゼミナールについて同様な形態で発表会を実施した。

平成19年度の情報科学ゼミナールの発表会の実施にあたり、実施形態の点検を行った。情報分野の会議で、いろいろと問題点について議論した。問題点を集約するとつぎのようになった。

- ①発表者は研究室においての発表と同様熱心に発表しているが、聴講している学生はそれほどの熱意は感じられない。
- ②質問するのは同じ学生になっている。研究室では質問する学生も教室となると質問していない。

以上のような問題点を改善する方向として、実施形態の見直しを議論して、結果としてポスターセッションの形態をとることになった。

以下のような方法で実施した。

大学院生16名を4グループに分ける。展示発表場所は4箇所。

話し手：2回～3回発表する（目標3回）

聞き手：6件～9件聞く（目標9件）

話し手は質問応答時間の長短を計算して説明時間を適宜調節する。

学生はあらかじめアンケート用紙が配布されており、印象や理解しやすかったかどうかなどについての評価を記入してもらう。短時間で記入できるように、回答が5段階で与えられていて、選択しやすくなっている。記名式で、発表会終了後に提出してもらう。

実施結果としては質問が活発となり、改善がみられた。話し手との目線の高さや、近距離、少人数ということの効果があったものと思われる。反省点としては、発表場所が接近していたこともあり、隣での発表がかなり雑音となっていたところもあった。

平成19年度 理工学研究科理学系FD委員会委員

数理科学分野	増本 誠	井上 透 (委員長)
物理・情報科学分野	繁岡 透	吉川 学
生物・化学分野	村上 柳太郎	田頭 昭二
地球科学分野	加納 隆	

第2節 工学系

平成19年度の理工学研究科工学系の主なFD活動は、次の2点である。

1. 全学FD研修会への参加
2. 授業評価表彰

全学FD研修会への参加については、工学部のFD活動の部分と重複するので、そちらを参照して頂きたい。理工学研究科工学系では、本年度より新たに授業評価表彰を始めた。学生による授業評価は既に段階的に実施しており、昨年度はほぼ全部の授業で行われた。この結果を受けて、優秀な授業を表彰することでこれを讃えると共に一層の改善を促し、また他の授業への波及効果を期待している。

以下に、理工学研究科工学系の優秀授業表彰一覧を示す。

平成18年度優秀授業表彰一覧

番号	開設科目名	担当教員名	専攻	学年	表彰種類
1	微分方程式学特論	岡田真理	数理科学	-	最優秀授業
2	構造材料学特論	吉武勇	社会建設	1	最優秀授業
3	施設構造工学特論	清水則一	社会建設	1	優秀授業
4	公共政策論	榊原弘之	社会建設	1	優秀授業
5	都市環境工学特論	今井剛	社会建設	1	優秀授業
6	土木計測学特論	今井剛	社会建設	1	優秀授業
7	固体触媒特論	今村速夫	物質化学	1	最優秀授業
8	反応制御化学特論	中山雅晴	物質化学	1	優秀授業
9	有機量子化学特論	笠谷和男	物質化学	1	優秀授業
10	固体物性論特論	嶋村修二	電子デバイス	1	最優秀授業
11	半導体光物性特論	山田陽一	電子デバイス	1	優秀授業
12	スピン応用学特論	浅田裕法	電子デバイス	1	優秀授業
13	電子計測特論	西藤聖二	電子情報システム	1	最優秀授業
14	ソフトウェアシステム工学特論	田中稔	電子情報システム	1	最優秀授業
15	電力変換工学特論	田中俊彦	電子情報システム	1	優秀授業
16	空間造形学特論I	内田文雄	感性デザイン	1	最優秀授業
17	環境エネルギー工学特論	中村安弘	感性デザイン	1	優秀授業
18	デジタル映像処理特論	三池秀敏、長篤志	感性デザイン	1	優秀授業
19	生体触媒化学特論	福永公壽	環境共生	1	最優秀授業
20	都市防災システム特論	瀧本浩一	環境共生	1	優秀授業
21	情報環境システム特論	中村秀明	環境共生	1	優秀授業
22	環境分子化学特論	喜多英敏	環境共生	1	優秀授業

理工学研究科工学系の公開授業に関しては、FD活動を主管する工学部点検・評価委員会（第9章参照）において論議されたが、各授業によって授業形態が大きく異なるために、今後の調査を待たざるを得ないとの結論になった。

第16章 農学研究科のFD活動

第1節 はじめに

(1) 平成19年度FD計画

- 1) セミナー（農学部公開講演会と共催）の実施
- 2) 教員による授業自己評価の実施
- 3) 全学FD研修会への参加

(2) 活動および報告内容について

農学研究科のFD活動は、平成19年度よりはじめて上記のような計画をたて、「セミナー」、「授業自己評価」、「全学FD研修会」を中心に実施された。

以下にその具体的実施状況を報告し、それぞれについて総括するとともに、今後の問題点を指摘する。

第2節 セミナー（農学部公開講演会と共催）

(1) 開催セミナー一覧

	開催日	演題	講師	分野
1	5月31日	植物の環境ストレスにおけるアルデヒド化合物の作用	真野純一	生物機能科学分野
2	11月9日	糖タンパク質の品質管理における糖鎖機能の解明ー鶏卵白オボアルブミンをモデルとしてー	松富直利	生物機能科学分野
3	1月9日	分子昆虫学研究室立ち上げ4年間の主要研究成果報告	小林 淳	生物資源環境科学分野

(2) セミナー内容要旨

1) 「植物の環境ストレスにおけるアルデヒド化合物の作用」

環境ストレス（高温、低温、乾燥、紫外線、オゾンなど）は植物の炭酸固定を阻害することで「光過剰」状態をもたらす。この過剰な光エネルギーにより生成する活性酸素種（ O_2^- 、 H_2O_2 、 $1O_2$ など）が、植物の環境ストレス傷害の主因であると考えられている。

一方、酸化ストレスによって脂質が酸化され過酸化脂質が生成するが、これはさらに分解されて多様なアルデヒド化合物を生じる。その中でも α,β -不飽和アルデヒド（活性アルデヒドとよぶ）は反応性が高く、タンパクや核酸を修飾する細胞毒として知られている。我々はシロイヌナズナの新規抗酸化因子の機能究明から、活性アルデヒドの α,β -不飽和結合を特異的に還元する2-アルケナルレダクターゼ

を発見した。この酵素を過剰発現したタバコが強光耐性、パラコート耐性、オゾン耐性を示したことから、さまざまな環境ストレス下では、葉で活性アルデヒドが生じ、それが細胞損傷の原因となること、活性アルデヒドの消去はストレス防御の重要な機能の一つであることを示してきた。現在の主要な疑問は以下の3つである。

1. 植物（特に葉）では、アルデヒドはどんな条件でどのようにして生成するか？（生成メカニズム、生成分子種と植物の生理的条件との関連性）
2. アルデヒドのターゲットは何か？
（アルデヒドによる傷害のメカニズム）
3. 植物細胞の各コンパートメントで、アルデヒドはどのように消去されるか？
（とくに葉緑体でのアルデヒド消去メカニズム）

これらの課題に関する関連研究の状況を概観し、我々の現在の取り組みと最近の研究結果を紹介したい。

2) 「糖タンパク質の品質管理における糖鎖機能の解明ー鶏卵白オボアルブミンをモデルとしてー」

タンパク質は翻訳後修飾により、遺伝情報を超えた新たな機能を獲得し、多彩な細胞機能を発揮することができるようになる。翻訳後修飾の中心的なものの一つに糖鎖修飾があり、全タンパク質の約50%以上が何らかの糖鎖付加を受け、タンパク質機能に必須な役割を果たしていることが知られている。特に、N-結合型糖鎖は、フォールディング、輸送、仕分け、細胞認識等でかなめ役割をしている。一方で、糖鎖の異常がタンパク質のアンフォールディングを生じ、様々な疾病（とくに、アンフォールディング病）を引き起こすことも明らかになりつつある。こうして、糖タンパク質の生合成や分解などの異常によるヒトの疾患の原因究明の点からも、糖鎖の機能解明が重要である。

N-結合型糖タンパク質オボアルブミンは、その一次配列において2箇所（Asn-292、Asn-311）にN-結合型糖鎖認識配列を持っている。しかし、鶏卵白中では、オボアルブミンはAsn-292にのみ糖鎖を持つモノグリコシル化型として存在する。一方、Katoらは、オボアルブミンが輸卵管で一時的にジグリコシル化型として発現されていることを報告している（Arch. Biochem. Biophys., 1986）。さらに、Suzukiらは、輸卵管中のペプチドN-グリカナーゼがオボアルブミンのAsn-311に付加した糖鎖を特異的に切断することを報告し、卵白中のオボアルブミンがモノグリコシル化型で存在する理由を示した（Proc. Natl. Acad. Sci., 1997）。しかし何故、Asn-311に糖鎖が付加したジグリコシル化オボアルブミンが合成され、その後部位特異的に切断されて卵白に移行するのだろうか。また、卵白中にオボアルブミンの非グリコシル化型は検出されていないことから、糖鎖修飾とタンパク質の機能とが密接に関係していることを示唆するが、ジグリコシル化型は卵白中には存在しないし、輸卵管でも一時的にしか存在しないため、オボアルブミンでの糖鎖機能は不明のままである。一方、最近、Yoshidaらは、糖タンパク質のN-結合糖鎖が細胞質内の糖タンパク質のクリアランスのタグとして機能していることを示し（Nature, 2002）、新たな糖鎖機能を見い出している。

筆者らは、酵母発現系を用いて、オボアルブミンの発現・分泌を研究する中で、モノグリコシル化型に加えてジグリコシル化オボアルブミンが分泌されることを見い出した。これはオボアルブミンの糖鎖機能を解明するうえで格好の材料である。ここでは、酵母発現系において、モデル糖タンパク質としてオボアルブミンのフォールディングや分泌における糖鎖機能を紹介する。

3) 「分子昆虫学研究室立ち上げ4年間の主要研究成果報告」

今回の研究セミナーでは、2003年10月に分子昆虫学研究室を立ち上げてから現在に至るまでの約4

年間に行ってきた下記の研究内容について報告する。

1. 昆虫ウイルス（バキュロウイルス）を用いた新規有用タンパク質生産技術の開発
15N や 13C などの安定同位体を含むタンパク質で調製した人工飼料でカイコおよび野蚕を飼育し、バキュロウイルスを感染させることにより、高度に安定同位体標識されたタンパク質の生産技術開発に成功し、特許を共同出願した。この技術は、結晶化困難な膜タンパク質などの NMR 構造解析に利用可能であり、プロテオームやメタボロームといったポストゲノム研究の推進に役立つと期待される。また、研究成果の実用化と社会貢献のために、2006 年 4 月に設立された株式会社バキュロテクノロジーズに取締役（兼業）として参画し、技術移転を行ってきた。
2. 転移因子（*piggyBac*）を利用した形質転換昆虫培養細胞の作製とタンパク質持続生産システムの開発
転移因子 *piggyBac* を使って昆虫培養細胞の染色体に外来遺伝子を挿入して形質転換させ、分泌タンパク質や膜タンパク質を持続生産させる基礎技術開発に成功した。この技術は、生細胞におけるタンパク質の機能研究や安全な医薬・獣医薬用タンパク質生産などに利用可能である。今後の課題は、生産量の向上と形質転換細胞クローニング技術の開発である。
3. 昆虫培養細胞の同定技術開発と農薬検定系としての利用
DNA 分析による簡便な昆虫細胞同定技術開発において、ミトコンドリアの COI 遺伝子配列を比較解析する DNA バーコード法の有効性ならびに RAPD 法よりも正確な細胞識別能力を確認した。また、昆虫培養細胞が種特異的な殺虫剤感受性の検定や、殺虫剤標的タンパク質遺伝子の突然変異による抵抗性獲得の予測に利用可能であることを実証した。

（3）セミナーの総括

農学研究科のセミナーは、農学部全教員と学生および農学研究科と医学研究科の大学院生を対象に行われてきた農学部公開講演会のうち、農学研究科教員が担当するものを、新たに研究レビューとして認定したものである。

平成 19 年度は上記のように 3 回実施され、多数の教員と院生・学生が参加し、活発な質疑が行われた。来年度以降も本年度と同程度の回数で実施されることにより、各教員および研究科全体の研究活動の活性化につながると期待される。

第 3 節 教員授業自己評価

（1）質問項目の集計結果

1) 講義

質問 1

聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	66.7	3.0	30.3	3.6

質問 2

理論や考え方、専門用語などをわかりやすく説明しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	66.7	3.0	30.3	3.6

質問3

板書を工夫しましたか？また、テキストやプリントなどの教材を効果的に使いましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	3.0	66.7	0	30.3	3.6

質問4

必要に応じてOHPやビデオ、コンピュータなどの視聴覚メディアを効果的に使いましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	66.7	3.0	30.3	3.6

質問5

学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	75.7	6.1	18.2	3.4

質問6

身振り手振りを加えたり、目を見て話すなどの態度を心がけましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	66.7	3.0	30.3	3.6

質問7

学生は、シラバス（授業案内）に記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値

	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	72.8	3.0	24.2	3.5

質問 8

学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	72.8	3.0	24.2	3.5

質問 9

授業の内容に学生は満足していると思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	3.0	66.7	6.1	24.2	3.5

質問 10

期待した授業外の学習時間（授業 1 回あたり）

回答：1) 0.5 時間未満、2) 0.5～1 時間、3) 1 時間～1.5 時間、4) 1.5～2 時間、5) 2 時間以上

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	72.7	3.0	9.1	6.1	9.1	1.8

2) 演習・実験・実習

質問 1

聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	57.9	2.9	38.2	3.8

質問 2

演習・実習・実験の手続や方法に関しての指示は分かりやすく工夫しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	

選択率%	0	0	57.9	2.9	38.2	3.8
------	---	---	------	-----	------	-----

質問3

必要な教材や器材を適切に使いましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	2.9	57.9	0	38.2	3.7

質問4

学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	57.9	2.9	38.2	3.8

質問5

学生に手本・示範などを適切に示しましたか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	74.7	11.8	23.5	3.6

質問6

個人またはグループの作業は集中できる雰囲気の中で実施されたと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	57.9	2.9	38.2	3.8

質問7

学生は、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	2.9	58.9	2.9	35.3	3.7

質問 8

学生は授業の内容理解や技能のレベルが向上したと思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	52.9	11.8	35.3	3.8

質問 9

授業の内容に学生は満足していると思いますか？

回答：1) そう思わない、2) 余りそう思わない、3) どちらとも言えない、4) ややそう思う、5) そう思う

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	0	0	58.8	5.9	35.3	3.8

質問 10

期待した授業外の学習時間（授業 1 回あたり）

回答：1) 0.5 時間未満、2) 0.5～1 時間、3) 1 時間～1.5 時間、4) 1.5～2 時間、5) 2 時間以上

	回答					回答平均値
	1	2	3	4	5	
選択率%	61.8	5.9	8.8	8.8	14.7	2.1

(2) 学生授業評価と教員授業自己評価の総括

農学研究科の教員授業自己評価については、平成 20 年 3 月末日（入力締め切りは 4 月末日）の時点での入力数が、講義は 33 科目、演習、実験、実習が 34 科目であった。力締め切りまでに後期授業の入力数が増加すると予想されるので、最終的にどの程度の教員が入力するか把握できない。また、入力対象科目数が設定されていないので、入力率が算出できないが、この点については今後検討すべきであろう。

教員授業自己評価の 10 項目の質問に関する集計結果では、授業時間外の学習時間に関する質問（質問 10）以外の全ての質問において、平均回答値が 3.4～3.8 の範囲にあり、入力した多くの教員が授業に対して比較的良好であるという評価を下していた。また、質問 10 では、科目により教員が学生に期待する学習時間にかかなりのバラツキが見られたが、平均すると 0.5 時間未満と 0.5～1.0 時間の間となった。

第4節 全学FD研修会

(1) 参加教員一覧

開催日	研修会種別	教員	分野
4月2日	TA研修会	竹松葉子	生物資源環境科学分野
4月6日	聴覚障害学生の授業方法についての研修会	深田三夫	生物資源環境科学分野
		西山壮一	生物資源環境科学分野
		荊木康臣	生物資源環境科学分野
		古賀大三	生物機能科学分野
		右田たい子	生物機能科学分野
		藤井克彦	生物機能科学分野
8月2日	講演会：学生の意欲を喚起する「基礎セミナー」の展開方法を学ぼう	小林淳	生物資源環境科学分野
		高橋肇	生物資源環境科学分野
8月9日	特別支援学生に対する修学支援の方法を学ぼう	藤間充	生物資源環境科学分野
		古賀大三	生物機能科学分野
		滝本晃一	生物機能科学分野
9月14日	授業技術研修会－学生を授業に参加させる課題解決型の授業の方法	田中秀平	生物資源環境科学分野
9月18日	最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法	荊木康臣	生物資源環境科学分野
		松下一信	生物機能科学分野
9月20日	脱初心者！MS Office 実践的活用法	小崎紳一	生物機能科学分野
9月21日	パワーポイント教材の作り方	細井栄嗣	生物資源環境科学分野
2月13日	専門教育課程における聴覚障害学生修学支援についての研修	右田たい子	生物機能科学分野
		古賀大三	生物機能科学分野

(2) 全学FD研修会の総括

農学研究科教員の全学FD研修会への参加人数は、平成19年度はのべ19名（実数15名、農学研究科教員の52%）で、約半数の教員の参加が得られた。本年度は、農学部に入学者に対する特別支援学生に対する修学支援のための研究会が3回開催され、それらを含めて複数回出席した教員がいたために、参加者が多くなった。農学研究科教員のFDに対する関心の高さを示す結果であろう。

第5節 まとめ

平成19年度の農学研究科FD活動は、計画に基づいて実施されるのは始めてであり、授業自己評価以外は、全て学部と重複した項目であるため、大学院独自の取り組みはほとんどない。しかしながら、大学院教育に対する外部評価が強化される傾向にあることから、今後、農学研究科独自のFD活動の充実が求められると予想される。また、本年度試行的に始めた研究科独自の学生による授業評価アンケート（自由記述のみ）についても、回収率が極めて低かった（10件）ので、来年度以降は、質問項目などの様式も含めて実施方法を再検討すべきであろう。

いずれにしても、本報告書が最初の農学研究科FD報告書であり、今後の農学研究科FD活動改善のためのたたき台となることを期待して締めくくりたい。

平成 19 (2007) 年度 農学研究科 FD 委員会

生物資源環境科学分野 田中秀平、小林淳 (委員長、全学 FD 委員)

生物機能科学分野 横山和平、阿座上弘行

第17章 東アジア研究科のFD活動

第1節 平成19年度東アジア研究科FD計画

東アジア研究科FD委員会は、大学院設置基準の一部改正によって大学院におけるFD研修が義務化されたことをうけ、平成19年度より発足したものである。東アジア研究科は、博士課程のみの独立した大学院であり、主たる教育活動は学生に対する研究指導となっている。こういった現状を鑑み、FD委員会としては「研究指導法についての検討会」を企画するに至った。

第2節 東アジア研究科FD研修会

平成19年度に東アジア研究科が実施したFD研修会は2回（後期）である。東アジア研究科が毎年10月に開催している2回の「博士学位準備論文報告会」を参加契機として利用するべく、当該の報告会終了後にFD研修会を開催することにした。また、研修会では、博士学位準備論文報告会で発表を予定している学生の主旨指導教員に研究指導法についての実践報告を依頼した。

事前の準備として、主旨指導教員には「研究指導上の留意点」をFD委員会に提出してもらった。FD委員会は、その「研究指導上の留意点」を東アジア研究科全教員に対して開示。研修会当日、参加者は「研究指導上の留意点」を念頭に置きつつ、学生の博士学位準備論文報告を聴くことになる。そして、博士学位準備論文報告会の終了後、FD研修会を開催。主旨指導教員があらためて「研究指導上の留意点」について補足説明を施し、博士学位準備論文報告会での学生の報告を実践事例として参照しつつ、意見交換を行なうこととした。

なお、「研究指導上の留意点」については以下のような観点を想定している。

1. 学生の研究課題に対して主旨指導教員がどのようなサポート体制を敷いているか。
(例：「海外における調査研究の指導について」、「国際学会への参加について」)
2. 学生の学位請求論文作成に向けて、どのような困難を感じているか。あるいは、その困難をどのように克服したか。
(例：「査読誌投稿論文の作成指導について」、「論の体系化にあたって〇〇の点が不足」)

1. 第1回東アジア研究科FD研修会

第1回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第1回東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」

日時：平成19年10月20日（土）東アジア開発政策コース及び東アジア企業経営コースの博士学位準備論文報告会終了後

場所：経済学部第1会議室

参加者：小谷典子、石田成則、柳沢旭、林徳治、橋本寛、成富敬、古賀大介（以上7名）

（1）研修会の手順

東アジア研究科博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。各報告を聞いた後、「報告者の指導教員に対する、指導上のアドバイス・コメント」を記入するように、参加教員に依頼した。

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、現在指導している際の工夫、直面している問題について述べた。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスをを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、学生の報告を聞いたうえで、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス(改善点など)を行った。

(2) 提起された問題とその解決法について

研修会では次のような問題点が提起され、それに対する解決法が話し合われた。

① 他分野にまたがる領域に関しての指導のあり方について

指導教員の専門領域を超えるテーマ、もしくは二つ以上の分野にまたがるテーマの指導上の困難性が提起された。さしあたりの対処法として、指導できる範囲にできるだけ接近するよう誘導する(学生にとっては、拡散しがちな博士論文テーマが明確化し、より専門的な指導が受けられるというメリットがある)という案があがった。一方で、基盤演習・プロジェクト演習という共同指導体制があるものの、現在、必ずしも十全であるとは言いがたい。他分野の教員・副指導教員との連携を、より実質的に、いかに円滑に進めるべきかという今後の課題も浮かび上がった。

② 社会人院生への指導上の問題点とその解決法について

遠隔地から通う学生で、かつ他に職業をもついわゆる社会人学生への指導を行う場合、次のようなコミュニケーションに関する問題が存在するとの提起がなされた。

現在、これに該当する学生は、登校する日数も直接面談指導を受ける時間も極めて限られている。このため、指導教員は、主に電子メールで指導を行っている。しかし、電子メールでの指導では、対面口頭指導と比較し、指導できる「量」がどうしても少なくなりがちであり、時間差の生じるメールでのやり取りから、コミュニケーション上の齟齬・誤解が生じやすくなる。このため、教員が指導したにもかかわらず、その意図が学生側に十分に伝わっていないという問題がしばしば生じ、論文作成指導上の大きな障害になっているとの指摘が多数あった。

この解決法として、遠隔地であっても指導教員と学生がリアルタイムに対面式で指導ができるPC付帯式テレビカメラ(スカイプ)の導入が提起された。導入コストが極めて安価(テレビカメラ・音声機能用オプション機器1台あたり数千円)で、また通信コストが事実上0円であるため、研修会参加者一同「同機材の導入は、上記問題解決に向けて極めて有効」との認識を持った。もっとも、導入にあたっては、使用方法に関する講習会を計画・実施していくこと、また試験的に導入し、その教育的効果を確認することが、今後重要だとの指摘もあわせてあった。

③ 留学生の語学に関する問題について

学生とのコミュニケーションに関する問題について更に、日本語がまったくできない留学生が入学し、そのことで指導上問題が生じているとの指摘が複数あった。東アジア研究科では英語による論文提出を認めているが、指導教員は日本語での指導を基本としているため、留学生で日本語ができない場合、教員の意図が十分に留学生に伝わらないという問題が生じているとの意見が出された。この問題に関しては、入試制度のあり方、日本入国後の日本語指導のあり方を含め、今後、更なる検討を有す問題であるとの認識で議論がなされた。

(3) 研修会の運営上の問題点

今回、東アジア研究科で初めてのFD研修会ということもあり、研修会運営に関して、FD研修会の意図が教員間に十分伝わっていないという問題がみられた。FD研修会は、教育方法・技術における問題提起・解決に関する教員間のピア・レビューを趣旨としているが、今回、学生の論文報告会後の研

修会ということもあり、参加者のコメントは教員の研究指導法に関するものよりも、学生の研究内容に関するものの方が多くなってしまった。このため、今後、研修前に研修の意図を十分に教員に伝えていくための工夫、及び、アンケートのあり方に関する工夫を検討することが、運営上の課題として残されたと言える。

2. 第2回東アジア研究科 FD 研修会

第2回東アジア研究科 FD 研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第2回東アジア研究科 FD 研修会～研究指導法の検討～」

日時：平成19年10月22日（月）東アジア比較文化コースの博士学位準備論文報告会終了後

場所：人文学部第5講義室

参加者：小谷典子、瀨瀬厚、福田隆眞、添田建治郎、藤原マリ子、阿部泰記、葛崎偉、田中誠二、高木智見、辻正二、坪郷英彦、名島潤慈、西村正登、根ヶ山徹、平野芳信、森野正弘、湯川洋司（以上17名）

（1）研修会の概要

本 FD 研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科比較文化コースの博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、各学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

（2）提起された問題とその解決法について

研修会では次のような問題点が提起され、それに対する解決法が話し合われた。

① 留学生の語学に関する問題について

留学生などの日本語を母語としない学生に対していかなる研究指導が適切であるかという観点から、「自主的な学習姿勢を習得させるべく、すぐには解決方法を提示しないようにしている」、「学生からの質問や報告は文章化したものを添付させるようにしている。これにより、コミュニケーション上の齟齬が回避され、学生の日本語文章力の指導も可能となる」といった報告があった。

これに対し、参加者からは「学生が難題を自分で解決する力を養うためには、焦らず見守ることが必要であり、指導教員はそれを理解していると思われる」、「学生の主体性を重視しようという立場には共鳴する」、「文章による相互交流は大いに参考になった」、「学術用語の翻訳は極めて難しい」といったコメントが寄せられた。

② 学生の研究課題の方向転換という問題について

学生の研究課題が、当初計画していたものから大幅に変更を来した場合の対処法について報告があった。その場合、もはや学生の自主性に委ねるといふ余地はなく、研究のメソッドを徹底して「教え込む」という指導方法をとらざるを得ないとの見解が示された。

これに対し、参加者からは「“教え込む”という指導と、“自主性を育む”という指導とは一見矛盾するようであるが、それらは学生の個性や置かれた状況に応じて選択されるものであり、学生本位の指導という点で両者は通底している」といったコメントや、「研究テーマの変更がスケジュール進行の支障とならないように注意すべきである」といったコメントが寄せられた。

3. 参考資料

(1) 第1回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成19年度 東アジア研究科FD研修会 アンケート

社会動態講座

お名前_____

以下の観点を例として参考にしながら、報告者の指導教員に対する、指導上のアドバイスやコメント（ご意見）をお願いします。見習うべき点のほか、改善点もあわせてお書きください。

- ①既存研究渉猟が確実に行われているか？
- ②既存研究の成果を正確に整理分類し総括できているか？
- ③その上でオリジナル性が明確であるか？

* 報告会終了後、30分程度、FD研修会を予定しております。ご協力よろしくお願います。

①報告者名_____ (指導教員名)

コメント

②報告者名_____ (指導教員名)

コメント

(2) 第2回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

【平成19年度 第二回東アジア研究科FD研修会・コメント票】

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

お名前:

~~~~~

①A先生の研究指導法（指導学生：a）

- \*留意点：
- \*コメント

|  |
|--|
|  |
|--|

②B先生の研究指導法（指導学生：b）

- \*留意点：
- \*コメント

|  |
|--|
|  |
|--|

③C先生の研究指導法（指導学生：c）

- \*留意点：
- \*コメント

|  |
|--|
|  |
|--|

④D先生の研究指導法（指導学生：d）

- \*留意点：
- \*コメント

|  |
|--|
|  |
|--|



### 第3節 東アジア研究科修了後動向アンケート

東アジア研究科では、在学生を対象とした授業アンケートを実施するか否かについて検討を加えている最中である。アンケート回答者の匿名性が十分に担保されない可能性があるからである。以上を踏まえ、本研究科では、教育の成果を点検し、その改善を図るために修了生を対象とした「東アジア研究科修了後アンケート」を実施している。

平成16年3月から平成19年3月にかけて修了した学生27名を対象に以下のようなアンケートを行い、そのうち13名より回答があった。

#### 【回答数内訳】

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 回答数   | 3     | 3     | 4     | 3     | 13 |

問1. あなたは現在の生活（主に仕事、職業）に満足しておられますか。

1. 非常に満足している      2. かなり満足している      3. 不満である

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 選択肢1  | 2     | 2     | 1     | 0     | 5  |
| 選択肢2  | 1     | 1     | 2     | 3     | 7  |
| 選択肢3  | 0     | 0     | 1     | 0     | 1  |

問2. 東アジア研究科を修了して以降、職場を変ったことがありますか。

1. 大学院に入学する前の仕事に現在も就いている  
 2. 大学院修了後に就いた仕事を現在もつづけている  
 3. 大学院修了後に就いた仕事や職場を変った（      回）  
 4. その他（      ）

※現在の就職先      職場名： \_\_\_\_\_  
 職場住所： \_\_\_\_\_

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 選択肢1  | 1     | 0     | 1     | 1     | 3  |
| 選択肢2  | 2     | 3     | 3     | 1     | 9  |
| 選択肢3  | 0     | 0     | 0     | 0     | 0  |
| 選択肢4  | 0     | 0     | 0     | 1     | 1  |

問3. 山口大学大学院東アジア研究科で学んだことや研究したことは、現在のあなたの仕事に直接的あるいは間接的に役に立っていますか。

1. 大いに役立っている      2. かなり役立っている      3. 役立っていない

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 選択肢1  | 2     | 1     | 0     | 0     | 3  |
| 選択肢2  | 1     | 2     | 4     | 2     | 9  |
| 選択肢3  | 0     | 0     | 0     | 1     | 1  |

問4. 以下にあげる大学院東アジア研究科の授業科目や報告会は、あなたの博士論文作成や研究にどのくらい役に立ちましたか。大いに役だったと思うものに◎を、役だったと思うものに○をつけてくだ

さい。◎, ○はいくつでも結構です。

特別研究 基盤演習 プロジェクト演習 形成特論 特別講義  
 外国語コミュニケーション 準備論文報告会 博士論文報告会

| 修了年・月 | H16・3<br>◎ | H17・3<br>◎ | H18・3<br>◎ | H19・3<br>◎ | 合計 |
|-------|------------|------------|------------|------------|----|
| 特別研究  | 1          | 2          | 2          | 3          | 8  |
| 基盤演習  | 1          | 0          | 1          | 2          | 4  |
| プロ演習  | 1          | 1          | 1          | 1          | 4  |
| 形成特論  | 1          | 0          | 0          | 0          | 1  |
| 特別講義  | 1          | 0          | 2          | 0          | 3  |
| 外コミュ  | 0          | 0          | 0          | 0          | 0  |
| 準論報告  | 1          | 1          | 1          | 2          | 5  |
| 博論報告  | 1          | 2          | 1          | 1          | 5  |

| 修了年・月 | H16・3<br>○ | H17・3<br>○ | H18・3<br>○ | H19・3<br>○ | 合計 |
|-------|------------|------------|------------|------------|----|
| 特別研究  | 2          | 1          | 1          | 0          | 4  |
| 基盤演習  | 2          | 1          | 1          | 1          | 5  |
| プロ演習  | 2          | 1          | 2          | 1          | 6  |
| 形成特論  | 1          | 0          | 2          | 2          | 5  |
| 特別講義  | 2          | 0          | 1          | 2          | 5  |
| 外コミュ  | 0          | 0          | 1          | 0          | 1  |
| 準論報告  | 2          | 1          | 1          | 1          | 5  |
| 博論報告  | 2          | 0          | 2          | 0          | 4  |

問5 問4の授業や報告会のうち、最も印象に残っている授業は何ですか。具体的に記入してください。  
 (授業科目・報告会名及び担当教員名： )

※回答省略

問6. 以下にあげる在学中の学習環境について、どのような感想を持っていますか。

図書館の利用 (1. 満足している 2. 不満である)  
 研究室の利用 (1. 満足している 2. 不満である)  
 コンピュータの利用 (1. 満足している 2. 不満である)

※「1」の回答数

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 図書館利用 | 2     | 3     | 4     | 2     | 11 |
| 研究室利用 | 3     | 3     | 2     | 2     | 10 |
| PCの利用 | 3     | 3     | 3     | 1     | 10 |

問7. 以下にあげる学生生活の支援体制について、どのような感想を持っていますか。

- 履修の指導 (1. 満足している 2. 不満である)  
 生活の助言 (1. 満足している 2. 不満である)  
 進路の相談 (1. 満足している 2. 不満である)  
 悩みの相談 (1. 満足している 2. 不満である)

※「1」の回答数

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 履修の指導 | 3     | 2     | 4     | 4     | 11 |
| 生活の助言 | 3     | 2     | 2     | 1     | 8  |
| 進路の相談 | 3     | 1     | 1     | 1     | 6  |
| 悩みの相談 | 3     | 1     | 2     | 1     | 7  |

問8. 全体的に見て、東アジア研究科を修了できたことの影響はいかがですか。

1. 非常に良かった 2. かなり良かった 3. 良くなかった

\* 3. 良くなかったとお答えになった場合、さしつかえなければ、その理由をお書きください。  
 ( )

| 修了年・月 | H16・3 | H17・3 | H18・3 | H19・3 | 合計 |
|-------|-------|-------|-------|-------|----|
| 選択肢1  | 3     | 2     | 3     | 3     | 11 |
| 選択肢2  | 0     | 1     | 1     | 0     | 2  |
| 選択肢3  | 0     | 0     | 0     | 0     | 0  |

問9. 東アジア研究科で学んだことは、あなたにとってどんな意味がありましたか？何なりと自由にご記入ください。

- ・現在の仕事に大いに役立っています。
- ・今の仕事に大変役に立ったし、途上国政府の政策提言にも貢献していると思われる。
- ・研究の第一歩を踏み出したということです。
- ・山口大学に入学し、東アジア研究科で勉強できて、よかったという気持ちでいっぱいです。
- ・研究生活は厳しいものでしたが、このような過程を経ることによって研究、学問とは何かを考えさせるものになりました。いま人生の新たなスタートに立つことができたのは東アジア研究科での研究生生活のおかげです。
- ・母校です。
- ・人文社会学の観点から企業（営利組織）の経営行動を研究することはとても面白いことです。東アジア研究科は様々な研究の環境を提供しているからこそ以上の研究ができたのです。
- ・特別講義のほかに、基盤演習やプロジェクト演習では、専門分野以外の先生方の指導があり、新たな知見を得られたこと。
- ・生きるために学ぶだけでなく、学ぶために生きるという生き方があることを、先生方から学ぶことができた。また学ぶことの楽しさをあらためて実感できた。
- ・大学院で得た「スキル」が仕事に役立つことは今のところ全くないが、学術研究の手法・考え方（問題点を絞り込んで個別に対応する、といったこと）は、課題に対処しようとするときの考え方として役立っていると思う。
- ・これまでに触れることのなかった世界（学術研究の世界）に触れることができ、視野は広がったと思う。
- ・何より、学生生活には将来に夢を持たせる雰囲気があり、学術研究も本来的に能動的な作業であるこ

とからも、とにかく面白く、楽しかった。

- いろいろな意味がありましたが、主に、次の点をあげられます。一つは、指導教官から、学問的な指針はもとより、研究者としての心構えや姿勢を教えてくださいました。それを大事にしていきたいと思えます。研究結果として、3本の査読論文を發表し、少し達成感を感じました。博士号が取れたのは新たな出発点になり、選択肢も広がりようになりました。これから新たに出発しようと思えます。
- 学問への道に導かれた。
- 博士課程を無事修了するという学問上のステップをふめただけでなく、東アジアの現在を留学生の方々を通して体感する機会でもありました。

問10. 今後、東アジア研究科をよりよくするためのご提案がありましたら、何なりと自由にご記入ください。

- 参考資料をもっと充実すること。そして、論文作成による研究費の補助を強化すること。
- 学生にも外国の大学と連帯研究などのような機会を与えればどうですか。
- 数多くの受験生からいい学生を選択すること。いい学生とは、確かに入学するのは、勉強のための学生、入学して研究に専念できる学生というものだ。修士課程を修了したが、いい職業がないので、とりあえず東アジア研究科に入ろう、修士課程修了時、奨学金をもらっているの、帰国したら、もったいない、とりあえず東アジア研究科に入ろう、というような学生がいない。不言実行というような学生が歓迎。
- 東アジア研究科の学生には、留学生が結構多いです。修了した留学生は大部分が各自の国に戻り、研究生活に従事するものが結構いると思います。東アジア研究科として修了生の各自の国と日本交流の場として学術誌「東アジア研究」を修了生の学術研究の成果を積極的に掲載すべきだと思います。
- RAなど学費や生活費をサポートするものがあれば良いと思います。
- 修了生は各国の各界で活躍されていることと思いますので、年1回でも同窓会報のようなもので先生方や修了生の近況や活躍を知る機会があれば、それが励みにもなり、同窓生のネットワークづくりにも役立つのではないかと思います。
- 今後も学術研究は続けたいが、仕事で学術研究をする人以外がそれを行うことは、しくみ的に困難な点がままある。例えば、学会報告をするにしても、論文を投稿するにしても、肩書きからして困ってしまう。修了生の研究サポートも検討していただけたらと思う。例えば、図書館等の施設利用の優待等が考えられると思う。  
また、修了生が先輩として現役学生をサポートするような仕組みがあればとも思う。
- 博士課程では、他の学生との交流はまったくなかった。基盤・プロジェクト演習でも、関心領域の違いがあるためか、教官との議論はあっても、他学生との議論はまったくなかった。現実社会では、個人ではなく、チームで課題解決にあたるのがほとんどであり、高度専門職業人の養成にはチームで課題解決をする能力の養成が不可欠であると思う。
- 学生が集中して勉強できるため、奨学金を多く設けるべきだと思う。

\* \* \* \* \*

平成19年度 山口大学東アジア研究科FD委員会

植村 高久  
森野 正弘 (委員長)  
古賀 大介

## 第18章 技術経営研究科

### はじめに

技術経営研究科ではFD活動として以下に示す活動に継続的に取り組んでいる。

- (1) 公開授業
- (2) 全学FD研修会
- (3) 教育改善を目的とした評価活動
- (4) その他のFD活動

以下、本年度の活動を報告する。

### 第1節 公開授業

技術経営研究科では、前期の1科目、後期の2科目を選んで公開授業を行った。

#### 平成18年度前期 公開授業

| 専攻名  | 授業科目名              | 授業実施者 |      | 実施日               |
|------|--------------------|-------|------|-------------------|
|      |                    | 職     | 氏名   | 年月日               |
| 技術経営 | プロジェクトマネジメント<br>特論 | 准教授   | 大島直樹 | 平成19年<br>5月19日(土) |

#### 平成19年後期 公開授業

| 専攻名  | 授業科目名     | 授業実施者 |      | 実施日             |
|------|-----------|-------|------|-----------------|
|      |           | 職     | 氏名   | 年月日             |
| 技術経営 | 生産管理特論    | 教授    | 千秋隆雄 | 平成19年<br>10月20日 |
| 技術経営 | 財務戦略特論    | 教授    | 松浦良行 | 平成20年<br>1月15日  |
| 技術経営 | 情報化製造技術特論 | 教授    | 上西 研 | 平成20年<br>1月19日  |

前後期で4回の公開授業を実施した。

技術経営研究科は社会人大学院生を対象にした教育課程であるため、授業を週末(土日)に開講していること、および宇部・北九州・広島の3教室体制で授業を行っていることにより、全教員が週末に授業を担当している。そのため、公開授業には授業の担当が重なっていない少数の教員しか参加できないという制約があるものの、公開授業の開催日を調整することによって、12名中9名(前期2名、後期7名)の参加が得られた。参加率は75%であった。以下に、感想と指摘点を挙げる。

#### ◆ 優れていると感じた点

##### 【説明】

- ・声ははっきりとして聞き取りやすかった。
- ・丁寧に講義内容を説明している。

- ・大学院生の職務内容を念頭に置いた説明をしている。
- ・大学院生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されている。
- ・専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されている。
- ・パワーポイントの使い方が適切である。
- ・社会の時事問題から授業に関連する項目を事例として紹介している。
- ・動画を使った説明は、学生の興味を上手く引き出している。
- ・学生の理解する（呑み込む）ペースを考慮して、話のテンポがゆったりしている。
- ・

#### 【資料】

- ・パワーポイント資料（スライド）のフォントのバランスがよい。
- ・パワーポイント資料1枚当たりの時間が長いので、講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されている。
- ・データベースからエクセルにデータを取り込むためのアドインについて、専門家による説明が行われているので、全受講生が高度なデータ処理を行っている。
- ・専用ソフトウェアの利用に当たって、丁寧な操作マニュアルが用意されている。
- ・特許検索に関するデータベースと検索エンジンが整備されている。
- ・NHKなどのニュース・報道から、時事問題に関する情報が取り入れられている。

#### 【教授法と工夫】

- ・スクール形式による説明と、グループ学習による討議がバランス良く取り入れられている。
- ・事前課題が緻密に計算されている
- ・授業の最後の10分間を利用して、「その授業における振り返り」の時間を設定している。

#### ◆ 改善を要すると感じた点

- ・パソコンを使った統計処理に関する操作手順の説明については、eラーニングなどを利用して、説明時間の節約を図ってみてはどうか。
- ・テキストだけのパワーポイント資料は、改善した方がよい。
- ・教材資料が多すぎて、学生が講師の説明について行けてない場面がある。

#### ◆ 公開授業を通じて得られた気付き

- ・公開授業を通じて、講義内容の科目間におけるつながりがより明確に認識することができた。
- ・学生のモチベーションを上手く引き出している。
- ・講義の進行と、グループワークによる討議が結びついている。
- ・特定の学生の発言回数が多い。
- ・動画コンテンツを上手く利用して授業を行っていた。
- ・

## 第2節 全学FD研修会

### (1) 全学FD研修会への参加状況

平成19年度FD研修会参加者  
名簿

部局名 技術経営研究科

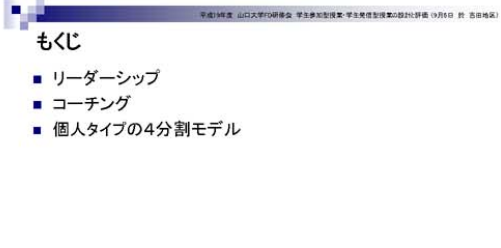

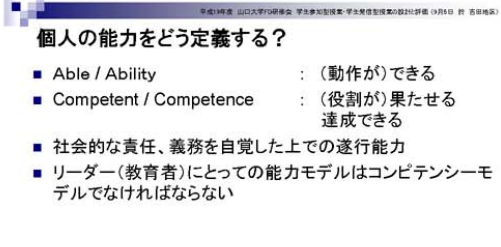
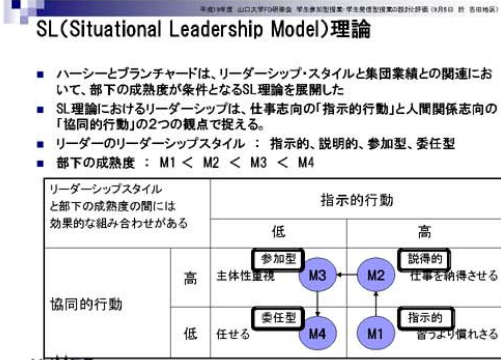
| 氏名         | 職名  | 開催日         | 研修会名                  |
|------------|-----|-------------|-----------------------|
| 上西 研       | 教授  | 平成20年3月18日  | 授業技術研修会               |
| 久保 元伸      | 教授  | 平成20年3月18日  | 授業技術研修会               |
| 稲葉 和也      | 教授  | 平成19年8月2日   | 新規採用教育職員研修会           |
| 千秋 隆雄      | 教授  | 平成20年3月13日  | 最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法  |
| 向山 尚志      | 教授  | 平成20年3月13日  | 最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法  |
| 河村 栄       | 教授  | 平成20年3月26日  | 学生参加型授業の設計と評価         |
| 大久保隆弘      | 教授  | 平成20年3月13日  | 最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法  |
| 木村 友久      | 教授  | 平成19年11月14日 | 情報セキュリティ・情報モラルの教え方    |
| 松浦 良行      | 教授  | 平成20年3月13日  | 最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法  |
| 福代 和宏      | 准教授 | 平成20年3月13日  | 最近の学生の実態と客観的な成績評価の方法  |
| グエン・フー・フック | 准教授 | 平成19年9月14日  | 授業技術研修会               |
| 大島直樹(講師)   | 准教授 | 平成19年9月6,7日 | 学生参加型授業・学生発信型授業の設計と評価 |

(2) 平成 19 年度 FD 研修会

平成 19 年 9 月 6, 7 日

学生参加型授業・学生発信型授業の設計と評価

講師 大島直樹

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |                                          |                        |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|------------------------|----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|--|-------|--|---|---|-------|---|-----------------|--------------------|---|---------------|--------------------|
|  <p>Copyright© 2007 Yamaguchi University YUMCOT</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |  <p>もくじ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ リーダーシップ</li> <li>■ コーチング</li> <li>■ 個人タイプの4分割モデル</li> </ul> <p>Copyright© 2007 Yamaguchi University YUMCOT</p> <p style="text-align: right;">スライド 2</p>                                                                                                                            |                                          |                        |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
|  <p>Copyright© 2007 Yamaguchi University YUMCOT</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |  <p>個人の能力をどう定義する？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Able / Ability : (動作が)できる</li> <li>■ Competent / Competence : (役割が)果たせる達成できる</li> <li>■ 社会的な責任、義務を自覚した上での遂行能力</li> <li>■ リーダー(教育者)にとっての能力モデルはコンピテンシーモデルでなければならない</li> </ul> <p>Copyright© 2007 Yamaguchi University YUMCOT</p> <p style="text-align: right;">スライド 4</p> |                                          |                        |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
|  <p>Performance &amp; Maintenance 理論</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ P&amp;M理論は、集団機能という観点からリーダーシップの類型化を試みた理論で、三隅二不二(みすみじゆうじ)によって提唱された</li> <li>■ P機能:目標達成機能             <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 集団の生産性を高めるような働きをすること</li> </ul> </li> <li>■ M機能:集団維持機能             <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 集団のチームワークを強固なものにするような働きをすること</li> </ul> </li> <li>■ 集団効果の基準を生産とした場合             <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 短期的には PM型 &gt; Pm型 &gt; pM型 &gt; pm型</li> <li>□ 長期的には PM型 &gt; pM型 &gt; Pm型 &gt; pm型</li> </ul> </li> <li>■ 長期にわたって同じチームで何かに取り組む場合には、リーダーとして求められる資質としてM機能が重要である</li> </ul> <table border="1" data-bbox="478 1478 710 1635"> <tr> <td>Pm型(P型)<br/>仕事に対しては厳しいが、グループをまとめるのは苦手である</td> <td>PM型<br/>生産性を高めつつ、集団の維持にも気を配る。リーダーの理想像である。</td> </tr> <tr> <td>pm型<br/>仕事に甘く、部下の面倒見も悪い</td> <td>pM型(M型)<br/>部下の面倒見は良いが、仕事では甘い面もある</td> </tr> </table> <p>Copyright© 2007 Yamaguchi University YUMCOT</p> <p style="text-align: right;">スライド 5</p> | Pm型(P型)<br>仕事に対しては厳しいが、グループをまとめるのは苦手である                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | PM型<br>生産性を高めつつ、集団の維持にも気を配る。リーダーの理想像である。 | pm型<br>仕事に甘く、部下の面倒見も悪い | pM型(M型)<br>部下の面倒見は良いが、仕事では甘い面もある |  <p>SL(Situational Leadership Model)理論</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ハーシーとブランチャードは、リーダーシップ・スタイルと集団業績との関連において、部下の成熟度が条件となるSL理論を展開した</li> <li>■ SL理論におけるリーダーシップは、仕事志向の「指示的行動」と人間関係志向の「協同的行動」の2つの観点で捉える。</li> <li>■ リーダーのリーダーシップスタイル : 指示的、説明的、参加型、委任型</li> <li>■ 部下の成熟度 : M1 &lt; M2 &lt; M3 &lt; M4</li> </ul> <table border="1" data-bbox="893 1568 1348 1747"> <tr> <td colspan="2" rowspan="2"></td> <td colspan="2">指示的行動</td> </tr> <tr> <td>低</td> <td>高</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">協同的行動</td> <td>高</td> <td>参加型 M3<br/>主体性重視</td> <td>説明的 M2<br/>仕事を納得させる</td> </tr> <tr> <td>低</td> <td>委任型 M4<br/>任せる</td> <td>指示的 M1<br/>言より慣れさせる</td> </tr> </table> <p>Copyright© 2007 Yamaguchi University YUMCOT</p> <p style="text-align: right;">スライド 6</p> |  |  | 指示的行動 |  | 低 | 高 | 協同的行動 | 高 | 参加型 M3<br>主体性重視 | 説明的 M2<br>仕事を納得させる | 低 | 委任型 M4<br>任せる | 指示的 M1<br>言より慣れさせる |
| Pm型(P型)<br>仕事に対しては厳しいが、グループをまとめるのは苦手である                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | PM型<br>生産性を高めつつ、集団の維持にも気を配る。リーダーの理想像である。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                          |                        |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
| pm型<br>仕事に甘く、部下の面倒見も悪い                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | pM型(M型)<br>部下の面倒見は良いが、仕事では甘い面もある                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |                                          |                        |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 指示的行動                                    |                        |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 低                                        | 高                      |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
| 協同的行動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | 高                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | 参加型 M3<br>主体性重視                          | 説明的 M2<br>仕事を納得させる     |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 低                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         | 委任型 M4<br>任せる                            | 指示的 M1<br>言より慣れさせる     |                                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |  |  |       |  |   |   |       |   |                 |                    |   |               |                    |



平成19年度 山口大学研究費 学生参加型授業・学生実習型授業の設計と評価 (9/18日 前 吉田博典)

# コーチング

Copyright © 2007 Yamaguchi University




平成19年度 山口大学研究費 学生参加型授業・学生実習型授業の設計と評価 (9/18日 前 吉田博典)

## コーチング

- コーチングは、相手の目標を達成させるために、その人の能力を引き出すこと
  - 目標を聞き出す
  - それを提示するために何をすべきかを問う
  - 正解を提示するのではなく、解決策を引き出す
  - 聞き役に徹することで自発的な行動を促す
  - 答えはその人自身が持っている
  - その答えや能力を引き出し、行動に結びつける
- コーチングの定義
  - 「Coach」という言葉が最初に登場した。もともとは「馬車」という意味の名詞から、「大切な人を、現在その人が居るところから、その人が望むところまで送り届ける」という意味の「コーチ」(動詞)が派生した。
  - コーチングとは、双方向のコミュニケーションを通じて、人の自発的な行動を促し、目標達成をサポートする方法のこと
  - 人が本来持っている能力や可能性を最大限に引き出す

Copyright © 2007 Yamaguchi University




スライド 8

平成19年度 山口大学研究費 学生参加型授業・学生実習型授業の設計と評価 (9/18日 前 吉田博典)

## コーチングのメリット

- 教師のメリット
  - 教員と学生の関係を効果的に構築できる
  - 教員の知識と技術を効果的に伝えられる
  - 学生の創意工夫を活かせる
  - コーチングによって、教員自らのレベルも上がる
- コーチングを受ける対象者のメリット
  - 指示・命令ではなく、学生が自らの考えを活かすことができる
  - 学習課題を解決できる
  - 高い視点での助言を受けることで、自らの考えを整理できる

Copyright © 2007 Yamaguchi University




スライド 9

平成19年度 山口大学研究費 学生参加型授業・学生実習型授業の設計と評価 (9/18日 前 吉田博典)

## 自己主張の4つのパターン

- 非主張的
  - 減りに自分の表現(喜怒哀楽)を表さない
  - 自分が優先することはない
- 攻撃的
  - 相手を支配する、もしくはコントロールしようとする発言が目立つ
- 間接攻撃的
  - 相手に判らないように意地悪をしたりする
- アサーティブ(素直な自己表現)
  - 他人の感情や権利も尊重し、自分の意見や希望を正直に直接述べるができる

Copyright © 2007 Yamaguchi University



スライド 10

平成19年度 山口大学研究費 学生参加型授業・学生実習型授業の設計と評価 (9/18日 前 吉田博典)

## コーチングスキル GROWモデル

|     |          |         |                         |
|-----|----------|---------|-------------------------|
| [G] | Goal     | 目標の明確化  | 抽象的な大目標から具体的な目標へ        |
| [R] | Reality  | 現実把握    | 本当の問題は何か                |
|     | Resource | 資源の発見   | 目標達成に使えるもの(人、物、金、情報、時間) |
| [O] | Options  | 選択肢の創造  | 無限の可能性を追求し、ベストの選択肢を選ぶ   |
| [W] | Will     | 目標達成の意思 | やる気の確認と計画の策定            |

Copyright © 2007 Yamaguchi University



スライド 11


平成19年度 山口大学研究費 学生参加型授業・学生実習型授業の設計と評価 (9/18日 前 吉田博典)

## GROWモデルの質問リスト

### GOAL

- 今、一番達成したいことはどんなことですか
- 今日、ここで話しをして、どういふ成果を手に入れたいですか
- 何か、ここをこいう風にしたいと思っていることはありますか
- どういう状況になったら、目標が実現できたと感じられるでしょうね
- では、そういう目標でよろしいでしょうか
- どんとき、一番、達成感を感じますか
- 貴方が仕事の中で、大切にしている信条みたいなものは何ですか
- 3年後に、こんな自分になっていたら嬉しいなというイメージはありますか

Copyright © 2007 Yamaguchi University



スライド 12

### GROWモデルの質問リスト REALY

- 今、一番緊急の課題は何ですか
- 長期的に見て、最も重要な課題は何でしょうか
- 改善が必要なポイントを3つ上げるとすれば、それらは一体なんですか
- どこが一番難しいでしょうか
- その判断の根拠になっているのは、どういうデータですか
- その情報はどこから得たのですか
- ほかに、影響している要素はありませんか
- 誰かの思惑が関与しているとしたら、誰の思惑なのでしょう
- 以前からそういう状況だったのですか
- これから事態はどういう風に変化していくのでしょうか

### GROWモデルの質問リスト OPTIONS

- いつもはどういう方法でやっていますか
- これまでに上手くいった方法は、どういう方法ですか
- 他に新しいやり方は無いでしょうか
- ライバルが使っている方法はありますか
- 一番効果の大きな方法は、どの方法ですか
- 逆の発想を試みることはできませんか
- 「これ」と「これ」を組み合わせるという方法はありますか
- ～と聞いて、思いついた方法はありますか

### GROWモデルの質問リスト WILL

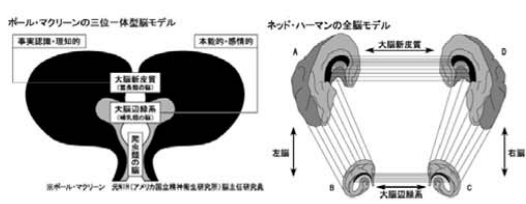
- まず、どこから手を付けましょうか
- 優先順位が一番高いのは、何ですか
- 一番やりやすいところから始めるとしたら、どこですか
- そのためには、一つの作業について何日かかることになりますか
- 1週間以内にできるのは、何と何ですか
- 絶対にやると決めましたか
- 成功したら、自分にどんなご褒美を上げましょうか
- これをやり逃げたら、どんな気持ちになりますか

### コーチングの4つのコアスキル

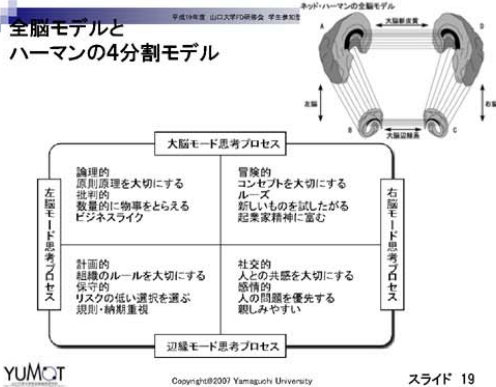
- 傾聴する
  - 信頼関係を育むために、相手の話しを心で聞くスキル
- 問いかける
  - 相手の持つ答えを引き出すスキル
- 伝える
  - 相手の「やる気」を「やれる気」にし、実際の行動を促すスキル
- 承認する
  - 相手の強みや魅力を理解し、教官を育むスキル

### 個人タイプの4分割モデル

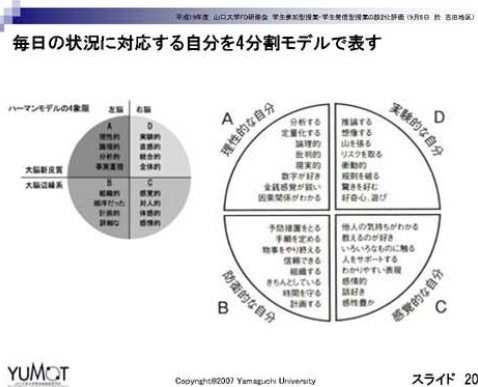
### 三位一体型脳モデルと全脳モデル



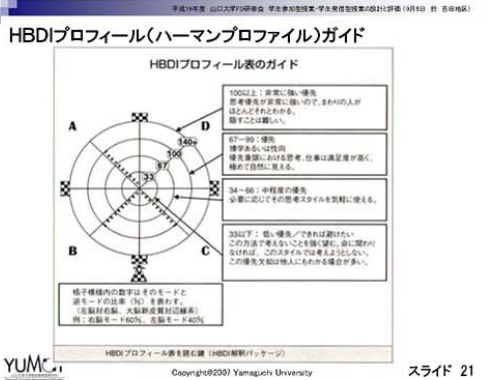
### 全脳モデルとハーマンの4分割モデル



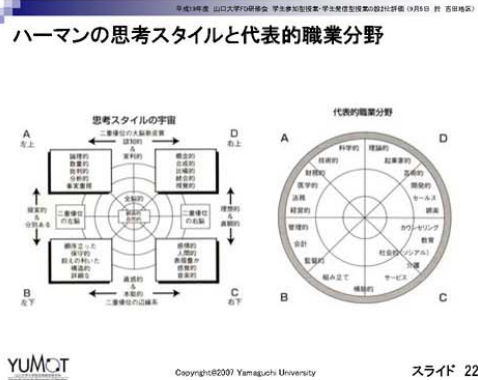
### 毎日の状況に対応する自分を4分割モデルで表す



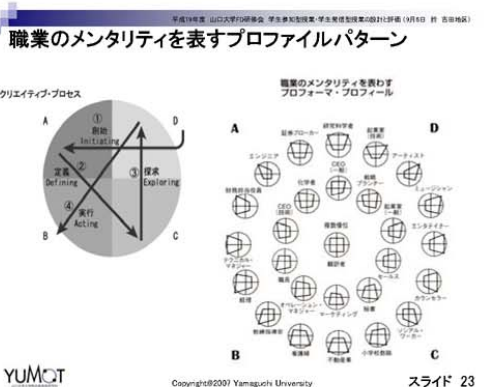
### HBDIプロフィール(ハーマンプロファイル)ガイド



### ハーマンの思考スタイルと代表的職業分野



### 職業のメンタリティを表すプロフィールパターン



### ハーマンモデルと学習スタイル・学習デザインとの対応

|                                                                                                                                |                                                                                                                            |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>A 事実</b><br>学習方法<br>アイディアを考え抜き、論理的思考を尊重し、事実を要求し、理論を形成し、事例を組み立てる。<br>伝達形態<br>明確な講義、事例の討論、教科書、プログラム化された学習、行動変革への学習デザイン        | <b>D イマジネーション</b><br>学習方法<br>自己発見、コンセプトを構成する、直感を尊重することと似た可能性に関わりがある。<br>伝達形態<br>経験的、実践的、視覚的、英学的、個人志向の学習デザイン                |
| <b>B 形式・構造</b><br>学習方法<br>理論を検証し、構造・プロセスを尊重し、実証による技術的指導を指向する。<br>伝達形態<br>構造化された一連のフォーマット、講義、教科書、事例の討論、プログラム化された学習、行動変革への学習デザイン | <b>C 感覚・実感</b><br>学習方法<br>アイディアを聞いて共有する、直感的思考を尊重し、類似のために働き、経験を自己と一体化する。<br>伝達形態<br>経験的かつ感覚的関与する活動、運動、音楽、人間志向の事例、グループでの相互作用 |

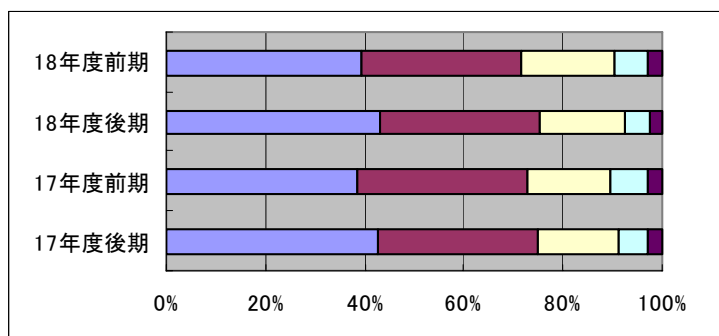
### 第3節 教育改善を目的とした評価活動

#### (1) 学生授業評価

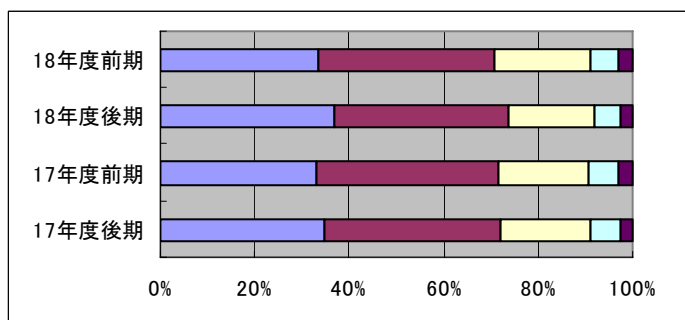
[学習指導法に対する学生授業評価]

学習指導法に対する学生による5段階の授業評価の結果では、「どちらとも言えない」から「思う」までの肯定的な意見が、6項目とも89%を締めている。

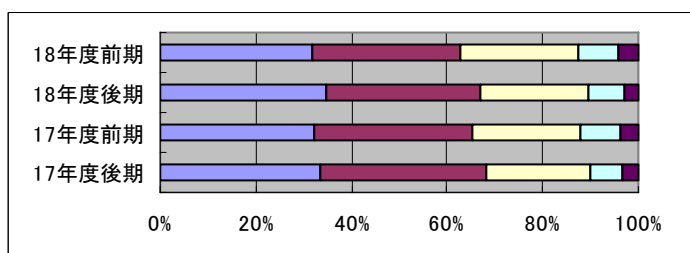
質問：教員の話し方は聞き取りやすかったですか？



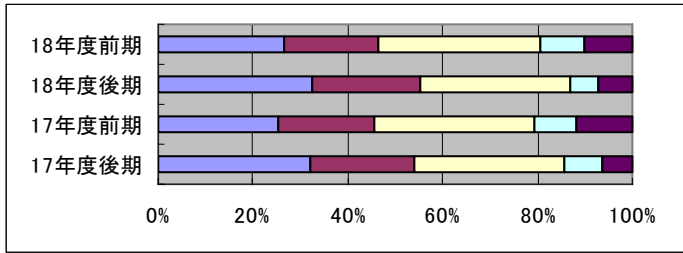
質問：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？



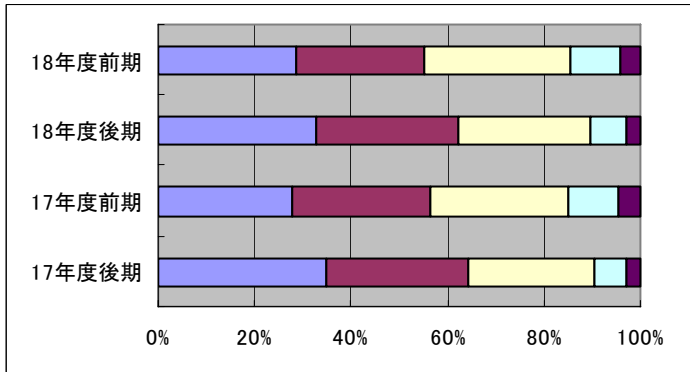
質問：板書は適切に行われましたか？ また、テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？



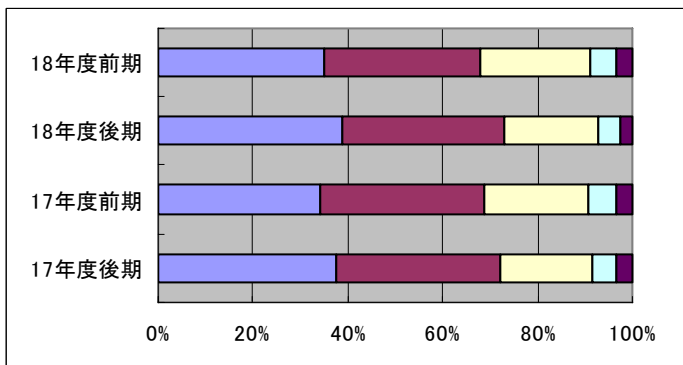
質問：必要に応じてOHPやビデオ、コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？



質問：学生の疑問・質問などに答える機会が十分に与えられていましたか？



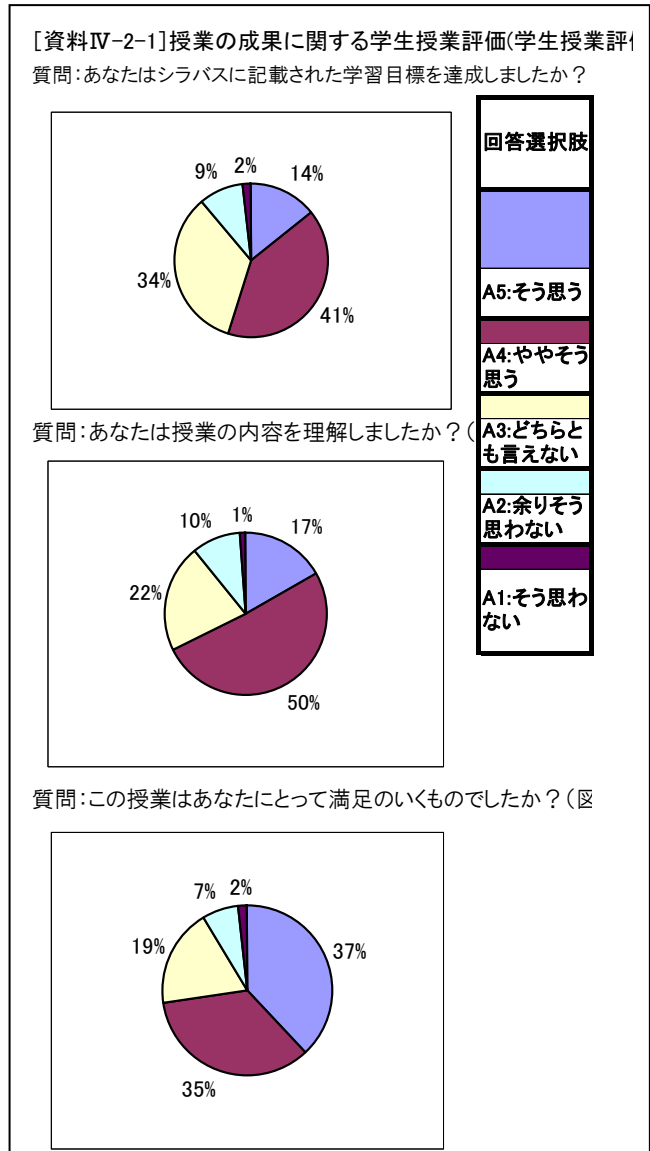
質問：教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？



|       |      |        |           |          |        |
|-------|------|--------|-----------|----------|--------|
| 回答選択肢 |      |        |           |          |        |
|       | そう思う | ややそう思う | どちらとも言えない | 余りそう思わない | そう思わない |

[授業の成果に対する学生授業評価]

授業の成果に対する5段階による選択式の学生による授業評価の結果では、「そう思う」から「ややそう思う」の肯定的な意見が、シラバスに記載された学習目標の達成が89%、授業の内容の理解が89%、授業に対する満足度は91%と3項目とも90%前後の高い評価であった。



## (2) 教員授業自己評価

教員による授業の自己評価では、(1)から(9)までの9項目(話し方の工夫、考え方の説明の工夫、教材と補助機器の工夫、授業外学習、質問の機会、授業に対する熱意、学習目標の達成、学習の理解および授業満足度)のすべてについて4以上(平均4.4)のスコアとなり、高い評価であった。また、授業外学習については、1科目1週間当たりの平均時間数が1.5時間であった。

| 項目                                                       | 平均  |
|----------------------------------------------------------|-----|
| (1)聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか?                                 | 4.4 |
| (2)理論や考え方, 専門用語などをわかりやすく説明しましたか?                         | 4.6 |
| (3)テキスト・プリント等の教材、黒板や OHP、ビデオ、プロジェクターなどの授業の理解を促す工夫をしましたか? | 4.4 |
| (4)練習問題や演習、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫をしましたか?            | 4.5 |
| (5)学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか?                                | 4.3 |
| (6)熱意を持って授業を行いましたか?                                      | 4.5 |
| (7)学生は、シラバス(授業案内)に記載された学習目標を達成したと思いますか?                  | 4.4 |
| (8)学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか?                               | 4.3 |
| (9)授業の内容に学生は満足していると思いますか?                                | 4.3 |
| (10)授業外学習について(学習時間)(※)                                   | 3.0 |

1) そうは思わない, 2) 余りそうは思わない, 3) どちらとも言えない, 4) ややそう思う, 5) そう思う

(※) 期待した授業外の学習時間(授業1回あたり):

1: 0.5時間未満, 2: 0.5~1時間, 3: 1~1.5時間, 4: 1.5~2時間, 5: 2時間以上

## 第4節 その他のFD活動

### (1) ケースメソッド教育方法の研修

ケースメソッド教育方法については、月次定例の中村学園大学流通科学部ケースメソッド研究会へ教員を参加（及び講師を体験）させることにより、教授法の体得に努めている。

また、山口大学経済学部主催の「技術経営とイノベーションの会」にケース研究会を平成18年5月に発足させ、当研究科教員および経済学部教員、地元企業から参加者を募り、隔月で新作ケースの教育実践と教授法の意見交換を行っている。

平成19年度に開催されたプロジェクトマネジメント協会東京支部主催によるPMツールボックス・メンタープログラム2007に講師として参加し、メンタリング教育実践と教授法に関する意見交換を行っている。

### (2) 教材改善の取り組み

プロジェクトマネジメント特論およびプロジェクトマネジメント演習科目では、プロジェクトマネジメントソフトウェア学習教材の開発と改良をJSPE（日本プロフェッショナルエンジニア協会）と協働して行っている。

### (3) ビデオライブラリの登録

平成19年度に開講された授業のうち、7科目について授業をビデオに収録し、授業ビデオコンテンツの整備に取り組んだ。



## 第19章 連合獣医学研究科のFD活動

### 第1節 はじめに

山口大学大学院連合獣医学研究科は、山口大学、鳥取大学、宮崎大学および鹿児島大学の農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備および施設を連合した標準修業年限4年の大学院博士課程である。大学院博士課程の学生は、主指導教員の属する大学に配属され、主指導教員のもとで研究指導を受ける。

教育活動：4大学は距離的に離れているので、4大学の学生は年1回4大学のうちの一つの大学に集合し、3泊4日の共通ゼミナールを開催している。

また、現在E-ラーニングの収録をしている。E-ラーニングは各大学の主指導教員が、パワーポイントで図示すると同時に音声を録音したものである。各主指導教員は30分間のE-ラーニングを当面3コマ収録することになっている。大学院の学生は各自のパソコンにパスワードをいれて各自の都合のいい時間にいつでも繰り返しE-ラーニングを聴講できることになる。学生は各E-ラーニングを聴講後、課題を教員にメールで送信することにより単位を得られるようになる予定である。

### 第2節 共通ゼミナール

平成19年度の獣医学共通ゼミナールは、鳥取大学の主催で「ホープスターとっとり」を会場として7月3日から7月6日までの3泊4日の日程で開かれた。鳥取大学の教員によるセミナーの主テーマは最近の獣医学である。セミナーの担当教員および講義テーマは以下である。

|        | 担当教員 | テーマ                            |
|--------|------|--------------------------------|
| セミナー A | 山野好章 | 内分泌攪乱物質が哺乳類の精子形成に与える影響         |
| セミナー B | 浅野淳  | I型インターフェロンによって誘導されるウイルス感染抵抗性因子 |
| セミナー C | 岡本宗裕 | 有鉤条虫の分子系統と種内変異                 |
| セミナー D | 永野昌志 | 哺乳動物における人工繁殖技術                 |
| セミナー E | 南三郎  | キチン誘導体の機能と応用—高分子からモノマーまで       |
| セミナー F | 澁谷泉  | 細胞内カルシウムイオンの機能とその調節機構          |

平成19年度獣医学共通ゼミナール日程表

平成19年7月3日～7月6日

会場 ホープスターとっとり 鳥取県鳥取市永楽温泉町556番地

| 時間<br>月日          | 7  | 8  | 9  | 10                      | 11                      | 12                       | 13 | 14                      | 15                     | 16                     | 17 | 18                   | 19        | 20    | 21            | 22 |  |
|-------------------|----|----|----|-------------------------|-------------------------|--------------------------|----|-------------------------|------------------------|------------------------|----|----------------------|-----------|-------|---------------|----|--|
| 第1日<br>7/3<br>(火) |    |    |    |                         |                         |                          |    |                         |                        |                        | 受付 | 開講式                  | オリエンテーション | 休憩・入浴 | 夕懇親会          |    |  |
| 第2日<br>7/4<br>(水) | 起床 | 朝食 | 休憩 | 山野好章教授<br>鳥取大学<br>セミナーA | 浅野淳彦教授<br>鳥取大学<br>セミナーB | 岡本宗裕准教授<br>鳥取大学<br>セミナーC | 昼食 | 永野昌志助教<br>鳥取大学<br>セミナーD | 南三郎教授<br>鳥取大学<br>セミナーE | 義谷孝教授<br>鳥取大学<br>セミナーF | 休憩 | 英語論文の書き方<br>(選択セミナー) | 休憩        | 夕食    | 研究交流<br>(学年別) |    |  |
| 第3日<br>7/5<br>(木) | 起床 | 朝食 | 休憩 | 学生研究紹介<br>担当校 教員参加      |                         |                          | 昼食 | 学生研究紹介<br>担当校 教員参加      |                        |                        | 休憩 | 英語論文の書き方<br>(選択セミナー) | 休憩        | 夕食    | 研究交流<br>(講座別) |    |  |
| 第4日<br>7/6<br>(金) | 起床 | 朝食 | 休憩 | 伊藤善徳教授<br>鳥取大学<br>特別講演  | 報告会<br>その他              | 閉講式                      | 解散 |                         |                        |                        |    |                      |           |       |               |    |  |

\*都合により変更することがあります。  
\*セミナーは質疑応答を含め50分 休憩10分

平成19年7月20日

山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価(結果)

<授業科目名> 平成19年度獣医学共通ゼミナール セミナー(平成19年7月4日 実施)

<担当教員名> 鳥取大学 担当教員(山野、浅野、岡本(宗)、永野、南、澁谷)

<学年>

- 1.1年生 18人(27.7%)
- 2.2年生 29人(44.6%)
- 3.3年生 12人(18.5%)
- 4.4年生 6人(9.2%)

<学生区分>

- 1. 一般学生 12人(18.2%)
- 2. 留学生 20人(30.3%)
- 3. 社会人 34人(51.5%)

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったですか?

- 1. そう思わない 1人(1.6%)

2. 余りそう思わない 9人(14.1%)
3. どちらとも言えない 23人(35.9%)
4. ややそう思う 15人(23.4%)
5. そう思う 16人(25.0%)

2)理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

1. そう思わない 1人(1.5%)
2. 余りそう思わない 10人(15.4%)
3. どちらとも言えない 20人(30.8%)
4. ややそう思う 19人(29.2%)
5. そう思う 15人(23.1%)

3)テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

1. そう思わない 0人(0%)
2. 余りそう思わない 7人(10.9%)
3. どちらとも言えない 12人(18.8%)
4. ややそう思う 23人(35.9%)
5. そう思う 22人(34.4%)

4)コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

1. そう思わない 0人(0%)
2. 余りそう思わない 3人(4.6%)
3. どちらとも言えない 10人(15.4%)
4. ややそう思う 18人(27.7%)
5. そう思う 34人(52.3%)

5)学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？

1. そう思わない 0人(0%)
2. 余りそう思わない 2人(3.1%)
3. どちらとも言えない 11人(17.2%)
4. ややそう思う 28人(43.8%)
5. そう思う 23人(35.9%)

6)教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

1. そう思わない 1人(1.6%)
2. 余りそう思わない 2人(3.2%)
3. どちらとも言えない 11人(17.8%)
4. ややそう思う 32人(51.6%)
5. そう思う 16人(25.8%)

7)教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？

1. そう思わない 2人(3.2%)
2. 余りそう思わない 2人(3.2%)
3. どちらとも言えない 9人(14.3%)
4. ややそう思う 20人(31.7%)
5. そう思う 30人(47.6%)

8)あなたはセミナーの内容を理解しましたか

1. そう思わない 5人(7.9%)
2. 余りそう思わない 11人(17.5%)
3. どちらとも言えない 14人(22.2%)
4. ややそう思う 26人(41.3%)
5. そう思う 7人(11.1%)

9)このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思わない 3人(4.8%)
2. 余りそう思わない 14人(22.6%)
3. どちらとも言えない 15人(24.2%)
4. ややそう思う 20人(32.3%)
5. そう思う 10人(16.1%)

10)このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？

1. そう思わない 2人(3.2%)
2. 余りそう思わない 16人(25.4%)
3. どちらとも言えない 12人(19.0%)
4. ややそう思う 17人(27.0%)
5. そう思う 16人(25.4%)

<質問Ⅱ>このセミナー(講義)に関する感想や要望等

1. 講義の内容は良いと思うのだが、方針であると思うが、英語のみの講義であるため、講義の内容について理解しがたい。自分の専門以外の講義については、用語自体の理解が遅いため、理解に苦しむ点がある。
2. 先生により理解のしやすさが異なり、わかりやすい先生の講義は、大変興味深く勉強になる一方で、専門英語が多かったり、分かりにくい英語を話す先生の授業は、時間がもったいないと感じた。専門英語には、日本語の訳がほしい。
3. 全てを英語にしなくても、全員が理解できるようにした方が、結果として良いのでは？
4. 多くの場合、英語での実施は無理があるように思う。
5. 基本は英語で、ポイントを英語でサマライズくらいの方が良いのでは？多くは先生方のご専門の知見であるが、学生が自分の実験のヒントになるような実験技術あるいは、もう少しジェネラルな獣医学的問題も盛り込んで欲しい。
6. 全講師に、スライドをプリントして配付して欲しかった。

7. 専攻ごとに分かれた講義があってもいいように思う。
8. もう少しゆっくりと話して欲しかった。
9. 全て英語というのは、日本人学生にはきついで、教材(配付物)にもう少し工夫が欲しいです。
10. 南先生のスライドは分かりやすかった。
11. 非常に興味深い話もあり、ためになった。
12. 臨床分野の話題が少なく、あまり興味が持てなかった。大学が研究機関であることも分かるが、*in vivo*の試験をもっと多く紹介して欲しい。
13. 講義の目的が分かりにくい。教授の研究紹介なのか、一般教養向けレベルなのか、何が新知見で何が引用データ(既知)なのか、専門外の人には分からない。
14. スライドは、日・英の併記にいただければ、より理解が深まったと思います。
15. 岡本先生のように、英語と日本語で話してもらうか、配付するプリントは日本語にするなど、日本人学生に対しても配慮してほしい。
16. 英語だけで全て話をされると理解できない。自分が得意な分野であれば、ほどよい英語の訓練にもなるが、専門外になるとほとんど分からない。自分の研究以外の分野の獣医学を勉強できるのがこのゼミの大きな目的の一つだと思うが、苦手なところの知識を得られずじまいで、とても惜しいと感じる。

共通ゼミナールのスケジュールのうちの「英語論文の書き方」、「研究交流」および「学生の研究紹介」についての聴講院生による意見および要望についてのまとめがありますが、ここでは割愛します。

### 第3節 特別講義

研究科長、研究科専任教員および各大学 2 名の教員により代議員会が月ごとに開かれている。代議員会は主として山口大学で開かれているが、他の 3 大学においても年1回ずつ開催している。代議員会は午後から開催されるので、その午前中代議員の教員による特別講義をしている。特別講義の対象は院生であるが学部生にも解放している。平成 19 年度はこの特別講義が 4 回開かれ、その都度聴講学生による意見、感想のアンケートをとっているが、ここでは教員の特別講義のテーマのみを記す。

平成 19 年 6 月 8 日 午前 10 時 30-12 時 於鳥取大学

1. 那須哲之(山口大学)「腸平滑筋の収縮反応におよぼす重金属イオンの作用。カドミウムについて」
2. 三角一浩(鹿児島大学)「関節鏡手術」
3. 上村俊一(宮崎大学)「牛群の繁殖性向上に重要な3つの時期」

平成 19 年 10 月 12 日 午前 10 時 20-11 時 50 於山口大学

1. 上村俊一(宮崎大学)「雌豚の経直腸超音波診断法」
2. 三角一浩(鹿児島大学)「競走馬の関節疾患を予測する一どこから病気は始まる？」
3. 島田章則(鳥取大学)「獣医学と環境保全」

平成 19 年 11 月 9 日 午前 10 時 30-12 時 於宮崎大学

1. 三角一浩(鹿児島大学)「癒合不全と骨移植—骨折治癒の指標を探す—」
2. 那須哲之(山口大学)「腸平滑筋の収縮反応におよぼす銅イオンの作用」
3. 岡本芳晴(鳥取大学)「獣医領域における最先端がん治療—がん治療を行う上での基礎知識1—」

平成 19 年 12 月 14 日 午前 10 時 30-12 時 於鹿児島大学

1. 島田章則(鳥取大学)「野生動物の病気と地球環境」
2. 上村俊一(宮崎大学)「牛の子宮内核心温と受胎性」

3. 那須哲之(山口大学)「マンガニオンによる腸平滑筋の収縮の特質」

## 第4節 FD 研修会

聴覚障害学生修学支援についてのFD研修会には、全学の各学部から多数の参加者があったが、獣医学科から平成19年4月6日には15名、8月9日には14名、平成20年2月13日には18名の教員の参加があり、関心の高さが伺えた。連合獣医学研究科においても聴覚障害学生が進学することが考えられるので、その研究支援の方策を講ずる必要がある。

## 平成 19 年度 国立大学法人山口大学教育職員能力開発(FD)委員会 名簿

| 部局名               | 職 名        | 氏 名     | 任 期                  | 備 考 |
|-------------------|------------|---------|----------------------|-----|
| 大学教育機構 (大学教育センター) | センター長      | 岩 部 浩 三 |                      | 委員長 |
| 〃                 | 教育企画・実施部主事 | 宮 川 勇   |                      |     |
| 〃                 | 教育企画・実施部主事 | 成 富 敬   |                      |     |
| 〃                 | 教育評価部主事    | 北 本 卓 也 |                      |     |
| 〃                 | 外国語センター長   | 高 橋 俊 章 |                      |     |
| 〃                 | 教 授        | 小 川 勤   |                      |     |
| 〃                 | 准教授        | 何 暁 毅   |                      |     |
| 〃                 | 准教授        | 吉 田 香 奈 |                      |     |
| 〃                 | 講 師        | 木 下 真   |                      |     |
| 〃                 | 助 教        | 岡 田 耕 一 |                      |     |
| 人文学部              | 准教授        | 真 木 隆 行 | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 教育学部              | 准教授        | 野 村 厚 志 | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 経済学部              | 教 授        | 柏 木 芳 美 | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 理 学 部             | 教 授        | 井 上 透   | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 医 学 部             | 准教授        | 川 崎 勝   | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 工 学 部             | 教 授        | 羽 野 光 夫 | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 農 学 部             | 教 授        | 小 林 淳   | H18. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 人文学研究科            | 准教授        | 真 木 隆 行 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 教育学研究科            | 准教授        | 野 村 厚 志 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 経済学研究科            | 教 授        | 柏 木 芳 美 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 医学系研究科            | 教 授        | 田 中 満由美 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 理工学研究科            | 教 授        | 羽 野 光 夫 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 農学研究科             | 教 授        | 小 林 淳   | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 東アジア研究科           | 准教授        | 森 野 正 弘 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 技術経営研究科           | 准教授        | 大 島 直 樹 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
| 連合獣医学研究科          | 教 授        | 那 須 哲 之 | H19. 4. 1～H20. 3. 31 |     |
|                   | 学務部学務課長    | 村 中 隆 実 |                      |     |
|                   | 学務部学務課課長補佐 | 林 章 司   |                      |     |
|                   | 学務部学務課課長補佐 | 吉 武 志津江 |                      |     |

### 平成 19 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」

平成 20 年 8 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会  
 山口市吉田 1677-1

TEL (083)933-5150 (学生支援部教育支援課)

印刷所 (有) いづみプリンティング